浦添市文化財調査報告書第21集

嘉門貝塚（かじょう）B

牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅳ

１９９３年３月

沖縄県浦添市教育委員会

あいさつ

嘉門貝塚は昭和５５年に実施した遺跡分布調査の際に発見された沖縄貝塚時代後期の遺跡であります。

発掘調査は牧港補給地区内に於ける建設工事に伴う緊急発掘調査として実施したもので、調査は建設工事の工程上からＡ・Ｂの２区に分けて行い、Ａ区については平成３年４月にその概要を報告したところであります。

Ｂ区の発掘調査では沖縄貝塚時代前期と後期の遺構と遺物が確認されています。前期は住居址と推定する４基の竪穴遺構とその覆土から土器、チャート製の穿孔具を含む石器等が出土しています。後期は埋葬遺構、交易品として貯蔵されたゴホウラやアンボンクロザメの貝集積遺構、炉址等が検出され、土器、石器、貝製品、食料として供されたイノシシやウミガメ等が出土しています。土器は在地の土器と伴に九州弥生時代前期の土器が出土しており、嘉門貝塚が沖縄貝塚時代後期において集落を形成し、九州地域との交流を物語る証左など多大な成果が得られています。

今後は、発掘調査で出土した貴重な資料を広く公開し、活用を図っていく所存であります。

最後になりましたが、本報告書発刊にあたり、指導助言を賜りました諸先生方に対しお礼を申し上げるとともに、本報告書が歴史の解明の一助になれば幸いです。

平成５年３月

教育長　**保久村昌伸**

例　　言

1　本報告書は牧港補給地区の開発工事に伴う嘉門貝塚の緊急発掘調査成果の記録である。嘉門貝塚の発掘調査は開発工事の工程上から２区（Ａ・Ｂ区）に分けて実施した。今回の報告はＢ区の調査成果を収めたものである。

2　調査は那覇防衛施設局からの委託を受けて、浦添市教育委員会が実施した。

3　発掘調査及び資料整理にあたり、次の方々から御指導・御助言をいただいた。記して、感謝申し上げます。

河口貞徳（鹿児島県考古学会会長）、三島　格（肥後考古学会会長）、高宮廣衛（沖縄国際大学教授）、本田道輝（鹿児島大学）、池田栄史（琉球大学助教授）、金武正紀（沖縄県立博物館）、長野真一・宮田栄二・牛之濱修・八木澤一郎（鹿児島県文化課）、中山清美（笠利町歴史民俗資料館）、安里嗣淳・大城　慧・岸本義彦・金城亀信・島袋　洋（沖縄県教育庁文化課）、呉屋義勝（宜野湾市教育委員会）、中村　愿（北谷町教育委員会）

4　動物遺存体、石質の同定については次の方々による。記して感謝申しあげます。

動物遺存体　金子浩昌（早稲田大学）

石　　質　大城逸朗（県立教育センター主任主事）

5　本報告書に掲載する遺物実測図の縮尺は原則として⅓とした。

6　本書に掲載した地形図は浦添市都市計画部都市計画課所収の１／2,500地形図を複製した。

7　貝類遺存体については時間の制約上割愛せざるをえなかった。それについては別途報告したい。

8　本報告書び執筆は下記のメンバーで分担し、編集は松川が行った。

下地安広　第Ⅰ・Ⅱ章　第Ⅳ章第２節，第３節１在地土器

松川　章　第Ⅲ章　第Ⅵ章第１節，第２節２～５，第３節２　第Ⅴ章

宮里信勇　第Ⅳ章第２節６　第３節５～10

池田栄史　第Ⅳ章第３節１弥生土器

高良京子　第Ⅳ章第３節３・４

金子浩昌　第Ⅳ章第３節　沖縄県浦添市嘉門貝塚Ｂ区の動物遺存在体

9　出土した資料については浦添市教育委員会教育部文化課で保管している。

目　　次

あいさつ
例　言
目　次
第Ⅰ章　調査に到る経緯…… 1
　第1節　調査に到る経緯…… 1
　第2節　調査体制…… 2

第Ⅱ章　位置と環境…… 3

第Ⅲ章　調査の経過…… 6

第Ⅳ章　調査の成果…… 8
　第1節　層　　序…… 8
　第2節　遺　　溝……10
　　1　竪穴遺溝 …… 11
　　2　炉　　址 …… 15
　　3　落ち込み遺溝 …… 15
　　4　貝集積遺溝 ……18
　　5　埋葬遺溝 …… 24
　　6　溝　遺　溝 …… 25
　第3節　出土遺物 …… 26
　　人工遺物
　　1　土　　器 …… 26
　　2　石　　器 …… 48
　　3　貝製品 …… 81
　　4　骨製品 ……108
　　5　陶磁器 ……110
　　6　円盤状製品 ……139
　　7　銭　　貨 ……141
　　8　煙　　管 ……141
　　9　かんざし …… 141
　　10　角　　釘 ……142

　　自然遺物
　　沖縄県浦添市賀門貝塚B区の動物遺存体 ……143

第Ⅴ章　まとめ ……164

図　版 ……167

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

調査のきっかけは、昭和61年６月９日に那覇防衛施設局より在沖米軍施設である牧港補給地区内の建設工事計画について本市に通知があった時点から調整業務が始まった。なお、同計画は、牧港補給地区内の主に西側一帯の建設工事計画で、その建築物の内容は販売所、倉庫、診療所、野球場、高層住宅で工事対象総面積は合わせて約15万㎡に及んだ。

前述の工事計画に先立ち、本市教育委員会に同工事区内に埋蔵文化財等の文化財が所在するか否かの文書の合議が浦添市の企画部を通してなされたが、米軍への提供施設内については、文化財の所在は十分把握されてなかったことから開発に先立つ埋蔵文化財等の確認作業が必要であること、更に、今後の建設工事計画にあたっては本市教育委員会と協議を要する旨の報告を行った。

その後、那覇防衛施設局と本市教育委員会で数回の調整を行い、昭和61年10月22日から同年11月20日の期間で埋蔵文化財の有無を確認する表面踏査と試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、米軍提供施設内であることや調査費用負担の問題もあって那覇防衛施設局が主体になり、市教育委員会職員が立ち会い文化財を確認する方式を取った。なお、具体的には表面踏査と開発計画地内に１辺30m間隔の方眼を設定し、その交差点で重機によって掘削しながら埋蔵文化財を確認する試掘調査を行う手法を取った。

前述の調査では、販売所地区で古墓群（城間古墓群）と近世及び沖縄貝塚時代後期の遺跡（城間遺跡）、診療所・野球場地区で近世の遺跡（小湾遺跡）が確認された。高層住宅地区では昭和55年度に実施された市内遺跡分布調査の際に発見された嘉門貝塚が開発工事計画地内に含まれることが明かとなった。

本市教育委員会では、調査の成果を踏まえ、那覇防衛施設局と確認された埋蔵文化財の取り扱いについて数回にわたる協議を行った結果、次のとおりの対応に落ちついた。

小湾遺跡については、盛り土して野球場の付帯施設であるバックネット、ベンチ等の配置及び設計変更を行ない遺跡内に施設が来ないように工夫する。しかし、城間古墓群、城間遺跡、嘉門貝塚は事業計画が既に確定しており、当該区域以外に建設用地の確保が困難であること、設計変更を行う現状保存が不可能であること等から、本市教育委員会が発掘調査事業を受託して実施することになった。なお、市が調査を受託するにあたっては発掘調査の規模が１万㎡を超え３万㎡前後あること、調査期間が１年10ケ月であること等から市町村の調査規模をはるかに越えること等の理由から調査全てを県受託あるいは一部県受託の面から県教育庁文化課と調整等も行ったが不発に終わった。

発掘調査は、那覇防衛施設局の発掘届や市教育委員会の発掘調査届、那覇防衛施設局と市教育委員会の契約等、基本的な手続きを経た上で行われた。

嘉門貝塚Ｂ区の発掘調査は、前述の調整・手続きを経た最終の調査区で昭和63年５月から発掘調査が実施された。

第２節　調査体制

事業主体	浦添市教育委員会	教育長	西原正次　（昭和63年３月まで）
			保久村昌伸（昭和63年４月より）
事業所管	教育部	部　長	名嘉原安栄（昭和63年３月まで）
			比嘉靖芳　（昭和63年４月～平成元年１月まで）
			東　一男　（平成元年２月より）
	文化振興担当参事		西原廣美　（平成２年４月より）
事業総括	教育部	文化課	
		課　長	宮里良一　（昭和62年３月まで）
			豊里友建　（昭和62年４月～平成２年３月まで）
			宮城　勝　（平成２年４月より）
事務総括	文化財係長		前津政廣　（昭和63年３月まで）
			仲宗根盛栄（昭和63年４月より）
事業事務	主　事		小浜恵子　（昭和63年３月まで）
			小波津春美（昭和63年４月より）
			下地安広
			松川　章　（昭和62年４月より）
			宮里信勇　（平成３年５月より）
	臨時職員		嘉数喜久子・運天順子・川満美和子・喜舎場涼子・棚原明子・大城政子・与那覇あゆ子・蒲田桂子
調査員	主　事		下地安広・松川　章
調査補助員	臨時職員		宮城義明・比嘉　聡・与那嶺豊・廣山洋一・島袋春美
			大湾政人・下地　傑・高良京子・又吉純子・仲宗根菊枝

発掘作業員

金城光子・比嘉サダ・石川チヨ・上地孝子・渡名喜悟・高嶺清子・崎浜良枝・宮城静子・石川ヨシ子・森本和子・棚原弘春・宮城春美・高野キク・玉江秋子・阿嘉節子・福嶺信吉・比嘉トシ・玉那覇スミ・豊平マサ子・宮城良子・宮城光子・島袋正助・平良米子・与那覇浩・宮城美代子・古堅厚徳・城間昌貞・城間辰重・宮城清子・宮城ユキ子・金城　清・宮城清子・上原ミヨ・宮平良子・秋吉慎一・上里恵子・豊元充子・翁長静江・諸見里ユキ・宮城ミネ・前里定勇・諸見太郎・宮平美千代・伊波盛吉・平山次郎・棚原キク・宮城昭善・嘉手納良信・横田政雄・久手堅ミヨ・仲松　章・仲間節子・永山ケイ子・西原節子・西里光夫・平安山寛三・平安山ト

久手堅ミヨ・仲松　章・仲間節子・永山ケイ子・西原節子・西里光夫・平安山寛三・平安山トヨ・粟国キヨ・垣花良子・山里　栄・當山玄昌・宮城ヨシ子・平良トミ・伊波富子・玉城キヨ・叶　ハツ・比嘉　澄・上地善一・宮城吉子・津堅ノブ子

整理作業員

比嘉典子・仲地智子・住友千恵子・安和千代子・大湾政人・宮城　敦・大城研一・大城広輝・宮平留美子・仲宗根菊枝・比嘉清美・波名城和枝・運天順子・儀間るみ子・金城京子・渡具知征子・嵩原朋子・与那嶺文子・大浜利子・中野洋子・又吉純子・冨里順子・上地孝子・上里恵子・当間初江・大城洋子・国中恵子・古堅禎子・平田サヨ子・渡具知孝江・菊池絹子・徳村カツ江・玉寄敏子・銘苅才子・奥原玲子・宮国福子・前川安美・真栄城由記子・又吉美佐江・栄あゆみ・宮城律子・宮城明美・謝花トキ子・嶺間信子・吉村優喜江・親冨祖直美・小嶺千鶴子・仲間教子・比嘉郁子・安次富純子・佐和田悦子・銘苅尚子・小渡重成・仲松浩光・松田啓子・知念孝子・仲宗根直美・西原正美・金城悦子・翁長律子・大見謝哲郎

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　遺跡の位置

浦添市は、県都那覇市の北側に位置し市の東側に西原町、北側には宜野湾市が隣接している。西側は東シナ海に面し、遠くには慶良間諸島を望むことができる。

本市の人口は、那覇市に隣接していることから年々増加の一途をたどり市制施行（1970年）前は、４万人台の人口であったのが1989年（平成元年）においては２倍以上の約９万人の人口を擁する県下第三の都市に発展している。それにともなって行政区別による自治会も19の組織から現在は35の組織に増えている。

市域は、東西8.4km、南北4.6kmで、平面観は北側を頂点としたややいびつな扇状形をなし、総面積18.28k㎡で、そのうち約15％の2.8k㎡が米軍提供施設（軍用地）となっている。

地形は、沖縄本島中南部によく見られる波状の地形と石灰岩からなる台地、段丘が広がっており、特に市の中央部を南北に横切る国道330号（通称・バイパス）を境に東西の地形に違いが見られる。市の中央部から東側にかけては、標高50m以上の石灰岩台地と丘陵によって形成されている。この丘陵一帯は、多年にわたる風化、浸食により起伏の小さい丘と浅い谷が連続する波状の地形となっている。また、市の東部に位置する浦添城跡から北西側の字牧港にかけては、断層によってできた石灰岩堤が帯状によく発達しておりその堤上に立地している浦添城跡あたりは標高100m以上となり市内で最も高いところである。

市の西側は、標高50m以下の小丘陵と石灰岩の低台地（低位段丘面）で形成されており、ゆ

海岸線には小規模ながら海岸低地がみられ、前面の東シナ海は沖合いにかけて幅広くサンゴ礁が発達している。このように本市は、東側が高く西側に向かって低くなるいわゆる東高西低の地形を形成している。

市内を流れる4つの河川（牧港川、シリン川、小湾川、安謝川）は全長3～7km、幅員約20～45mの小規模なもので市東部の丘陵地を源として、市の東西を横切り、東シナ海にゆるやかにそそいでいる。

地質は、第三紀島尻層群の与那原泥岩層（クチャ）が基盤を形成し、石灰岩堤が帯状に伸びる部分と琉球石灰岩がこれを覆っている市の西側部分がある。市の中央部からなだらかな丘陵をなす南側一帯と字西原一帯には基盤の泥岩が露出し、石灰岩堤の南側の丘陵地帯には小禄砂岩層（ニービ）が分布している。また、4つの河川の河口付近や海岸線には小規模ながら沖積層及び海岸堆積層が分布している。さらに、本市における地質の構成比をみてみると泥岩層44.4%、砂岩層12.2%、石灰岩層32.3%、沖積層及び海岸堆積層11.1%となり総面積の約6割は島尻層群が露出していることがわかる。

嘉門貝塚は、浦添市の西部に位置する在沖米軍施設の牧港補給地区の浦添市字城間小字嘉門に所在する。遺跡一帯の地形等は、戦後の米軍基地建設によって大きく変わっいる。古老の話によると海岸沿いは戦前10m前後の海岸砂丘があって、周辺には防潮林としてアダンが植えられ、防潮林から内陸は主に畑であったとのことである。

周辺遺跡としては、時代的に近い遺跡として牧港貝塚（浦添市所在）、牧港第二貝塚（浦添市所在）、小湾遺跡（浦添市所在）、宇地泊兼久原貝塚（宜野湾市所在）、安座間原第二遺跡（宜野湾市所在）がある。その他、隣接する遺跡は後背の石灰岩低台地に沖縄貝塚時代後期後半（古墳～平安時代）の城間遺跡、また、東側には東空寿遺跡（時期不明の小規模遺跡）、下港川遺跡（沖縄貝塚時代前期およびグスク時代）などがある。

＜註＞

1・2・3　沖縄県　土地分類基本調査　1983

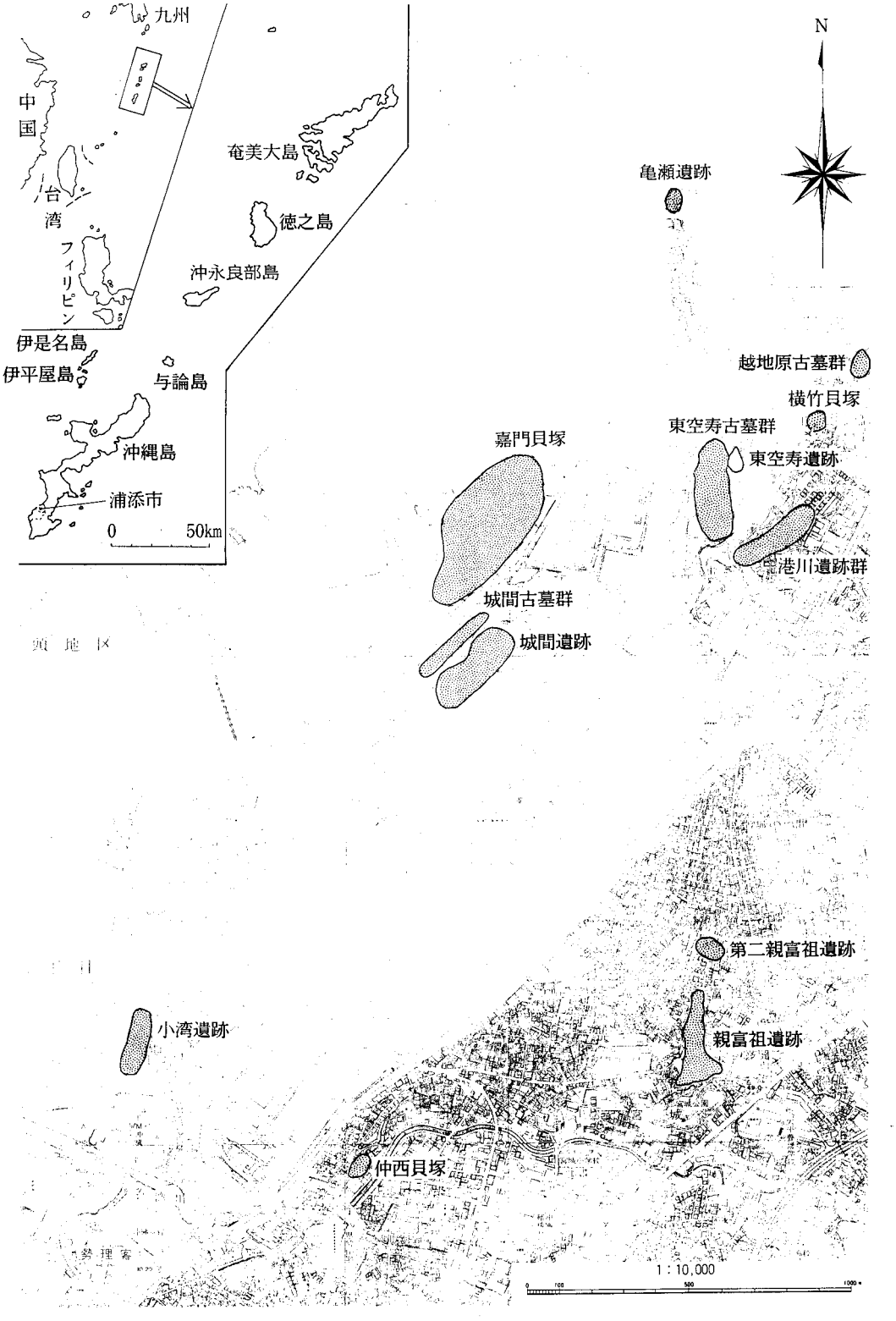
＜参考文献＞

1　浦添市史編集委員会　浦添市史　第1巻　通史編　1989

2　浦添市史編集委員会　浦添市史　第6巻　資料編5　1986

3　宜野湾市教育委員会　宜野湾市の遺跡　1982

4　沖縄国際大学文学部考古学研究室　沖国大考古第10号　1989



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

第Ⅲ章　調査の経過

嘉門貝塚Ｂ区の発掘調査は昭和63年７月４日から同年10月31日の期間で行った。遺跡一帯を被覆する客土は発掘調査に先駆け、昭和61年３月にあらかた取り除いた。

城間遺跡Ｂ区の後半において嘉門貝塚Ｂ区の遺物包含層の確認のためトレンチを設定し、発掘を行った結果、茶褐色混土砂層が約50cmの厚さで堆積していることが分かった。茶褐色混土砂層は旧表土層で、発掘調査の期間もあり約30cmの厚さをバックホーとトラックを用いて除去した。客土除去後の調査地一帯は東側に赤土、西側は茶褐色の混土砂層がみられ、全体として陸（東）から海岸（西）に向けて緩やかな傾斜を示していた。

発掘調査は先ず、客土の残土及び埋設された電気・電話ケーブル等を取り除くことから始め、その後に８ｍ四方のグリッドを設定した。

茶褐色混土砂層の発掘は南側のグリッドから行い、次層の露出後漸次北側に移動した。本層は旧表土層で、客土等の上部からの圧力により堅く締められていた。南側の発掘では嘉門貝塚Ａ区で出土した石積みを伴う「道」の延長が想定されたが、部分的に石灰岩礫が確認されたのみであった。茶褐色混土砂層下は褐色混土砂層で、「て－27・せ－26・し－24・こ－20」グリッドの各指示杭をつなぐ南側に分布する遺物包含層である。その北側と東側は赤土で、赤土の「し－25・こ－22・け－24」グリッドでは４基の竪穴遺構が検出された。発掘調査区の北側と南側では近世の石列及び石積みを伴う近世の溝が確認された。

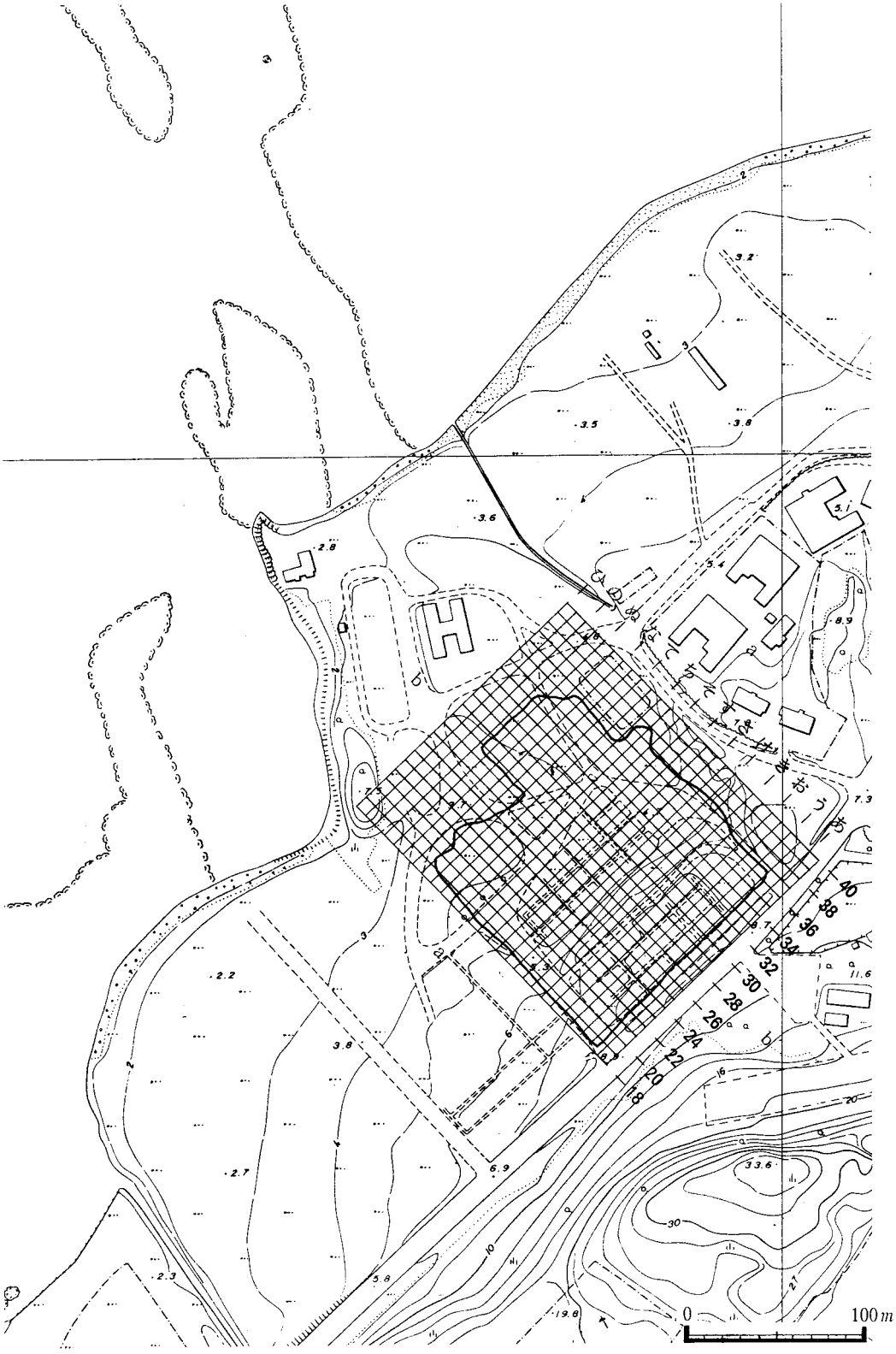
褐色混土砂層から出土する遺物については、遺物ごとに番号を付けて平板をもちいて出土地点とレベルを注記した後取り上げることにした。

遺跡全体の広がりと状況が把握されたことから、調査は近世の溝遺構から行った。溝遺構は縁に石灰岩礫を配列あるいは積み上げ、赤土部から遺跡内をとおり南西部で合流する。溝の内外から近世の陶磁器片が採集された。

溝遺構の調査後、褐色混土砂層の掘り下げを開始した。褐色混土砂層は米軍の埋設した水道管や電気・電話ケーブルの除去した溝の壁面から単一の遺物包含層であることが確認されたが、調査の進行に伴い南東部と北西部で採集された土器に違いがみられ、また、後者では搬入土器の出土、イノシシ・海ガメの動物遺存体も多く、地点により異なることから時期差が考えられたが、層の観察からは確認できなかった。

次層の白砂層上にはゴホウラ・アンボンクロザメの集積と、柱穴様の落込みが検出された。赤土側では４基の竪穴遺構の黒褐色土から高宮暫定編年前Ⅳ期の仲泊式土器と奄美系の面縄東洞式土器等が出土し、チャート製の穿孔具の出土もあった。

遺構及び層序の写真撮影と実測を行った後、土層観察用に残していた畦を発掘して遺物を取り上げ、発掘調査を終えた。



第2図　グリッド設定図

第Ⅳ章　調査の成果

第1節　層　序

嘉門貝塚Ｂ区で確認された層序は客土を含めて５枚で、基本的には嘉門貝塚Ａ地区の層序とほぼ同一のものである。Ａ区で認められたグスク時代の遺物を包含する黒褐色土層は本区においては確認されなかった。第３図に25ラインの土層図を示し、層序について記述する。

第Ⅰ層　客　土　層　　戦後、米軍による造成に伴う客土層である。内陸側で浅く、海岸側で比較的厚い。

第Ⅱ層　茶褐色混土砂層　　旧表土層と考えられるものである。第Ⅰ層を取り除いた時点で、調査区の西側に広く分布し、29ライン以東では赤土が露呈していた。本層の層厚は北側で薄く、南側では比較的厚く堆積し、嘉門貝塚Ａ区に至る。層色も南西側で濃く、北側では薄くなることから、本層の中心部はＡ区とＢ区の境目とみられる。

第Ⅲ層　黒　色　土　層　　Ａ区の調査で確認されたグスク時代の遺物を含む二次堆積土で、Ｂ区では認められなかった。

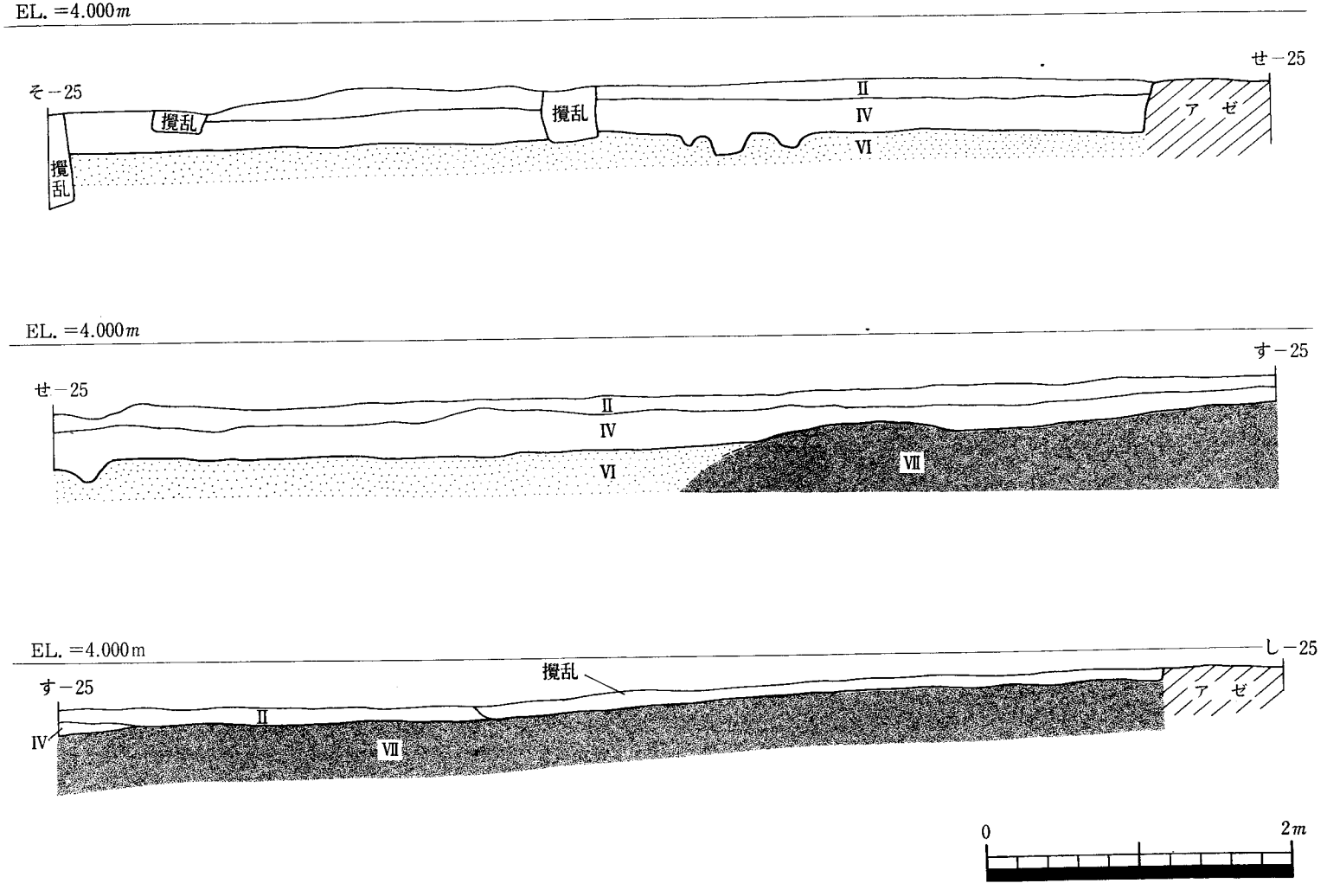
第Ⅳ層　褐色混土砂層　　遺物包含層で発掘調査区の南西側に展開し、多量の先史遺物を包含する。遺物の出土は本層と赤土部の付近で特に多い。本層に包含される在地土器の胎土・器面調整等と搬入土器の出土地点から、層位的に分けられるかと考えられるが、発掘調査においては、明確な層位的な違いを把握することはできなかった。

第Ⅴ層　黒褐色土層　　調査区の東側で検出された竪穴遺構内の覆土である。竪穴遺構は高宮暫定編年前Ⅲ・Ⅳ期に属する土器を包含する。

第Ⅵ層　白砂層（地山）　　調査区の南西部の第Ⅲ層下に見られるものである。Ａ区における状況から、本層は基盤の琉球石灰岩の上部に堆積されていることが確認されており、本区においても同様の状況かと考えられる。

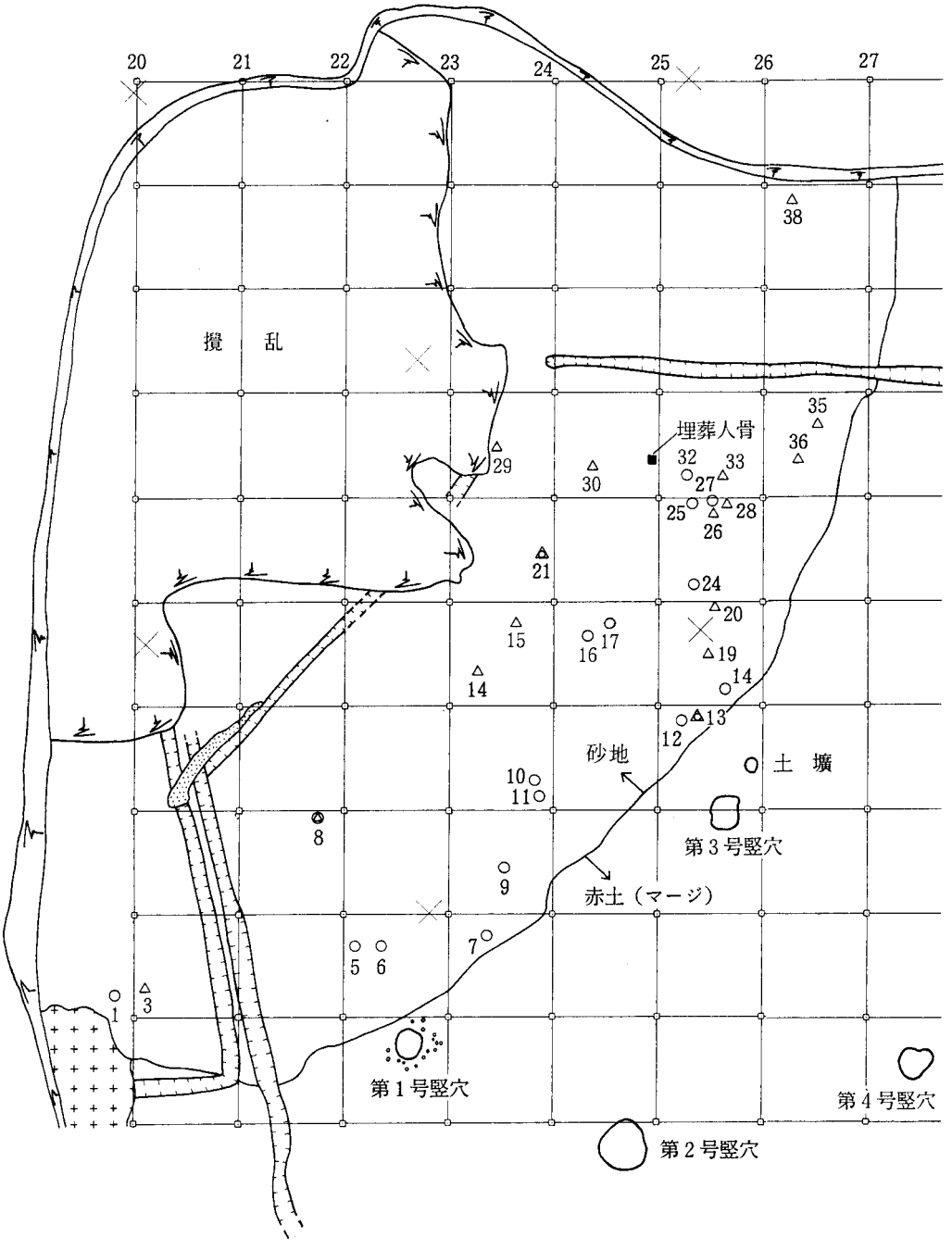
第Ⅶ層　赤　土（地山）　　第Ⅲ・Ⅳ層の内陸側にみられ、調査区の東側では表土層を発掘するとその直下に本層が露出する。

第3図　25ラインの層序

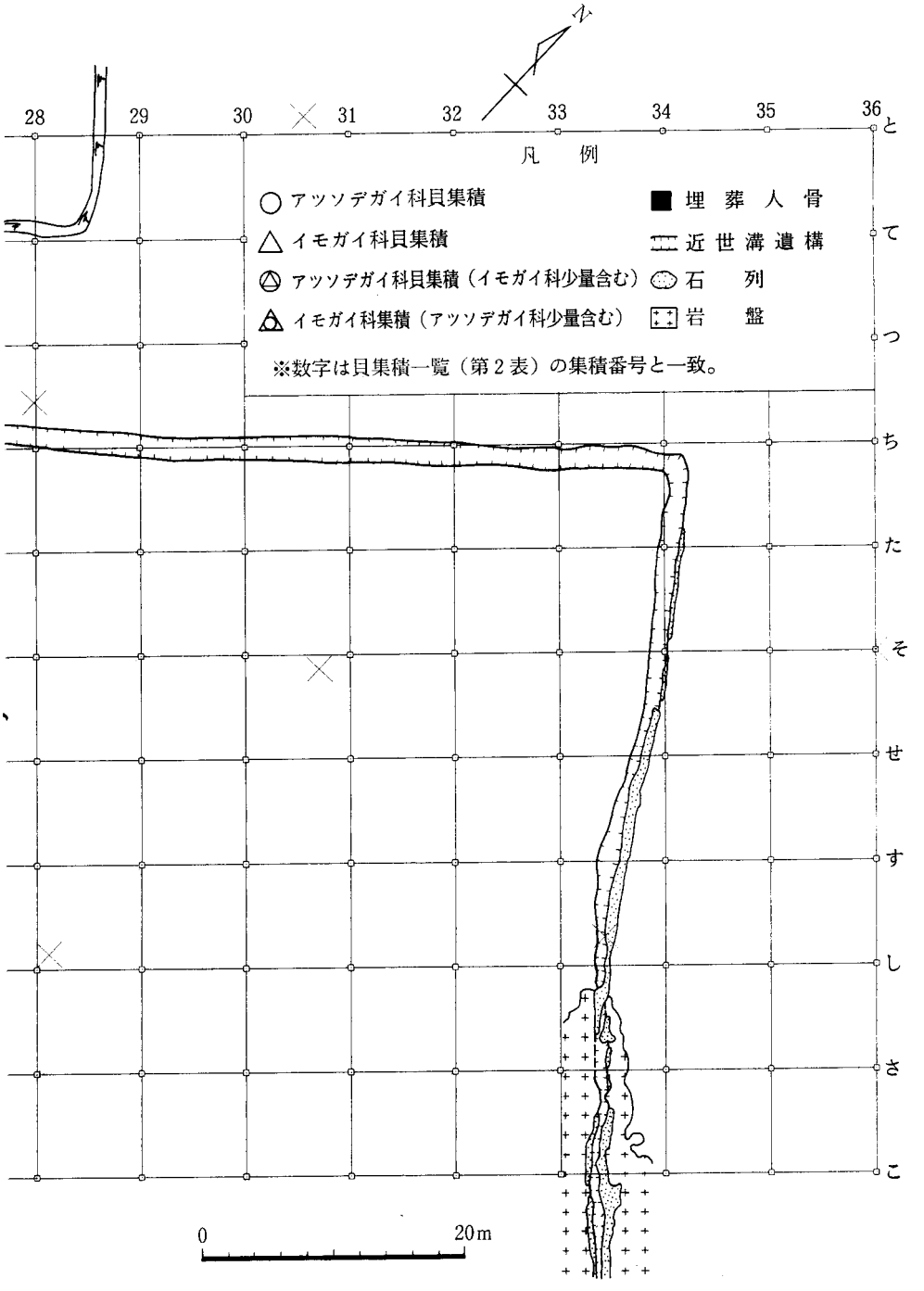


第2節　遺　構

遺構は先史時代と近世に属する遺構が確認され、前者は竪穴遺構、炉址、貝集積遺構、埋葬遺構、柱穴状の落込み遺構である。近世に属する遺構は溝遺構が検出されている。



第4図　遺構の分布


28
29
30
31
32
33
34
35
36
と
て
つ
ち
た
そ
せ
す
し
さ
こ
凡　例
アツソデガイ科貝集積
イモガイ科貝集積
アツソデガイ科貝集積（イモガイ科少量含む）
イモガイ科集積（アツソデガイ科少量含む）
※数字は貝集積一覧（第2表）の集積番号と一致。
埋葬人骨
近世溝遺構
石列
岩盤
0
20m

1　竪穴遺構

ここに紹介する遺構は、住居址と思われるもの4基、土壙状のもの1基である。いずれの遺構にも面縄東洞式土器や仲泊式土器と磨石、石材等の出土が見られたが、特に第4号遺構の床面では仲泊式土器と市来式土器に類似する土器の出土があった。同遺構は、本貝塚の主体をしめる遺構や包含層は砂地に所在するがここに紹介する遺構は総て砂地から赤土に変わった境界部分から20～30m内陸側の平坦な地形のところで確認された。以下、遺構別に略述する。

第1号竪穴（第5図、図版10）

平面形は基本的に隅丸方形であるが、やや楕円に近い。長径は2.50m、短径は2.0m、深さは20cmを測る。同遺構に伴う柱穴と思われる落込みも周辺より16基確認されている。床面から20cmのところで遺物の集中箇所があり、面縄東洞式土器、石斧、石材、貝殻片等が観られた。こ－22グリッドより検出。

第2号竪穴（第6図、図版11）

平面形は隅丸方形で長径3.85m、短径3.40m、深さは20cmであった。床面で面縄東洞式土器と小型の石斧、磨石等が検出された。こ－24グリッドより出土。同遺構については、縁の立ち上がり上面が途中で切られる状況を示すことから後世に上部が削られたと推察する。なお、同遺構に一部重なり直径1.20mの円形の深い落込みが見られたが、層の状況等から後世の落込みと判断した。

第3号竪穴（第7図、図版12）

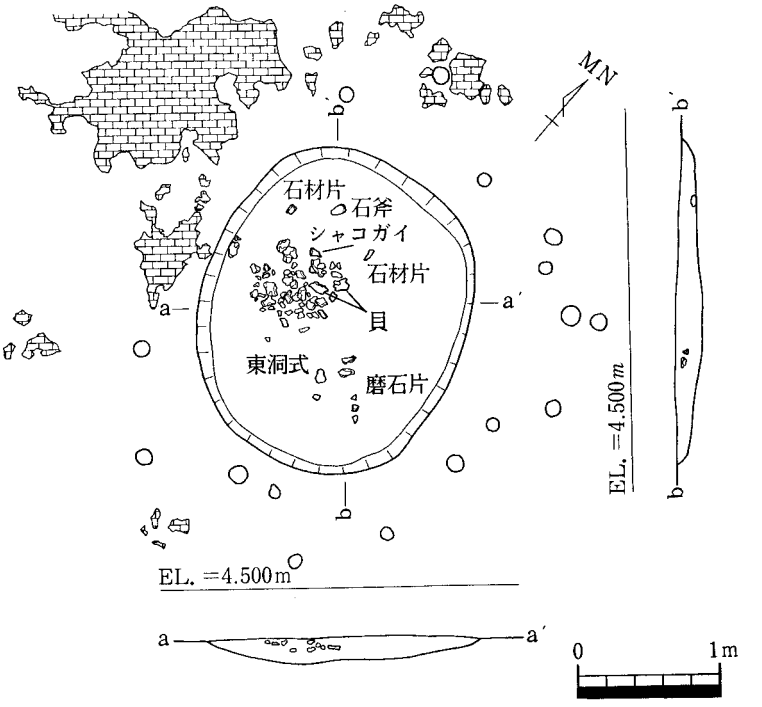
平面形は隅丸方形で長径2.70m、短径2.10m、深さは25～30cmを測る。遺構の中からは、土器・石器片が出土した。土器の特徴からして面縄東洞式に関連する遺構と推察した。す－25・26グリッド。

第4号竪穴（第8図、図版13）

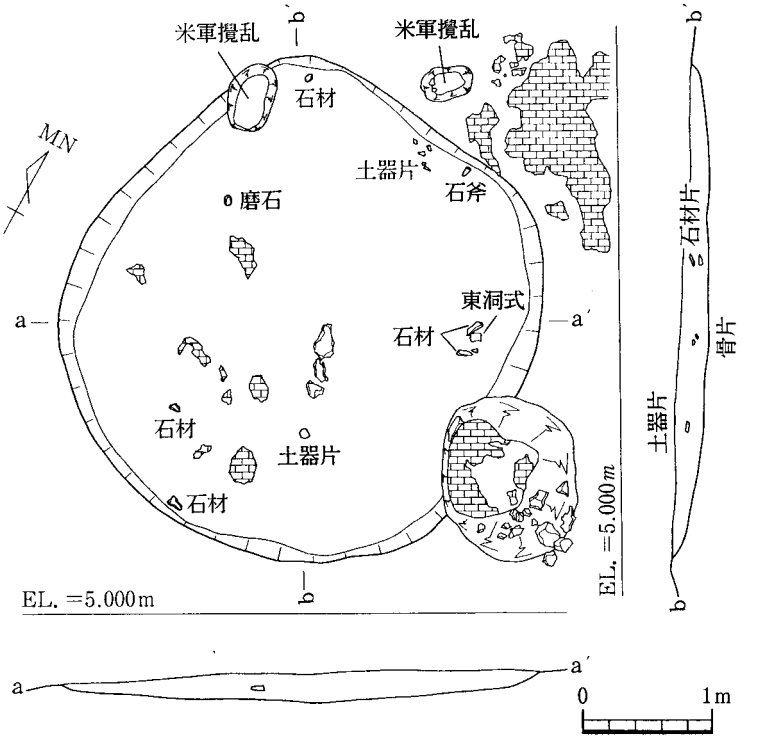
本遺構は、ラフに表現するなら平面形はやや崩れた隅丸の三角形状で、長径2.75m、短径2.30m、深さは20cmを測る。土器は面縄東洞式と仲泊式、市来式土器に類似するものが出土したが、床面では後者の仲泊式と市来式類似（黒雲母を胎土に含む）が観られた。本遺構は、一部、現代の攪乱溝や掘り込みも観られた。こ－27グリッドより出土。

土　壙（第9図、図版14）

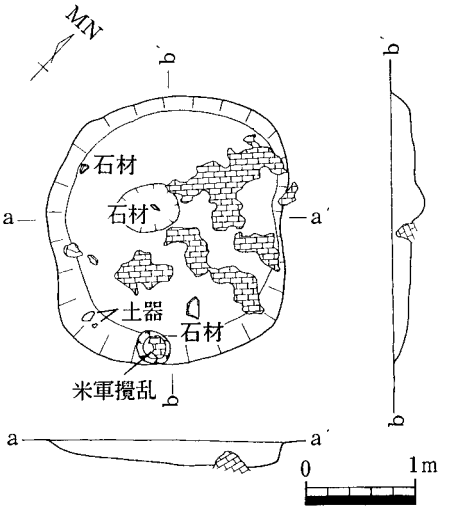
平面形は円形で、断面形は中華鍋状である。直径は1.10m、深さは30cmを測る。底から20cmあたりで磨石片が出土。す－25グリッドより検出。



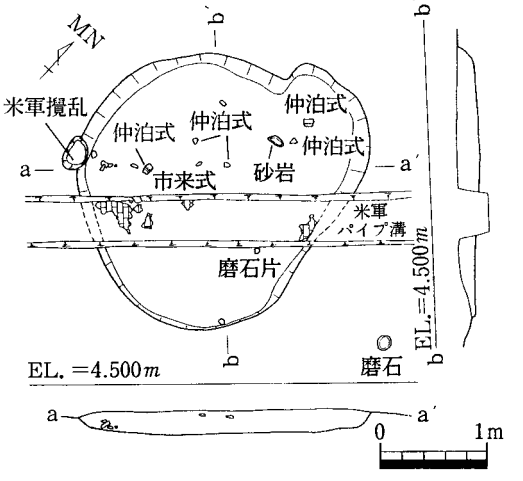
第5図　第1号竪穴遺構



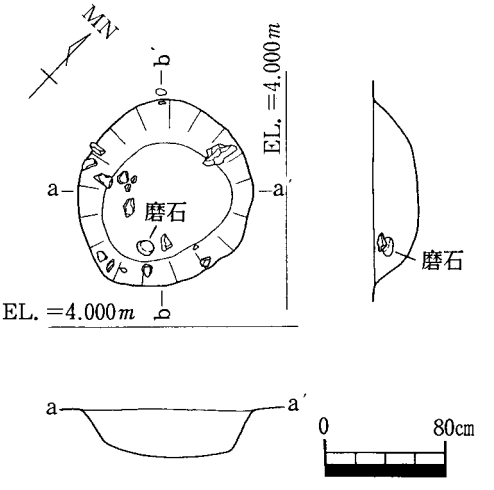
第6図　第2号竪穴遺構



第7図　第3号竪穴遺構



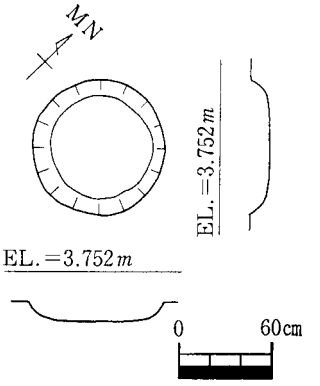
第8図　第4号竪穴遺構



第9図　土　壙

2　炉址

「こ－20」グリッドの北西端で確認されたものである。平面観は直径84cmの円形をなし、深さは12cmである。底面はほぼ平坦で、覆土には焼土や炭とともに貝殻が混入する。土器等の人工遺物の出土はない。周辺に柱穴等の住居址に関わる遺構が認められないことから屋外に設置する炉である。



第10図　炉　址

3　落込み遺構

白色砂層の直上で出土した褐色の落込みである。分布状況は「さ・し・す－21」グリッド、「す・せ－23」グリッド、「す－24」グリッドでみられ、遺物包含層の範囲内の東側に位置する。貝集積遺構との関わりでみると、貝集積遺構の分布の中心である「そ－25」グリッドの東側に落込み遺構は展開する。後述するように、落込み遺構としたものの中には柱穴と考えられるものもあり、住居地域の前面に貝集積がなされることも想定できる。

平面形及び断面形から①柱穴状のもの43例、②比較的上面の広い土壙状のもの12例、③は①・②に分類されないもの23例である。①については住居址に関わるものとしてプランの追求を行ったが把握できなかった。②は土壙になるもので、1例からは磨石と石材の出土がある。また、覆土にシジミと灰を含むものもある。

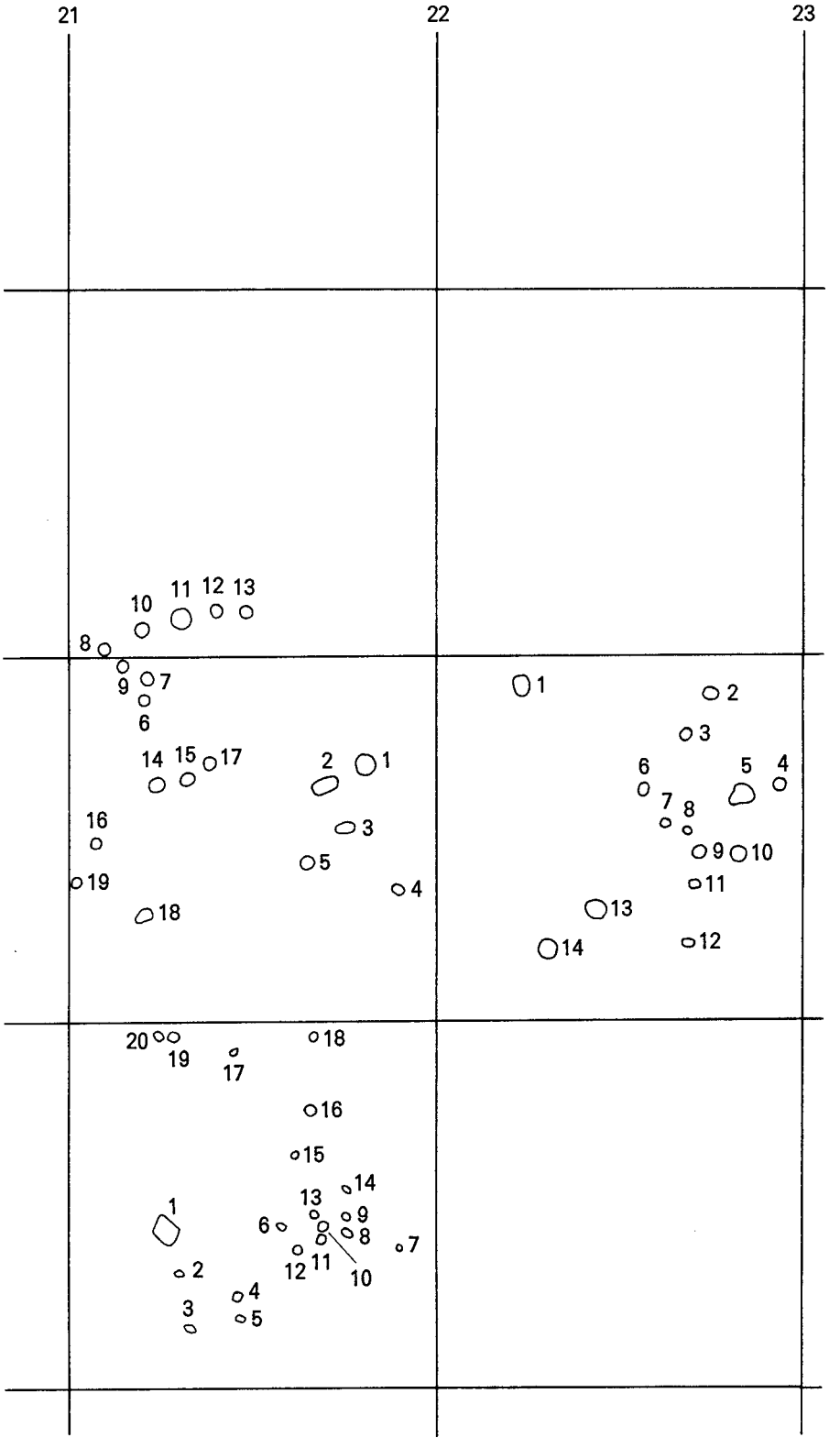
平面形態は①円形を呈するもの48例、②楕円形を呈するもの29例、③隅丸の三角形を呈するものが1例ある。深さは最小8cm、最大36cmで、平均20cm台のものが多い。

第1表　落込み遺構計測一覧

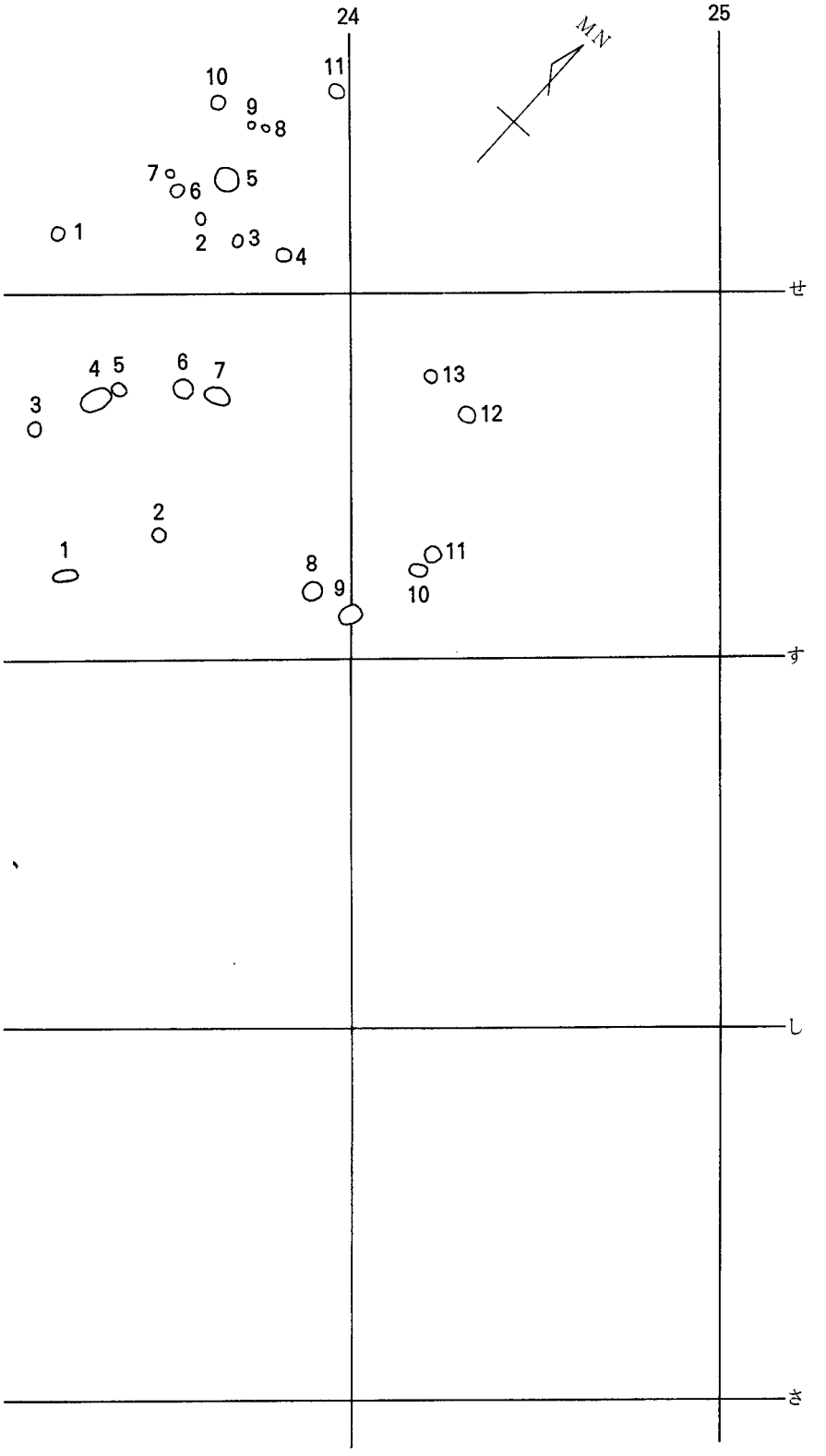
グリッド	番号	平面形態	長径	短径	深さ
さ－21	1	円形	68	63	14
	2		10	17	14
	3	楕円形	29	20	13
	4		18	14	12
	5	円形	20	19	20
	6		23	20	23
	7	楕円形	17	13	10
	8		40	23	16
	9		22	17	7
	10		30	22	17
	11	円形	25	21	26
	12		22	21	15
	13		16	16	8
	14	楕円形	18	12	19
	15	円形	20	19	14
	16		23	22	20
	17	楕円形	24	20	9
	18	円形	24	23	16
	19		24	24	11
	20		22	20	14
し－21	1	円形	55	52	10
	2	楕円形	42	21	19
	3		47	32	11
	4		38	30	10

グリッド	番号	平面形態	長径	短径	深さ
し－21	5	円形	36	36	13
	6		44	40	10
	7		46	44	15
	8		37	32	5
	9		33	32	10
	10		37	31	18
	11	楕円形	35	29	15
	12	円形	31	28	16
	13		29	25	11
	14	楕円形	60	32	10
	15	円形	23	23	10
し－22	1	楕円形	45	36	12
	2	円形	34	30	16
	3	楕円形	30	19	4
	4	円形	27	27	2
	5	三角形	50	50	24
	6	楕円形	30	19	8
	7	円形	22	21	4
	8		21	20	5
	9	楕円形	33	24	7
	10	円形	34	32	3
	11		26	22	8
	12	楕円形	20	17	8
	13	円形	42	38	5

グリッド	番号	平面形態	長径	短径	深さ
し－22	14	円形	45	41	14
す－23	1	楕円形	35	25	11
	2	円形	28	26	5
	3	楕円形	40	30	11
	4		70	37	26
	5	円形	30	29	5
	6	楕円形	54	52	6
	7		55	34	20
	8		49	43	20
	9		63	46	21
す－24	10	楕円形	40	27	20
	11		40	32	21
	12	円形	40	40	36
	13	楕円形	35	29	26
せ－23	1	円形	26	22	8
	2		20	19	3
	3		22	18	17
	4		31	30	18
	5	楕円形	60	35	23
	6	円形	25	20	9
	7		21	19	9
	8		19	19	5
	9		20	20	12
	10		30	28	13
	11		31	29	9



第11図　落込み遺構分布図


24
25
MN
せ
す
し
さ
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

4　貝集積遺構

貝輪等の貝製品の素材になるゴホウラやアンボンクロザメを集積するものである。現在のところ県内では嘉門貝塚を除く18遺跡で29基の出土例がある。集積される貝種はゴホウラ、アンボンクロザメ、オオソデガイが知られ、1種のみで集積するものと2～3種の複数種の貝で集積する例があり、集積される個数は最小3個から最大60個まである（註1）。

本貝塚の貝集積遺構についてはA区で3基、B区では37基が確認されている。B区ではヒメジャコの集積が2基出土しており、集積されたヒメジャコには有孔品もあることから本項で取り扱って報告する。

尚、嘉門貝塚の貝集積遺構については島袋春美氏により分類、考察されている（註2）が、資料整理における追加資料もあり、それらも含めて報告する。

(1)出土状況

貝集積の遺跡内における分布状況は「た－26」グリッドから「さ－22」グリッドにかけての広い範囲で出土し、特に「そ－25」グリッド周辺に多くが集中している。出土層は遺物包含層である第Ⅳ層である。出土状況からゴホウラとアンボンクロザメの集積は白色砂層を掘り込んだ土壙にあるものと、白色砂層上に配置するものがある。前者は比較的数量の多い集積にみられ、後者は数量の少ない集積に多い。ヒメジャコは貝肉を食した後の貝殻を集積したと考えられるが、取り上げ時の不手際から土壙にあったかどうかは不明である。

(2)貝　種

出土した集積を貝種でみるとゴホウラ、アンボンクロザメ、アツソデガイ、ヒメジャコの4種である。アンボンクロザメとしたものの中にはクロフモドキと思われる資料もあるが、殻表面の摩耗のため同定できないものもある。貝種ごとの集積をみると1種のみはゴホウラの集積13基、アツソデガイの集積4基、アンボンクロザメの集積2基、ヒメジャコの集積1基である。複数種の集積はゴホウラとアツソデガイの集積2基、ゴホウラとアンボンクロザメの集積1基、アツソデガイとアンボンクロザメの集積1基、ヒメジャコ除く3種の混在する集積が1基である。ゴホウラとアンボンクロザメのどちらか1種で集積される例が多いが、これは県内の他の遺跡における出土状況と同様である。

(3)貝の大きさ

集積された貝の大きさをみると、ゴホウラは全体で85個有り、殻径が最小9.7cm、最大14.7cmで、平均すると11.96cmの貝が採集されている。ゴホウラのみの集積の平均値をみると、10cm台1基、11cm台6基、12cm台5基、13cm台1基である。他の貝と集積されるものはアツソデガイ・アンボンクロザメと集積されるゴホウラは11cm台、アツソデガイと集積される

ゴホウラは9cm台1個と背面除去のため不明のものがある。

アツソデガイは30個有り、殻径の最小5.7cm、最大9.7cm、平均8.1cmである。アツソデガイのみの集積の平均値は7cm台2基、8cm台2基である。アンボンクロザメと集積されるものは8cm台、アツソデガイ・ゴホウラと集積されるものは7cm台と8cm台がある。

アンボンクロザメは159個有り、殻径の最小4.5cm、最大8.2cmで、平均は5.93cmである。アンボンクロザメのみの集積では殻径の平均が4cm台2基、5cm台5基、6cm台7基である。アツソデガイと集積するものは5cm台、アツソデガイ・ゴホウラと集積されるものは6cm台である。

ゴホウラとアツソデガイは集積別にみても個体間における大きさの差はなく、採集の際の取捨選択が働いた結果と考える。しかしながら、ゴホウラとアツソデガイの2種については殻厚の薄い幼貝27点が含まれており、採集時には大きさを目安に採集されたことが窺える。アンボンクロザメは貝輪以外に貝札の素材として使用できることから、前者ほど採集する貝の大きさにこだわらなかった結果であろう。

ヒメジャコについては写真でしか判断できないが、ほぼ同じ大きさの殻が集積される。ヒメジャコ等に2枚貝については貝錘の素材になりえるものであり、そのストックかと考える。

(4)加工の有無

これまで県内の発掘調査で出土した貝集積の中で、ゴホウラ等のソデガイ科の貝は溝に孔を穿つもの、背面や腹部が除去される例がある。A区も含め本貝塚出土の集積40基中の19基に認めることができる。

ゴホウラのみの集積についてみると、加工の施される集積は10基、非加工の集積は2基、加工と非加工の混在する集積は1基である。アツソデガイやアンボンクロザメと混在する集積をみるとアツソデガイと集積（2基）するものは2種ともすべて加工される。アンボンクロザメと集積（1基）されるゴホウラは加工品で、ヒメジャコを除く3種で構成される集積は非加工である。本貝塚出土の貝集積のゴホウラは加工されたものが多いことが分かる。

次に、アツソデガイについてみると、1種のみで集積されるものとゴホウラとともに集積さるアツソデガイはすべて加工が施される。ヒメジャコを除く3種で構成されるものは非加工である。

加工の施されたゴホウラとアツソデガイは、(1)背面中央に孔を穿つもの、(2)前溝近くに孔を穿つもの、(3)背面をすべて除去し、腹面を打割調整後に孔を穿つものがあり、(2)に分類されるものが多い。

アンボンクロザメは1種のみあるいは他種と混在する集積においても加工痕は認められない。

ヒメジャコは2基の内1基に穿孔される資料が1個確認できる。

註1　岸本義彦・島　弘「沖縄における貝の集積遺構－ゴホウラ・イモガイを中心に－」
『紀要』第2号　沖縄県教育委員会文化課　1985年3月

註2　島袋春美「南島から見た交易」『考古学ジャーナル』No.311 ニューサイエンス社　1989年

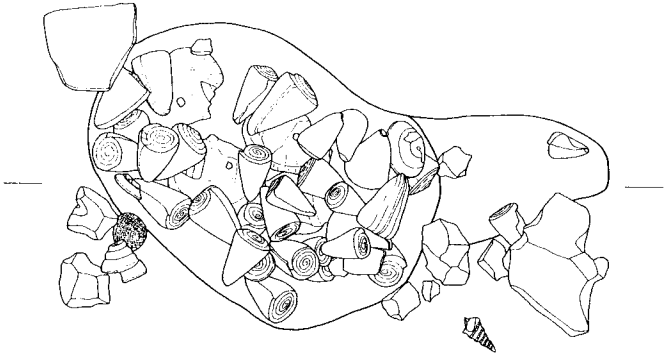
第2表　貝集積一覧

集積番号	出土グリッド メイン	サブ	層	貝種	個数	殻径 最小	平均	最大	加工の有無	備考
1	さ－19	d	Ⅳ	ゴホウラ	6	11.0	11.86	13.5	非加工	ヘビガイの4個付着、ヘビガイとアバタを呈するものが2個。
2	さ－19	不	Ⅳ	アンボンクロザメ	13	5.0	5.64	6.2	非加工	
3	さ－20	o	Ⅳ	アンボンクロザメ	11	6.1	6.60	7.2	非加工	アザタ状を呈するもの3個、ヘビガイの付着1個。
4	さ－20	不	Ⅳ	ヒメジャコ	7				有孔品1個有り。	
5	さ－22	n	Ⅳ	ゴホウラ	3	11.1	11.93	13.2	3個とも前溝に孔有り。	幼貝2個。成貝1個はアバタ状を呈する。
6	さ－22	j	Ⅳ	アツソデガイ	2	8.4	8.65	8.9	2個とも前溝に孔有り。	ヘビガイの付着1個、アバタ状を呈するもの1個。
7	さ－23	j	Ⅳ	ゴホウラ	6	10.1	11.04	11.5	前孔1個、前中孔3個、中孔1個有り。背面除去の腹面資料1個有り。	腹面資料を除く5個は幼貝。
8	し－21	a	Ⅳ	ゴホウラ	29	10.0	11.87	13.9	非加工	ヘビガイの付着8個、アバタ状を呈するもの1個、両方認められるもの7個有り。
				アツソデガイ	5	7.2	7.94	8.2	非加工	ヘビガイの付着1個。
				アンボンクロザメ	8	6.4	6.63	7.0	非加工	アバタ状を呈するもの2個有り。
9	し－23	g	Ⅳ	ゴホウラ	6				7個とも背面除去の腹面資料で、有孔品である。アツソデガイを含めた6個は殻頂破損。	
				アツソデガイ	1					
10	す－23	c	Ⅳ	ゴホウラ	5	10.9	11.40	11.8	5個とも前溝に孔有り。	ヘビガイの付着2個、アバタ状を呈するもの1個。
11	す－23	d	Ⅳ	アツソデガイ	4	5.7	7.32	8.3	4個とも前溝に孔有り。	ヘビガイの付着2個。
12	す－25	i	Ⅳ	ゴホウラ	2	11.9	12.80	13.7	1個は背面中央に孔有り。	有孔資料は幼貝。
13	す－25	f	Ⅳ	アンボンクロザメ	32	4.9	6.29	7.4	非加工	アバタ状を呈するもの2個有り。
				ゴホウラ	3	11.1	11.75	12.4	3個とも背面中央に孔有り。	有孔資料は1個は幼貝。
14	せ－23	k	Ⅳ	アンボンクロザメ	4	5.5	6.25	7.5	非加工	
15	せ－23	f	Ⅳ	アンボンクロザメ	5	5.7	6.26	7.0	非加工	
16	せ－24	j	Ⅳ	ゴホウラ	3	11.8	11.86	12.0	3個とも前溝に孔有り。	2個は幼貝。成貝1個はアバタ状を呈する。
17	せ－24	f	Ⅳ	ゴホウラ	2	12.3	12.50	12.7	2個とも前溝に孔有り。	2個とも幼貝。1個はヘビガイの付着とアバタ有り。
18	せ－25	h	Ⅳ	ゴホウラ	2	10.3	10.60	10.9	背面中央に孔有り。	2点ともヘビガイのを削り取った痕跡有り。
19	せ－25	g	Ⅳ	アンボンクロザメ	8	5.7	6.09	6.5	非加工	アバタ状を呈するもの5個有り。
20	せ－25	e	Ⅳ	アンボンクロザメ	4	4.7	4.73	4.6	非加工	
21	そ－23	b	Ⅳ	アンボンクロザメ	34	4.5	5.44	6.1	非加工	ヘビガイの付着1個。
				アツソデガイ	1	8.6				アバタ状を呈する。
22	そ－24	不	Ⅳ	ゴホウラ	3	11.5	12.60	13.7	前溝孔2個、背面中央孔1個。	2個は幼貝。殻径計測不可資料が1個。
23	そ－24	不	Ⅳ	アツソデガイ	5	7.2	7.82	8.8	5個とも前溝に孔有り。	幼貝1個。ヘビガイの付着1個アバタ状を呈するもの2個。
24	そ－25	i	Ⅳ	ゴホウラ	6	11.8	13.23	14.7	6個とも前溝に孔有り。	幼貝2個。ヘビガイの付着2個、ヘビガイとアバタの見られるもの2個。
25	そ－25	i	Ⅳ	ゴホウラ	2	11.5	12.26	12.8	2個とも前溝に孔有り。	幼貝1個。ヘビガイの付着1個、ヘビガイとアバタの見られるもの1個
26	そ－25	e	Ⅳ	アンボンクロザメ	2	5.8	5.90	6.0	非加工	
27	そ－25	e	Ⅳ	アツソデガイ	8	7.7	8.57	9.7	9個とも前溝に孔有り。	ヘビガイの付着3個、アバタ状を呈するもの5個。
				ゴホウラ	1		9.70			
28	そ－25	a	Ⅳ	アンボンクロザメ	4	6.2	6.65	7.5	非加工	
29	た－23	k	Ⅳ	アンボンクロザメ	4	4.6	4.98	5.4	非加工	アバタ状を呈するもの2個。
30	た－24	k	Ⅳ	アンボンクロザメ	3	5.3	5.60	6.1	非加工	
31	た－24	不	Ⅳ	ヒメジャコ	18				不明	
32	た－25	i	Ⅳ	ゴホウラ	3				3個とも背面除去の腹面資料で、有孔品。殻頂破損1個。	
33	た－25	h	Ⅳ	アンボンクロザメ	2	6.6	6.70	6.8	非加工	
34	た－25	f	Ⅳ	アツソデガイ	3	8.4	8.83	9.7	3個とも前溝に孔有り。	1個はアバタ状を呈する。
35	た－26	f	Ⅳ	アンボンクロザメ	14	5.0	5.56	6.2	非加工	
36	た－26	k	Ⅳ	アンボンクロザメ	3	6.5	6.80	7.4	非加工	
37	つ－25	不	Ⅳ	ゴホウラ	4	11.9	12.40	13.7	非加工	ヘビガイの付着2個、アバタ状を呈するもの2個。
38	つ－26	i	Ⅳ	アンボンクロザメ	7	5.4	5.87	6.3	非加工	アバタ状を呈するもの1個。

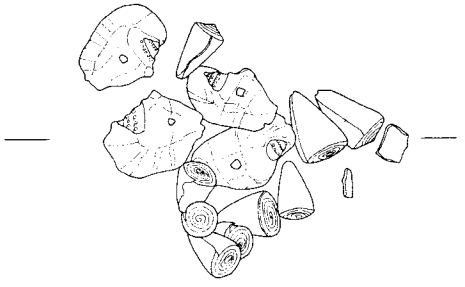
註1　出土グリッドのサブは右図のとおりである。不は不明。

サブグリッド

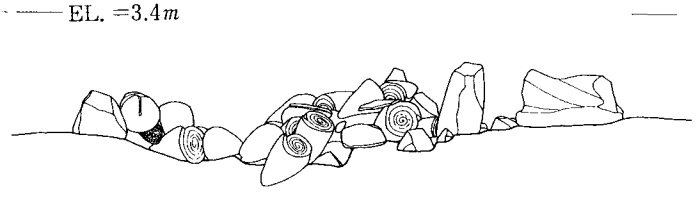
a	b	c	d
e	f	g	h
i	j	k	l
m	n	o	p



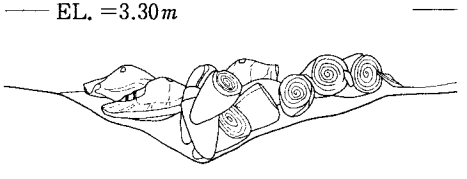
第13号集積の上部平面図



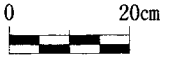
第13号集積の下部平面図



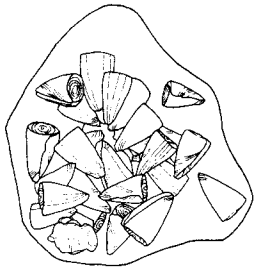
第13号集積の上部側面図



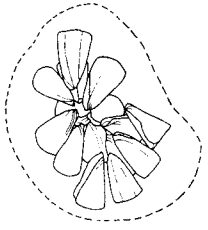
第13号集積の下部側面図



第13図　貝集積遺構

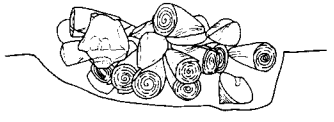


上　部

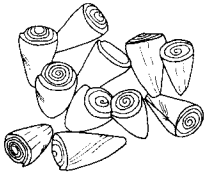


下　部

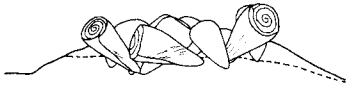
EL. =3.4m



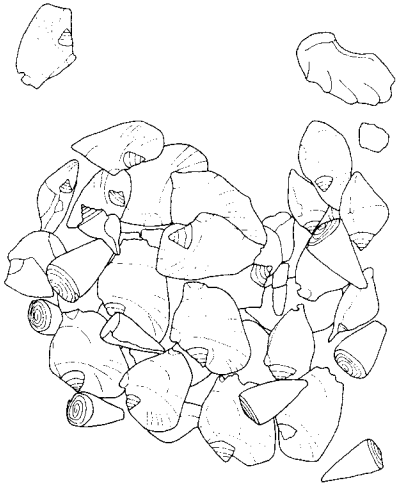
第23号集積



EL. =4.3m

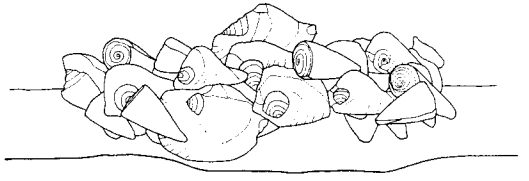


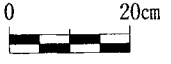
第3号集積

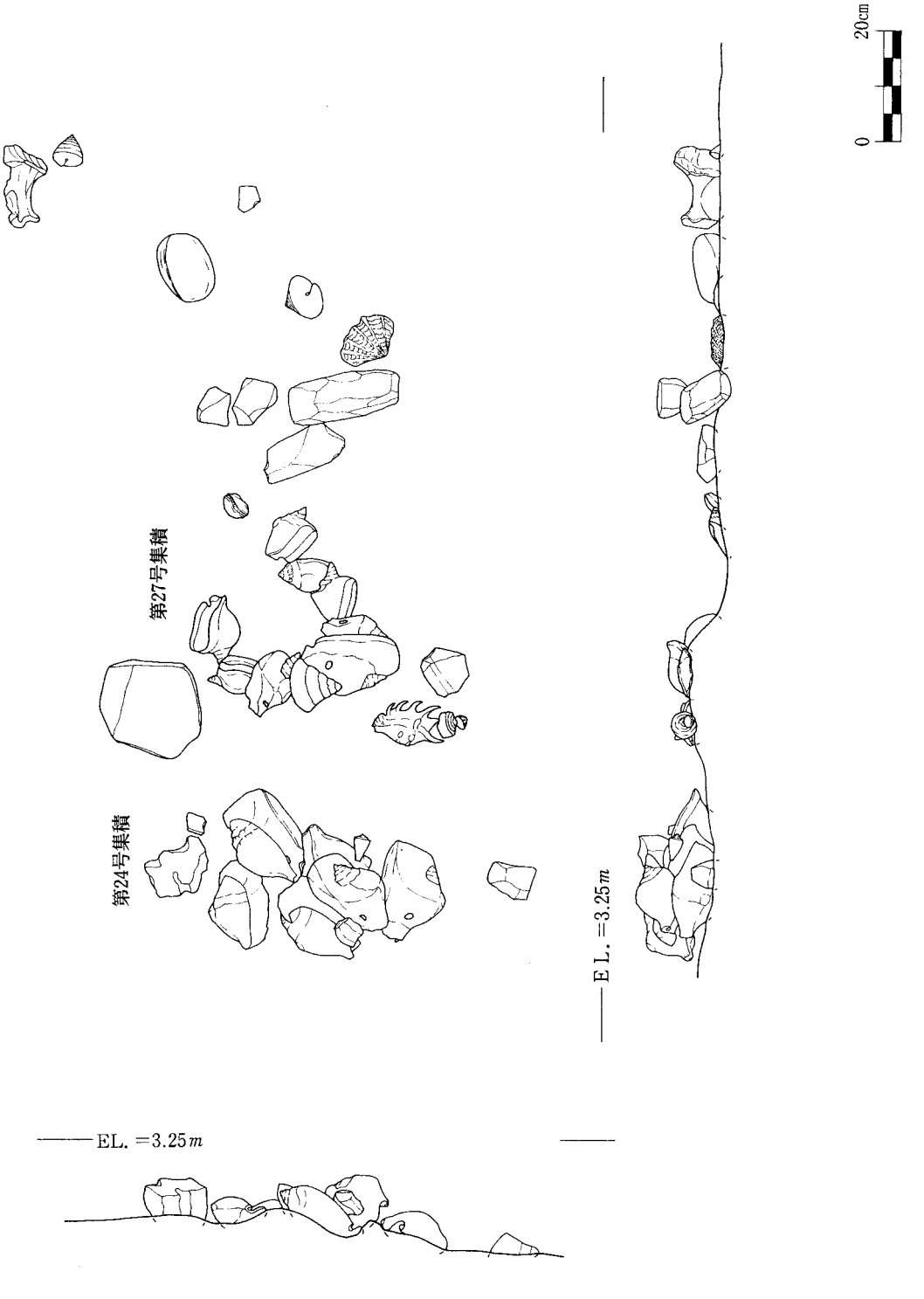


第8号集積

EL. =4.0m







第14図　貝集積遺構

5　埋葬遺構

た－24グリッドの白砂層上から１体の埋葬人骨が出土している。人骨の周囲に明確な掘り込みラインは検出できなかったが、周辺に先史遺物の出土が少ないことから、白砂層を掘り込んだ土壙墓と考えられる。人骨の左側には弧状に点在する礫を認めるが、人為的な配置かどうかは判然としない。人骨は頭位をほぼ西に向けた伏臥で埋葬される。人骨の保存状態は悪く、頭蓋骨、骨盤、四肢骨等が残るだけである。人骨の右肩部と左腰部にヒメジャコが配されるが、ほかに副葬品とみられる遺物の出土はない。

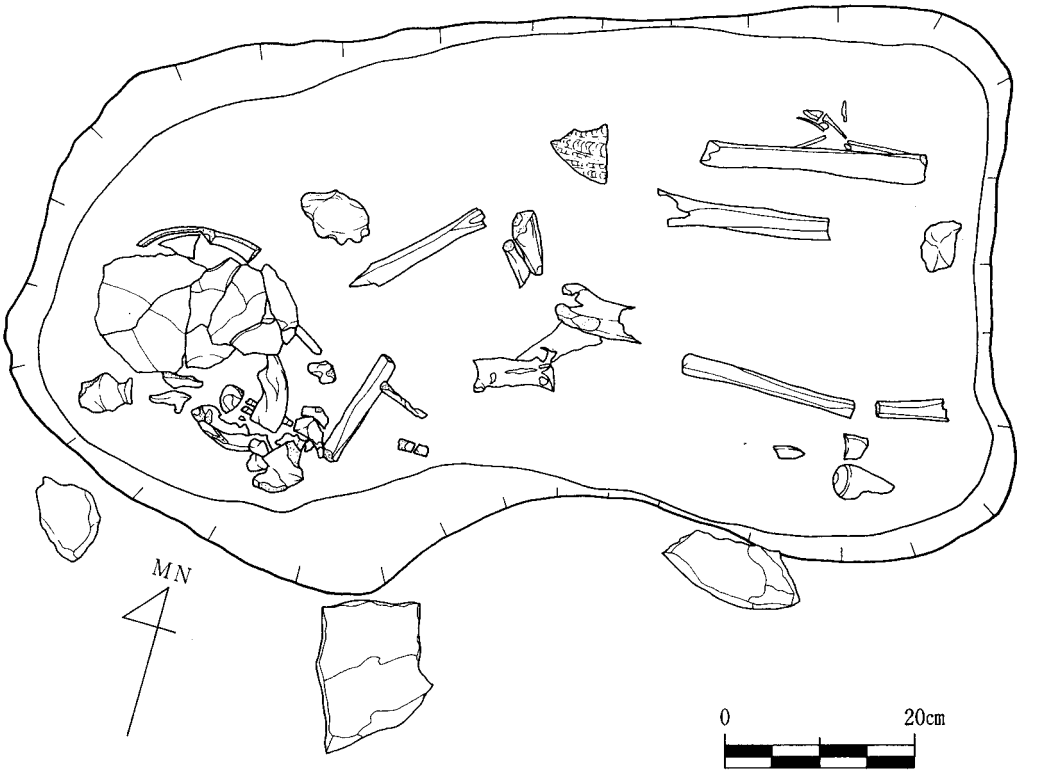
人骨についての形質人類学的詳細な調査は未だであるが、松下孝幸氏から次のとおりのコメントをいただいている。

嘉門貝塚Ｂ区出土人骨所見

1　性　別　　女性

2　年　齢　　壮年

3　その他　　抜歯の可能性が考えられる。



第15図　埋葬遺構

6　溝遺構

溝遺構は調査地区の北側と南側で確認された（第４図参照）。

北側の溝は上面観がＬ字形をなすもので、総延長は150m近くにも及ぶものである。溝は内陸側の岩盤・赤土地帯から海側（ほぼ北方向）へ向かって60m余り直進し、そこで直角（ほぼ南西向け）に折れ、80m程直進したところで終結する。終盤の25mは砂丘部に入る。溝の幅は内陸側の岩盤地帯では20～30cmの細い部分もあるが、赤土から砂丘地帯においては１m前後となる。溝の横断面は大方Ｕ字ないしＶ字状を呈し、深さは内陸側から海側へ向かうラインが30～40cm、南西に走るラインが50cm前後である。溝の片側あるいは両側には石列を配し、溝の側石とするようであるが、欠落する部分も多い。石列は琉球石灰岩によるもので、個々の大きさは拳大のものから、40cm前後の大型のものまである。面の加工は認められない。

南側では３本確認された。うち２本は北側の溝と同じように、内陸側から海側へのびる（南東～北西）のもので、両者はあぜを挟んで並走する。ただし、２本のうち南に位置する１本については内陸側の赤土地帯においては南西方向へ直角に折れ、８mほど進んだところの岩盤で途切れる。２本とも大部分は砂丘上に位置し、いずれも海側へのびた部分は攪乱によって様子がつかめない。溝の長さは南に位置するものが約35mで、北に位置するものは45mである。

南側検出の３本のうち残る１本はほぼ南北に走るもので、南端は前述の並走する溝の途中に連結する。北端は攪乱のため詳細は知り得ないが、調査地区の北側で検出された溝の終結部近くまで及ぶ。攪乱を受け断続的な検出となったが、長さは途切れた部分を含め約30mである。

溝は３本とも幅１m前後で、前述の北側で検出された溝とほぼ同じであるが、深さは北側の溝に比べると浅く、30cm程度であった。ここでも石列を伴うが、大部分は欠落している。南北に走る溝に伴う石列は、南端部が、並走する２本の溝を覆うかたちで配されていることから、南北に走る溝と並走する２本の溝との間には若干の時間差があるものとみられる。

以上、本地区で確認された溝遺構それぞれについて述べた。ところで、去る大戦前における嘉門貝塚一帯の土地利用をみると、この辺りは畑として利用されていたようである（註１）。今回、検出された溝遺構全体をみると、北側の溝と南側の溝とによって、広大な空間を区画したような構成を呈し、畑の区画なども想起させるが、今のところ決定的な根拠がなく、その性格は判然としない。後述のように本遺跡では18～20世紀中を中心に、15後半～20世紀中にまたがる多量の陶磁器が出土している。溝遺構内からは灰釉碗や鉄釉碗などの陶器片が数点検出されていることから、同遺構は近世～大戦前の所産と推察されるが、具体的な所属年代を示すには至らなかった。なお、本遺跡の近くに遺構の様子や遺物内容が近似する城間遺跡（註２）が所在しており、今後、同遺跡を含めた広い空間での検討が必要と思われる。

註１：浦添市史編集委員会 浦添市教育委員会『浦添市史第６巻』昭和61年３月

２：浦添市教育委員会『城間遺跡』浦添市文化財調査報告書第19集 平成４年３月

第３節　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は時代的には大きく先史遺物と近世遺物に分けられる。前者は遺物包含層である第Ⅳ層から出土した土器、石器、貝製品、骨製品等の人工遺物とイノシシ・ウミガメの動物遺存体、貝類遺存体の自然遺物がある。後者は近世の陶器、磁器、金属製品等がある。量的には先史遺物が圧倒的に多く、後者は少なかった。

以下、先史遺物から既述する。

人工遺物

１土　器

嘉門貝塚Ｂ区出土の土器は、その特徴から見て、大半は高宮暫定編年（註１）後期（沖縄貝塚時代後期）に属すると思われるものと、高宮暫定編年前Ⅲ・Ⅳ期（沖縄貝塚時代前期）相当の土器がセキスイコンテナＴＳ28の約30箱分出土した。なお、近世の軟質陶器については別のところで扱うためここでは触れないことにする。また、出土した土器は多量であること、紙面に都合があること等から特徴的な資料について報告する。

土器報告の順番は、基本的に高宮暫定編年前期および後期の順にした。以下、時期別に略述する。

高宮暫定編年前Ⅲ・Ⅳ期に相当する土器

この時代に相当する土器は高宮氏の土器編年によると、前Ⅲ期の面縄前庭式、前Ⅳ期の仲泊式、神野Ｄ・Ｅ式、伊波式、荻堂式、大山式、室川式等の土器がある。

本貝塚Ｂ区は、前述の在地土器型式と扱われている中で面縄前庭式土器と仲泊式土器、型式の判然としない土器が出土した。その他の南九州系統の土器型式または影響を受けたと思われる土器は、市来式土器に類似する資料と奄美諸島の土器型式とされている面縄東洞式土器が出土した。後者は搬入土器のところで扱うことにして、前者の面縄前庭式、仲泊式土器の代表的な資料について図版に示した。ここで紹介した土器は、いずれも前記の竪穴遺構（住居址と想定する）に伴うものである。

在地土器

図版60の１～４は縄前庭式土器、同図版５～８は仲泊式土器に属する資料である。

搬入土器

図版60の９～21は面縄東洞武土器、図版22は市来式土器または市来式の影響を受けた土器である。後者については、胎土に雲母を多量に含むことから製作場所は嘉門貝塚周辺の可能性がいと観てここで扱った。

高宮暫定編年後期に相当する土器

この時代に相当する土器は、高宮廣衛氏の研究によると後Ⅰ期に属する真栄里式土器（弥生前期相当）、後Ⅱ期に属する具志原式土器（弥生中期相当）、後Ⅲ期に属するアカジャンガー式土器（弥生後期相当）、後Ⅳ期に属するフェンサ下層式土器（古墳時代～平安時代相当）が報告されている（註２）。

ここで扱う嘉門貝塚Ｂ区出土の土器の大半は、前述した型式の何れに属するか判断し難いものである。しかし、沖縄県教育委員会において、今日まで沖縄貝塚時代後期に属するとして扱われている（註３）後述の遺跡等から検出される土器に特徴が類似すること等から後期の土器として扱った。以下、後期の土器とする。

ここに分類する土器は、既に報告した嘉門貝塚Ａ区出土の後期の土器（註４）の分類範疇に概ね含まれることから嘉門貝塚Ａ区の胎土・器面調整等による分類と形態の特徴を組み合わせて下記のように分類して報告する。

嘉門貝塚の土器を観察する中では、胎土・器面調整等が分類するうえで目安になり易いことから分類の柱に置くことにした。また、前述の視点による分類を行った後、次に器種別の形態による分類を加えながら口縁部、底部に分けて略述する。

口縁部

Ⅰ類

胎土はやや泥質で、混和材に細かい砂粒と赤色粒を主体に含む。器面調整は、撫で調整、篦撫で、刷毛目状調整が主に認められる。器面には土器整形時の指圧痕や土器製作の輪積み痕が顕著に認められるため、器面はやや起伏を呈する。土器の厚さは平均７～８㎜を測る。

１、口縁が外反するもの。

ａ)口縁から下位の肩部にかけて屈曲状の稜を明瞭に作るもの。第16図１～４。

ｂ)口縁の端部が外反するもの。第16図５～７。

ｃ)口縁が直線的に開くもの。第16図９・10。

嘉門貝塚Ａ区で出土した、口縁が内湾するものは少ないため、省略した。

その他

有文土器を第24図10～12に示した。

Ⅱ類

胎土と混和材は前述Ⅰ類と変わりない。器面調整も前述Ⅰ類と基本的には変わりないが、前者Ⅰ類よりも器面の起伏は少なく、器面調整はやや丁寧である。中には器面が光沢を呈するものもある（篦撫で）。土器の厚さは平均１㎝を測る。前者に比較して重厚な感じを受ける。

１、口縁が外反するもの。

a ）口縁から下位の肩部にかけて屈曲状の稜を明瞭に作るもの。第18図５・７に示した。

b ）口縁の端部が外反するもの。第18図１～４がこれに属する。

２、口縁が内湾するもの。

a ）肩部から口縁にかけて、僅かに内湾するもの。第18図８・９である。

Ⅲ類

胎土は前記のⅠ・Ⅱ類とほぼ変わりない。しかし、土器の厚さは均一で、５～６㎜と比較的薄く、器面調整は丁寧で土器製作の輪積み痕や指圧痕は外面では容易に確認しにくい。

第17図１・２・７は甕形の器形を呈するものである。第18図３・４に図示した２点で小型鉢形に近い器形の資料である。同図５・６の鉢も本類に属すると考えるが、面の仕上げは雑である。

Ⅳ類

胎土は、前述の三者に比較するとやや砂質的なもので、手触りはややザラザラする。混和材に細かい石英、黒色を呈する細長い鉱物等を含む。器面調整は丁寧で、面は部分的にやや光沢を呈するところもある。この種類の土器は、宇竪貝塚の報告で九州の弥生土器の可能性も考えられる（註５）とされているものと同類の資料と推察する。嘉門貝塚Ｂ区の土器で主流になるものである

１、口縁が外反するもの。

a ）口縁と肩部の間に屈曲状の稜を明瞭に作るもの。第21図１～５はこれに属する。

b ）口縁の端部が外反するもの。第22図１・２はこれに属する。このタイプには、外耳を貼り付けるものも見られた。

２、口縁が内湾するもの。

a ）肩部から頸部にかけて内湾し、口縁の端部が外反するもの。第７図３～第８図４。

b ）口縁の下位で屈曲して内傾するもの。第23図５～７。５は口縁部に小さい山を有する。６は外耳が付くものである。

３、口縁がほぼ直口するもの。

第19図１～４、第20図１～５の９点がこれに属する。第19図４には外耳が貼り付いている。

その他

有文土器を第24図１～16に図示した。その中でも１は口縁に山形を作り、口縁外面には単篦を使用した横方向押し引き文を２本描き、口縁山形の部分で区画する。６は、口縁の縁をやや尖らせて肥厚させるものである。また、口縁に沿って先の細い道具を利用した鋸歯文を横方向に描いている。文様は素朴である。前述の２点とも胎土に雲母を多量に含み、他の土器と胎土

の点で特徴を異にする。むしろ、胎土の特徴の点では弥生土器に近いことから搬入品の可能性も考えられる。2～5は先の分類Ⅳ類、10～12はⅠ類に属する。

底　部

底部の資料は74点を図示した。これらの資料は、土器の形を浮かび上がらせるため、前述した胎土・器面調整等の分類別に底部を分け、口縁部と底部を可能な限り関連づける手法をとった。

Ⅰ・Ⅱ類

第25図1～35に示したものは、Ⅰ類にその大半が属する底部資料で底の部分はボリュームのある乳頭状の膨らみを有する乳房状尖底、または、底部先端をくぼめ、凹面に整形するもの、膨らみの形状がルーズなもの等がある。ここの土器底部は、胎土・器面調整等、分類のⅡに属するものが含まれている可能性が考えられるが今回は具体的に示すことが出来なかった。

Ⅳ類

第11図は、分類Ⅳ類に属する底部資料で平底、丸底、乳房状尖底が観られる。平底を同図1～11、19～23、丸底は31～32、乳房状尖底は12～18、24～30に図示した。しかし、ここで乳房状尖底とした底部は底を平たく成形しているものが多いように感じた。

その他

胎土等の分類で容易に分けることが出来なかった底部資料である。感覚的には分類Ⅰ・Ⅱのグループに属する第25図36～40と分類Ⅳ類に属する41・42の2点に大別されると想定するがハッキリしない。また、41については、土器の別の部位になることも考えられることから部位の検討が必要である。

以上、土器について分類別に略述した。土器を出土層位または遺構との関連で出土状況を説明できないのは別の項で述べていることからも推察できることであろう。しかし、発掘調査区の面的な出土状況を観るなら土器分類Ⅰ・Ⅱ類のタイプは嘉門貝塚A区に近いグリッドで出土が目につき、同貝塚B区の北西側にかけて（内陸から海側）土器分類Ⅳ類の出土が大半を占め、主流であった。また、同貝塚出土の弥生土器はそのほとんどが発掘調査区の北西側のグリッドからの出土であった。前述の状況から本貝塚における弥生土器に伴う在地の土器は土器分類Ⅳ類のタイプと考える。

尚、先に報告した嘉門貝塚A区の土器口縁部資料は土器分類のⅠ・Ⅱ・Ⅲ類が全体の9割以上を占め、弥生土器と分類できる土器は得られてない（註6）。

註、

（１）高宮廣衛「滄海に列なる南島」『図説検証　現像日本』旺文社１９８８年

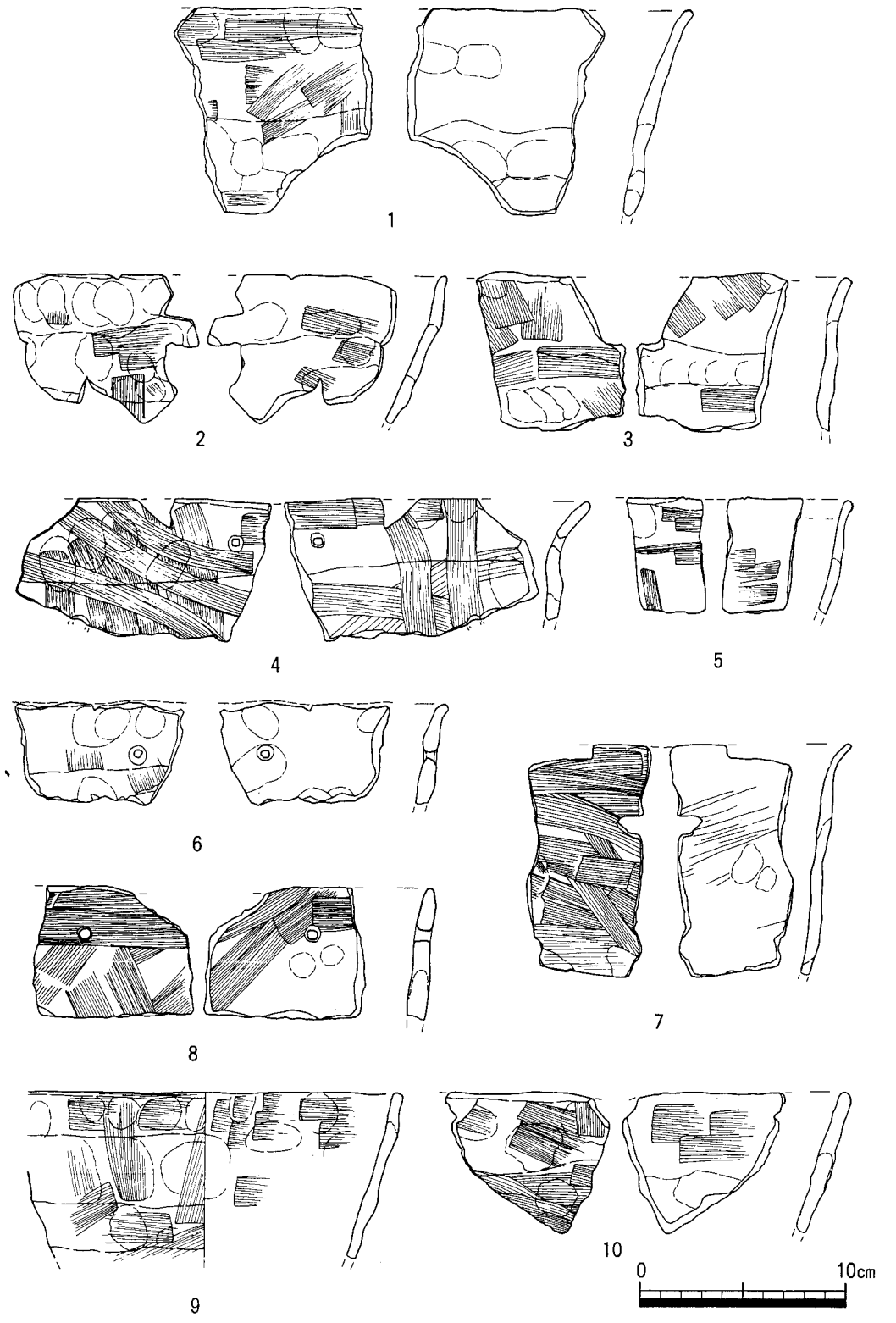
（２）高宮廣衛「沖縄のいわゆる後期遺跡について―弥生文化との関連において―」八幡一郎先生頌寿記念考古学論集『日本史の黎明』六興出版１９８５年

（３）沖縄県教育委員会「沖縄考古展　掘り出された沖縄の歴史―発掘調査１０年の成果―」１９８２年

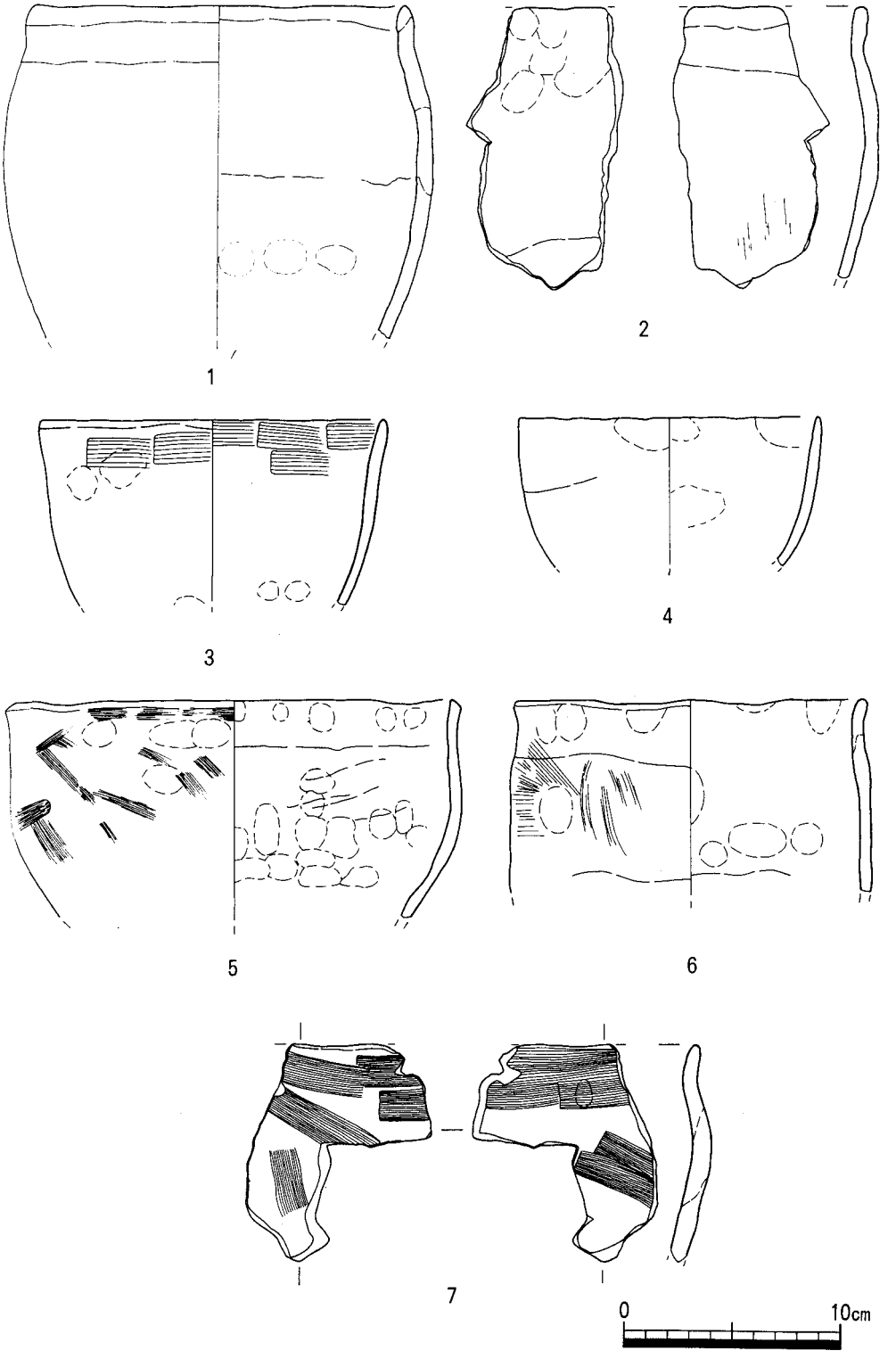
（４）浦添市教育委員会「嘉門貝塚Ａ」－牧港補給地区開発に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ－１９９１年３月

（５）沖縄県具志川市教育委員会「宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚発掘調査報告書」１９８０年３月

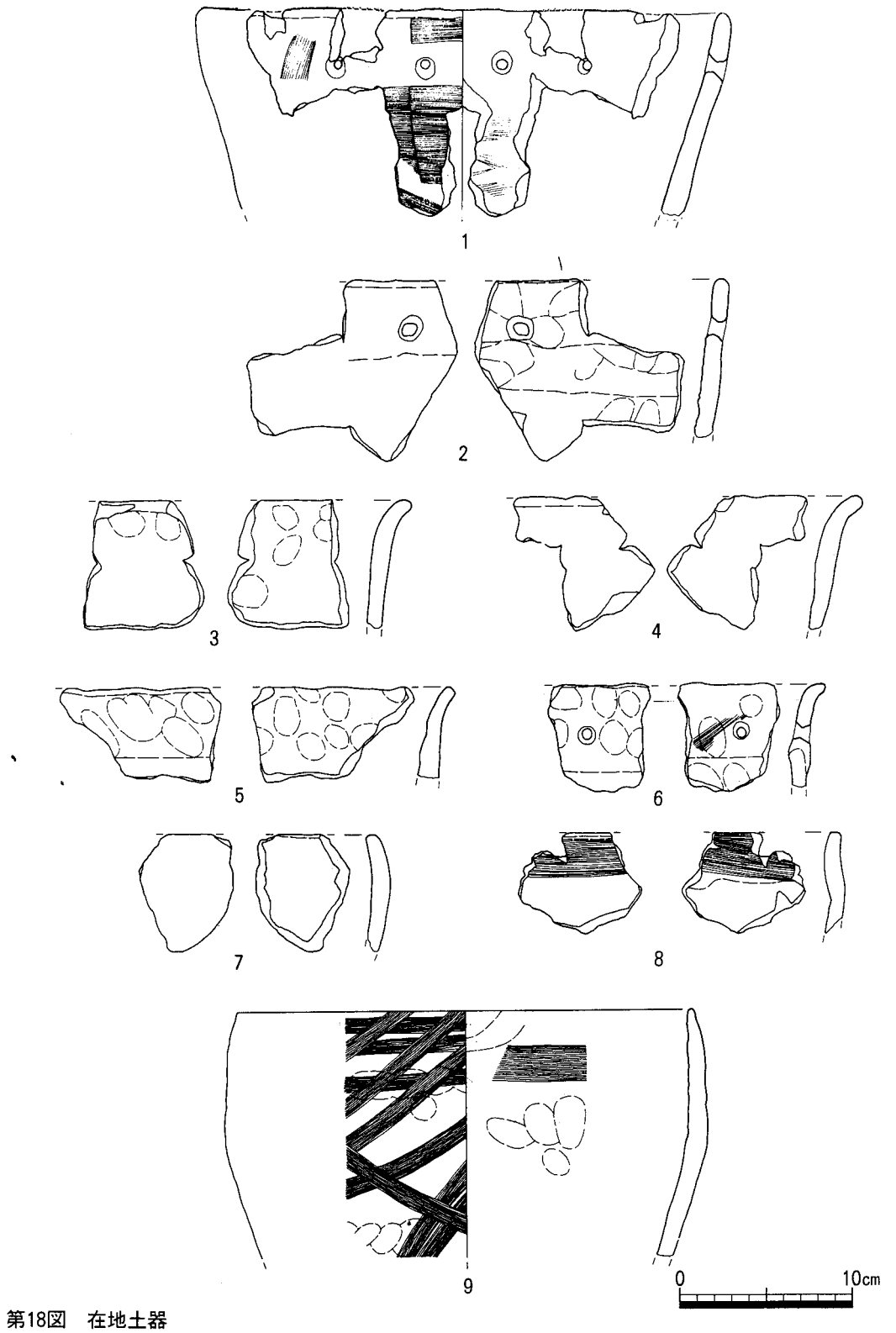
（６）前記４と同じ



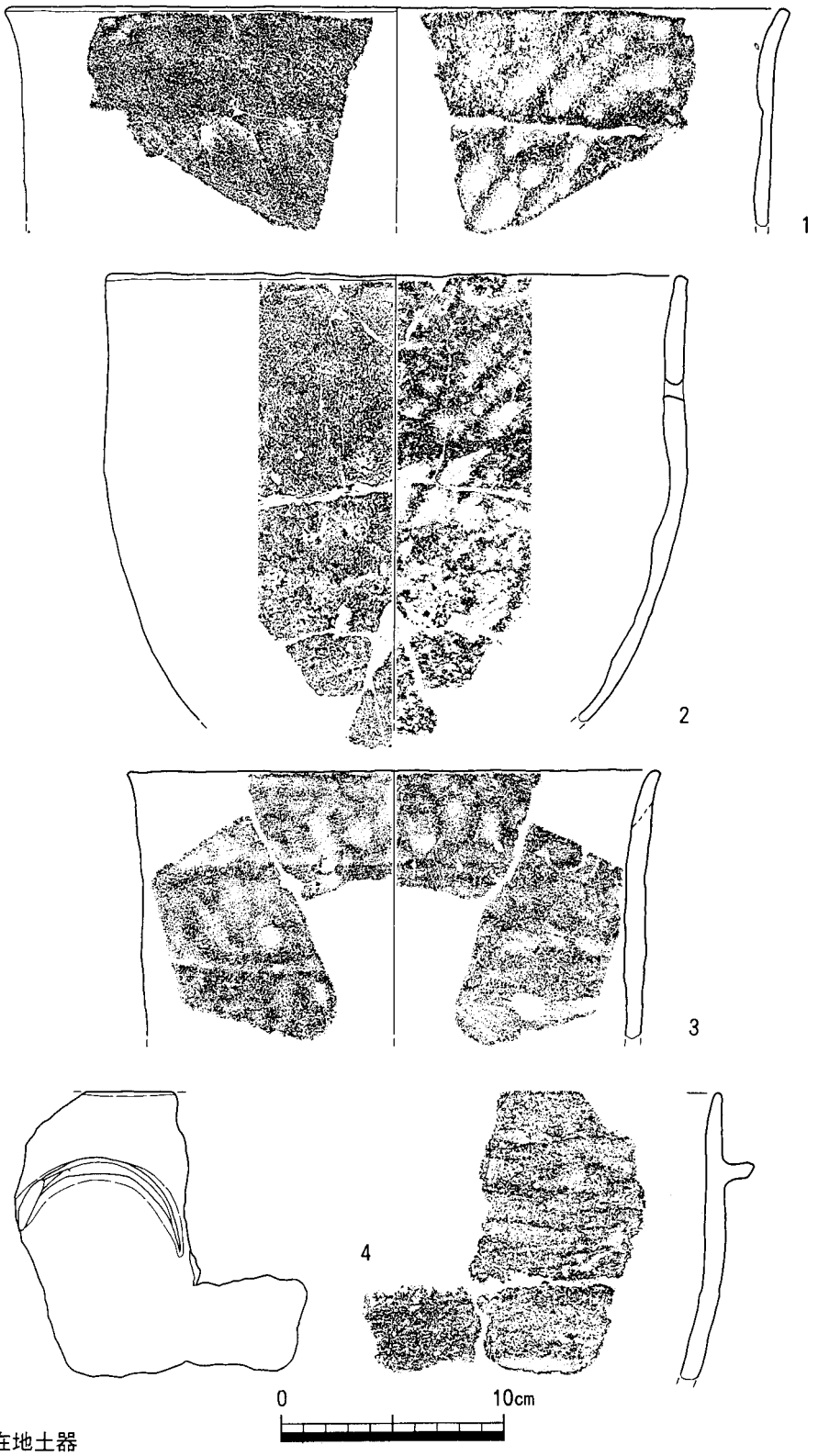
第16図　在地土器



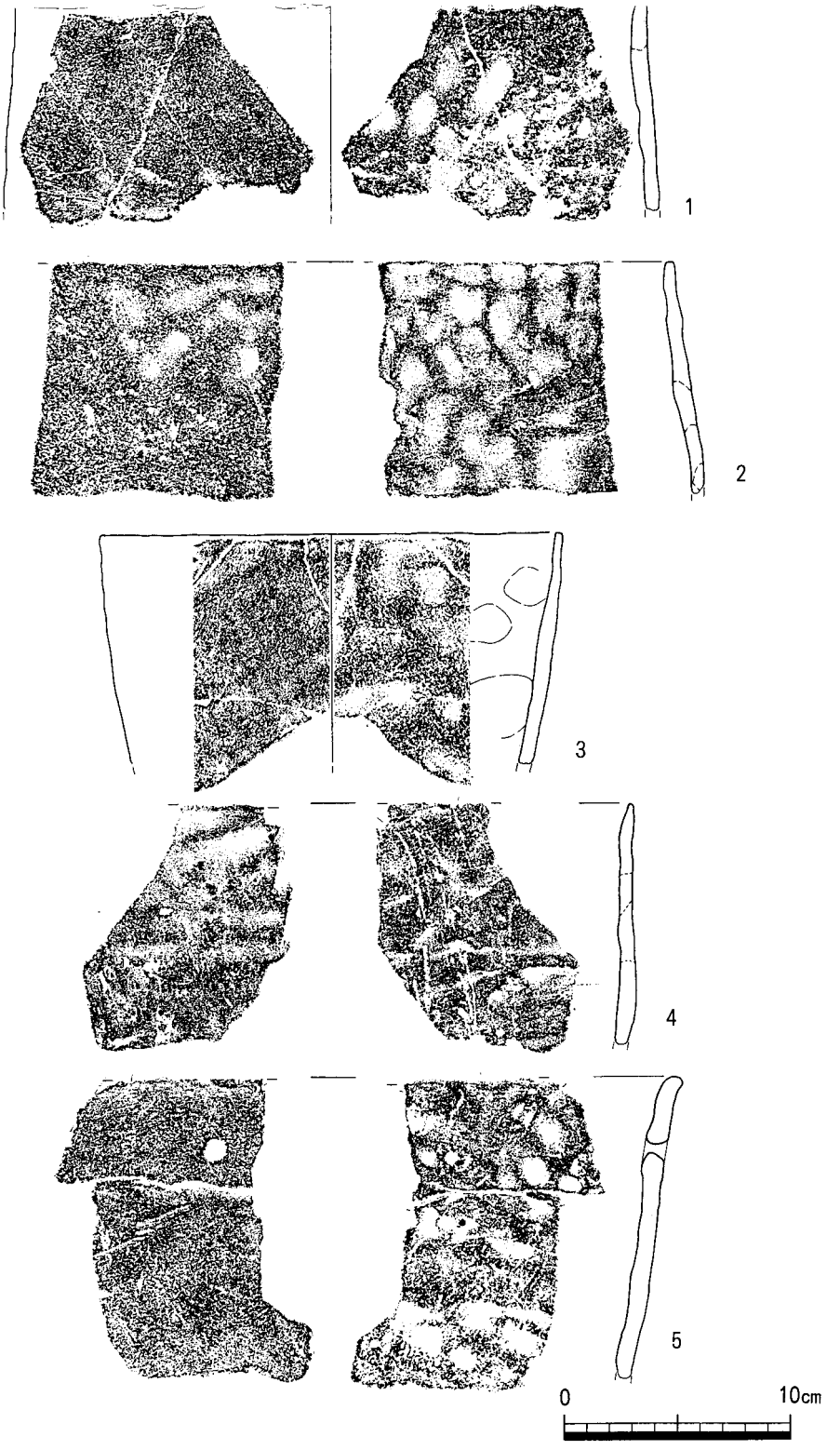
第17図　在地土器



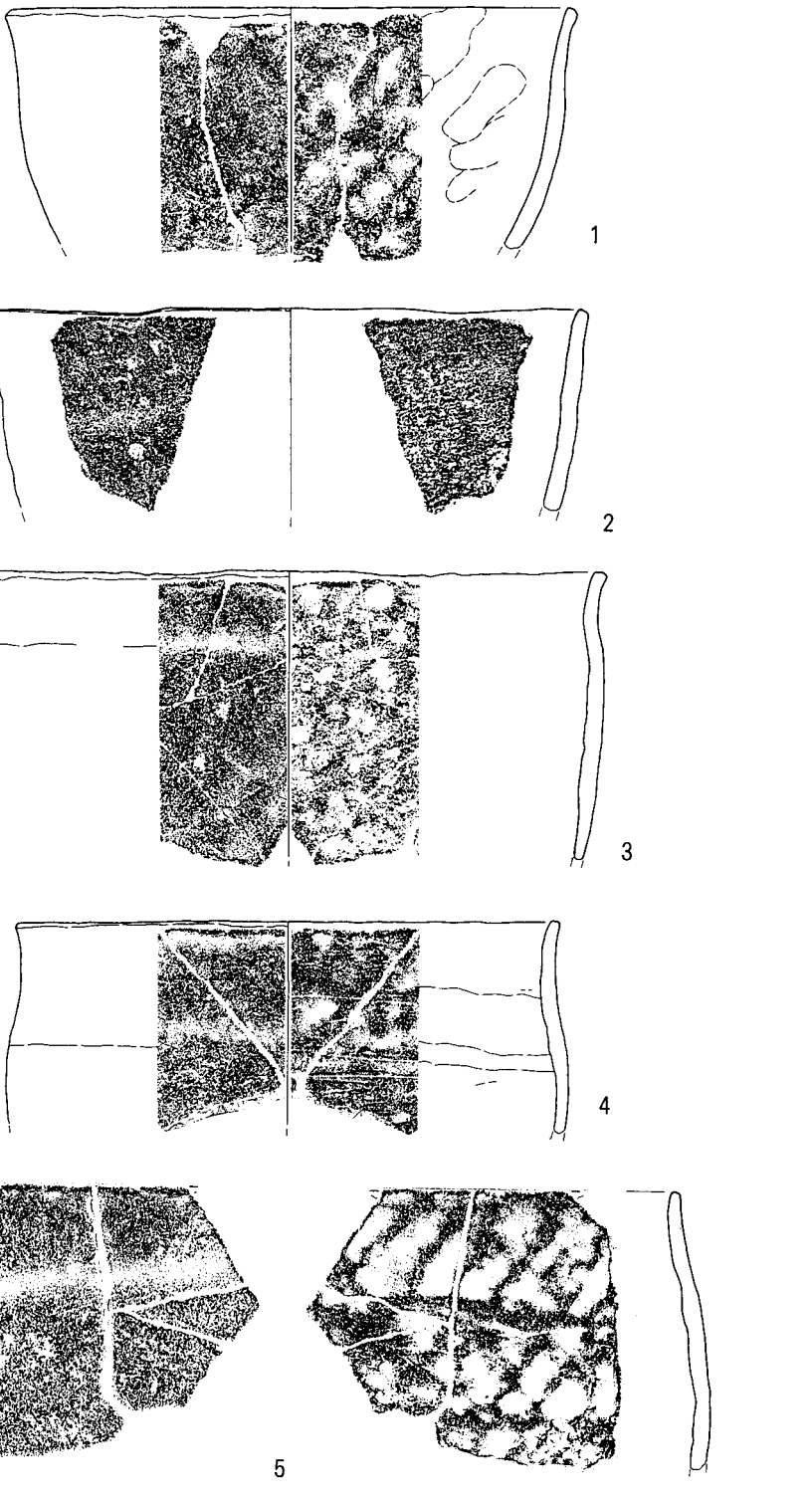
第18図　在地土器



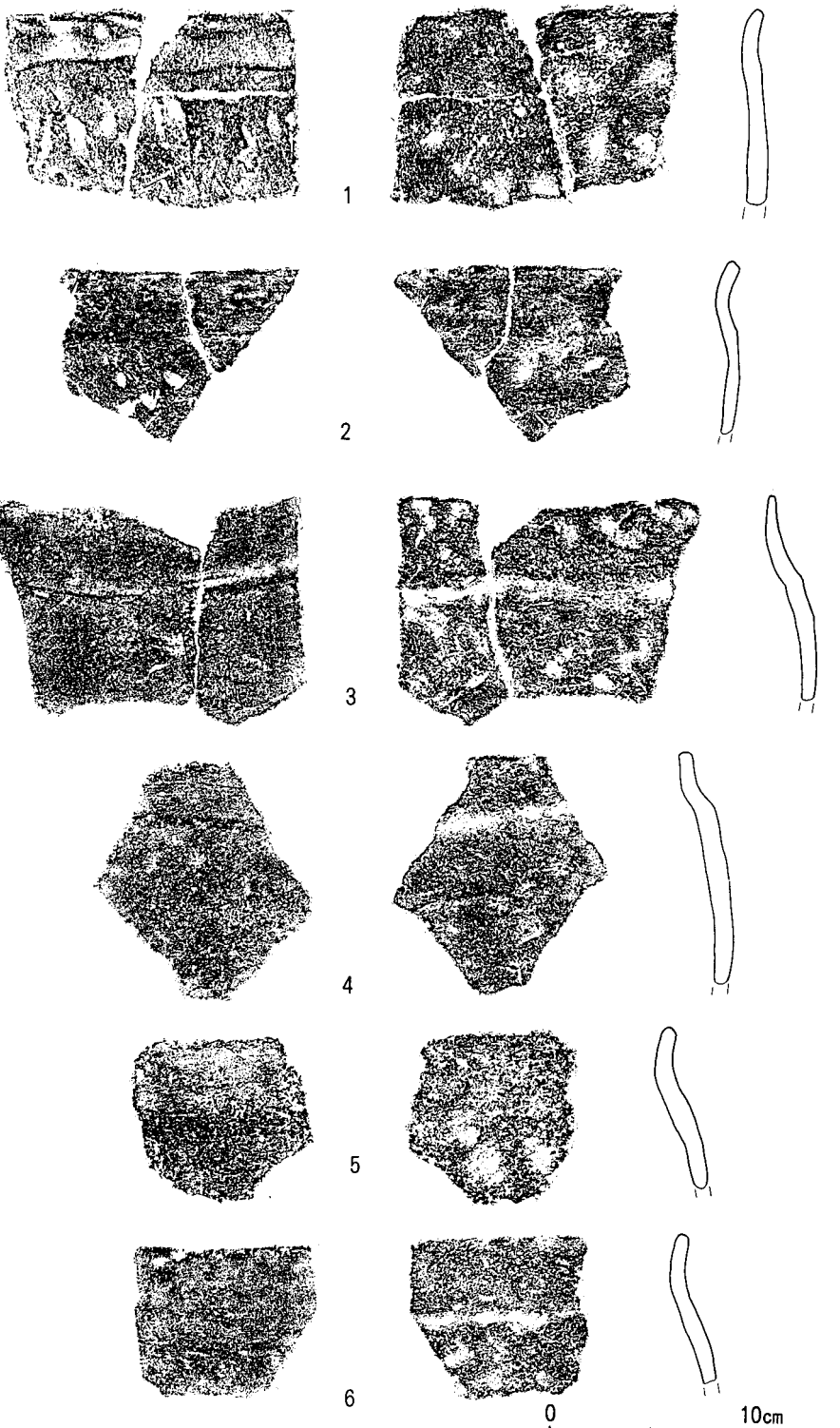
第19図　在地土器



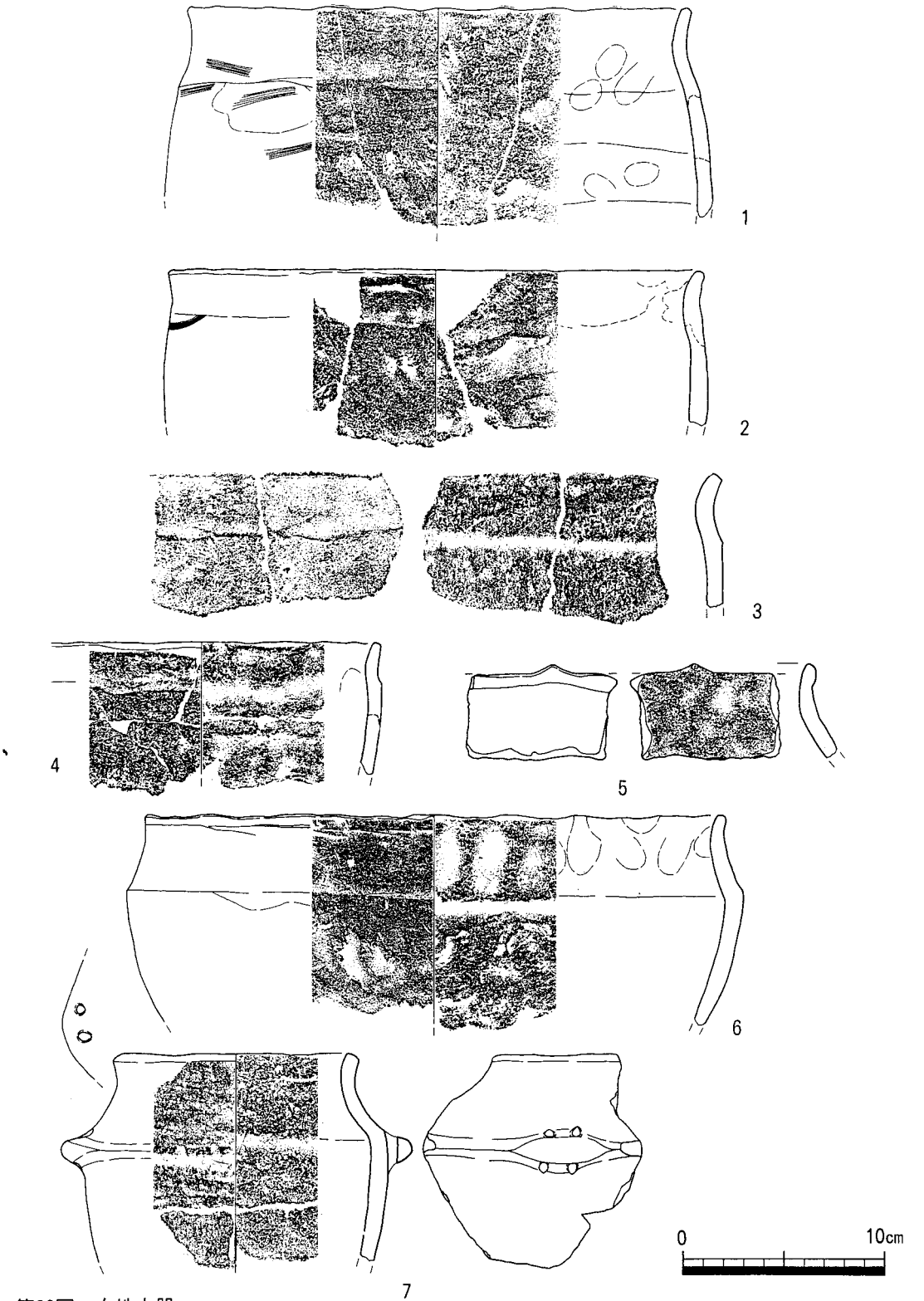
第20図　在地土器



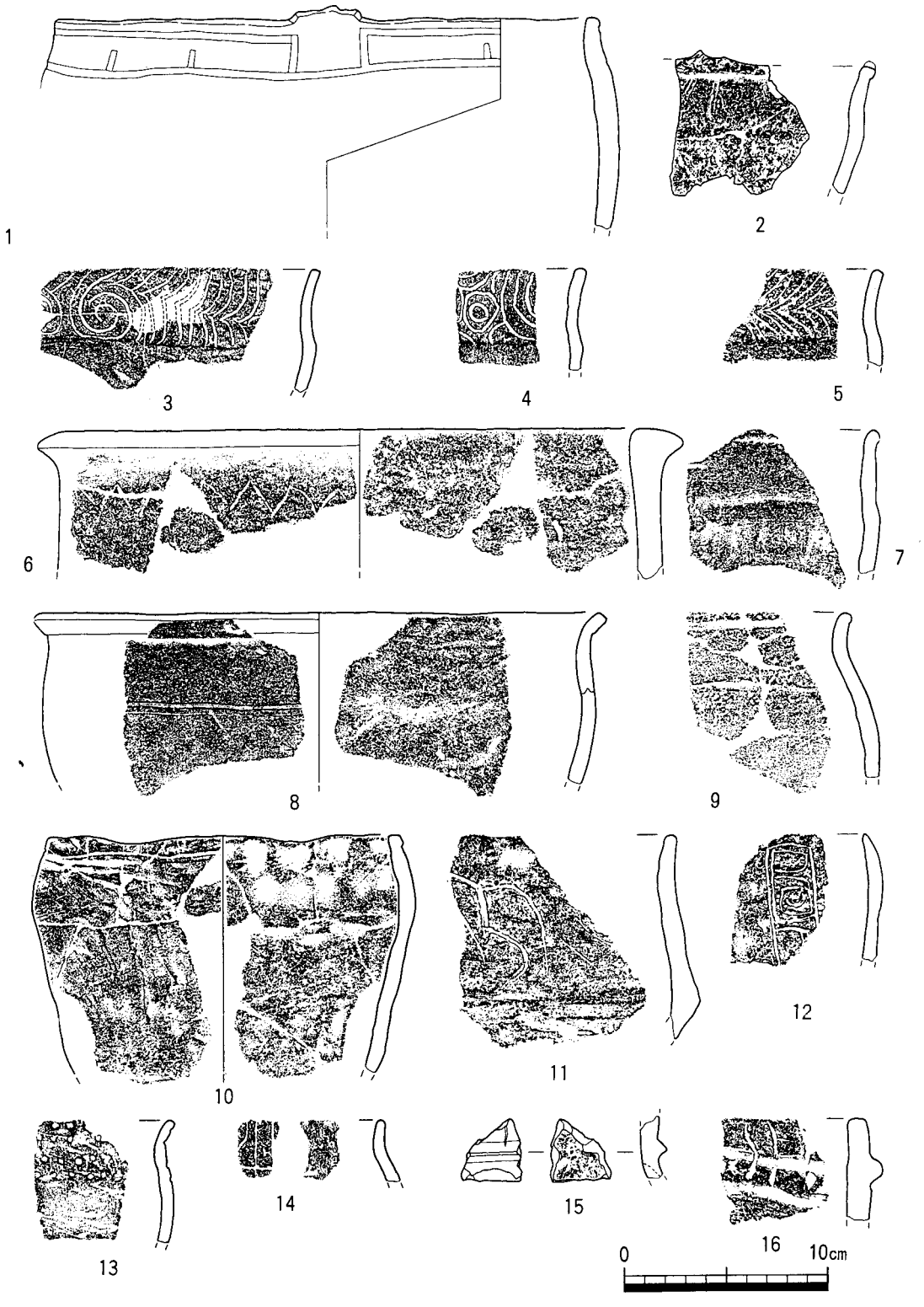
第21図　在地土器



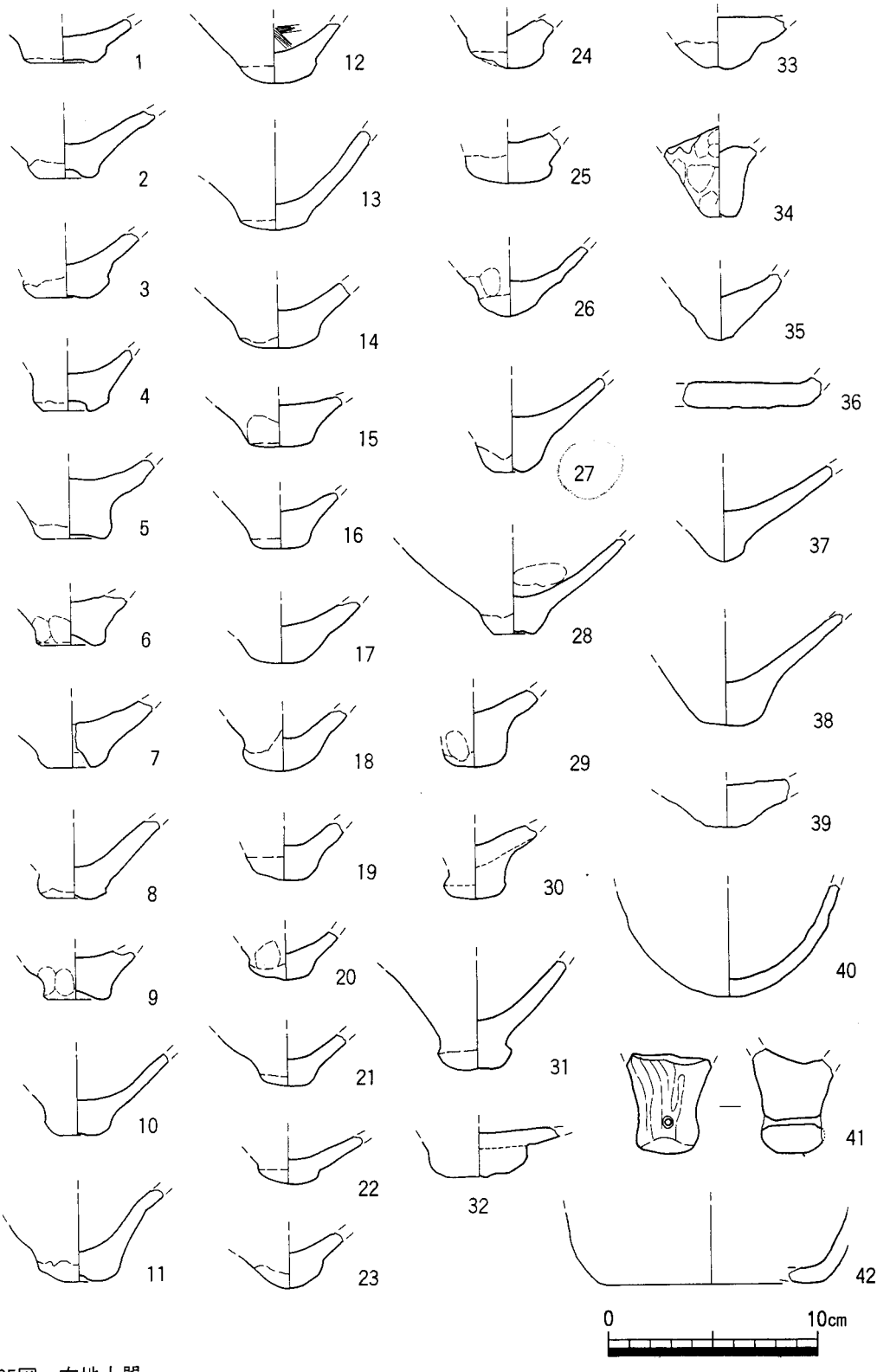
第22図　在地土器



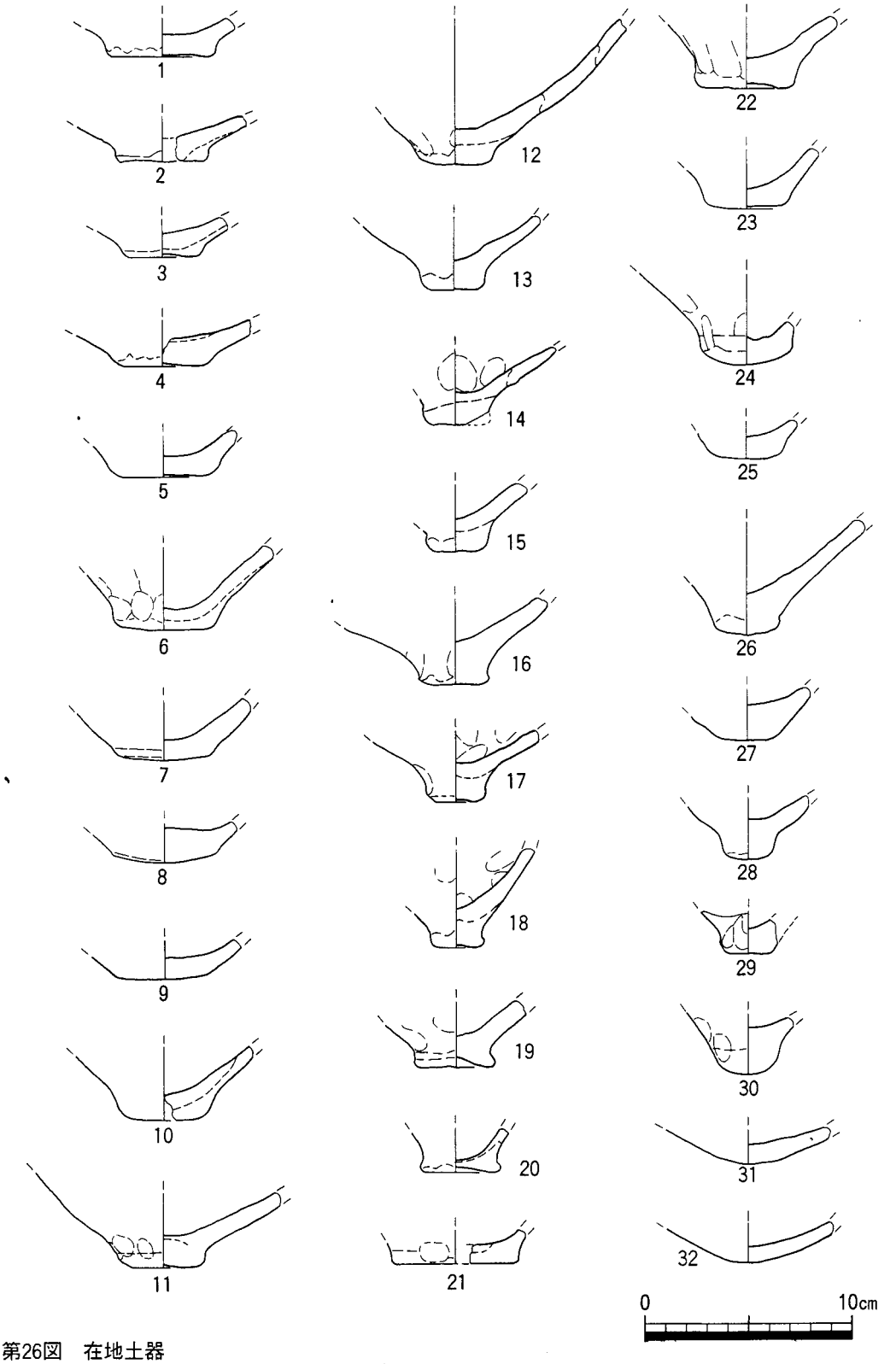
第23図　在地土器



第24図　在地土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
10cm

第25図　在地土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
10cm

第26図　在地土器

弥生土器

壺形土器（第27図１～11）

１～４は口縁部、５～７は肩部、８は胴部、９～11は底部の破片である。

１は２/３ほどの破片であり、復元口径12.6cmを測る。球体の胴部から口縁部がほぼ直立して立ち上がり、口唇部はやや外反する。口唇部は張り付けによる肥厚が見られ、肩部には３条の三角突帯を貼付する。器内外面の剥落がひどく、器面調整の観察は難しいが、器外面にヘラ状工具による磨き痕、内面に指押さえ痕が認められる。また、器外面の一部に赤彩された顔料の一部が残る。

２～４は外反する口唇部破片で、２は１/８、３は１/10、４は１/６ほどの破片である。それぞれ復元口径21.0cm、19.7cm、14.5cmと考えられる。１に比べ、ともに口唇部がほぼ直角に折れる。また、磨耗している４を除いて端部は凹状に仕上げられており、これは４においても同様であったと推測される。口唇部は回転を利用したナデ仕上げ、頸部以下にはヘラ状工具による縦方向の磨き痕が見られる。なお、２は口唇下に１条の横沈線があり、現存する器外面および内面上半部に赤彩された痕跡がわずかに残る。

５は肩部三角突帯部分の破片であり、約５cmが残る。細片のため全体の復元はできない。現在部分には３条の三角突帯が観察される。

６、７も肩部三角突帯部を含む破片で、６は１/８、７は１/12程度から復元した。球体の胴部から口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がる変換点の部分に、６では２条、７では３条の突帯が施される。この突帯最上段頂部での復元径は６で28.3cm、７で34.0cmとなる。したがって、ともに全体形はかなりの大型壺に復元されることとなる。突帯部分を除く器外面にヘラ状工具による磨き痕、内面に指押さえ痕が認められる。

８は胴部１/10ほどの破片で、現存部に突帯１条が残る。突帯部分が最大径と考えられ、27.8cmに復元される。器外面にナデ、内面に指押さえとナデ調整の痕跡が認められる。

９～11の底部破片は、ともに平底から胴部下半部が大きく開きながら立ち上がる。底径はそれぞれ９で7.4cm、10で5.1cm、11で8.8cmを測り、底径からすれば９と11は大型壺の破片と考えられる。しかし、９と11では底の厚さに違いが見られ、９に比べて11はかなり厚い。

９の器外面にはヘラ状工具による磨き痕とその上から施されたナデ調整が認められ、接地部はヘラ状工具によって削り仕上げがなされる。器内底部は剥落が激しく、調整技法は観察できない。11の器内外面に見られる成形および調整技法は、ほぼ９と同様である。10は器外面に指押さえによる成形痕とナデ仕上げ痕、接地面にナデ仕上げ痕が見られる。器内面は剥落がひどく、観察ができない。

甕形土器（第28図１～11）

１、２はいわゆる刻目突帯文土器であり、口唇部と胴部上半部に２条の断面三角形刻目突帯

が施される。1、2とも1/10ほどの破片であり、復元口径はともに18.0cm前後と考えられる。最大径は胴部上半部に施された突帯上に求められるが、1が胴部の突帯付近で大きくくびれるのに対して、2は緩やかに立ち上がる。また、口唇部の突帯も1は口唇端部よりやや下がった位置に施されるのに対して、2では口唇端部に接して施され、刻目の間隔も2は比較的均一なのに対して、1はかなり粗く施される。1の器外面にはナデ調整とヘラ状工具による縦方向の磨き痕が観察され、内面は剥落が激しいものの一部指押さえの痕が認められる。2は内外面とも指押さえによる成形の後、不定方向のナデ調整が施されている。

3も刻目突帯文土器であるが、3cmほどの破片であり、全体の復元は行い得なかった。口唇端部に貼り付けられた突帯上に刻目が施されている。

4と5もやはり口縁部に貼り付けられた突帯上に刻目を施す甕形土器である。4、5とも1/10ほどの破片であり、復元口径は4で20.8cm、5で24.6cmである。ほぼ直立気味に立ち上がる口縁部の口唇外面に大きめの三角突帯が貼り付けられ、これに刻目が施される。刻目は浅く、三角突帯の頂部からやや下がり気味となる。突帯から2cmほど下の胴部最大径となるあたりには、ヘラ状工具によって2条の沈線が施される。4、5とも全面にナデ調整痕が残り、5では器外面胴部下半部にヘラ状工具によるナデ痕が認められる。

6は5cm程度の破片であり、全体復元はできなかった。内湾して立ち上がる口唇端部に三角突帯が貼り付けられるが、突帯上に刻目は施されず、突帯上面に細沈線による施文が行われる。小破片のため明確ではないが、上面からみれば口唇突帯上を2条の細沈線でまばらな鋸歯状に巡っていたものと推測される。外面突帯下に2条の沈線を施す。

7、8は内湾して立ち上がる口縁端部にやや長細い突帯を貼り付け、その下方2cmほどの位置に三角突帯を配する。7、8ともに1/10ほどから復元した。復元径は口縁突帯端部で、7は33.2cm、8は23.8cmを測る。7に比べて8の内湾が強く、口縁部の突帯はやや垂れ下がり気味となる。また、胴部三角突帯も7の1条に対して、8は3条が施される。器内外面に指押さえとナデ調整痕が認められ、7では口唇内部にハケ目が残る。

9～11は底部の破片である。完全な底部形状が知れるのは9のみで、10は筒状の脚部部分破片、11は1/6ほどから復元した。9の底径は8.5cm、脚部最小径は6.4cmで、10の脚部最小径は5.4cm、11の復元最小径は7.3cmを測る。器外面にヘラ状工具による削りに近いナデ調整が施されるが、内面は剥落によって観察が難しい。

その他の土器（第28図12）

12は5cmほどの小破片で、口径14cmほどの碗形に復元される。器外面上端にヘラ状工具によって口唇と平行する幅1cmほどの沈帯があり、ここに沈線が1条施される。内面に指押さえ痕と刷毛目痕、外面にヘラ状工具によるナデ痕が認められる。胎土や成形調整技法の観察から一応弥生土器で扱ったが、むしろ在地での変容土器と考えるべきかもしれない。

小結

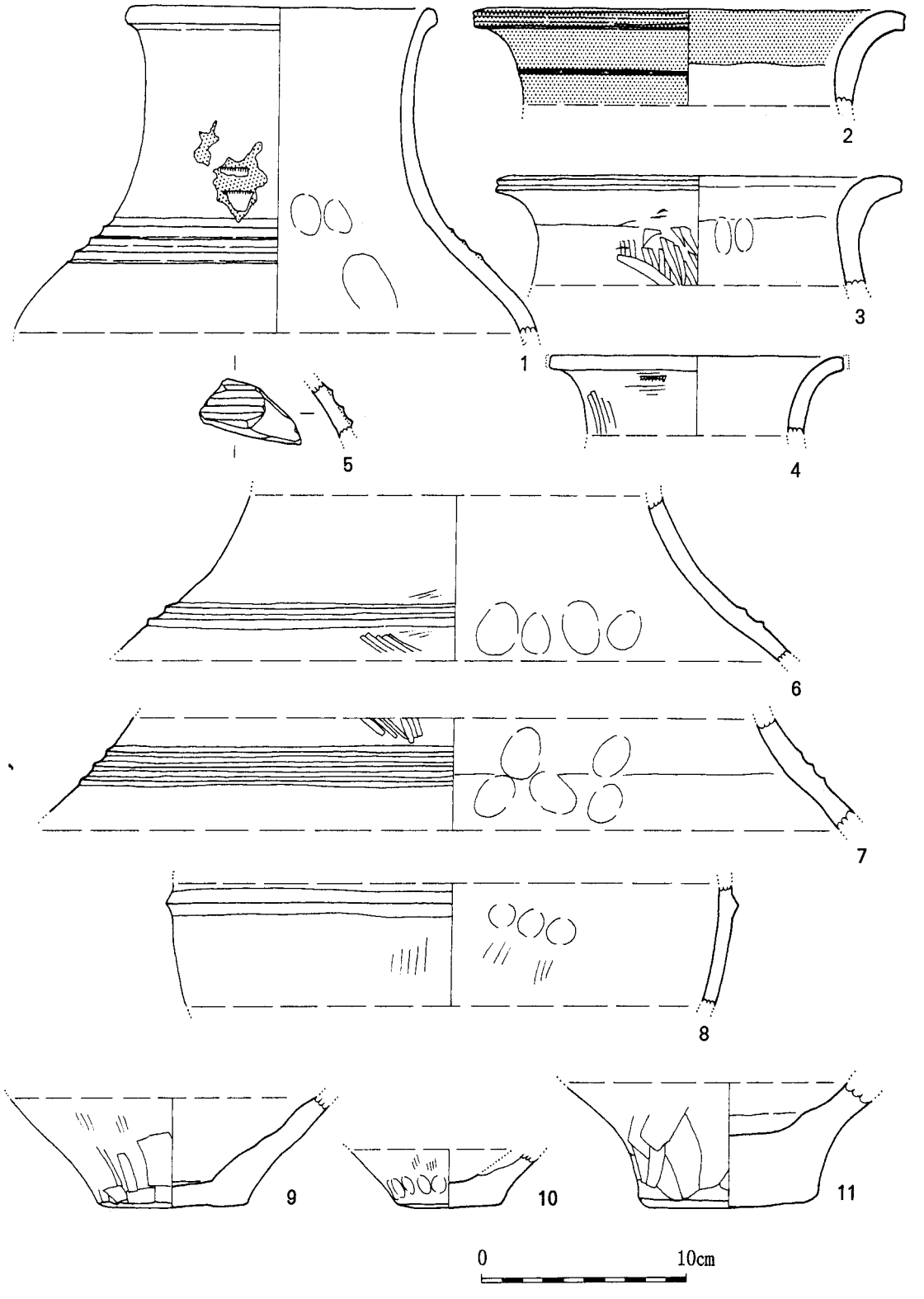
ここで取り扱った弥生土器は壺と甕を主とする。これらは器形や胎土、成形や調整技法などの点で、在地で作られる土器と大きく異なり、搬入された九州の弥生土器と考えられる。しかし、これらの弥生土器は本貝塚の調査区において、砂丘地に形成された包含層中から他の遺物と混在して出土している。砂丘遺跡では一般的に包含層の面積的な広がりは把握できるものの、これに伴う遺構の確認は究めて困難であるとされている。これは嘉門貝塚においても同様であり、これらの弥生土器に遺構を基にした伴出関係や、土器を始めとする他の遺物との取り扱い上の相違を見い出すことはできない。

そこで、個々の弥生土器について見れば、甕において刻目突帯文土器が多いことに気付かれる。これらの刻目突帯文甕には、口唇部に貼付された突帯の位置、胴部突帯との大きさや形態、刻目の施し方などに違いが認められる。また、突帯が貼付される甕の口縁部の傾きにも違いがあり、これらは基本的に刻目突帯文土器の型式変化を反映しているものと考えられる。すなわち、第　図1と2を比較すると、1の口唇突帯は2に比べて一段下がった位置にあり、口縁部の内湾度も強い。また、4～6では口唇部に貼付された突帯が肥大化し、逆に胴部突帯は省略され、2条の沈線によって突帯の痕跡が示されている。さらに、6では口唇部突帯の刻目もなくなって上面に鋸歯状の文様が施される。7、8は刻目突帯文土器ではないが、その変化の延長上にあり、口唇部の突帯がさらに強調されるとともに、胴部の突帯が再び多条をなして施されるようになる。

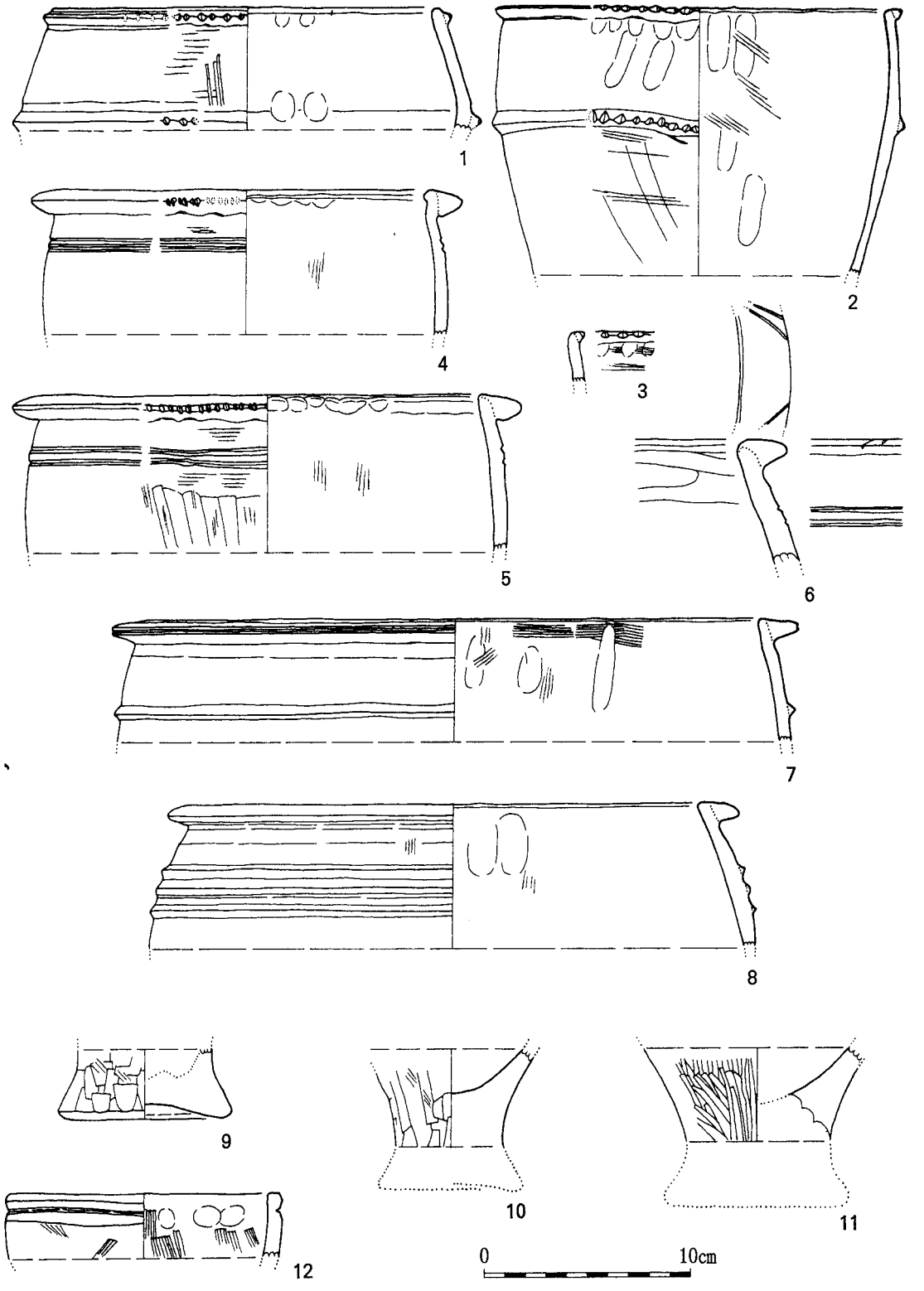
このような刻目突帯文系甕形土器の変化は、本遺跡における絶対的な資料数が不足してはいるものの、いわゆる板付系甕が存在しないことや、胴部に多条の突帯を有する甕が存在することなどと考え合わせれば、やはり鹿児島県下を中心とする南部九州弥生土器との関係を想起せざるを得ない（註1）。また、これに継起的な変化が認められることを踏まえれば、本貝塚の刻目突帯文系甕形土器は時間の推移に沿ってもたらされたものと理解され、大まかに弥生前期中頃から中期前半頃に位置付けられるものと考えられる。この刻目突帯文系甕形土器から導かれる年代的な位置付けは壺形土器によっても追認されるものと理解しておきたい。しかし、先述したように、これら弥生土器の位置付けについては、遺構における一括遺物の組み合せを踏まえたものではなく、今後の調査事例の増加と南部九州における弥生土器編年の精密化によってさらに詳細な検討が可能となる。ここでの年代的な位置付けの提起は、そのための目安と考え、今後さらなる検討を加えて行きたい。

（註1）

藤尾慎一郎「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集　1990年



第27図　弥生土器実測図　その１（スクリーントーンは赤採部分）



第28図　弥生土器実測図　その２

2　石器

今回の発掘調査で採集された石器は有孔石製品、穿孔具、ノミ状利器、石斧、叩き石、磨石、くぼみ石、その他の石器合わせて123点である。所属期については高宮編年前Ⅳ期と同後期に属するものがある。量的には後者が多く、前者に属すると考えられるものは赤土部の第2号竪穴遺構の覆土から出土した穿孔具等の6点である。

以下、それらについて記述する。

(1)有孔石製品（第29図1）

扁平長方形の礫に孔を穿つものが1点得られている。資料の上部と右側を欠く破損品である。資料の左側面と下面の角は丸みをおび、若干の研磨を施している。孔は表裏面より穿孔され、穿孔の位置がずれている。第2号竪穴遺構の出土。千枚岩製で、現存重量は4ｇ。

(2)穿孔具（第29図2～6）

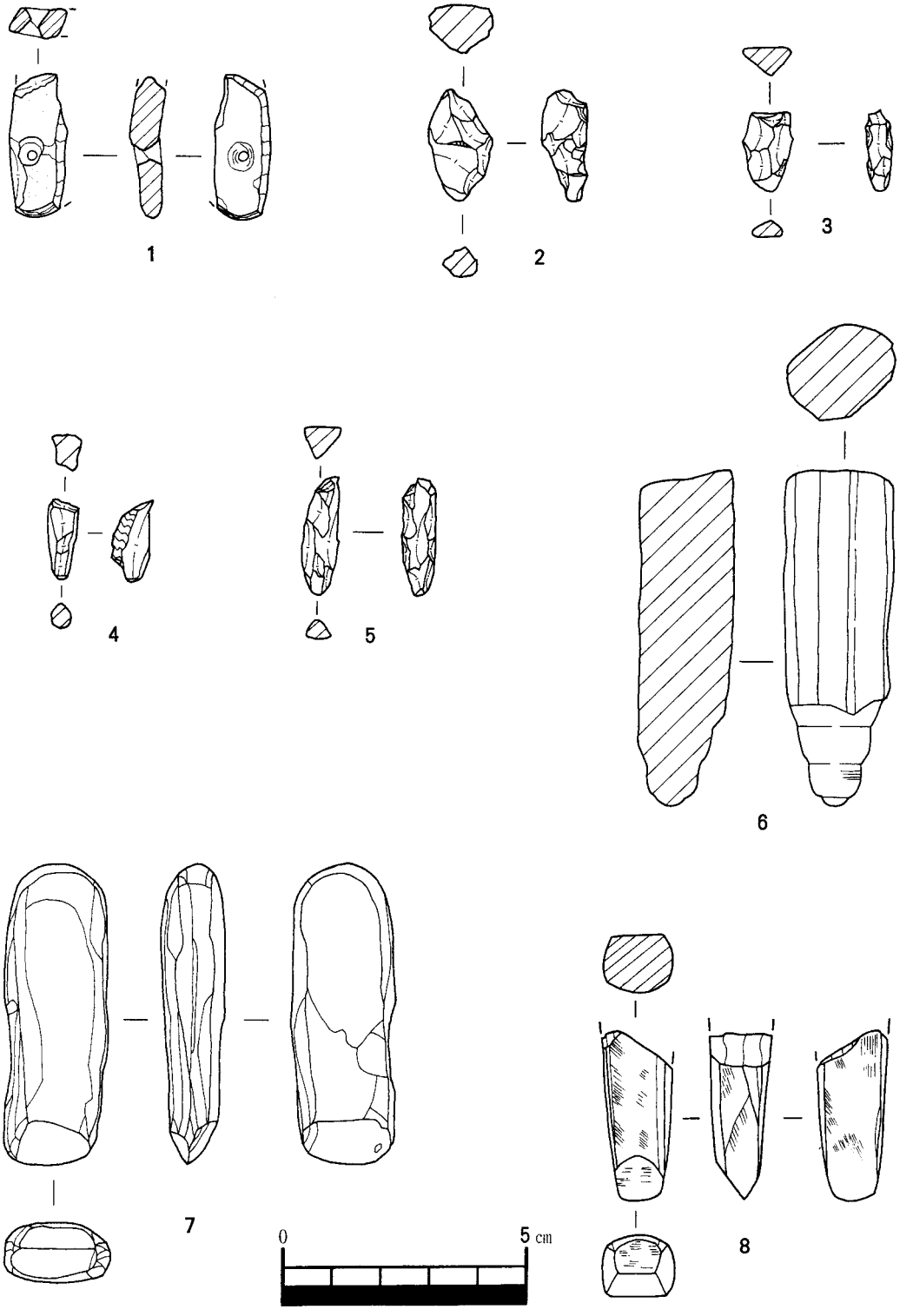
資料の一端が円形に磨かれたもので、2から5はチャート製の小型のものである。いずれも縦長剥片の一端が円形に研磨される。先端部以外はチッピングとみられる細部調整の剥離痕を認める。(1)の有孔石製品等の孔を穿孔する際のものであろう。4点の資料と(1)の有孔石製品の孔と突き合わせた結果、3の穿孔具の先端部とほぼ合う。4点とも第2号竪穴遺構の覆土から出土。

6は円柱状に成形されたもので、先端には身の径より小さくなる4段をなす。身は縦に面調整され、その際の稜をつくる面もあるが、裏面は自然面である。また、基端も自然面であることから円柱状の自然石の側面を加工し、穿孔具にしたものであろう。砂岩製であることから、穿孔された孔の縁の仕上げ用かと考える。重量は42ｇ。ち－25グリッド、第Ⅳ層の出土。

(3)ノミ状利器（第29図7・8）

7は扁平長方形の自然石の一端を表裏面より刃部をつくるものである。基端及び両側面は若干の研磨を施すが徹底してなく、表裏面と角に自然面が所々残る。刃部は両刃で、裏面側から研ぎ出しが強い。刃こぼれはなく、刃縁はやや偏刃である。第2号竪穴遺構の出土。片状砂岩製で、重量は30ｇ。

8は基部上半の折損する刃部資料である。横断面がやや丸みをもつ方形をなす柱状の片刃で、基部から徐々に幅を減じながら刃部にいたる。器面全面に研磨を入念に施す。片刃の刃縁は直刃をなし、僅かに刃こぼれがみられる。ち－23グリッドの出土。微粒砂岩製で、重量は現存で10ｇ。



第29図　有孔石製品(1)、穿孔具(2～6)、ノミ状利器(7･8)

(4)石　斧

今回の調査で42点の石斧が得られている。石斧個々の大きさ・特徴等は観察表に示すとおりである。42点のうち、全形の窺える資料が24点、刃部欠損資料７点、基部欠損資料６点、未完成品５点である。比較的完形の資料が多いが、破損資料も含め刃縁が左右いずれかに偏るものが多い。これは刃縁が破損しても研ぎ直すことにより残ったものと考えられる。

出土数は嘉門貝塚Ａ地区も合わせると62点になり、１遺跡からの石斧出土数としては多い方である。出土状況は「そ・た－25・26」グリッドを中心とする周辺で多く、他の遺物と同じく出土の多い砂層と土層の境界の南側からの出土である。Ａ地区においても遺物の集中する地域は赤土と砂丘の接する砂丘側で多く、当時の居住地域は砂丘で営まれるが、砂丘後背のバックマーシの前面を拠点にした考えられる。層位的には第Ⅳ層から出土が多い。

石質は４種が確認され、斑れい岩21点、輝緑岩19点、片状砂岩１点、礫質砂岩１点である。礫質砂岩を除く３種は嘉門貝塚Ａ地区において認められているもので、輝緑岩11点、斑れい岩３点、緑色片岩４点、片状砂岩１点で、本貝塚においては輝緑岩と斑れい岩が優勢を占める。

採集された石斧は製作技術と、それに用いる素材の状況、平面形及び側面形から次のとおり分類される。

製作技法

製作状況から次の２種に分けられる。素材あるいは母岩から割り取った剥片の形を括かし、簡易に製作されるものと敲打・研磨等の器面調整を加えることにより製作されるものに分けられる。

Ａ　加工を主に側辺と刃部に施すもの。

（1）側辺は打割と敲打で調整され、刃部を研ぎ出す。

（2）側辺は打割と敲打で調整され、その後研磨し、刃部を研ぎ出す。

Ｂ　加工を器面全体に施すもの。

（1）ほぼ前面に敲打痕を残すもので、研磨は敲打による器面の凹凸を潰す程度に施すもの

（2）部分的に打剥痕や敲打痕を残し、器面全体に研磨を比較的入念に施すもの。

Ａは15点、Ｂは27点で、前者は(1)・(2)で量的に差はなくそれぞれ７点と８点である。Ｂは(1)が７点、(2)が20点で、Ｂ(2)が本貝塚出土石斧の一般的な製作技法であるが、後述する平面形、側面形の形状を含め用途により各石斧が製作されたものと考える。Ａはいずれも刃部は研ぎ出され、また側辺は打割後に敲打で面調整されており、柄に装着できる状況にあり、比較的ラフに製作される。Ｂ(2)は磨製石斧になるもので、Ｂ(1)は敲打調整による器面の凹凸を研磨で潰すものである。いずれにしても最終工程には研磨が用いられる。

平面形態

A　方形

(1)長さに対し横幅の長いもの

(2)長さに対し横幅の短いもの

B　バチ形

(1)長さに対して刃部幅の大きいもの

(2)長さに対して刃部幅の短いもの

C　鎌　形　両側辺が同一方向に弧を描くもの

Aは21点、Bは17点、Cは4点で、A・Bについては(1)・(2)で量的に大きな差はみられない。もっとも多いA(2)で12点、A(1)とB(1) はともに9点、B(2)は8点である。

側面形態

下記の3種に分けられる。これは付刃する際にAは鋭角な刃部になり、Bは刃部と基部の境が不明瞭な鈍角になる。CはAとBの両方を合わせ持ち、ノミの様な側面形態をなす。

A　表裏面がほぼ平行になるもの

B　表裏面が弧を描くもの

C　表裏面の一方は平坦で、他方は弧を描くもの

量的にはAは14点、Bは13点、Cは15点で、大きな差はない。

第3表　石斧観察表　　※数値はすべて最大値で、(　) は現存値である

挿図番号	出土地点		分類			長さ(cm)	幅(cm)			厚さ(cm)			重さ(g)	石質	観察事項
	グリッド	層	製作技法	平面形	側面形		刃部	基部	基端	刃部	基部	基端			
第30図 1	く－21	Ⅰ	A1	C	A	11.7	4.6	4.4	3.2	2.7	2.1	1.2	190	斑れい岩	扁平の自然石を両側より打剥で形を整えるもので、両側辺とも弧状を呈する。側辺は打剥後、部分的に研磨を施す。刃部は両刃で、刃縁は研ぎ直しによる偏刃となす。
2	た－25	Ⅳ	A1	C	C	(11.8)	(4.3)	5.1	3.7	0.6	1.8	0.9	(160)	輝緑岩	打剥で形を整えるもので、刃部は裏面より研ぎ出される。裏面上半は割り面である。本資料は破損した石斧の再生品である。
3	せ－25	Ⅳ	A1	C	C	14.9	5.6	5.0	2.3	2.0	2.4	1.3	360	輝緑岩	両側辺が同一方向に弧を描くものである。表裏面は自然面で、両側辺は打剥で形を整えている。刃部は両刃で、刃面には研磨痕が認められる。

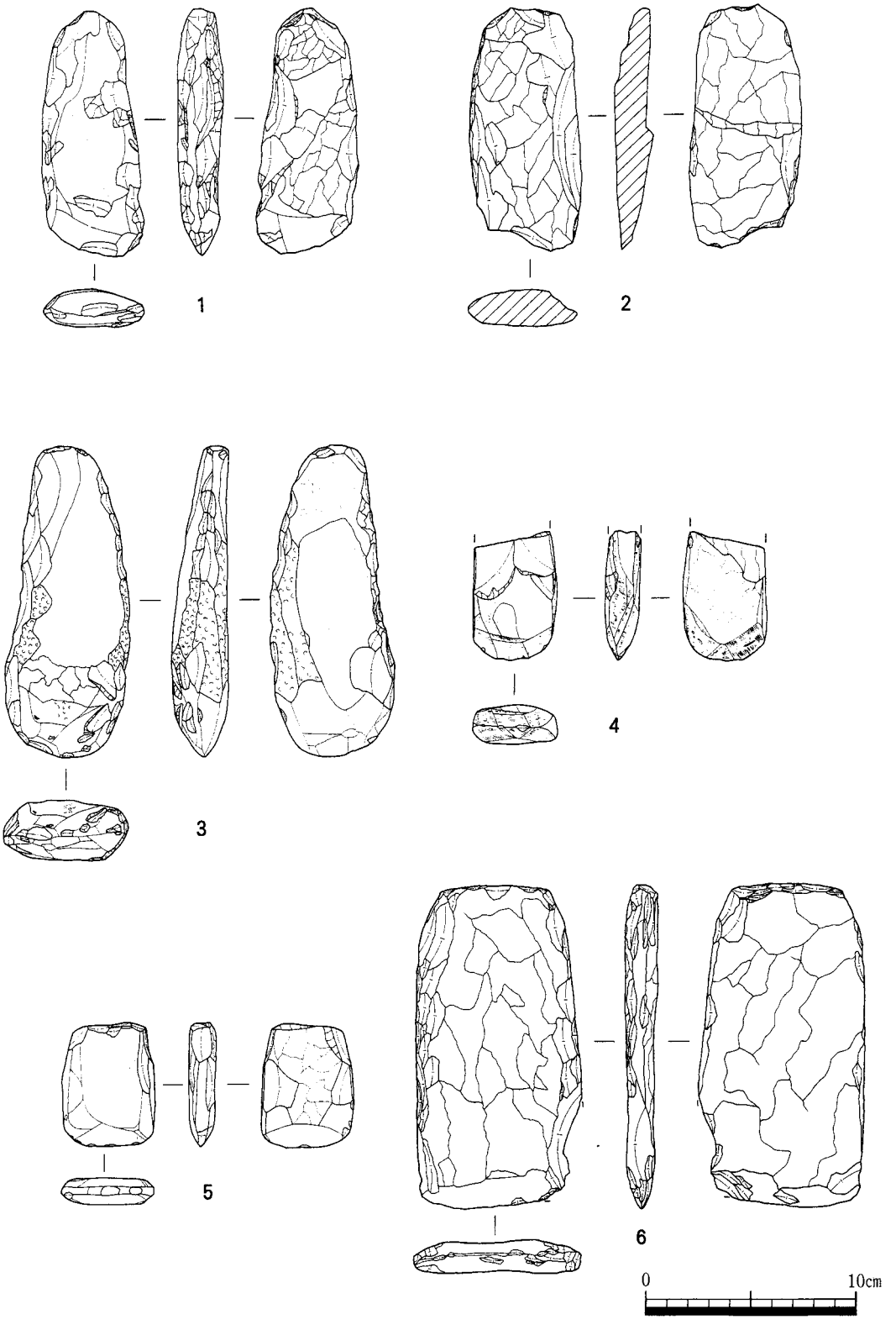
挿図番号	出土地点		分類			長さ(cm)	幅(cm)			厚さ(cm)			重さ(g)	石質	観察事項
	グリッド	層	製作技法	平面形	側面形		刃部	基部	基端	刃部	基部	基端			
第30図4	た－25	Ⅳ	A2	A2	A	(5.8)	3.8	4.0	－	1.2	(1.4)	－	(80)	輝緑岩	扁平長方形の自然礫を用いるもので、表裏面と左側面は自然面である。刃部は両刃で、研ぎ直しにより円刃をなす。
5	し－20	Ⅰ	A2	A1	A	6.0	4.3	4.3	3.4	1.3	1.3	1.2	80	輝緑岩	最大長6cmの小型の石斧である。縦割れ扁平の石材を用いて、右側辺と基端を打割調整後、敲打で面を整える。研磨は表面と裏面の刃部側、側面に施す。刃部は両刃で、使用により摩滅する。
6	ち－26	Ⅰ	A2	A1	A	15.4	(6.7)	7.6	(6.9)	1.2	1.2	1.2	(340)	輝緑岩	表面は割り面、裏面は自然面である。扁平の石材の両側に打割を加えて形を整えている。両側辺の中央部は摩滅する。基端は細かい敲打で調整される。刃部は両面より研ぎ出され、刃縁右側は使用により破損する。
第31図1	す－21	Ⅳ	A2	A1	A	(6.3)	7.0	7.5	－	1.5	2.1	－	(170)	輝緑岩	横幅の広いわりに厚みの薄い石斧である。扁平の石材を用い、表面と裏面の一部に自然面が認められる。両側面に剥離痕と敲打痕を残すものの、研磨仕上げされる。刃部は両刃。
2	た－25	Ⅰ	A2	A1	C	(8.0)	(6.8)	6.8	6.8	1.0	1.9	－	(170)	輝緑岩	縦割れ扁平の石材を用いる。両側面と表面上方に自然面を残す。研磨は刃部のみに施す。刃縁は弧状を呈するが、右側を破損する。
3	さ－23	Ⅳ	A2	A2	A	9.7	4.4	4.7	3.1	1.7	2.1	0.7	170	輝緑岩	扁平の石材を打剥で形を整えるもので、その後、部分的に研磨を施す。表裏面は自然面で、部分的に敲打痕を認める。刃部は両刃で使用により破損する。
4	こ－23	Ⅰ	A2	A2	C	(3.9)	(4.1)	(4.7)	－	0.8	1.2	－	(40)	輝緑岩	基部上方と刃部左側を破損する。表面は自然面、裏面は割り面である。両側は打割により形を整えた後、研磨を施す。刃部は両刃である。
5	そ－25	Ⅰ	B1	A2	B	10.5	4.3	4.0	2.8	(1.6)	2.8	2.7	(220)	斑れい岩	身の幅の割に長さの長いものである。ほぼ全面を敲打調整し、潰しのための研磨痕を施す。刃部は破損するが、表裏面に研磨痕がみられることから両刃であろう。

挿図番号	出土地点		分類			長さ(cm)	幅(cm)			厚さ(cm)			重さ(g)	石質	観察事項
	グリッド	層	製作技法	平面形	側面形		刃部	基部	基端	刃部	基部	基端			
第31図 6	そ－25	Ⅳ	B1	A2	C	12.8	5.5	6.3	4.6	2.3	3.3	1.9	500	斑れい岩	身の均整のとれた、重量感のある石斧である。ほぼ全面は細かい敲打調整され、その潰しのための研磨を若干施す。刃部は破損するが、研磨がみられることから両刃であろう。
7	つ－26	Ⅳ	B1	B1	B	10.9	5.7	4.6	2.6	2.6	3.1	2.0	320	輝緑岩	裏面に一部自然面を残すものの、刃部を除く全面は敲打調整される。その後、潰しのため研磨を若干施す。刃部は両刃で、刃面には多方向の研磨稜がある。刃縁は摩滅する。
8	た－25	Ⅳ	B1	B1	B	7.6	4.5	3.6	2.6	1.8	2.0	1.7	110	斑れい岩	長さ7.6cmの小型の資料である。刃部と剥離面以外は敲打調整され、若干の研磨を施す。刃部は両刃で、刃縁は破損と研ぎ直しで円刃をなす。
第32図 1	こ－22	Ⅳ	B1	B1	C	12.6	－	6.8	2.9	1.3	3.5	3.3	(520)	斑れい岩	製作技法と形態から石斧の未完成品である。裏面の中央部に自然面を残し、他は敲打痕で被われる。刃部は付けられてなく、研ぎ出す前の資料であろう。
2	た－25	Ⅳ	B1	B2	A	9.9	4.5	3.7	1.4	1.9	1.5	1.6	140	斑れい岩	縦割れした石材を利用するもので、裏面は割り面である。両側は打剥され、その後表面とともに敲打調整される。表面と裏面の凸部は研磨される。刃部は両刃で、表面側は基部から弧を描く様に研磨する。
3	ち－26	Ⅳ	B1	B2	B	10.1	4.9	4.1	2.1	1.8	3.0	1.3	230	輝緑岩	身の長さに比べ、厚みのあるバチ形の石斧である。器面は研磨されるが粗く、敲打痕を残す。刃部は両刃で、刃縁は偏り研ぎ直されたことが分かる。
4	た－25	Ⅳ	B2	A1	A	8.9	5.8	5.8	4.6	1.6	1.9	1.5	180	輝緑岩	身の長さに比して刃部幅の広い石斧である。両側辺と基端には整形時の打剥痕と敲打痕を残す。表裏面には研磨を施す。刃部は両刃で、刃縁は円刃をなすが、両側は使用により破損する。

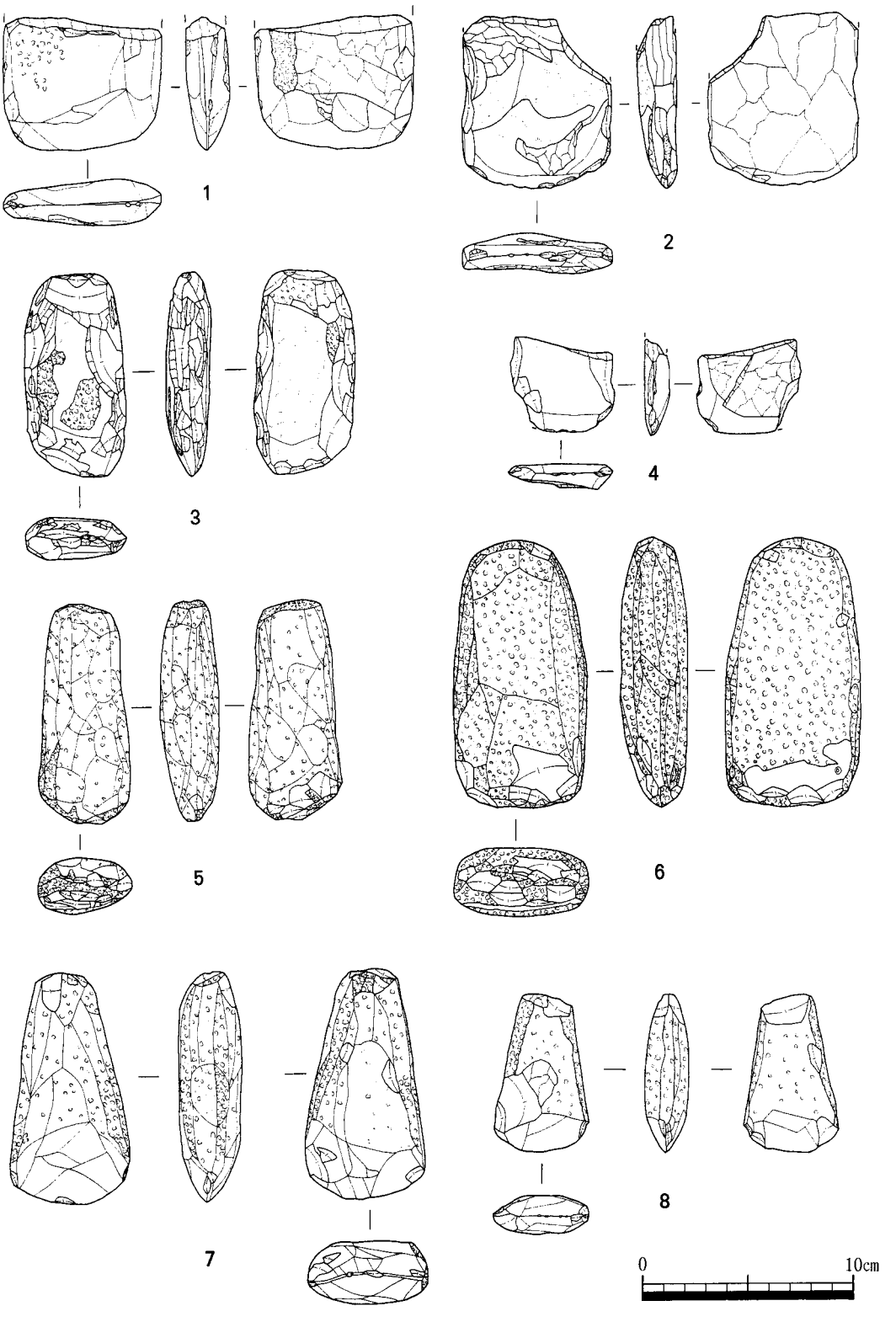
挿図番号	出土地点		分類			長さ(cm)	幅(cm)			厚さ(cm)			重さ(g)	石質	観察事項
	グリッド	層	製作技法	平面形	側面形		刃部	基部	基端	刃部	基部	基端			
第32図 5	そ－26	Ⅳ	B2	A1	C	10.0	5.5	5.7	5.6	1.2	2.2	1.4	230	斑れい岩	表面は縦断面及び横断面とも弧を描くが、裏面はほぼ平坦である。器面は敲打調整後、研磨されるが、裏面は潰しのために若干施す。刃部は両刃で、刃縁は偏刃をなすが、これは破損と研ぎ直しの結果であろう。
6	つ－27	Ⅳ	B2	A1	C	10.4	5.8	5.6	4.5	1.7	2.2	1.3	250	輝緑岩	短冊形の整った資料である。刃部を除く周辺は打剥後、敲打される。表裏面は研磨されるが、敲打痕を残す。刃部は両刃で、表面は基部から刃部に緩やかな弧を描く。刃縁は偏刃で、摩滅する。
第33図 1	そ－24	Ⅳ	B2	A1	C	10.4	(5.8)	6.3	4.3	2.0	3.2	2.3	(400)	斑れい岩	身の長さに比べ厚みのある重量感のある石斧である。周辺と裏面に打剥痕を残すが、大部分は敲打調整され、潰しのための研磨を施す。刃部は両刃で、刃縁は使用により潰れている。
2	た－26	Ⅳ	B2	A2	A	(11.9)	(5.1)	5.5	1.8	(2.1)	2.3	1.8	(300)	斑れい岩	身の厚さが一定になるもので、打割で形を整える。その後、敲打調整し、表裏面に研磨を丁寧に施す。刃部は両刃で、使用により大きく破損している。
3	た－24	Ⅳ	B2	A2	A	12.2	5.3	5.3	4.1	1.6	1.8	1.5	250	輝緑岩	扁平楕円形の石材の右側辺を打割して形を整え、裏面を敲打調整後研磨される。表面は自然面である。刃部は両面より研ぎ出され、刃縁は使用により摩滅する。
4	つ－25	Ⅳ	B2	A2	B	(11.5)	5.8	5.6	2.8	－	2.7	1.0	(340)	斑れい岩	刃部破損品で、表裏面の一部に自然面を残す。表裏面には製作時の打剥痕と敲打痕がみられ、潰しのための研磨を若干施す。両側辺は細かい敲打で打調整される。刃部近くに研磨痕を認め、両刃の資料であろう。
5	た－26	Ⅰ	B2	A2	B	7.9	4.0	4.0	3.7	1.2	1.4	0.6	100	斑れい岩	短冊形のほぼ全面に研磨を施す。側面には調整時の剥離痕と敲打痕がみられる。刃部は表面からの研ぎが強く片刃的である。刃縁には縦位方向の使用痕を認める。

挿図番号	出土地点		分類			長さ(cm)	幅(cm)			厚さ(cm)			重さ(g)	石質	観察事項
	グリッド	層	製作技法	平面形	側面形		刃部	基部	基端	刃部	基部	基端			
第33図6	せ－22	Ⅳ	B2	A2	C	12.8	5.9	6.4	5.0	1.3	2.8	1.7	420	斑れい岩	扁平の石材に打剥で形を整え、敲打で器面調整する。敲打後、潰しのための研磨を若干施す。刃部は両刃で、刃縁は刃部正面からみると裏面よりにある。
第34図1	ち－24	Ⅳ	B2	A2	B	(5.9)	4.8	4.9	－	1.3	1.9	－	(100)	斑れい岩	基部上半を欠損する。表裏面に打剥痕と敲打痕を残すが、研磨を丁寧に施す。刃部は両刃で、刃縁は弧状を呈する。刃面には研磨による稜線を認める。
2	せ－25	Ⅳ	B2	B1	B	10.0	5.8	4.6	3.0	2.1	2.7	1.8	250	斑れい岩	完形品である。刃部を除く器面は敲打調整され、表裏面には研磨を施す。両側面の敲打痕は若干の研磨で潰される。刃部は表裏面よりバランスよく研ぎ出され、刃縁は使用により摩滅し、鋭さを失っている。
3	そ－25	Ⅳ	B2	B1	C	7.9	5.5	5.3	4.3	1.2	1.6	1.4	140	斑れい岩	幅に比べ長さの短いものである。基端と側辺に打剥痕と敲打痕を残すが、丁寧に研磨を施す。刃部は両刃で、使用により大部分破損する。
4	す－23	Ⅳ	B2	B1	C	8.9	5.4	5.2	3.2	1.4	1.3	1.1	150	斑れい岩	縦割れの石材を利用するもので、裏面は割り面、表面中央に自然面が残る。表面は敲打調整され、両側辺は打剥後敲打される。刃部は両辺で、刃縁は偏刃をなす。
5	ち－25	Ⅳ	B2	B1	C	7.7	5.5	3.9	2.8	1.3	1.3	1.3	90	斑れい岩	周辺に打剥を行い、バチ形に成形する。表裏面の一部に研磨痕を認める。刃部は表面からの研ぎが強く、片刃的である。刃縁は偏刃となっている。
6	ち－26	Ⅳ	B2	B1	C	9.3	6.0	5.5	4.6	1.7	2.1	2.1	220	斑れい岩	基端側で厚みのある縦断面がクサビ形をなす。裏面の一部に自然面を残し、敲打痕と研磨を施す。刃部は両刃で、刃縁は使用による破損と摩滅がみられる。
7	た－25	Ⅳ	B2	B2	A	8.9	4.6	4.4	3.5	1.5	1.8	1.5	150	斑れい岩	周辺部に調整痕を残すものの、全体的に研磨を施す。右側辺は弧状を呈し、左右は不対称である。側面中央から基端にかけて摩滅がみられる。刃部は研ぎ直され、多方面の研磨の稜を認める。

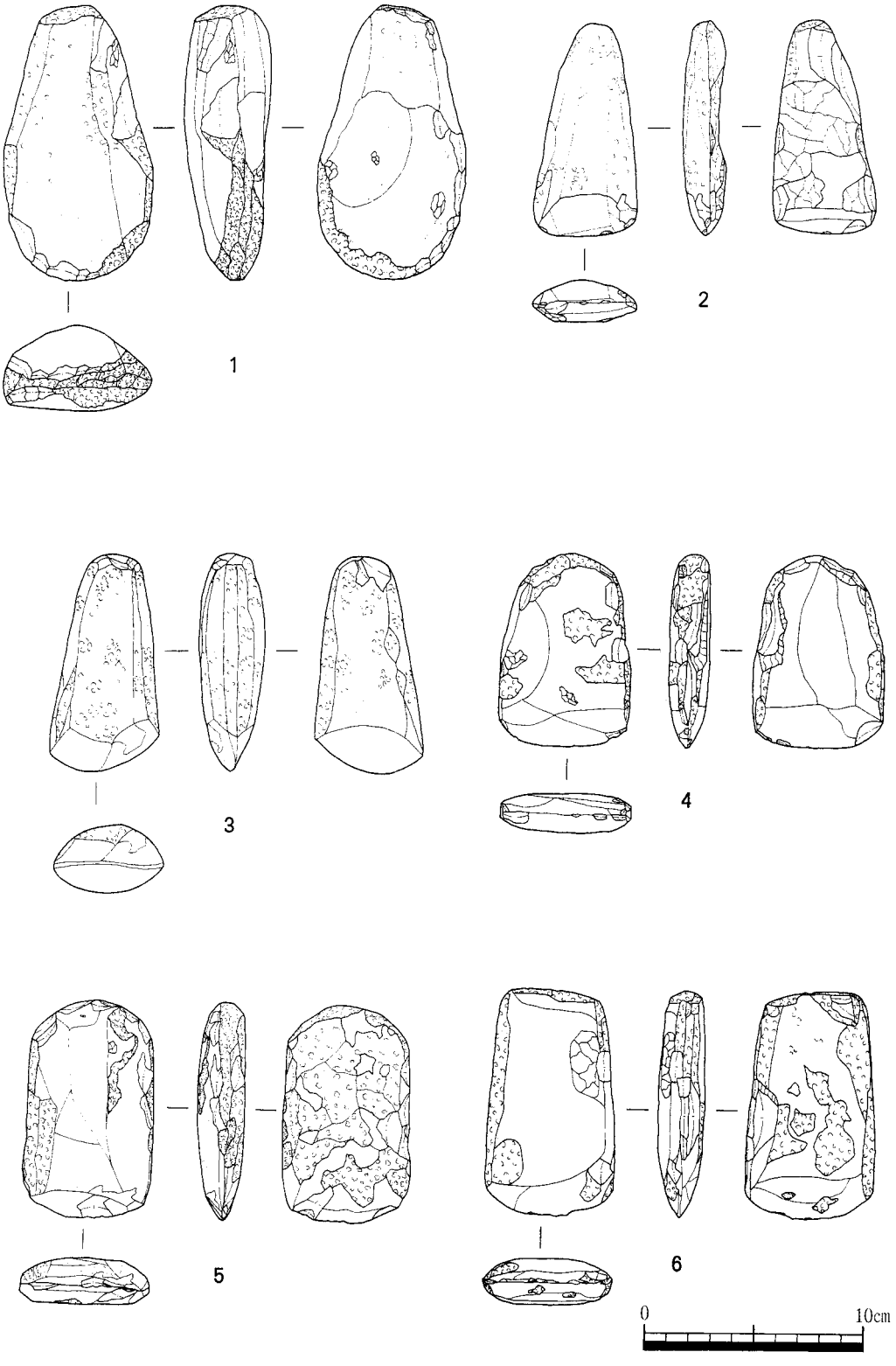
挿図番号	出土地点		分類			長さ (cm)	幅 (cm)			厚さ (cm)			重さ (g)	石質	観察事項
	グリッド	層	製作技法	平面形	側面形		刃部	基部	基端	刃部	基部	基端			
第34図 8	つ－22	I	B2	B2	A	(10.5)	6.2	5.6	－	2.0	2.3	－	(290)	斑れい岩	裏面左側に打割時の剥離痕を残し、他は敲打痕とその後に施した研磨面をなす。右側面は摩滅している。刃部は両刃で、刃縁は鋭いが、刃縁正面観は弧状をなす。
第35図 1	せ－24	Ⅳ	B2	B2	B	(12.3)	5.8	3.5	1.9	(3.4)	3.5	3.4	(320)	片状砂岩	バチ形の石斧として形態の整ったものである。器面全体に細かい敲打調整を行った後、研磨を縦位方向に施す。刃部は両刃で、刃面はほぼ平坦に研がれる。
2	た－26	Ⅳ	B2	B2	B	11.7	5.9	5.5	2.8	2.3	2.9	1.5	310	礫質砂岩	製作時の打剥痕が窺えないほど器面全体が敲打痕で被われる。敲打後は両側辺では粗く表裏面では敲打後にに研磨され、潰している。刃部は両面より入念に研ぎ出され、鋭さを持つが、使用と研ぎ直しにより偏刃となす。
3	た－26	Ⅳ	A1	A	A	18.8		7.52	6.3		3.7	1.4	920	斑れい岩	製作途中のものである。扁平の自然礫を用いるもので、右側に打剥痕を認める。大形の資料である。
4	た－25	Ⅳ	A1	B2	A	14		6.1			2.6	1.9	410	輝緑岩	製作途中のものである。表面の中央と右側面に敲打痕を認め、敲石として使用されるが平面形と基部上方左と下方右の打剥痕から石斧と判断するものである。
5	た－26	Ⅳ	A1	B2	B	11.9		5.1	2.1		3.6	1.6	310	輝緑岩	未完成品である。右側面と基部上下端に剥離痕と敲打調整痕を残す。敲石としての分類も可能であるが、形態と側面の調整痕から石斧の未完成と判断される。
6	ち－25	Ⅳ	A1	A2	C	10.8		5.7	3.4		0.9	1.1	220	輝緑岩	縦割れした石斧の再生品である。基部上方に研磨面があり、製作時は現基端部が刃部であったと考える。表面上方は自然面、下方及び側面は敲打調整される。刃部は両刃で、刃面は浅く、研ぎ出しも弱い。



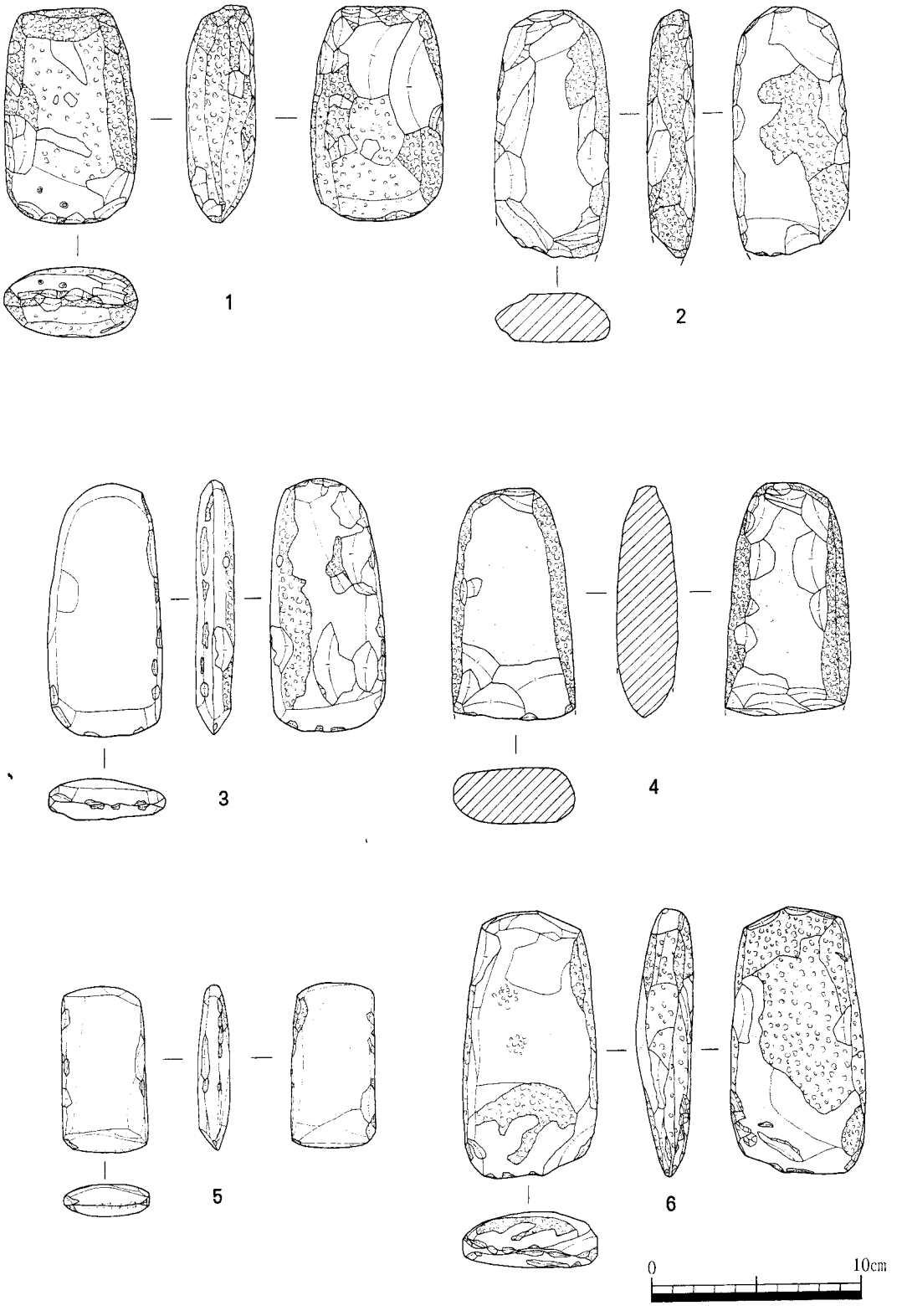
第30図　石　斧1



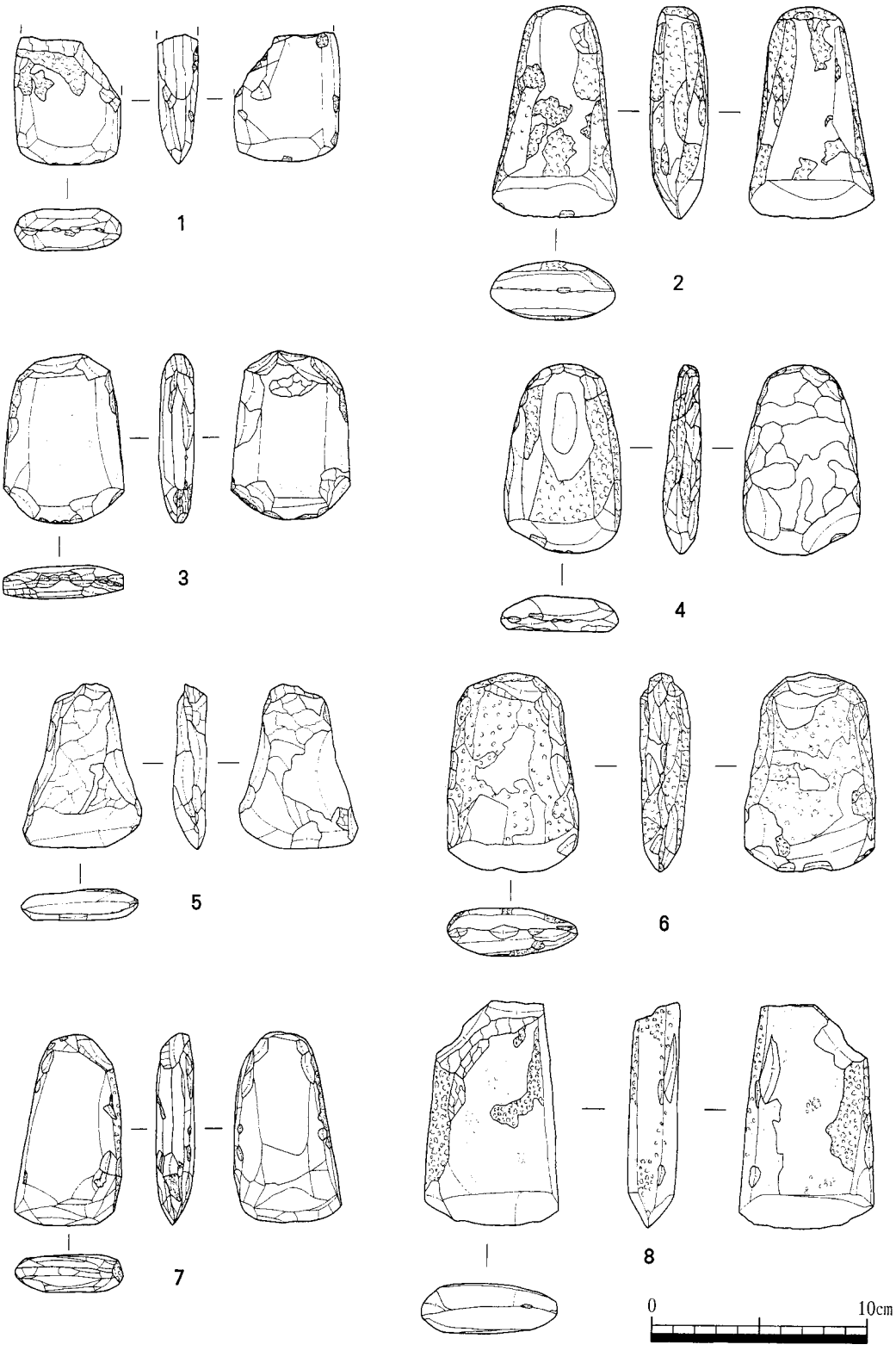
第31図　石　斧2



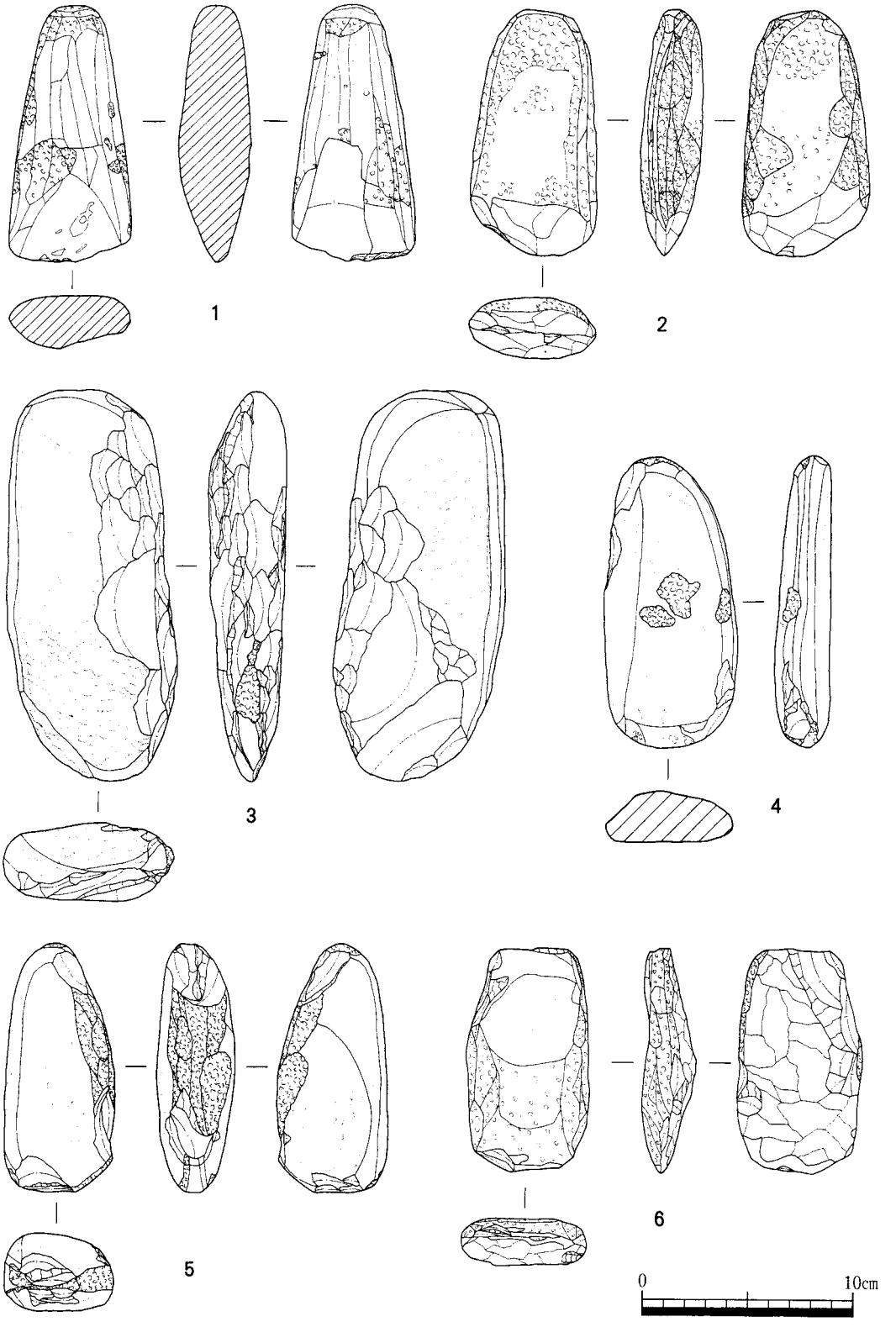
第32図　石　斧3



第33図　石　斧4



第34図　石　斧5



第35図　石　斧6

(5) 叩き石

嘉門貝塚B区の発掘調査では61点の叩き石が得られている。図示した資料は破損等により形態を明らかにできないものを除く比較的保存の良いものである。

叩き石はその機能として叩くことにより対象物をつぶすあるいは加工を加える加工具である。従ってその素材となる礫を加工することは少なく、自然礫が多く用いられるが、中には石斧の刃部破損品を転用することもある。叩き石として使用した結果、器面の数カ所に残る敲打痕を残すが、ほかに器面の表裏面が磨かれているもの、表裏面の中央がくぼむものもある。前者は磨石との兼用品、後者はくぼみ石との兼用品で、叩き石と磨石及びくぼみ石の機能を合わせもつものもある。

グリッド別の出土状況をみると「せー24」グリッドで7点、「たー24」グリッドで6点の出土があり、「そー24」グリッドを中心とする一帯での出土が多いことが分かる。これは石斧の出土状況と同様で、貝集積遺構・落込み遺構等の遺構も合わせ、遺跡（生活）の中心がこの一帯であったことを窺わせる。

石質は片状砂岩（20点）、輝緑岩（14点）、砂岩（10点）、斑れい岩（6点）、角閃石はん岩（5点）、礫質砂岩（2点）、細粒砂岩（2点）、花こう岩（1点）、シルト質泥岩（1点）の9種が同定されている。

得られた資料は器面に残る敲打痕、研磨痕、表裏面のくぼみの状況から次の4種に分類される。

A：敲打を主とした使用方法をするもので、19点が得られている。器面に残る敲打痕は比較的粗いものもある。平面形態は縦に長い方形をなすもの、円形、楕円形を呈するものがある。敲打部位は資料の上下端（面）・両側辺（面）が使用される。第36図1の資料には表裏面にくぼみを認めるが、使用状況から本種に分類したものである。また、第38図4・5・6は石斧からの転用品である。

B：磨石・くぼみ石との兼用品で、11点が得られている。量的には3位で、次のA・C類と比較すると少ない。平面形態は円形と楕円形及び角が丸みを持つ方形のものがあり、A類のように縦に長い槌状のものはない。表裏面の中央にあるくぼみは浅いものもあり、一概にくぼみ石として判断できないものもあるが、使用頻度の高さと他の部位がそれとして利用される場合が考えられる。したがって本種に分類されるくぼみを有するものは、面の中央部でくぼみのあるものをそれとして分類した。

C：磨石と兼用するもので、30点が得られている。量的には最も多いものである。平面形態は扁平な円形と楕円形を呈するものが多いが、厚みのある大型の資料もある。敲打部位としても使用は平面形態で異なるようで、円形であればその側面全体が使われ、楕円形あるいは角

の丸い方形であれば上下端（面）と両側辺（面）が使用される。磨石として器面に残る磨面は表裏面の一方が多用される例がみられる。

D：くぼみ石と兼用するもので、3点が得られている。3点の石質は細粒砂岩が2点、シルト質泥岩1点で、いずれも他の素材にくらべ軟質の石質である。そのためか、敲打部位としての器面に残る敲打痕は多く、そして粗いものが多い。

第4表　叩き石観察表

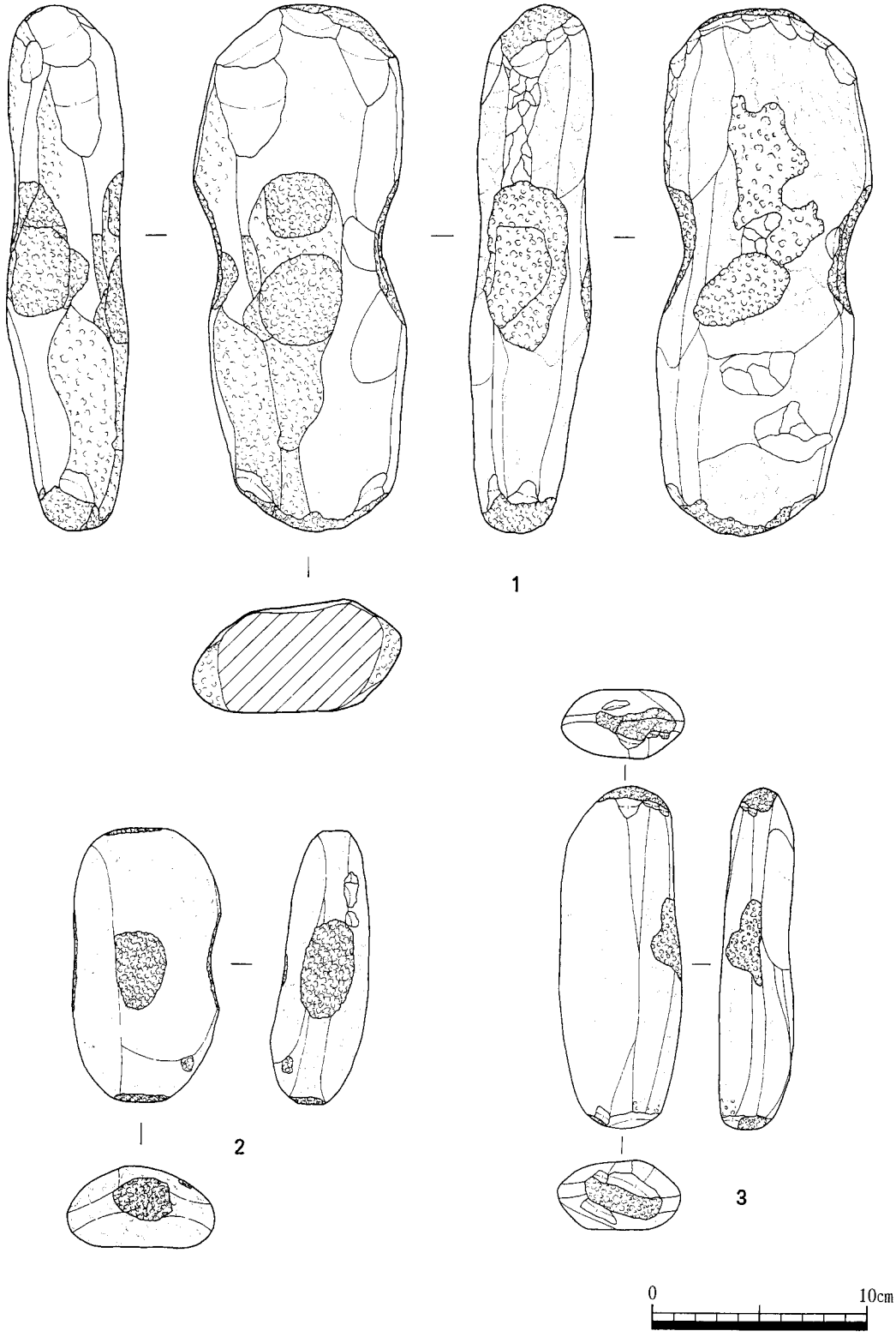
挿図番号	出土地点		分類	大きさ				石質	観察事項
	グリッド	層		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
第36図 1	た－20	Ⅳ	A	24.8	9.8	5.6	2280	輝緑岩	両側辺がくぼむ分銅形のもので、上下端と表裏面中央及び両側中央を敲打部位として使用する。上下端の敲打痕は他の部位に比べ粗い。
2	そ－25	Ⅳ	A	16.5	5.5	4.2	535	輝緑岩	ほぼ方柱状の自然礫を用い、上下端を敲打部位として使用する。下端は多く使用され、破損する。
3	し－23	Ⅳ	A	12.8	4.9	6.2	650	斑れい岩	表裏面中央と上下端及び両側辺を敲打部位として使用する。右側辺が特に多用される。表裏面の使用頻度は少ない。
図省略	し－19	Ⅳ	A	16.1	5.8	3.3	595	片状砂岩	扁平長方形の自然礫の上下端を敲打部位として使用する。側辺にも敲打痕を認めるが、使用頻度は少ない。
図省略	す－24	Ⅰ	A	11.0	4.9	3.4	340	輝緑岩	横断面が三角形をなす自然礫を用いるもので、上下端を敲打部位として使用する。
図省略	せ－24	Ⅳ	A	12.1	6.3	3.9	490	片状砂岩	原形は横断面が三角形をなす長方形の自然礫で、使用により下部の折れたものを使用する。敲打部位は折損部と上端、表面中央そして右側辺である。下部の破損は右側辺の使用時によるものであろう。
第37図 1	つ－25	Ⅳ	A	10.5	7.9	4.2	550	片状砂岩	楕円形をなす自然礫を用いるもので、表裏面中央と上下端及び両側辺中央部を敲打部位として使用する。使用頻度としては下端が高い。
2	し－22	Ⅳ	A	8.7	6.4	2.8	285	輝緑岩	隅丸菱形の自然礫で、上下端と右側辺が敲打部位として使用される。細かい敲打痕を認める。
図省略	そ－24	Ⅳ	A	15.6	10.8	7.1	1750	片状砂岩	横断面が三角形をなす平面五角形の自然礫を利用するものである。敲打部は上下端と両側辺中央及び表裏面の中央部で、右側辺は使用頻度が高く、敲打痕も粗い。
3	せ－21	Ⅳ	A	11.8	8.9	11.8	2530	片状砂岩	重量が約2.5kgを測る大形のもので、横断面は三角形をなし、平面観は縦長の台形を呈する。敲打部位として上下端と側辺の角が使用され、下端は多用され粗い敲打痕を認める。

挿図番号	出土地点		分類	大きさ				石質	観察事項
	グリッド	層		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
第38図 1	せ－23	Ⅳ	A	13.0	7.5	5.8	810	片状砂岩	横断面が四角形をなすほぼ方柱状の自然礫が利用され、上下端と表面中央、右側面と左側辺を敲打部位として使用する。各敲打痕は粗い。
2	せ－24	Ⅳ	A	7.4	6.6	5.1	390	斑れい岩	ほぼ円形をなすもので、上下端と側辺部及び表面中央部が使用される。表面中央部は僅かに敲打痕を認めるのみである。裏面の上部には粗い敲打面をつくる。
3	す－25	Ⅳ	A	6.7	6.5	4.2	300	輝緑岩	円形の自然礫を用いるもので、周辺部を敲打部として使用する。表面左側の破損は使用によるものであろう。
4	つ－24	Ⅳ	A	8.0	6.7	4.6	380	輝緑岩	やや縦の長い楕円形を呈するもので、裏面上部は破損する。上下端と両側面中央部を敲打部位として使用する。敲打痕は比較的細かいものである。
図省略	つ－25	Ⅳ	A	8.5	6.7	6.4	510	片状砂岩	上部の幅が広い楕円形をなす自然礫を使用するもので、上下端と表面右側を敲打部位とする。各敲打部位の使用頻度は低い。
5	つ－22	Ⅰ	A	8.5	5.0	4.7	280	輝緑岩	平面形態と器面調整から石斧の転用品とみられるもので、上下端が敲打部位として使用される。敲打痕は細かい。裏面は石斧製作時の研磨面である。
6	し－22	Ⅳ	A	10.1	6.0	3.8	410	斑れい岩	平面観が長方形をなす石斧の転用品である。下端を除く器面は石斧製作時の敲打痕と研磨痕を残す。敲石としての使用は下端で、比較的粗い面をなす。
第39図 1	ち－25	Ⅳ	A	8.2	5.7	3.9	340	斑れい岩	石斧からの転用品で、上下面と右側面を敲打部位として使用する。表裏面と左側面は石斧時の敲打痕と研磨痕を残す。敲石としての敲打面は粗い。
2	し－24	Ⅳ	B	8.2	7.3	4.4	390	片状砂岩	ほぼ円形をなす自然礫の周囲と表裏面を敲打部位として使用する。表裏面は磨石として活用され、中央部のくぼみは浅い。
図省略	た－25	Ⅳ	B	7.7	7.3	4.1	400	片状砂岩	円形の自然礫を用いるものである。表裏面は磨石とし、その中央部は浅くくぼむ。礫の周囲には比較的細かい敲打痕がめぐる。
3	す－25	Ⅳ	B	15.4	10.7	6.3	1560	礫質砂岩	楕円形をなす重量のあるもので、表裏面の中央部にくぼみ、上下端と両側辺を敲打部位として使用する。裏面は自然面で、表面は研磨される、磨石として使用される。
第40図 1	け－20	Ⅳ	B	12.8	9.9	5.2	1060	片状砂岩	楕円形の自然礫を用いるもので、上下端と両側辺中央部を敲打部位として使用する。表裏面は研磨がみられ、中央部は敲かれくぼみをなす。

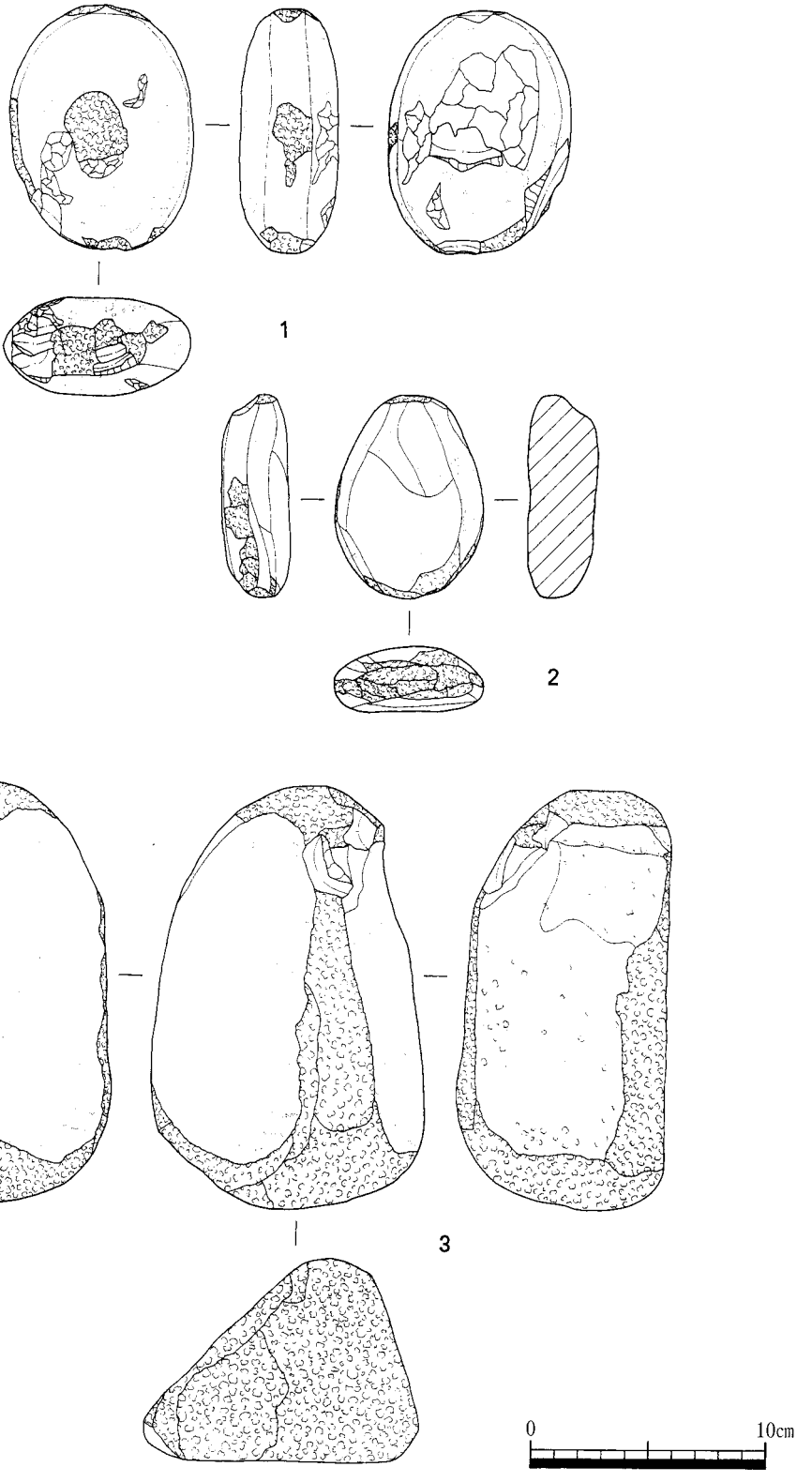
挿図番号	出土地点		分類	大きさ				石質	観察事項
	グリッド	層		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第40図 2	ち－25	Ⅳ	B	10.0	8.1	4.6	760	斑れい岩	隅丸長方形をなすものである。上下面と両側面に敲打痕がみられ、両側面は中央部での使用頻度が高い。表裏面は研磨され、中央部には敲打痕を認める。
3	さ－21	Ⅳ	B	10.7	7.0	4.7	490	片状砂岩	長楕円形をなす自然礫を用いるものである。上下面と両側面中央を敲打部位として使用し、表裏面は磨かれ、中央部には浅いくぼみをつくる。
第41図 1	け－20	Ⅳ	B	10.8	8.4	5.3	700	片状砂岩	下部幅より上部幅の広い楕円形を呈し、上下端と右側面を敲打部として使用する。表裏面は磨かれるが、徹底してない。中央はくぼむが裏面は浅い。
2	せ－24	Ⅳ	B	11.9	9.1	6.5	1220	砂岩	隅丸の方形をなすもので、上下面と両側面中央に粗い敲打痕がみられる。表裏面は磨面をなし、裏面中央には浅いくぼみを有する。
3	つ－25	Ⅳ	B	10.7	7.9	5.4	720	砂岩	隅丸方形のもので、裏面上部は使用により破損する。上下面と両側面中央部分を敲打部位とし、比較的粗い敲打痕をみる。表裏面は磨かれるが、裏面は徹底しない。表裏面中央のくぼみは浅い。
4	せ－25	Ⅳ	B	10.5	8.7	5.2	790	礫質砂岩	隅丸の方形をなし、上下面と両側面の中央を敲打部位として使用するが、それほど使用されてない。表裏面の磨面は裏面は滑面をなす。表裏面のくぼみは小さく浅い。
5	さ－21	Ⅳ	B	9.6	9.0	6.3	650	砂岩	身の上部と下部右側を破損するものである。下面と左側面に粗い敲打痕をみる。表裏面中央のくぼみは浅い。表裏面は磨かれるが、裏面は表面にくらべ丁寧である。
図省略	せ－24	Ⅰ	C	11.7	10.6	5.7	1100	砂岩	円形をなすものである。側面に敲打痕がみられ、特に上下面と両側面の中央は多用される。表裏面は比較的丁寧に磨かれる。
第42図 1	た－24	Ⅳ	C	10.5	9.6	5.6	940	角閃石はん岩	隅丸方形を呈し、側面全体に敲打痕がみられる。敲打痕は粗い。表裏面の研磨は表面は徹底され、弧を描く。
2	そ－25	Ⅰ	C	10.5	9.4	5.1	770	片状砂岩	ほぼ円形を呈し、側面全体に敲打痕をみとめる。裏面右側は使用により破損している。表裏面は磨かれ、稜を形成する。
3	た－24	Ⅳ	C	9.0	8.5	5.3	600	砂岩	ほぼ円形の自然礫を用いるもので、下端と両側辺を敲打部位とする。研磨面は表面にみられ、徹底しない。
図省略	せ－25	Ⅳ	C	13.4	8.7	5.6	1140	片状砂岩	上下面と両側面中央の敲打部位以外のほぼ全面が磨かる。研磨は表裏面で丁寧になされ、側面はそれほどでもない。上下面と側面の敲打痕は細かい。

挿図番号	出土地点		分類	大きさ				石質	観察事項
	グリッド	層		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第43図 1	そ－20	Ⅳ	C	13.7	11.2	6.5	1610	花こう岩	楕円形をなす厚みのあるものである。側面全体に粗い敲打痕がみられ、上下面は多用される。表裏面の研磨は徹底しない。
2	す－25	Ⅰ	C	12.6	10.4	4.5	1010	輝緑岩	扁平楕円形の自然礫を用いるもので、下面から右側面のかけての範囲と上端を敲打部位として使用する。表裏面の研磨は徹底しない。
図省略	た－25	Ⅳ	C	11.2	8.9	4.8	780	角閃石はん岩	楕円形をなす自然礫を用いるもので、上下面と両側面中央を敲打部位として使用する。表裏面の研磨は側面近くの縁まで施される。
図省略	つ－26	Ⅳ	C	11.1	8.7	4.6	710	砂岩	扁平楕円形の自然礫を用いるもので、上下面のみ敲打部位として使用する。表裏面の研磨は丁寧になされ、滑面を呈する。
3	そ－26	Ⅳ	C	12.2	8.4	4.6	680	片状砂岩	左側を欠損するもので、上端を敲石としての使用時のものであろう。敲打部位はほかに下端と右側面中央にある。表裏面の研磨はよく、中央は僅かに敲打痕を残す。
図省略	そ－26	Ⅳ	C	9.2	9.6	4.8	590	角閃石はん岩	身の上部を欠損する。下面を敲打部位として使用する。上部の欠損部の縁は敲打により潰されている。表裏面の研磨は粗い。
図省略	ち－24	Ⅳ	C	11.5	7.7	5.1	640	砂岩	平面観は下部より上部幅の広い長楕円形である。上下面と両側面中央に敲打痕を認めるが、使用頻度は少ない。表裏面の研磨も徹底していない。
図省略	せ－24	Ⅰ	C	11.2	8.7	4.7	720	輝緑岩	表面がほぼ平坦に磨き上げられるもので、中央に僅か敲打痕がみられる。裏面の研磨も良好である。側面全体が敲打部位として使用される。
図省略	す－22	Ⅳ	C	11.5	11.1	3.5	860	輝緑岩	扁平のほぼ円形をなす自然礫を用いるもので、左側面から下端左半分と右側面を敲打部位として使用。表裏面の研磨は徹底しない。
図省略	し－21	Ⅳ	C	9.9	8.1	5.0	680	砂岩	角の丸い方形をなす。上下面と両側面中央を敲打部位とするが、上下面は多用され粗い。表裏面の研磨は側面のふちまで丁寧に施す。
第44図 1	た－24	Ⅳ	C	12.6	10.0	6.3	1230	角閃石はん岩	平面観が楕円形をなし、上下面と両側面を敲打部位として使用する。敲打痕は粗い。表裏面は研磨され、中央に敲打痕を僅かに残す。
2	た－24	Ⅳ	C	12.3	8.3	5.9	1010	片状砂岩	縦長の隅丸の方形をなすもので、上下面と側面中央及び表裏面に敲打痕がみられる。表裏面を除く他の面が多用される。研磨は裏面が比較的徹底し、表面は部分的である。
図省略	す－23	Ⅳ	C	9.5	8.2	5.6	575	片状砂岩	上部を欠損するものであるが、破損面は敲打部位として使用される。下面及び両側面も敲打部で、粗い面をなす。研磨は裏面に施され、表面は自然面である。

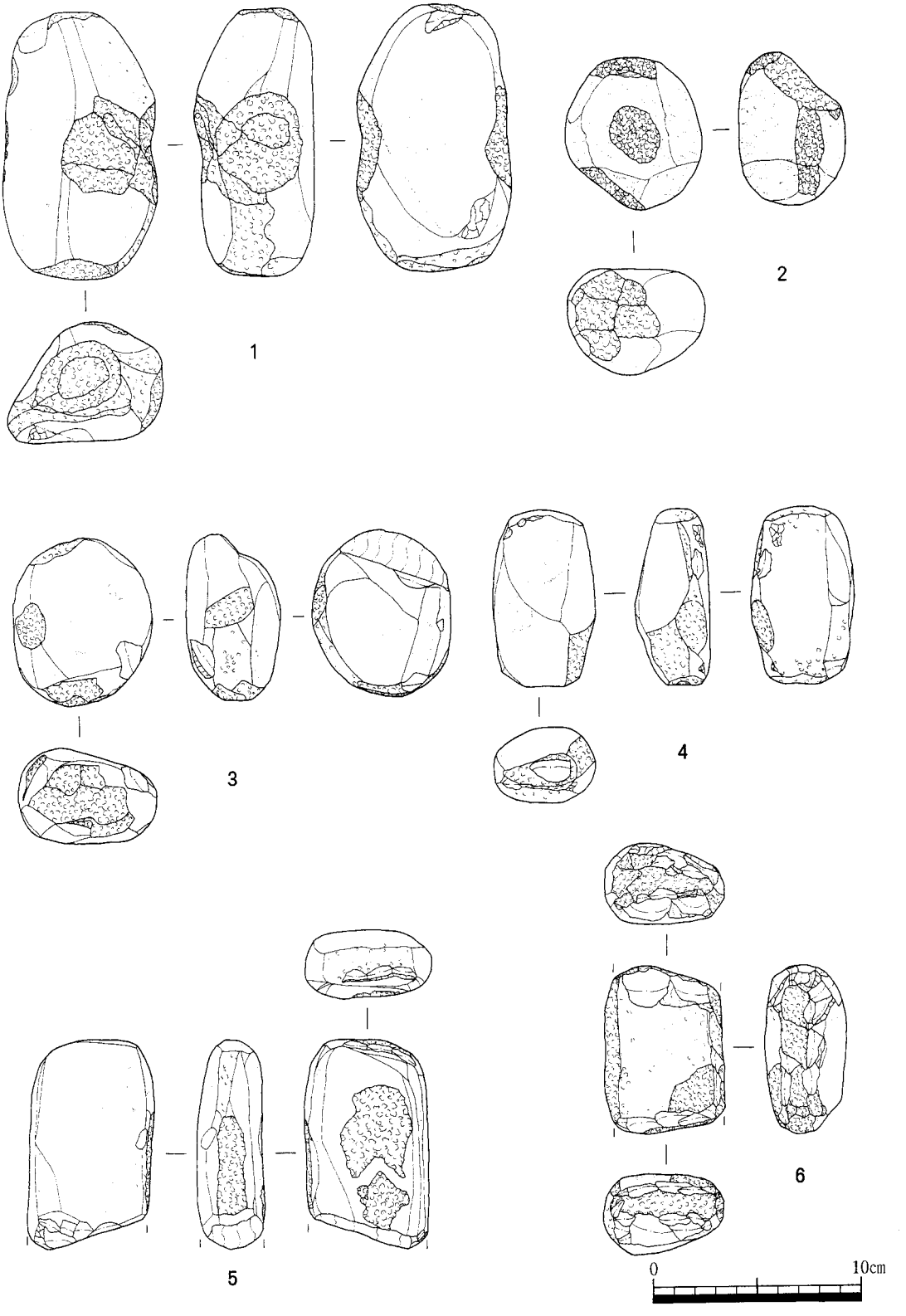
挿図番号	出土地点		分類	大きさ				石質	観察事項
	グリッド	層		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
図省略	と－23	I	C	11.5	8.2	5.0	680	砂岩	楕円形を呈し、側面のほぼ全体に敲打痕がみられる。敲打痕は特に上下面と側面中央で粗い。裏面は使用により破損する。表裏面の研磨は裏面側は丁寧である。
第44図 3	た－24	I	C	13.1	10.1	5.0	1030	輝緑岩	隅丸の三角形を呈するもので、上下面及び側面に敲打痕を部分的に残すが、若干の研磨が施されている。表裏面は滑面になるほど丁寧に研磨される。
第45図 1	そ－24	IV	C	12.9	10.0	4.7	1000	輝緑岩	いびつな台形をなすもので、右下面と両側面に敲打痕がみられる。左側面は粗く、裏面側は破損している。研磨は表面のみに施される。
図省略	た－25	IV	C	12.9	9.7	7.7	1400	角閃石はん岩	上部より下部幅の小さい楕円形を呈するもので、上下端を敲打部位として使用する。部分的に敲打痕を残すもののほぼ全面に研磨が施される。
図省略	せ－24	IV	C	12.7	7.1	6.9	1200	片状砂岩	平面観が三角形を呈するもので、下端と右側面及び上部左端を敲打部位として使用。側辺部以外はほぼ全面に研磨が行われる。
図省略	せ－20	IV	C	10.4	7.3	5.8	700	輝緑岩	角の丸い三角形を呈するもので、上下面と表面中央及び右側面を敲打部位とする。研磨は各面に認めるが、部分的である。
2	ち－24	IV	C	15.8	9.8	7.3	1710	片状砂岩	平面観が楕円形をなすもので、裏面は割面である。表面中央と両側面及び下端を敲打部位とする。研磨は裏面を除くほぼ全面に施され、稜を形成する。
図省略	た－25	IV	C	7.6	10.6	5.7	590	片状砂岩	身の上半部を欠損する。左側面から下面にかけて敲打部位として使用する。表裏面の研磨は粗い。
図省略	す－20	I	C	10.6	9.6	5.7	940	斑れい岩	ほぼ円形を呈するもので、全面に敲打痕が点在する。側面の使用頻度は高い。研磨は側面を除く表裏面になされるが、徹底せず敲打痕を残す。
図省略	こ－20	IV	C	8.4	7.9	4.7	470	砂岩	平面観は方形をなす。側面全体に敲打痕を認めるが、若干の研磨がかけられている。表裏面の研磨は丁寧になされ、滑面をなす。
3	た－24	IV	D	10.8	9.8	4.8	790	シルト質泥岩	円形を呈し、側面全体に粗い敲打痕がみられる。表裏面のくぼみの敲打痕は粗く、そして浅い。
4	せ－25	IV	D	15.4	10.7	8.9	960	細粒砂岩	身の右上半部を欠損するもので、本来の形態は楕円形になるものである。左側面から下端にかけて粗い敲打痕を残す。くぼみは表面のみにあり、粗い。
図省略	と－23	I	D	12.9	9.7	5.2	900	細粒砂岩	平面観が楕円形を呈するもので、両側面は使用により抉られる。側面全体に粗い敲打痕をみる。表裏面のくぼみは浅く、それほど使用されてないようである。
5	ち－26	IV	D	11.9	9.5	6.9	1090	細粒砂岩	いびつな円形をなすもので、側面全体に粗い敲打痕がみられる。くぼみは表裏両面の中央にあり、比較的広い範囲が使用されている。



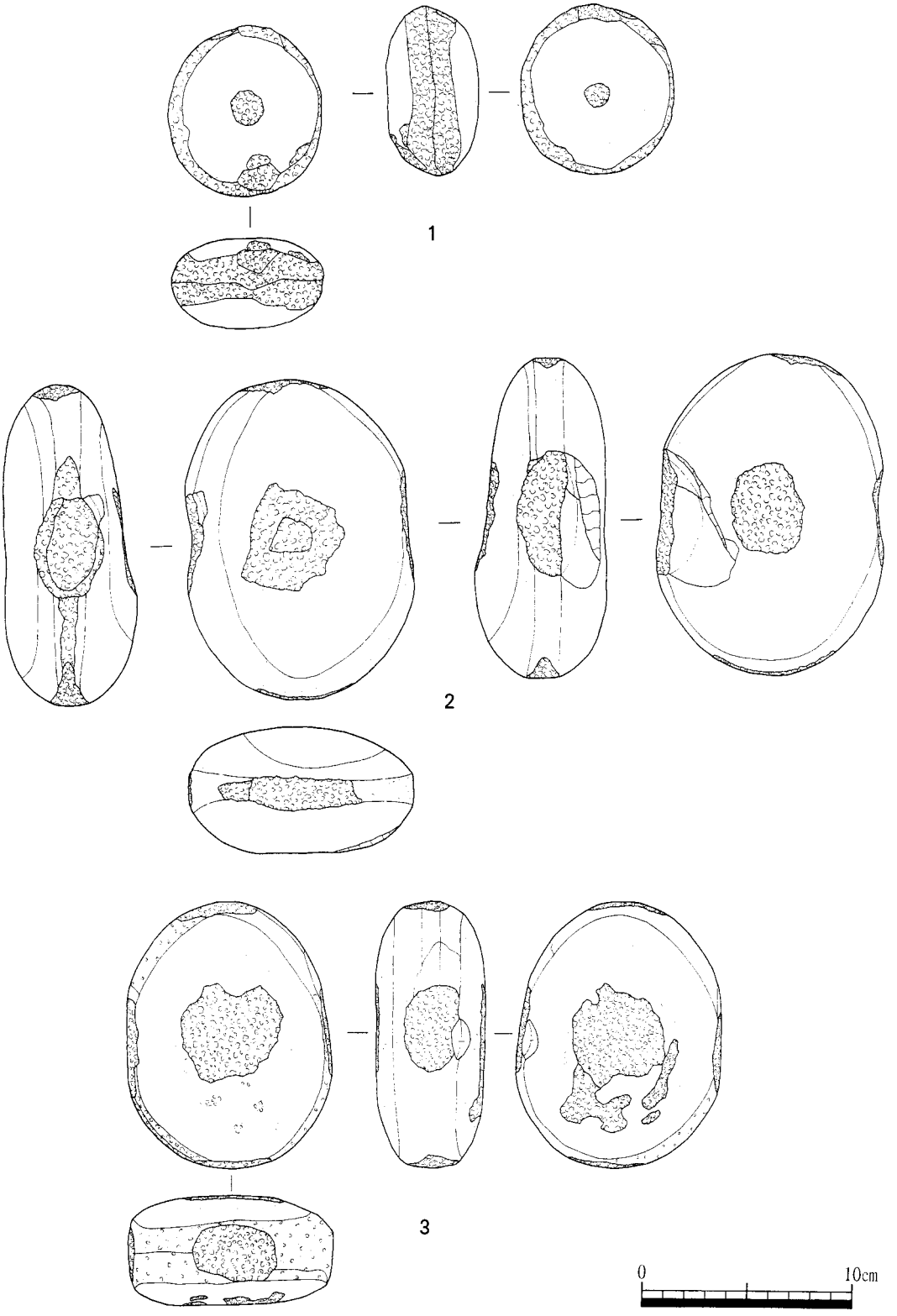
第36図　叩き石１



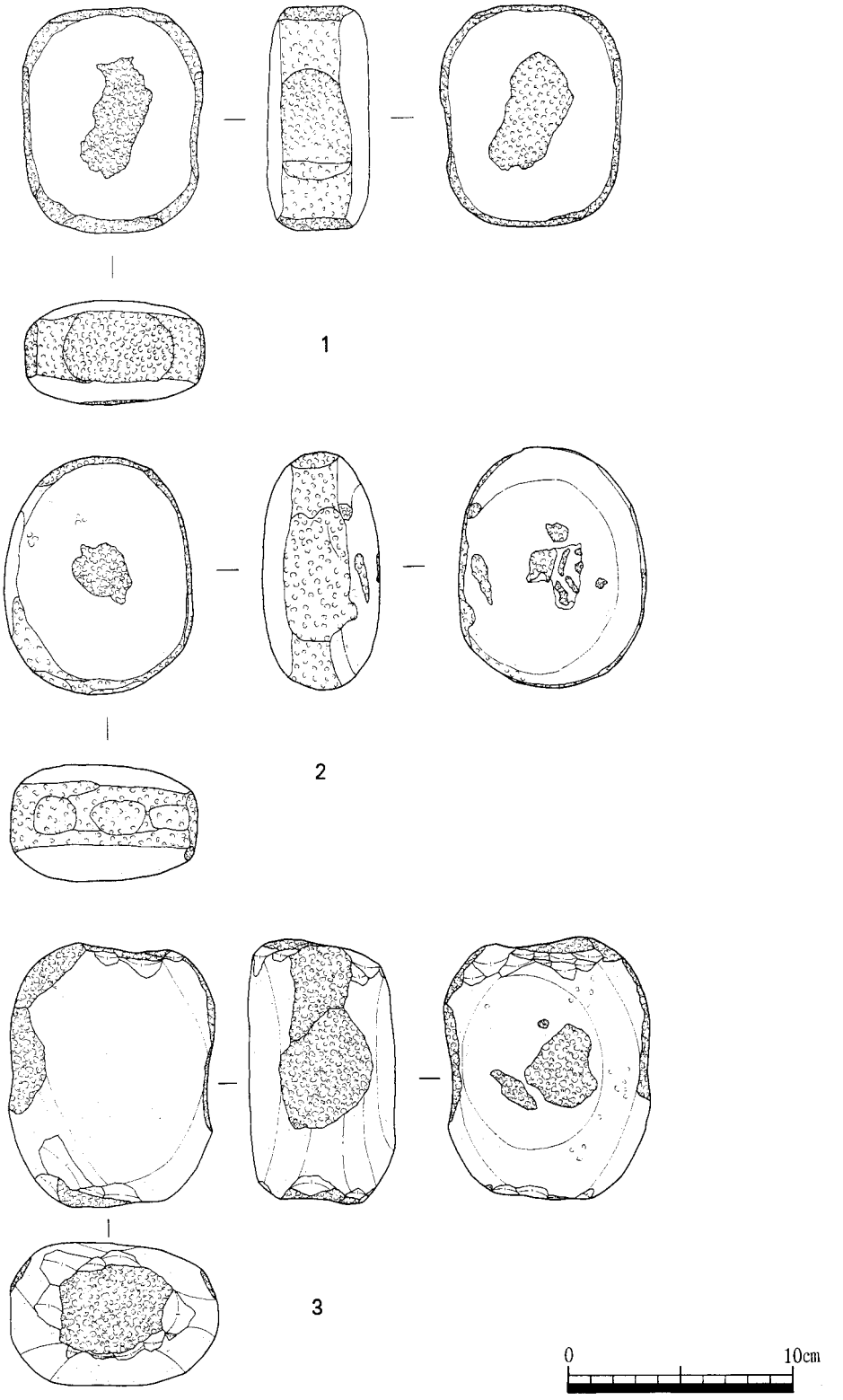
第37図　叩き石２



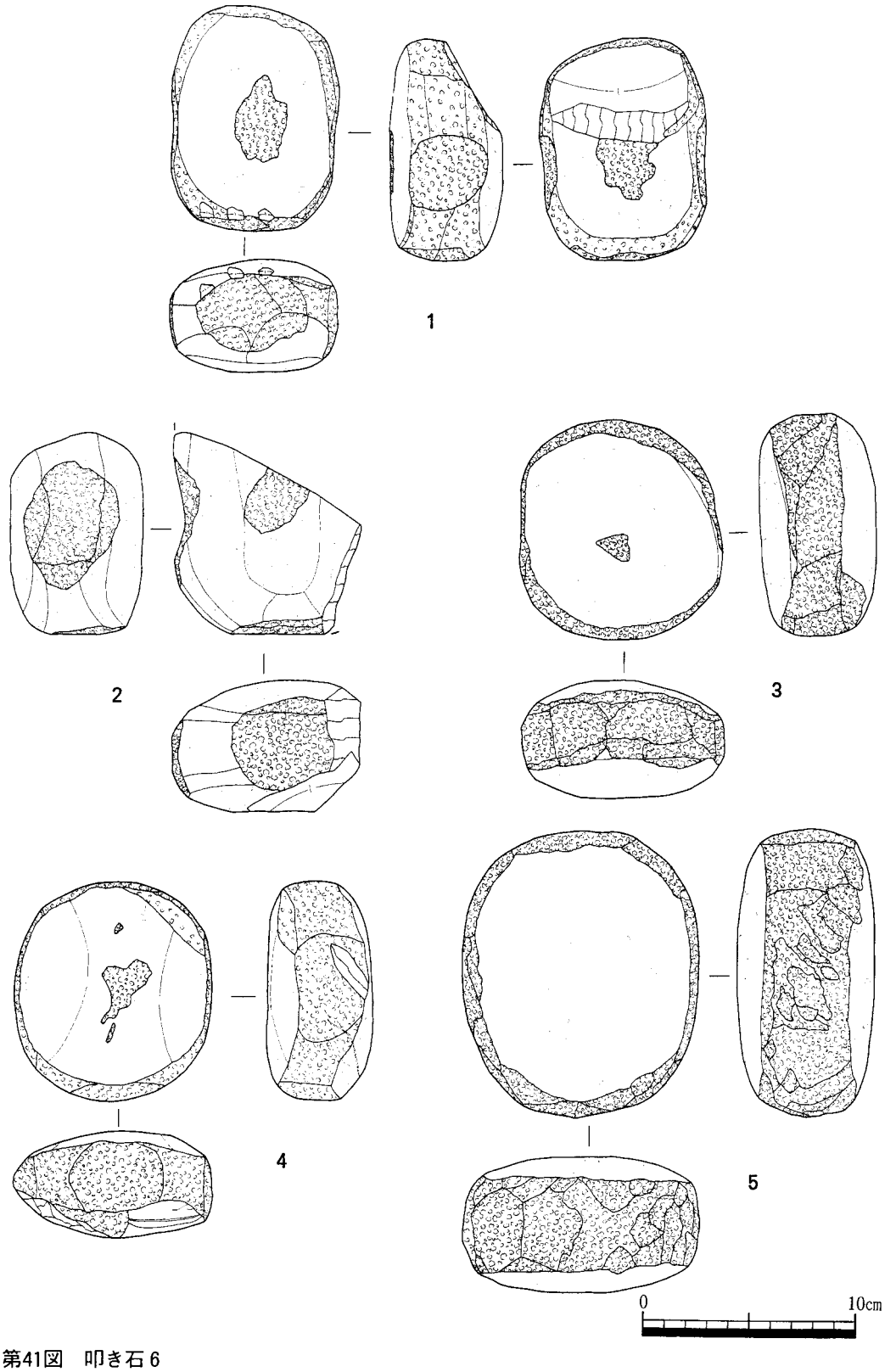
第38図　叩き石３



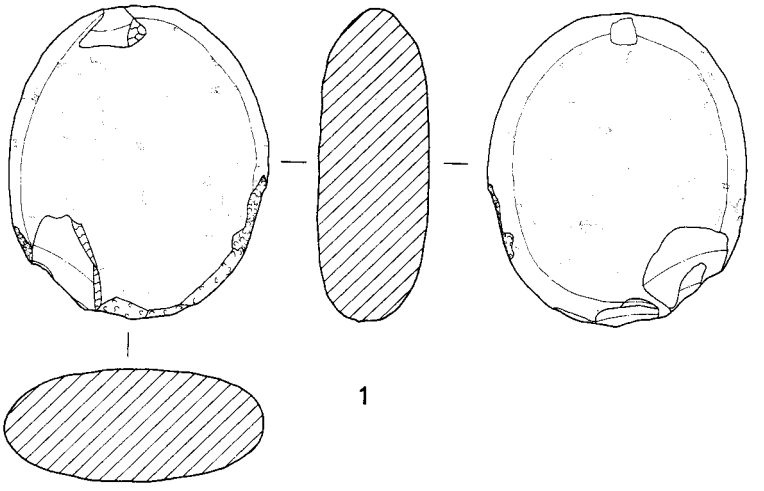
第39図　叩き石 4



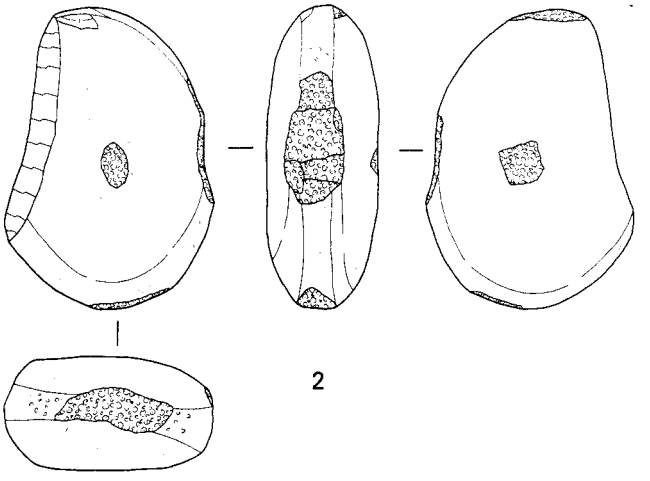
第40図　叩き石５



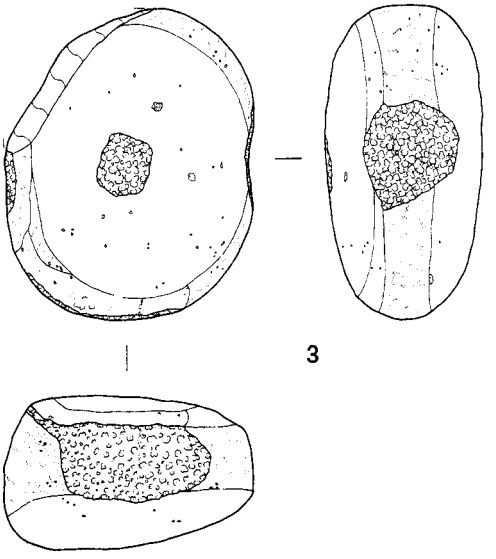
第41図　叩き石6



1

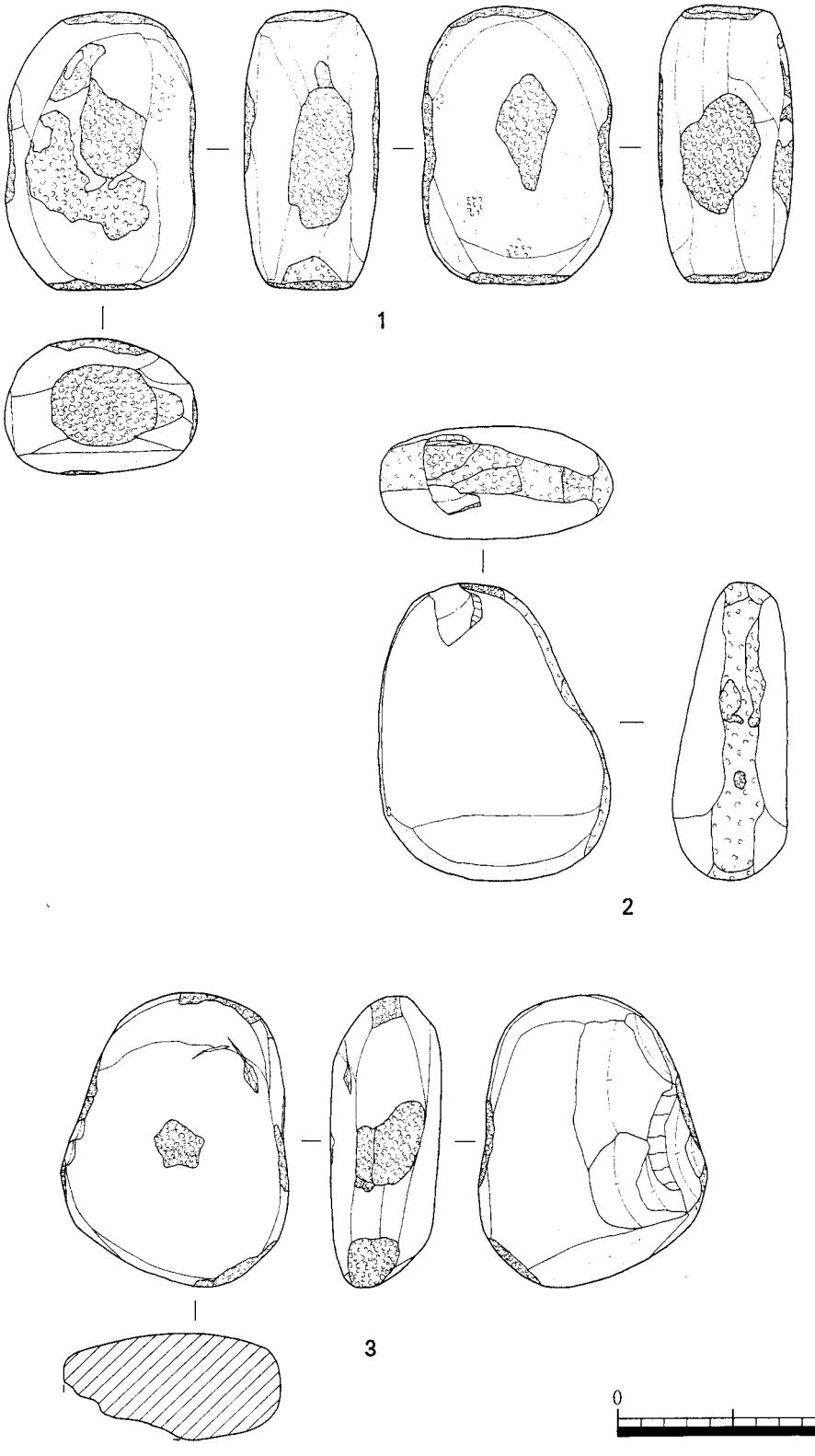


2

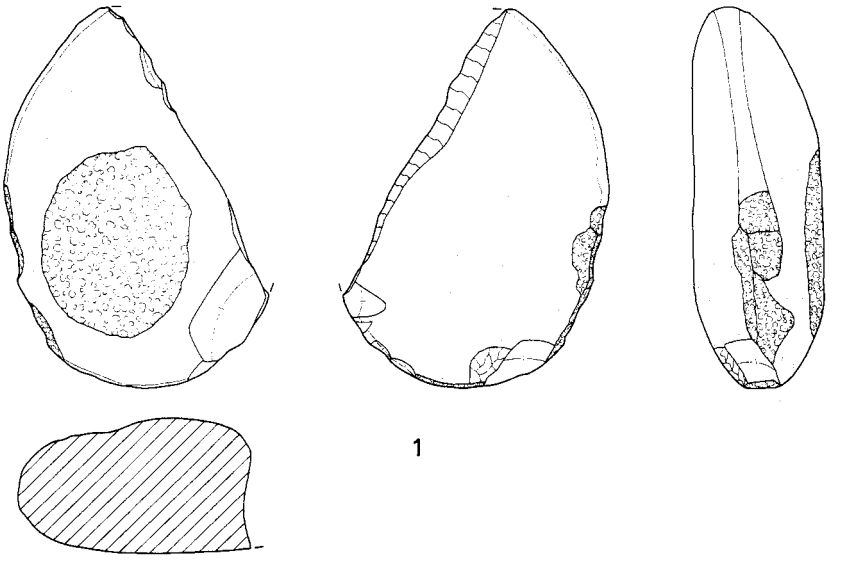


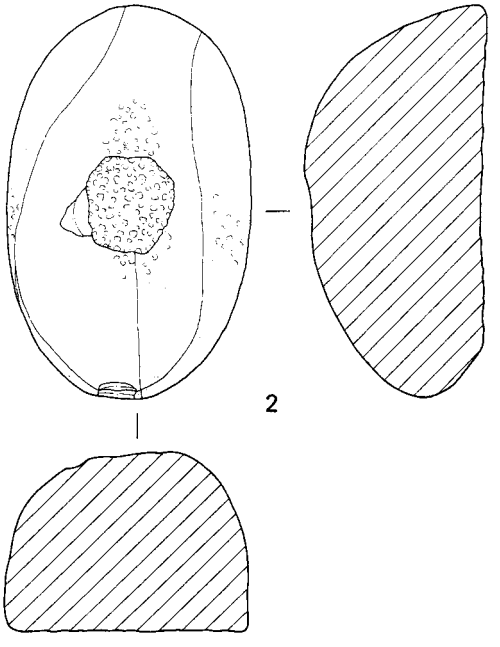
3

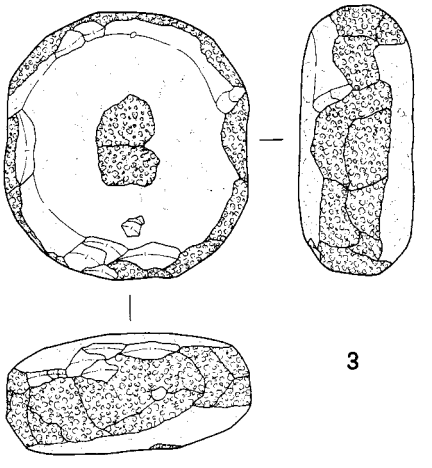
第42図　叩き石７

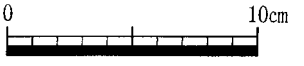


第43図　叩き石 8

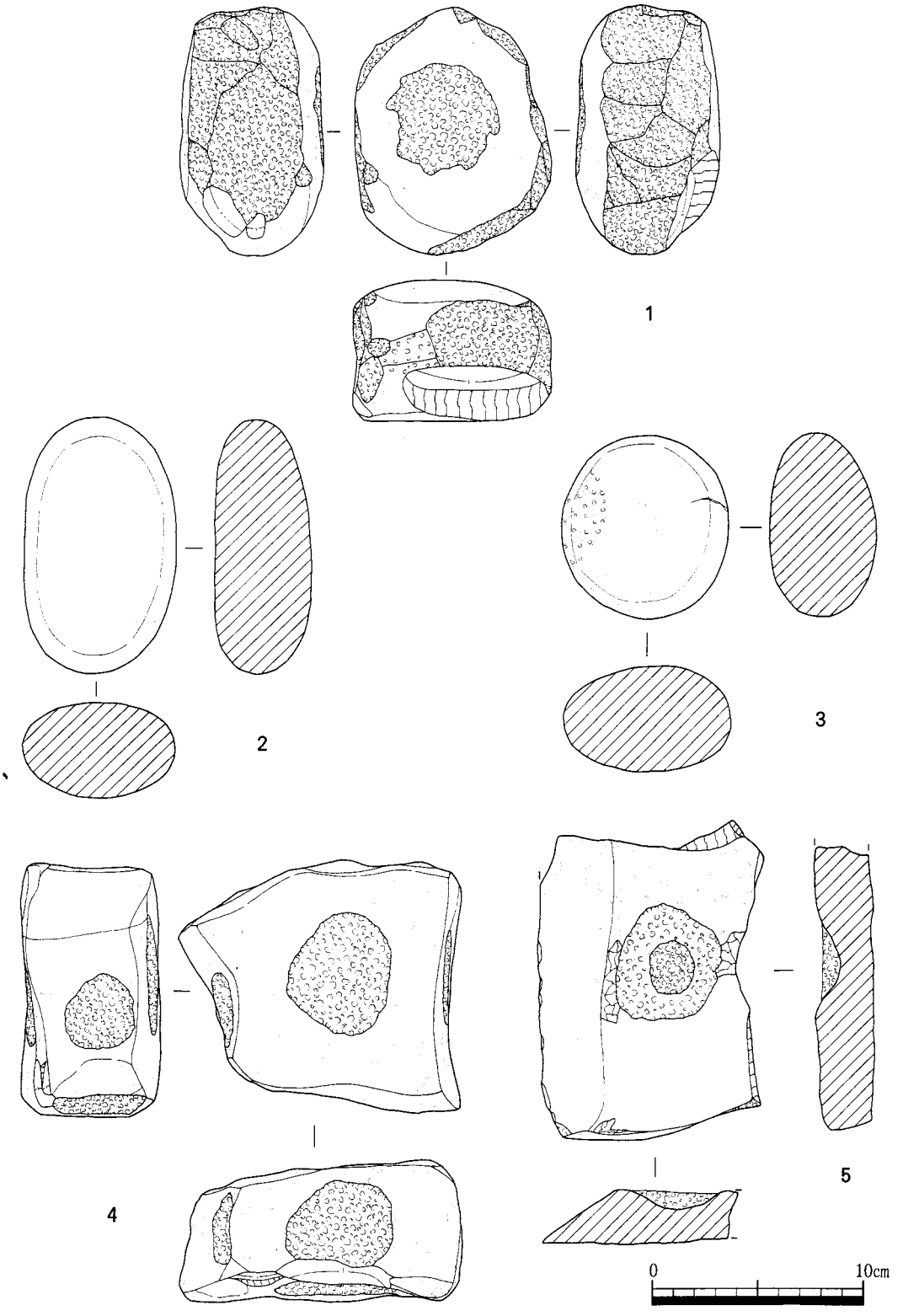








第44図　叩き石９



第45図　叩き石(1)、磨石（2･3)、くぼみ石（4･5)

(6)磨　石（第45図２・３）

磨石は５点が採集され、その中の２点を図示する。２は長楕円形をなすもので、器面は滑面を呈する程磨かれている。第２号竪穴遺構の床着である。砂岩製で、重量は640ｇ。

３は平面形が円形をなすもので、表面左側に僅かに敲打痕をみる。器面の磨きは表面側でよく、裏面ではそれほどではない。すー22グリッド第Ⅳ層の出土。片状砂岩製で、重量は510ｇ。

(7)くぼみ石（第45図４・５）

４点が得られている。いずれも扁平で平面観が方形あるいは多角形をなし、表面あるいは側面等がくぼむものである。中には厚みが厚く（11.0cm）、重量も1lkgを測るものもあり、台石的な使用法の考えられるものもある。採集されたこられの資料は５のみ片状砂岩製で、他はいずれも細粒砂岩製である。

(8)その他の石器（第46図）

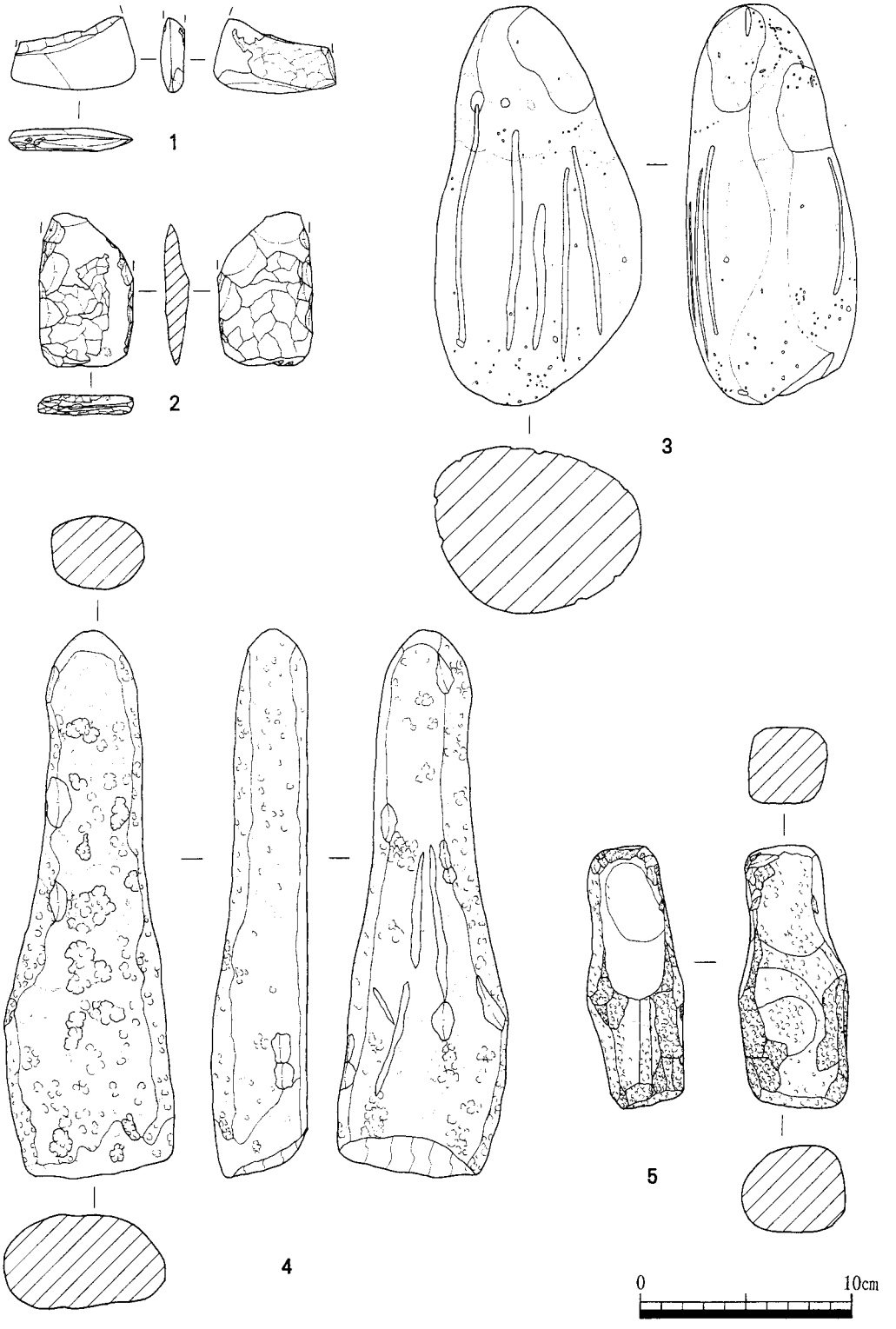
使用痕及び形態等が前記のいずれの分類にも属さないものである。１・２は磨製石斧の破片の再生品である。１は研磨面を残す破片資料の一端を裏面より研ぎ出して刃部をつくりだすものである。下辺の破損面は研磨を施し、潰しをかけている。表面の研磨は入念になされ、滑面を呈する。裏面は刃部以外は割面のままである。手持ちの小型ナイフのようにものを切る用途が考えられる。第２号竪穴遺構の出土。輝緑岩製。

２も石斧の再生品である。基部の右上部は破損している。現状から現基端は弧を描くように研磨されていることから、石斧として使用している際の刃部と考えられ、使用時に裏面の基部下半から刃部を含む範囲が破損したものである。そして、基端であった現刃部を両面より研ぎ出し、付刃する。研ぎ出しは弱く、鋭さはない。表面は打割時の剥離痕と研磨面がみられ、両側辺は打剥後に研磨が施される。せー25グリッド第Ⅳ層の出土。輝緑岩製。

４・５はほぼ全面に敲打痕の認めらるもので、形態が特異なことから叩き石としては分類せず本項で取り扱うことにする。４は横断面が方形をなすもので、基部上半部は下半部より絞られている。基部の上下面を除く全面に敲打痕で覆われる。基部の上下面は自然面である。基部の上半部の両側面は弧を描き、他面に比べ凹凸はなくほぼ平な面をなす。せー21グリッド第Ⅰ層の出土。輝緑岩製。

５は扁平の棍状のもので、下半部を欠損する。破損面を除くほぼ全面に敲打痕がみられる。上半部は弧を描き、上端は尖る。裏面の中央部から下半部にかけて、逆「Ｙ」状の浅い溝がはしる。破損及び器面に残る敲打痕から、下半部を手に持ち叩く用途が考えられるが、裏面の「Ｙ」状の溝もあり、また、形態から本項に含めた。たー24グリッド第Ⅳ層の出土。細粒砂岩製。

３は楕円形をなすサンゴ礫塊の表裏面に８条の溝が縦にはしるものである。敲打等の他の調整痕は認められない。たー24グリッド第Ⅳ層の出土。



第46図　その他の石器

3 貝製品

貝製品は、総数344点が得られている。これらは大別して実用品と装飾品に分けられるが、どちらか判別がつかない資料は用途不明とした。実用品は貝刃、二枚貝有孔製品、スイジガイ製利器、ホラガイ有孔製品、ホラガイ製容器、ヤコウガイ製杓子状製品があり、装飾品は貝輪、イモガイ製品、イモガイ製指輪、サツマビナ製品がある。用途不明品として扱ったものにはサラサバティ有孔製品がある。

以下、各製品について略述する。

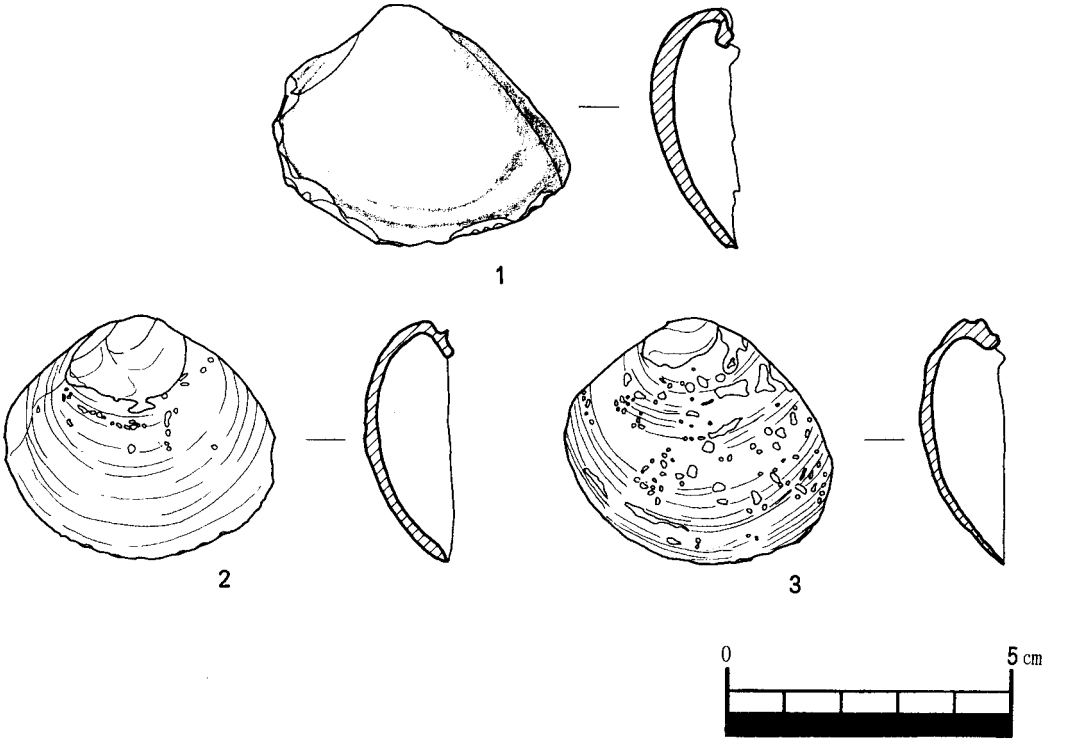
実用品

①貝刃（第47図）

二枚貝の腹縁を押圧剥離するもので、ハマグリ製とシレナシジミ製が出土している。

1はハマグリ製で、押圧剥離によって腹縁部に明瞭な刃をつくりだすものである。表面は刃部に沿って殻の表層が剥離している。殻長7.1cm、殻高6.0cm、重量42gで、し－22グリッド第Ⅳ層出土。

2・3はシレナシジミ製であるが、腹縁の剥離が微弱で不明瞭であるため、人工か自然かの判別が困難な資料である。2は殻長6.8cm、殻高6.0cm、重量26ｇ。3は殻長6.5cm、殻高6.1cm、重量27ｇ。いずれも、す－22グリッド出土である。



第47図　貝　刃

②二枚貝有孔製品（第48図）

二枚貝の殻頂部やその付近などに孔を穿つもので、227点が出土している。貝種別にみると、ヒメジャコ、ヒレジャコ、シラナミ、リュウキュウサルボウ、チヒロガイ、ハイガイ、ソメワケグリ、ダンドクメンガイ、シレナシジミ、メンガイ、リュウキュウマスオガイ、リュウキュウザルガイ、カワラガイの13種が認められる。なお、今回は6種15点を図示した。個別の観察表は第5表に示した。

穿孔の方法についてみると全て内側から穿たれており、一度の打割によって穿孔される例（1・2・5・6・8～14）と、打割後に数回にわたって打割を加え、孔を広げる例（7）とがある。本貝塚では前者が多く見受けられる。リュウキュウサルボウやカワラガイの中には殻頂又はその付近を磨くことによって孔を設けているもの（3・4）もみられる。

孔の形状は円形・方形・横楕円形・縦楕円形などに分けられ、横楕円形が最も多く、次いで円形とつづく。

孔の位置は厳密にみると殻頂部・中央部・前背縁部・後背縁部に分けられ、後三者は殻頂に近い場所を上部、殻の中央に穿つものを中央部、腹縁部に近いものを下部と細分される。本貝塚では前背縁部の中央に穿孔するものが71点と最も多く、次いで中央部の中央42点、前背縁部の上部39点、中央上部が33点ととつづく。

重量についてみると最大はシラナミの352gで、最小はリュウキュウサルボウの3.1gである。出土量の多いシャコガイ科の貝及びリュウキュウサルボウの重量分布についてみると、個体数が集中しているのは5.1～25.0gの範囲で、中でも10.1～15.0が最も多い。25g以上になると漸減する。貝種別にみると、ヒメジャコ、シラナミは5.1～10.0gに集中し、リュウキュウサルボウは20.1～25.0gに集中しており、それぞれ個体数が集中している重量の貝を選択して利用したことがうかがえる。

第5表　二枚貝有孔製品観察一覧　　単位　cm／g

No.	挿図番号	グリッド	層	貝種	左右殻	殻長	殻高	重量	孔径 縦	孔径 横	孔の位置	穿孔	孔の形状	腹縁
1	第48図1	し－21	Ⅳ	メンガイの一種	右	7.00	6.40	44.0	1.20	1.20	中上	内	円	×
2	〃 2	ち－24	ミゾ	リュウキュウマスオガイ	左	7.20	4.90	21.0	1.20	1.50	中中	内	横楕円	×
3	〃 3	ち－25	不明	カワラガイ	右	5.00	5.60	32.0	0.70	0.50	殻頂		縦楕円	×
4	〃 4	た－26	Ⅳ	リュウキュウサルボウ	左	7.00	5.10	49.0	0.40	0.50	殻頂		縦楕円	×
5	〃 5	こ－18	Ⅱ	リュウキュウサルボウ	右	6.00	4.10	21.5	0.60	1.10	殻頂	内	横楕円	×
6	〃 6	こ－17	Ⅳ	リュウキュウサルボウ	左	5.30	4.00	22.0	0.90	0.80	中上	内	縦楕円	×
7	〃 7	こ－18	アゼ	リュウキュウサルボウ	左	6.20	4.30	33.0	1.60	2.60	殻頂	内	横楕円，複孔？	×
8	〃 8	こ－18	不明	ヒメジャコ	左	4.80	2.90	5.9	0.50	1.10	中上	内	横楕円	×
9	〃 9	こ－16	Ⅳ	ヒメジャコ	右	5.00	3.40	9.0	0.80	1.00	中中	内	不定形	×
10	〃 10	さ－18	Ⅳ	ヒメジャコ	左	6.90	4.70	22.0	0.80	1.10	中中	内	不定形	×
11	〃 11	こ－16	Ⅳ	ヒメジャコ	右	6.60	4.30	22.5	0.70	1.00	中上	内	横楕円	×
12	〃 12	そ－24	Ⅰ	ヒメジャコ	右	6.00	3.70	15.0	0.20	0.60	前上	内	不定形	×
13	〃 13	さ－16	Ⅳ	シラナミ	左	6.80	3.70	18.5	1.50	1.30	中中	内	不定形	×
14	〃 14	さ－19	Ⅳ	ヒメジャコ	左	7.05	5.31	23.0	1.41	1.32	前中	内	不定形	×
15	〃 15	こ－17	Ⅳ	ヒメジャコ	左	10.30	7.70	58.0	0.90	1.20	前上	内	横楕円	×
16	〃 16	し－21	Ⅳ	カワラガイ	左	4.43	5.14	15.0	0.43	0.48	中上	内	円	×
17	図省略	せ－25	Ⅳ	カワラガイ	右	☆4.1	4.53	☆9.0	0.67	0.73	中中	内	円	×
18	図省略	し－20	アゼ	カワラガイ	左	4.03	4.91	11.0	0.39	1.14	中中	内	不定形，複孔？	×
19	図省略	す－21	アゼ	シラナミ	右	9.66	5.82	54.0	1.11	1.47	前中	内	横楕円	×
20	図省略	せ－23	不明	シラナミ	右	16.61	11.24	352.0	1.95	3.50	中中	内	不定形，複孔？	×
21	図省略	せ－20	Ⅰ	シラナミ	左	5.58	3.64	13.0	0.65	1.91	前中	内	横楕円	×
22	図省略	さ－19	Ⅳ	シラナミ	右	☆6.50	☆4,31	☆19.0	1.39	1.62	前中	内	円	×
23	図省略	せ－20	Ⅰ	シラナミ	左	5.95	3.69	15.0	0.65	0.77	前中	内	円	×
24	図省略	せ－22	Ⅳ	シラナミ	右	8.63	5.44	32.0	1.75	1.33	中中	内	不定形	×
25	図省略	こ－20	Ⅳ	シラナミ	左	6.48	4.03	13.0	1.24	1.91	前上	内	不定形	×
26	図省略	こ－20	不明	シラナミ	右	8.97	5.18	33.0	1.89	2.15	中中	内	横楕円	×
27	図省略	さ－20	不明	シラナミ	右	8.49	5.44	35.0	1.37	2.58	中中	内	横楕円	×
28	図省略	し－21	Ⅳ	シラナミ	左	8.45	5.47	38.0	1.13	1.35	前中	内	不定形	×
29	図省略	せ－22	不明	シラナミ	左	5.61	3.49	10.0	0.75	1.29	中上	内	横楕円	×
30	図省略	し－22	不明	シラナミ	左	10.44	5.60	57.0	1.24	2.04	前上	内	横楕円	×
31	図省略	し－23	アゼ	シラナミ	右	13.40	☆6.31	☆70.0	1.25	1.74	前中	内	横楕円	×
32	図省略	さ－19	Ⅳ	シラナミ	右	5.35	3.70	9.0	0.32	1.85	後上～前上	内内	不定形	×

No.	挿図番号	グリッド	層	貝種	左右殻	殻長	殻高	重量	孔径 縦	孔径 横	孔の位置	穿孔	孔の形状	腹縁
33	図省略	さ－21	不明	シラナミ	左	6.76	4.30	22.0	0.72	0.90	前下	内	不定形	×
34	図省略	し－20	不明	シラナミ	左	6.71	4.40	18.0	1.43	1.74	前中	内	円	×
35	図省略	し－20	I	シラナミ	左	☆3.99	4.00	☆12.0	1.36	1.69	中中	自然		×
36	図省略	し－21	IV	シラナミ	右	8.83	5.75	50.0	1.02	0.94	中中	内	円	打割?
37	図省略	し－21	不明	シラナミ	左	☆8.87	☆6.84	☆67.0	1.33	1.45	前中	内	円	打割?
38	図省略	さ－19	IV	シラナミ	右	6.18	3.52	13.0	0.77	1.55	中中	内	円	×
39	図省略	す－24	I	シラナミ	右	6.30	4.15	17.0	0.86	0.83	中中	内	円	×
40	図省略	つ－24	不明	シレナシジミ	左	6.45	5.62	25.0	1.26	1.53	中上	内	円	×
41	図省略	せ－23	不明	シレナシジミ	右	☆6.26	5.67	☆21.0	0.90	1.05	中中	内	不定形	打割?
42	図省略	し－20	I	ソメワケグリ?	左	2.58	☆2.20	20.0	0.43	0.58	殻頂	内	横楕円	×
43	図省略	た－23	I	ダンドクメンガイ?	左	5.17	4.80	9.0	1.55	0.79	中中	内	縦楕円	×
44	図省略	そ－24	IV下	チヒロガイ?	左	5.62	6.28	9.0	1.04	0.91	中中	内	縦楕円	×
45	図省略	不明		ハイガイ	右	4.24	4.05	20.0	0.40	0.85	殻頂	内	横楕円	×
46	図省略	し－19	IV	ハイガイ	左	4.21	3.62	18.0	0.60	0.90	殻頂	内	円	×
47	図省略	こ－19	I	ヒメジャコ	右	8.24	5.68	58.0	0.93	2.00	前中	内	横楕円	×
48	図省略	こ－20	IV	ヒメジャコ	右	7.64	4.89	25.0	1.23	0.86	中中	自然		×
49	図省略	こ－20	IV	ヒメジャコ	左	8.78	6.81	59.0	0.92	1.58	後中	内	横楕円	×
50	図省略	こ－20	IV	ヒメジャコ	左	6.54	4.50	17.0	1.20	1.43	前中	内	横楕円	×
51	図省略	こ－20	IV	ヒメジャコ	右	5.30	3.35	8.0	0.92	1.17	中中	内	横楕円	×
52	図省略	ち－24	IV	ヒメジャコ	右	7.80	5.60	35.0	0.80	0.50	前上	内	不定形	×
53	図省略	さ－19	不明	ヒメジャコ	右	7.12	4.37	26.0	0.79	1.11	前上	内	横楕円	×
54	図省略	さ－19	不明	ヒメジャコ	右	8.95	7.19	62.0	1.50	2.29	前中	内	横楕円	×
55	図省略	さ－19	不明	ヒメジャコ	右	9.70	7.02	80.0	2.35	2.81	前中	内	円	×
56	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	右	5.13	3.54	10.0	0.52	0.75	前中	内	横楕円	×
57	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	左	5.11	3.25	9.0	0.64	0.67	前中	内	円	×
58	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	右	☆7.21	☆5.79	☆37.0	0.84	1.57	中上	内	不定形	×
59	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	左	6.13	3.85	14.0	0.85	1.21	前中	内	横楕円	×
60	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	左	4.99	3.85	12.0	0.64	1.14	前中	内	横楕円	×
61	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	左	☆5.77	☆4.46	☆18.0	1.04	1.72	前中	内	不定形	打割?
62	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	左	7.86	5.60	46.0	0.61	0.93	中上	内	横楕円	×
63	図省略	さ－19	IV	ヒメジャコ	右	☆3.66	☆3.77	☆8.0	0.94	0.93	後上	内	円	破損
64	図省略	さ－20	不明	ヒメジャコ	右	8.06	5.81	39.0	1.99	1.50	前中	自然		×
65	図省略	さ－20	不明	ヒメジャコ	左	10.96	7.99	98.0	1.86	1.70	前上	内	円	×

No.	挿図番号	グリッド	層	貝種	左右殻	殻長	殻高	重量	孔径 縦	孔径 横	孔の位置	穿孔	孔の形状	腹縁
66	図省略	さ－20	I	ヒメジャコ	右	☆7.32	5.22	☆24.0	0.48	0.41	前中	自然		×
67	図省略	さ－20	I	ヒメジャコ	右	7.96	5.93	46.0	1.56	1.22	前中	内	縦楕円	×
68	図省略	さ－20	I	ヒメジャコ	右	9.80	7.16	87.0	1.53	2.10	前中	内	横楕円	×
69	図省略	さ－20	IV	ヒメジャコ	左	6.60	4.18	19.0	1.76	2.62	前上	内	横楕円	×
70	図省略	さ－20	IV	ヒメジャコ	左	10.94	6.97	88.0	3.04	3.77	中中	自然		×
71	図省略	さ－20	IV	ヒメジャコ	右	8.35	5.66	44.0	1.23	1.57	前上	内	円	×
72	図省略	さ－20	IV	ヒメジャコ	右	5.78	3.79	9.0	0.78	1.00	前上	内	円	×
73	図省略	さ－20	IV	ヒメジャコ	右	☆4.14	4.12	☆11.0	0.45	0.57	中中	内	円	×
74	図省略	さ－21	不明	ヒメジャコ	右	7.84	5.63	32.0	1.25	1.64	前中	内	不定形	×
75	図省略	さ－21	不明	ヒメジャコ	右	7.67	5.00	27.0	0.73	1.03	前上	内	横楕円	×
76	図省略	さ－21	不明	ヒメジャコ	右	6.83	4.79	23.0	0.41	0.64	前中	自然		×
77	図省略	さ－21	IV	ヒメジャコ	左	6.03	3.66	10.0	0.83	0.90	中中	内	不定形	×
78	図省略	さ－22	不明	ヒメジャコ	左	11.43	7.58	130.0	1.12	2.47	前上	内	不定形，複孔？	×
79	図省略	さ－22	IV	ヒメジャコ	右	7.83	☆4.57	☆28.0	0.94	1.64	前中	内	横楕円	×
80	図省略	さ－22	IV	ヒメジャコ	左	6.07	4.08	14.0	0.85	0.85	前上	内	円	×
81	図省略	さ－22	IV	ヒメジャコ	左	6.64	4.21	17.0	0.50	0.83	前上	内	横楕円	×
82	図省略	し－19	IV	ヒメジャコ	右	6.57	4.50	23.0	0.71	0.71	前中	内	方形	×
83	図省略	し－20	不明	ヒメジャコ	左	9.46	6.83	77.0	1.95	1.80	中中	内	円	×
84	図省略	し－20	不明	ヒメジャコ	右	5.24	3.38	10.0	1.35	0.82	中中	内	不定形	×
85	図省略	し－20	不明	ヒメジャコ	左	7.31	5.25	29.0	0.93	1.11	中中	内	円	×
86	図省略	し－20	不明	ヒメジャコ	右	6.53	4.08	16.0	1.05	1.20	前中	内	円	×
87	図省略	し－20	不明	ヒメジャコ	左	10.18	7.12	68.0	0.85	0.84	前中	自然		×
88	図省略	し－20	ミゾ	ヒメジャコ	左	8.95	6.43	47.0	2.08	3.14	前中	内	横楕円	×
89	図省略	し－20	IV	ヒメジャコ	右	☆4.44	☆3.63	☆8.0	1.16	1.07	前中	内	不定形	×
90	図省略	し－20	IV	ヒメジャコ	右	7.92	5.90	37.0	1.28	1.78	中上	内	横楕円	×
91	図省略	し－20	IV	ヒメジャコ	左	6.84	4.32	19.0	0.75	1.00	前上	内	円	×
92	図省略	し－20	I	ヒメジャコ	左	☆3.44	☆3.07	☆5.0	0.80	1.24	後中	内	横楕円	×
93	図省略	し－20	I	ヒメジャコ	左	5.85	4.10	13.0	0.78	1.16	前中	内	不定形	×
94	図省略	し－20	I	ヒメジャコ	左	8.66	☆5.98	☆4.30	1.33	1.85	中上	内	横楕円	×
95	図省略	し－21	不明	ヒメジャコ	左	5.46	3.63	13.0	0.86	0.73	前中	内	縦楕円	×
96	図省略	し－21	不明	ヒメジャコ	左	6.30	4.25	15.0	0.87	1.35	前中	内	不定形	×
97	図省略	し－21	不明	ヒメジャコ	左	6.17	4.00	15.0	0.73	0.89	前上	内	円	×
98	図省略	し－21	不明	ヒメジャコ	左	9.95	7.38	87.0	1.26	1.92	中中	内	横楕円	×

No.	挿図番号	グリッド	層	貝種	左右殻	殻長	殻高	重量	孔径 縦	孔径 横	孔の位置	穿孔	孔の形状	腹縁
99	図省略	し－21	不明	ヒメジャコ	左	6.33	4.53	15.0	1.27	1.51	前中	内	横楕円	×
100	図省略	し－21	I	ヒメジャコ	右	110.87	8.79	152.0	1.80	2.78	前中	内	横楕円	×
101	図省略	し－21	I	ヒメジャコ	左	☆64.0	3.99	14.0	1.20	1.10	中中	自然		×
102	図省略	し－21	I	ヒメジャコ	左	6.47	4.40	17.0	0.77	0.77	前上	内	円	×
103	図省略	し－21	IV	ヒメジャコ	左	10.22	7.66	112.0	1.66	1.76	中上	内	円	×
104	図省略	し－21	IV	ヒメジャコ	右	10.80	6.97	113.0	1.75	2.72	中中	内	不定形	×
105	図省略	し－21	IV	ヒメジャコ	右	5.11	3.66	10.0	0.56	1.01	中上	内	横楕円	×
106	図省略	し－21	IV	ヒメジャコ	右	7.96	5.53	8.0	0.84	0.92	中上	内	円	×
107	図省略	し－21	IV	ヒメジャコ	左	5.69	3.86	13.0	0.56	1.21	前上	内	不定形	×
108	図省略	し－21	IV	ヒメジャコ	左	6.54	4.42	20.0	0.88	0.90	前上	内	円	×
109	図省略	し－21	IV	ヒメジャコ	左	7.07	5.44	31.0	0.92	1.00	中中	内	円	打割?
110	図省略	し－22	不明	ヒメジャコ	左	10.50	6.55	50.0	1.03	2.09	前上	内	横楕円	×
111	図省略	し－22	不明	ヒメジャコ	右	9.52	6.41	52.0	1.11	1.44	前中	内	横楕円	×
112	図省略	し－22	IV	ヒメジャコ	左	5.40	3.46	11.0	0.83	0.70	前上	内	円	打割?
113	図省略	し－22	IV	ヒメジャコ	右	☆6.63	4.99	☆22.0	0.83	1.34	前上	内	横楕円	×
114	図省略	し－22	IV	ヒメジャコ	右	5.85	3.96	13.0	0.70	0.86	前上	内	円	×
115	図省略	し－22	IV	ヒメジャコ	左	7.81	5.69	36.0	1.26	1.93	中中	内	横楕円	×
116	図省略	し－22	IV	ヒメジャコ	右	5.60	3.73	14.0	0.64	0.87	前上	内	円	打割?
117	図省略	し－22	I	ヒメジャコ	左	7.05	4.86	23.0	0.38	0.98	前中	内	横楕円	×
118	図省略	し－23	不明	ヒメジャコ	左	8.23	5.11	37.0	1.26	1.91	前中	内	横楕円	×
119	図省略	し－23	不明	ヒメジャコ	左	10.73	7.82	122.0	1.57	2.34	中上	内	横楕円	×
120	図省略	し－23	不明	ヒメジャコ	左	8.85	5.80	47.0	1.82	1.50	前中	内	不定形	×
121	図省略	し－23	IV	ヒメジャコ	右	5.64	3.94	13.0	0.67	0.71	前中	内	円	×
122	図省略	し－23	IV	ヒメジャコ	左	10.63	6.84	51.0	1.94	2.50	前中	内	不定形	×
123	図省略	し－23	IV	ヒメジャコ	右	5.46	4.02	13.0	1.28	2.17	前上	内	横楕円	×
124	図省略	し－24	I	ヒメジャコ	左	5.27	3.09	8.0	0.43 0.18	0.40 0.47	前中 前中	内 内	縦楕円 不定形	×
125	図省略	す－20	I	ヒメジャコ	左	6.91	4.75	21.0	0.94	1.46	前中	内	不定形	×
126	図省略	す－21	I	ヒメジャコ	左	☆10.95	7.42	☆81.0	0.86	1.26	中上	内	不定形	×
127	図省略	す－21	アゼ	ヒメジャコ	右	5.65	4.05	12.0	0.73	0.75	前中	内	円	×
128	図省略	す－21	アゼ	ヒメジャコ	右	6.95	4.80	21.0	0.93	1.21	前中	内	横楕円	×
129	図省略	す－21	アゼ	ヒメジャコ	右	6.61	4.73	23.0	0.81	1.17	中上	内	円	×
130	図省略	す－21	I	ヒメジャコ	左	9.57	6.14	70.0	1.60	2.22	前中	内	横楕円	×
131	図省略	す－21	IV	ヒメジャコ	右	10.30	7.28	89.0	2.23	3.23	前中	内	横楕円	×

No.	挿図番号	グリッド	層	貝種	左右殻	殻長	殻高	重量	孔径 縦	孔径 横	孔の位置	穿孔	孔の形状	腹縁
132	図省略	す－21	I	ヒメジャコ	左	8.11	5.49	36.0	1.24	2.11	前中	内	横楕円	×
133	図省略	す－22	アゼ	ヒメジャコ	右	7.51	6.05	37.0	0.84	1.22	前上	内	横楕円	×
134	図省略	す－22	アゼ	ヒメジャコ	右	☆7.34	6.18	46.0	1.30	1.78	前上	内	横楕円	×
135	図省略	す－22	IV	ヒメジャコ	左	4.83	3.30	10.0	0.81	0.96	前上	内	不定形	×
136	図省略	す－23	アゼ	ヒメジャコ	右	6.16	4.32	20.0	0.60	0.68	前上	内	横楕円	×
137	図省略	す－23	アゼ	ヒメジャコ	左	8.98	5.84	57.0	1.02	1.09	後上	内	円	×
138	図省略	す－23	アゼ	ヒメジャコ	左	7.68	5.66	41.0	1.13	1.19	前上	内	縦楕円	打割?
139	図省略	せ－19	I	ヒメジャコ	右	☆9.85	7.56	☆96.0	1.85	2.06	前上	内	円	×
140	図省略	せ－19	I	ヒメジャコ	左	8.95	6.19	65.0	1.43	1.74	中上	内	横楕円	×
141	図省略	せ－19	I	ヒメジャコ	左	10.68	6.15	73.0	1.49	1.88	前中	内	不定形	×
142	図省略	せ－19	I	ヒメジャコ	左	10.27	7.38	94.0	2.16	2.77	後中	内	不定形	×
143	図省略	せ－19	I	ヒメジャコ	右	8.93	☆6.19	☆50.0	1.46	1.02	前中	内	方形	打割?
144	図省略	せ－20	不明	ヒメジャコ	左	6.85	4.94	29.0	1.10	1.78	前中	内	横楕円	×
145	図省略	せ－20	アゼ	ヒメジャコ	右	7.55	5.40	30.0	0.67	0.98	中上	内	横楕円	×
146	図省略	せ－20	アゼ	ヒメジャコ	右	7.29	4.72	25.0	0.90	1.03	前中	内	円	×
147	図省略	せ－20	IV	ヒメジャコ	左	7.96	5.19	29.0	0.98	0.84	前中	内	不定形	×
148	図省略	せ－20	IV	ヒメジャコ	右	8.64	6.72	53.0	1.29	1.79	前中	内	横楕円	×
149	図省略	せ－21	IV	ヒメジャコ	右	8.95	7.63	69.0	1.19	1.28	前中	内	円	×
150	図省略	せ－21	IV	ヒメジャコ	右	6.57	☆4.23	☆17.0	0.88	1.08	中上	内	円	打割?
151	図省略	せ－21	IV	ヒメジャコ	右	8.80	6.70	46.0	0.81	0.81	前上	内	円	×
152	図省略	せ－21	IV	ヒメジャコ	右	5.01	3.92	9.0	1.13	1.32	後上	内	横楕円	×
153	図省略	せ－21	I	ヒメジャコ	左	8.38	6.46	38.0	1.35	1.51	前中	内	円	×
154	図省略	せ－23	IV	ヒメジャコ	左	7.92	5.52	23.0	1.30	1.12	前中	内	縦楕円	×
155	図省略	そ－19	IV	ヒメジャコ	左	8.18	5.52	7.0	0.60	1.13	後上	内	横楕円	×
156	図省略	そ－19	I	ヒメジャコ	左	4.65	2.95	7.0	0.62	0.74	前上	内	円	打割?
157	図省略	そ－20	I	ヒメジャコ	右	7.27	4.67	21.0	0.76	1.22	前上	内	横楕円	×
158	図省略	そ－20	I	ヒメジャコ	左	5.06	2.92	8.0	0.60	0.89	前上	内	横楕円	×
159	図省略	そ－20	I	ヒメジャコ	右	4.96	3.13	7.0	0.97	1.22	前中	内	横楕円	×
160	図省略	そ－25	不明	ヒメジャコ	左	8.05	5.29	29.0	2.37	2.78	前中	内	不定形	×
161	図省略	ち－23	アゼ	ヒメジャコ	左	6.26	4.43	16.0	0.50	0.67	後上	内	不定形	×
162	図省略	ち－23	IV	ヒメジャコ	左	4.72	3.31	6.0	0.76	0.87	前中	内	不定形	×
163	図省略	ち－23	I	ヒメジャコ	左	7.94	5.52	29.0	1.27	1.91	前中	内	横楕円	×
164	図省略	ち－23	I	ヒメジャコ	右	10.04	☆6.71	☆74.0	1.41	2.20	前中	内	不定形	×

No.	挿図番号	グリッド	層	貝種	左右殻	殻長	殻高	重量	孔径 縦	孔径 横	孔の位置	穿孔	孔の形状	腹縁
165	図省略	ち--24	不明	ヒメジャコ	右	6.41	4.39	18.0	0.97	1.76	中上	内	横楕円	×
166	図省略	ち－24	Ⅳ	ヒメジャコ	左	7.51	4.95	36.0	1.34	1.09	前中	自然		×
167	図省略	ち－24	Ⅳ	ヒメジャコ	左	8.44	6.10	48.0	1.08	1.77	前上	内	横楕円	×
168	図省略	つ－22	Ⅰ	ヒメジャコ	右	6.19	4.15	17.0	1.05	1.08	前上	内	円	×
169	図省略	つ－26	Ⅳ	ヒメジャコ	右	7.10	4.28	16.0	1.20	2.17	中上	内	不定形	×
170	図省略	て--24	Ⅳ	ヒメジャコ	左	8.85	5.56	30.0	0.60	0.68	前中	内	円	×
171	図省略	不明	表採	ヒメジャコ	右	6.30	4.35	16.0	1.10	1.32	前上	内	円	×
172	図省略	不明	表採	ヒメジャコ	左	5.35	3.14	8.0	0.57	0.89	前上	内	円	×
173	図省略	不明	表採	ヒメジャコ	左	5.38	3.70	13.0	0.72	0.72	中中	内	円	×
174	図省略	さ－19	Ⅳ	ヒレジャコ	左	16.16	9.64	241.0	2.20	3.38	中中	内	不定形，複孔？	×
175	図省略	し－20	Ⅰ	ヒレジャコ	左	8.89	6.64	68.0	1.30	1.33	中中	内	円	×
176	図省略	し－21	不明	ヒレジャコ	左	10.79	7.40	78.0	1.59	2.49	前上	内	横楕円	×
177	図省略	し－21	Ⅳ	ヒレジャコ	右	7.16	4.48	20.0	0.90	1.43	前中	内	不定形	×
178	図省略	し－21	Ⅳ	ヒレジャコ	右	8.58	5.22	23.0	1.04	1.14	前中	内	円	×
179	図省略	た--25	Ⅳ	ヒレジャコ	右	6.85	4.52	18.0	0.91	1.15	中中	内	方形	打割？
180	図省略	つ－25	Ⅳ	ヒレジャコ	左	8.87	5.08	29.0	1.46	1.47	中中	内	不定形	×
181	図省略	こ－19	Ⅳ	メンガイ	左	4.50	4.63	8.0	1.28	1.50	中中	内	円	×
182	図省略	さ－19	Ⅳ	メンガイ	左	3.51	4.12	8.0	0.96	1.01	中上	内	円	×
183	図省略	し－19	Ⅳ	メンガイ	右	4.88	6.56	33.0	0.64	0.46	後中	内	円	×
184	図省略	し－23	Ⅳ	メンガイ	左	4.59	5.44	10.0	3.28	2.70	中中	内	縦楕円	×
185	図省略	そ－25	Ⅰ	メンガイ	左	7.30	7.84	35.0	1.89	2.01	中中	内	円	×
186	図省略	さ－19	不明	リュウキュウサルボウ	右	5.66	4.35	24.0	0.51	0.70	殻頂	内	横楕円	×
187	図省略	さ－19	不明	リュウキュウサルボウ	左	5.30	4.16	20.0	1.41	1.21	中中	内	不定形，複孔？	×
188	図省略	さ－19	Ⅳ	リュウキュウサルボウ	右	4.86	3.52	11.0	1.13	1.67	前上	内	縦楕円	×
189	図省略	さ－21	Ⅳ	リュウキュウサルボウ	左	6.21	4.45	27.0	1.92	2.86	中上	内	不定形	×
190	図省略	さ－22	不明	リュウキュウサルボウ	右	6.30	4.76	38.0	1.22	1.16	前上	内	円	×
191	図省略	さ--22	不明	リュウキュウサルボウ	左	6.48	4.89	31.0	2.86	3.30	中中	内	横楕円	×
192	図省略	し－19	Ⅰ	リュウキュウサルボウ	左	4.66	3.47	16.0	0.75	0.92	後上	内	円	×
193	図省略	し－19	Ⅰ	リュウキュウサルボウ	右	5.80	4.92	39.0	1.25	1.19	殻頂	内	円	打割？
194	図省略	し－19	Ⅰ	リュウキュウサルボウ	右	5.63	3.94	27.0	1.70	1.62	中上	内	円	×
195	図省略	し－20	Ⅰ	リュウキュウサルボウ	左	5.97	4.30	32.0	0.62	0.72	殻頂	内	円	×
196	図省略	し－20	Ⅳ	リュウキュウサルボウ	右	5.72	3.66	23.0	0.50	1.20	殻頂	内	横楕円	×
197	図省略	し－21	不明	リュウキュウサルボウ	右	4.35	3.42	10.0	0.98	0.92	中上	内	円	×

No.	挿図番号	グリッド	層	貝種	左右殻	殻長	殻高	重量	孔径 縦	孔径 横	孔の位置	穿孔	孔の形状	腹縁
198	図省略	し-21	IV	リュウキュウサルボウ	左	4.83	3.95	14.0	0.66	0.96	中上	内	縦楕円	×
199	図省略	し-21	IV	リュウキュウサルボウ	右	4.87	3.52	11.0	0.59	0.84	殻頂	内	不定形，複孔？	×
200	図省略	し-21	IV	リュウキュウサルボウ	左	5.36	3.59	17.0	0.58	0.53	殻頂	内	円	×
201	図省略	し-21	IV	リュウキュウサルボウ	右	6.62	4.52	38.0	1.63	1.43 1.16	殻頂～中央部	内	不定形，複孔？	×
202	図省略	し-23	IV	リュウキュウサルボウ	右	5.15	3.85	19.0	1.22	0.82	中上	内	縦楕円，複孔？	×
203	図省略	す-20	I	リュウキュウサルボウ	右	4.13	2.54	6.0	0.95	1.09	殻頂	内	縦楕円	×
204	図省略	す-21	I	リュウキュウサルボウ	左	5.83	3.69	22.0	1.35	2.14	殻頂	内	横楕円	×
205	図省略	す-21	I	リュウキュウサルボウ	左	☆5.05	4.27	☆25.0	1.12	0.97	殻頂	内	円	×
206	図省略	す-21	IV	リュウキュウサルボウ	左	6.82	3.84	27.0	1.34	2.30	殻頂	内	不定形，複孔？	×
207	図省略	す-22	不明	リュウキュウサルボウ	左	8.13	5.53	60.0	1.10	1.40	殻頂	内	不定形	×
208	図省略	す-23	IV	リュウキュウサルボウ	右	4.74	3.58	13.0	0.88	0.84	中上	内	円	×
209	図省略	せ-20	アゼ	リュウキュウサルボウ	左	4.88	3.91	35.0	0.97	1.50	中上	内	円	×
210	図省略	せ-20	IV	リュウキュウサルボウ	右	6.25	4.24	35.0	0.60	0.86	殻頂	内	横楕円	×
211	図省略	た-23	IV	リュウキュウサルボウ	右	6.00	4.02	27.0	0.77	1.25	殻頂	内	不定形	×
212	図省略	た-24	不明	リュウキュウサルボウ	右	7.09	4.41	38.0	1.18	1.18	殻頂	内	円	×
213	図省略	ち-23	IV	リュウキュウサルボウ	右	6.01	4.63	23.0	1.24	0.72	前中	内	不定形	×
214	図省略	つ-24	I	リュウキュウサルボウ	右	6.25	3.71	27.0	0.62	0.71	殻頂	内	円	×
215	図省略	つ-24	I	リュウキュウサルボウ	左	6.30	4.54	22.0	0.74	0.87	中上	内	円	×
216	図省略	つ-25	I	リュウキュウサルボウ	左	6.10	4.50	3.1	0.50	0.57	殻頂	内	円	×
217	図省略	つ-25	IV	リュウキュウサルボウ	右	4.14	3.51	90	0.80	0.82	中上	内	円	×
218	図省略	て-22	I	リュウキュウサルボウ	右	5.31	4.00	25.0	0.93	1.28	殻頂	内	横楕円	×
219	図省略	不明	表採	リュウキュウサルボウ	右	☆5.07	☆4.38	☆19.0	0.98	0.83	後上	内	縦楕円	×
220	図省略	て-22	I	リュウキュウサルガイ	右	4.16	4.46	11.0	1.17	0.94	前中	内	不定形	×
221	図省略	と-23	IV	リュウキュウサルガイ	左	3.85	4.40	8.0	0.64	0.71	中上	内	円	×
222	図省略	て-24	IV	リュウキュウマスオガイ	右	5.80	3.64	9.0	0.74	0.75	中中	内	円	×

注意　1　☆印は残存部計測値。

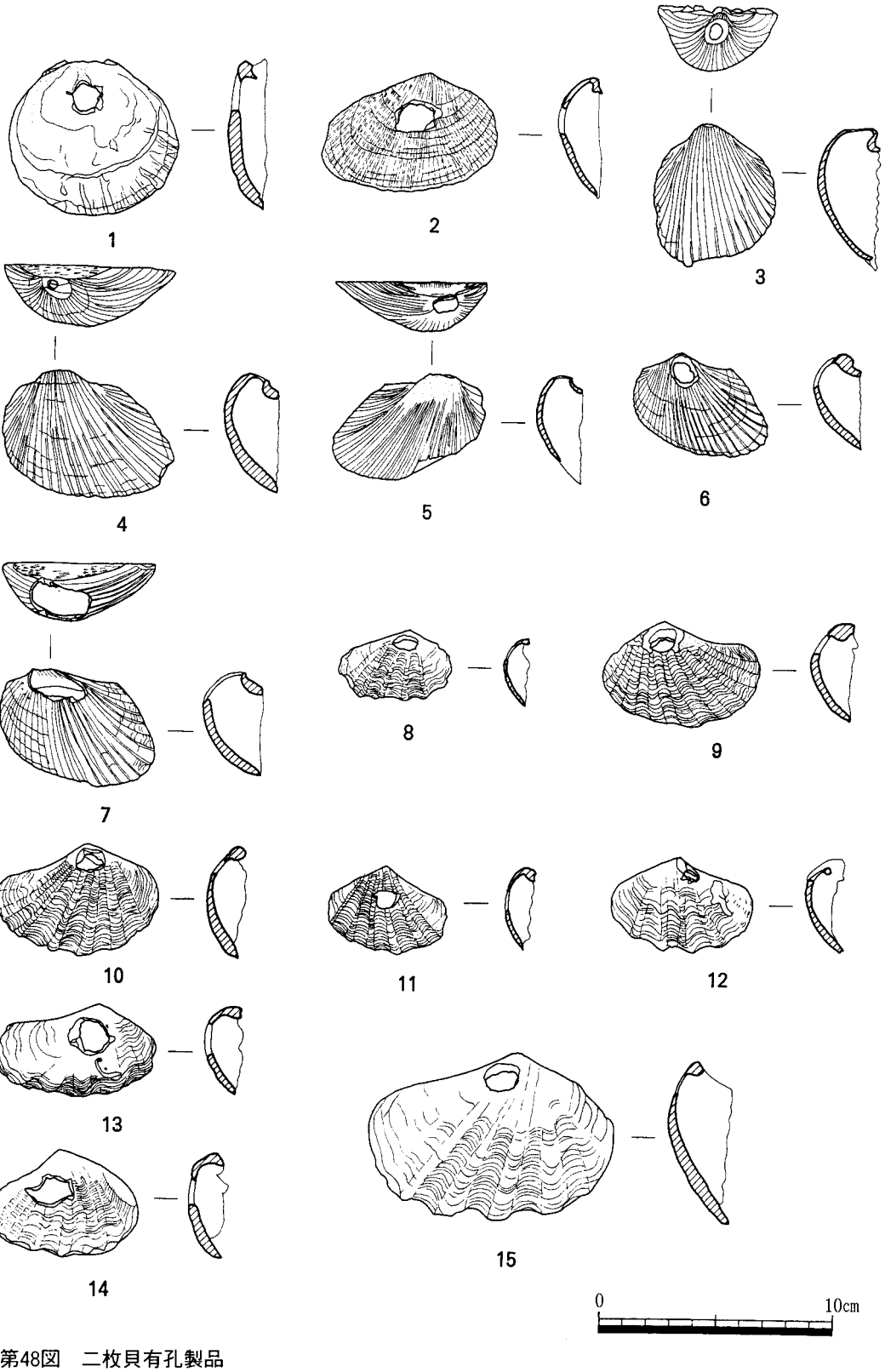
2　×加工無。

3　穿孔部は次のように記入。

前上→前背縁上部。前中→前背縁中央部。前下→前背縁下部。

中上→中央上部。中中→中央中央部。後上→後背縁上部。

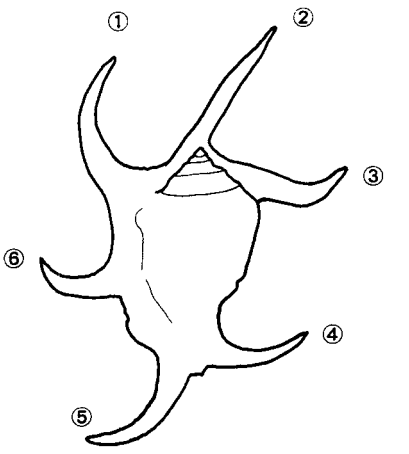
後中→後背縁中央部。殻頂→殻頂部。



第48図　二枚貝有孔製品

③スイジガイ製利器（第50・51図）

スイジガイ突起の先端に研磨を施し、附刃するものである。23点出土したうち、12点を図示した。尚、同利器については上原静氏の論文が著名であり（註１）、本貝塚出土資料も氏の分類基準にあてはまることから氏の分類方法や計測方法を使った。本貝塚出土のものはスイジガイの原形をほぼ残すもの（第50図１～３・５・６、第51図１～３）と、外唇のみを残すもの（第50図４）がある。附刃は１箇所のもの（第50図１～６、第51図１～３）と２箇所のもの（第51図４～６）とがあり、附刃される突起は上唇部に位置するもの（①番突起）が最も多く、次いで螺塔部直下から伸びているもの（②番突起）、外唇の中央に位置するもの（⑥番突起）とつづく。但し、後二者（②番突起・⑥番突起）に附刃するものの場合は、それぞれ前者（①番突起）と組み合わせた資料である。つまり、１個体で２本の突起に附刃されるものである。附刃が１箇所のものはいずれも①番突起である。



第49図　スイジガイ製利器模式

刃縁の平面形態は次の３種にわけられる。

イ.刃縁が直線的なもの（上原分類の平刃）21点

ロ.刃縁が丸みを帯びるもの（上原分類の丸刃）１点

ハ.突起部を両面から研磨したのち、更に螺塔側の側面からも研磨を加えて尖らしたもの。（上原分類のポイント）１点

刃縁と胴体部の位置関係をみると、前述のイ・ロはスイジガイを水平方向に置いた場合に、その外唇に対して刃縁が平行するもの（上原分類の横刃）である。

スイジガイ製利器は、前記した附刃のほかに体層部に孔を穿つ例が多い。孔の形状は円形（第51図２）・縦楕円（第50図２）・横楕円（第51図４）などがみられる。穿孔部位は背面（第50図１・２・５、第51図１・２・４）、腹面（第50図３・６）があり、背面穿孔のものが多い。背面穿孔の資料中には２箇所穿つもの（第50図２、第２・３・４）もある。

また、今回出土した資料23点の中には第51図２と４のように体層部中央が灰色に変色しているものもみられる。火熱によるものと思われる。

④ホラガイ有孔製品（第52図１～５）

ホラガイの腹面に孔を穿つものである。20点出土したうち、５点を図示した。

加工については前述の孔を施しただけのもの（４）や１のように穿孔と同時に殻口を広げ、さらに殻軸を除去したものがみられる。このタイプは小型のホラガイに限られる。

第6表　スイジガイ製利器観察表

No.	挿図番号	グリッド層	突起保存状況 ①	②	③	④	⑤	⑥	刃部形態 平面形	側面計	体部	孔の位置	孔の形状	孔径 縦	孔径 横	体部と刃縁の位置	各部の計測 a	b	c	d	e	重量
1	第50図1	そ-24IV	▲	×	×	×	△	△	平刃	両刃	有	A	不定形	1.83	1.64	横刃	1.26	5.20	9.10	5.70	☆13.13	500
2	第50図2	た-26IV	▲	×	×	×	△	△	平刃	両刃	有	A	円形	1.80	3.10	横刃	1.38	3.90	7.40	5.80	☆11.57	350
												A	不定形	2.84	4.27							
3	第50図3	た-25	▲	×	×	△	△	△	平刃	両刃	有	C	不定形	0.96	1.31	横刃	1.25	5.10	9.00	5.20	☆12.80	460
4	第50図4	た-24 アゼ	▲	×	×	×	△	△	平刃	片刃	無	−	−	−	−	横刃	1.10	7.30	☆5.50	3.70	☆11.60	300
5	第50図5	た-26	▲	×	×	×	△	△	平刃	両刃	有	A	不定形	4.26	3.47	横刃	0.98	5.40	8.70	4.90	☆11.92	370
6	第50図6	ち-25IV	▲	×	×	×	×	○	平刃	両刃	有	C	不定形	4.48	4.38	横刃	0.84	5.90	8.80	5.80	☆15.09	400
7	第51図1	そ-25IV	▲	×	×	×	△	△	丸刃	両刃	有	A	不定形	0.35	0.38	横刃	1.70	4.00	9.30	5.90	☆14.15	570
8	第51図2	こ-21	▲	×	×	△	△	×	平刃	両刃	有	A	不定形	2.03	2.24	横刃	1.12	3.90	☆7.80	☆4.00	☆10.09	300
												A	縦楕円	0.83	0.28							
9	第51図3	そ-25	▲	×	×	△	△	△	ポイント	ポイント	有	無孔	−	−	−	横刃	11.40	4.90	8.30	5.10	☆12.80	330
10	第51図4	た-24IV	▲	▲	×	○	×	○	平刃	両刃	有	A	不定形	0.50	0.55	横刃	0.75	5.80	7.90	5.30	☆14.77	430
									欠落の為不明			A	横楕円	11.40	4.74	不明						
11	第51図5	た-25IV	▲	▲	×	△	△	△	平刃	両刃	有	無孔	−	−	−	横刃	1.04	4.40	8.10	4.84	☆12.12	360
									欠落の為不明							不明						
12	第50図6	す-24	▲	×	×	×	△	▲	平刃	両刃	有	無孔	−	−	−	横刃	1.23	4.00	9.70	6.06	☆14.50	460
									欠落の為不明							不明						
13	図省略	し-20	×	△	△	×	×	△	不明	不明	−	−	−	−	−	−	−	−	8.40	−	☆11.80	200
14	図省略	ち-25IV	▲	×	×	×	△	○	平刃	両刃	有	C	不定形	3.80	5.32	横刃	1.45	5.00	9.10	5.90	☆14.97	560
15	図省略	こ-22	▲	×	×	△	△	△	平刃	両刃	有	C	横楕円	2.50	3.21	横刃	1.36	4.10	8.50	5.50	☆13.24	400
16	図省略	せ-24	▲	×	×	△	△	△	平刃	両刃	有	A	不定形	0.18	0.39	横刃	0.83	3.60	9.20	5.80	☆13.66	510
												A	不定形	0.30	0.58							
17	図省略	た-26IV	▲	×	×	△	△	○	平刃	両刃	有	A	不定形	1.59	0.75	横刃	0.99	5.45	8.90	5.62	☆14.28	570
												無孔	−	−	−							
18	図省略	そ-25	▲	×	△	△	△	△	平刃	両刃	有	C	円形	2.36	2.25	横刃	1.43	3.80	8.20	6.20	☆14.08	440
19	図省略	こ-22	▲	×	×	×	△	△	平刃	両刃	有	C	不定形	4.51	5.00	横刃	0.94	6.20	8.80	6.12	☆16.03	540
20	図省略	す-24	▲	×	×	×	△	△	平刃	両刃	有	A	不定形	5.09	4.70	横刃	1.38	5.10	9.10	5.60	☆13.50	410
21	図省略	こ-22	▲	×	×	×	△	△	平刃	両刃	有	無孔	−	−	−	横刃	0.67	5.30	8.20	5.40	☆14.47	400
22	図省略	そ-24	▲	×	×	△	△	△	平刃？	両刃	有	A	不定形	3.68	3.46	横刃	1.06	☆4.40	8.80	5.60	☆12.88	390
23	図省略	た-25IV	▲	△	△	△	△	△	平刃	両刃	有	無孔	−	−	−	横刃	0.93	4.50	8.50	5.70	☆14.25	450

注意

1　上原　静氏の分類法に従った。

2　☆は残存部計測値。

3　▲附刃突起，○完全保存突起，△半欠突起，×全欠突起（1㎝前後残すものは含めた）。

4　A：背面，B：側面，C：腹面。

他には２、３、５のように螺塔部先端付近に研磨を施すものもみられる。２、３は５より研磨が徹底している。第７表に計測値を示した。

⑤ホラガイ製容器（第52図６）

ホラガイの殻底や殻軸を除去したもので、全形は円錐状を呈する。容器として利用したものと考えられる。殻底の切断面は丁寧な研磨によって平坦につくられる。螺塔の先端は平坦に近くなるほど摩滅している。高さ18.1cm、最大幅11.9cm、重量384g。容量は450ℓである。そー24グリッド第Ⅳ層出土。

⑥杓子状製品（第59図１）

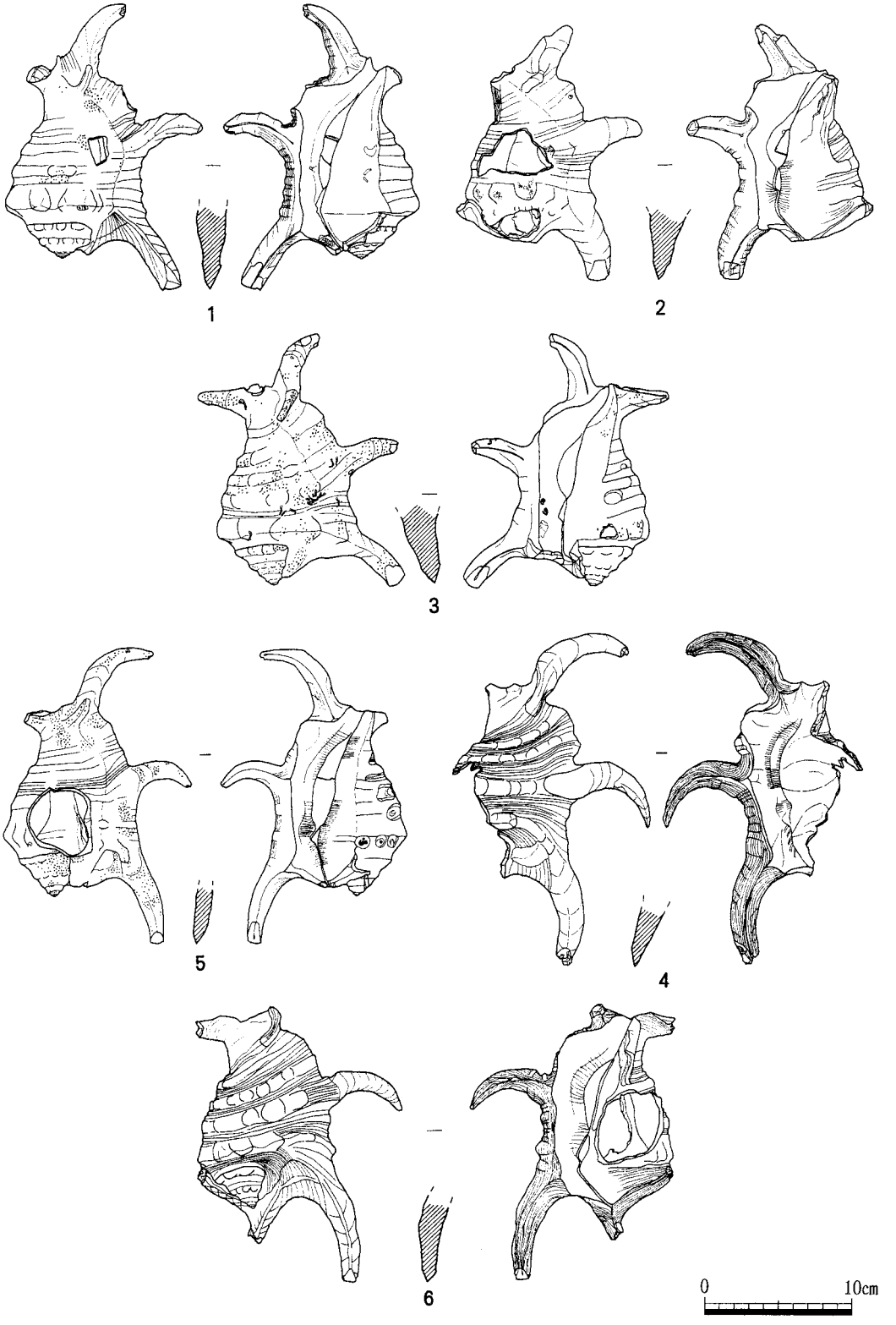
ヤコウガイの体層部を杓子状に加工するものである。残存資料からすると柄がつくられていたと推察され、同破損部には小孔が認められる。縁辺の一部に研磨痕がみられ、浅い抉りが左右に１箇所づつみられる。現存する長さは11.5cm、最大幅7.3cm、最大厚0.4cm、重量97g。ちー18グリッド第Ⅳ層出土。

第７表　ホラガイ有孔製品観察表

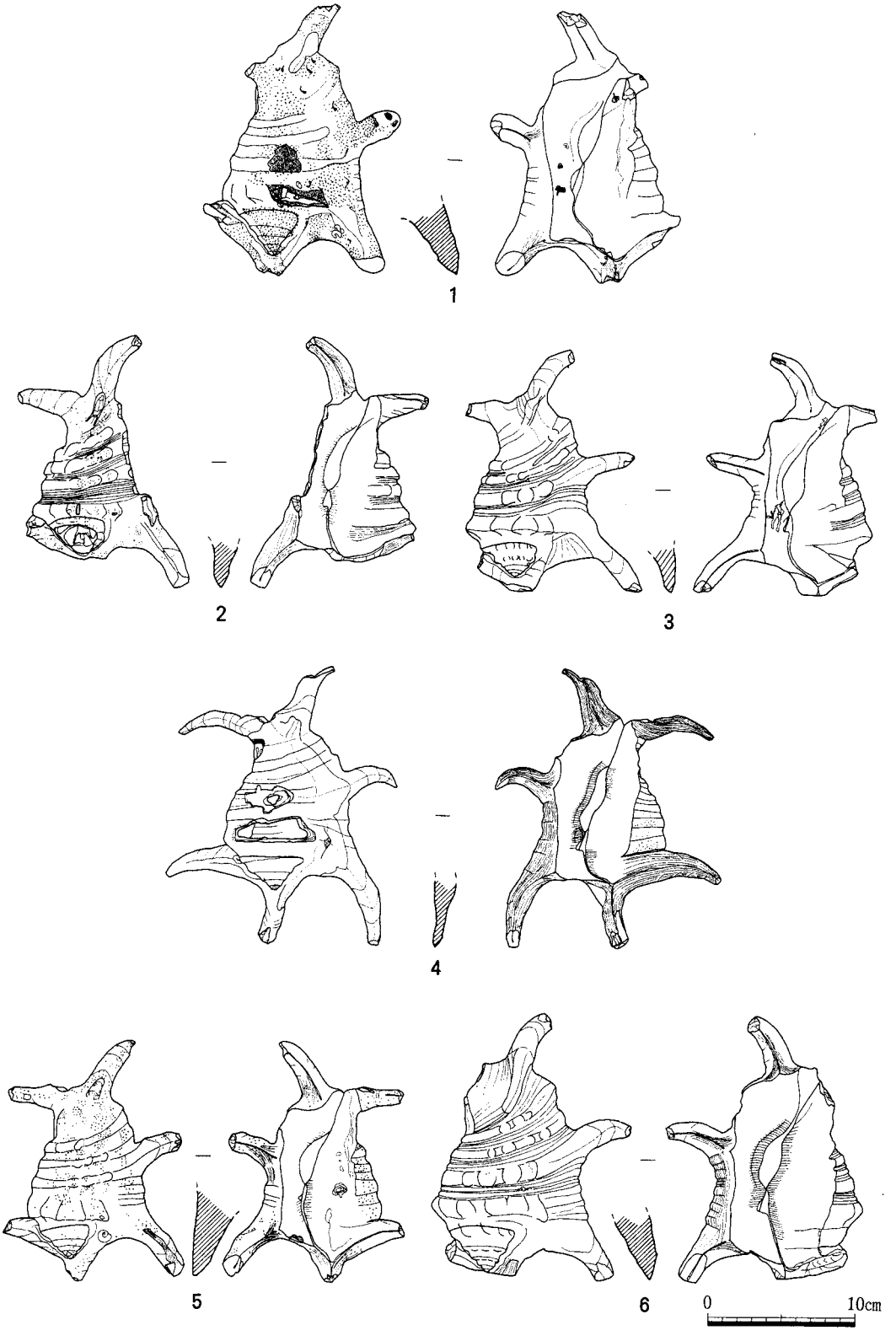
単位　cm／g

No.	挿図番号	グリッド層	殻高	殻径	孔径 縦	孔径 横	孔の形	重量
1	第52図１	そ－25	☆15.30	7.60	－	－	－	160
2	第52図２	つ－25	☆24.54	6.70	0.40	0.35	不定形	170
3	第52図３	つ－25Ⅳ	26.56	9.80	2.67	2.88	横楕円	700
4	第52図４	す－23	24.65	12.00	2.79	1.82	不定形	490
					2.44	3.77	横楕円	
5	第52図５	し－21	☆31.00	14.20	7.40	9.40	横楕円	486
					0.45	0.20	縦楕円	
6	図省略	そ－25Ⅳ	19.65	6.02	2.53	2.98	不定形	100
7	図省略	せ－25Ⅳ	14.48	4.70	1.28	1.30	円　形	50
8	図省略	ち－24アゼ	☆26.38	10.60	6.14	6.64	不定形	710
					1.18	1.14	円　形	
					0.46	2.85	不定形	
					0.26	0.91	不定形	
9	図省略	つ－25Ⅳ	☆16.04	6.90	2.19	2.17	円　形	130
10	図省略	つ－25Ⅳ	☆13.20	5.19	2.55	2.37	縦楕円	90
11	図省略	た－24	26.86	10.60	2.33	2.60	不定形	500
					0.49	1.14	不定形	
					0.49	0.66	不定形	
12	図省略	し－23	19.08	6.55	2.27	2.68	横楕円	200
13	図省略	不　明	12.09	4.15	0.66	0.95	横楕円	50
					0.16	0.21	不定形	
14	図省略	ち－24	☆39.17	9.70	2.43	2.72	横楕円	540
					3.24	4.55	不定形	
15	図省略	た－24Ⅳ	☆20.92	6.72	6.95	6.90	縦楕円	120
					2.29	2.50	不定形	
					2.57	2.75	円　形	
16	図省略	し－19Ⅳ	16.86	5.35	1.10	1.05	円　形	60
17	図省略	そ－23	☆29.63	10.30	－	－	－	550
18	図省略	そ－24	27.17	8.86	0.14	0.15	不定形	230
					0.30	0.83	横楕円	
					0.25	0.47	不定形	
					0.35	0.40	円　形	
19	図省略	せ－24Ⅳ	☆21.09	7.60	2.79	1.82	不定形	130
					9.50	6.71	不定形	
					0.93	0.64	不定形	
					1.73	2.20	横楕円	
20	図省略	せ－22	☆15.36	☆13.08	3.07	2.41	円　形	140
					0.50	0.45	縦楕円	
					0.26	0.20	縦楕円	
					2.19	2.09	縦楕円	

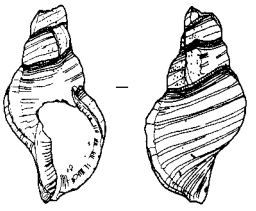
☆は残存部の計測値



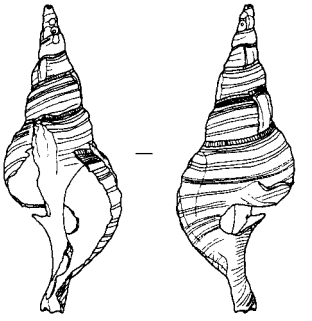
第50図　スイジガイ製利器１



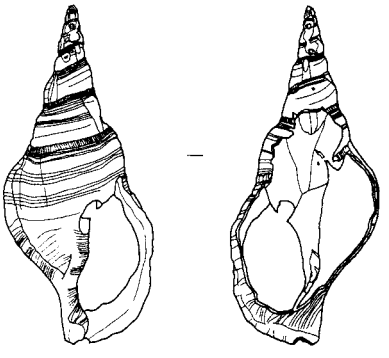
第51図　スイジガイ製利器 2



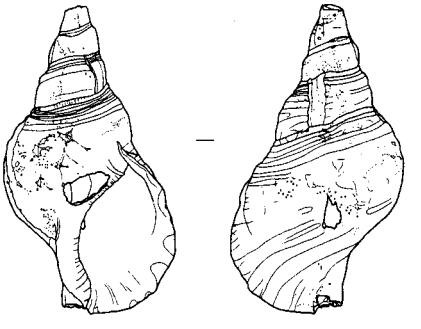
1



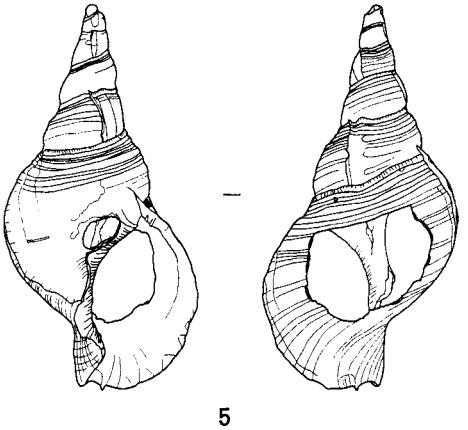
2



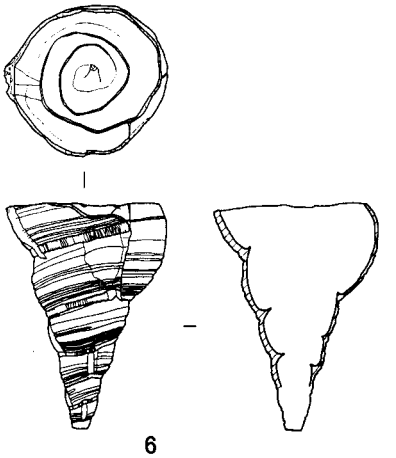
3



4



5



6

0 10cm

第52図　ホラガイ有孔製品

装飾品

①貝輪（第53図～第55図）

貝輪は23点出土しており、利用された貝種はオオツタノハ、オオベッコウカサガイ、メンガイの一種、サラサバテイ、シラナミ、イモガイ、ゴホウラ、アツソデガイの８種である。中でもイモガイとゴホウラは製作過程の一環が窺える資料が出土している。以下、貝種別に略述する。

ａ.オオツタノハ製貝輪（第53図１～３）

殻頂を除去し、殻の周縁部を貝輪として利用するものである。３点出土している。２・３は表面や加工部縁辺に研磨がみられるもので、３は２よりも研磨が丁寧である。１のように研磨調整がみられないものもある。１は最大長8.6cm、最大幅6.4cm、孔径3.0×2.1cm、重量35.0g。たー24グリッド第Ⅳ層出土。２は最大長8.8cm、最大幅6.7cm、孔径6.2×4.5cm、重量27g。せー20グリッド第Ⅰ層出土。３は最大長9.6cm、最大幅7.0cm、孔径5.4×3.7cm、重量36g。すー20グリッド出土。

ｂ．オオベッコウカサガイ製貝輪（第53図４）

前述のオオツタノハと同様、殻の周縁部を利用するものである。研磨はみられない。最大長7.1cm、最大幅5.9cm、孔径4.9×3.8cm、重量14g。さー19グリッド出土。

ｃ．メンガイ製貝輪（第53図５）

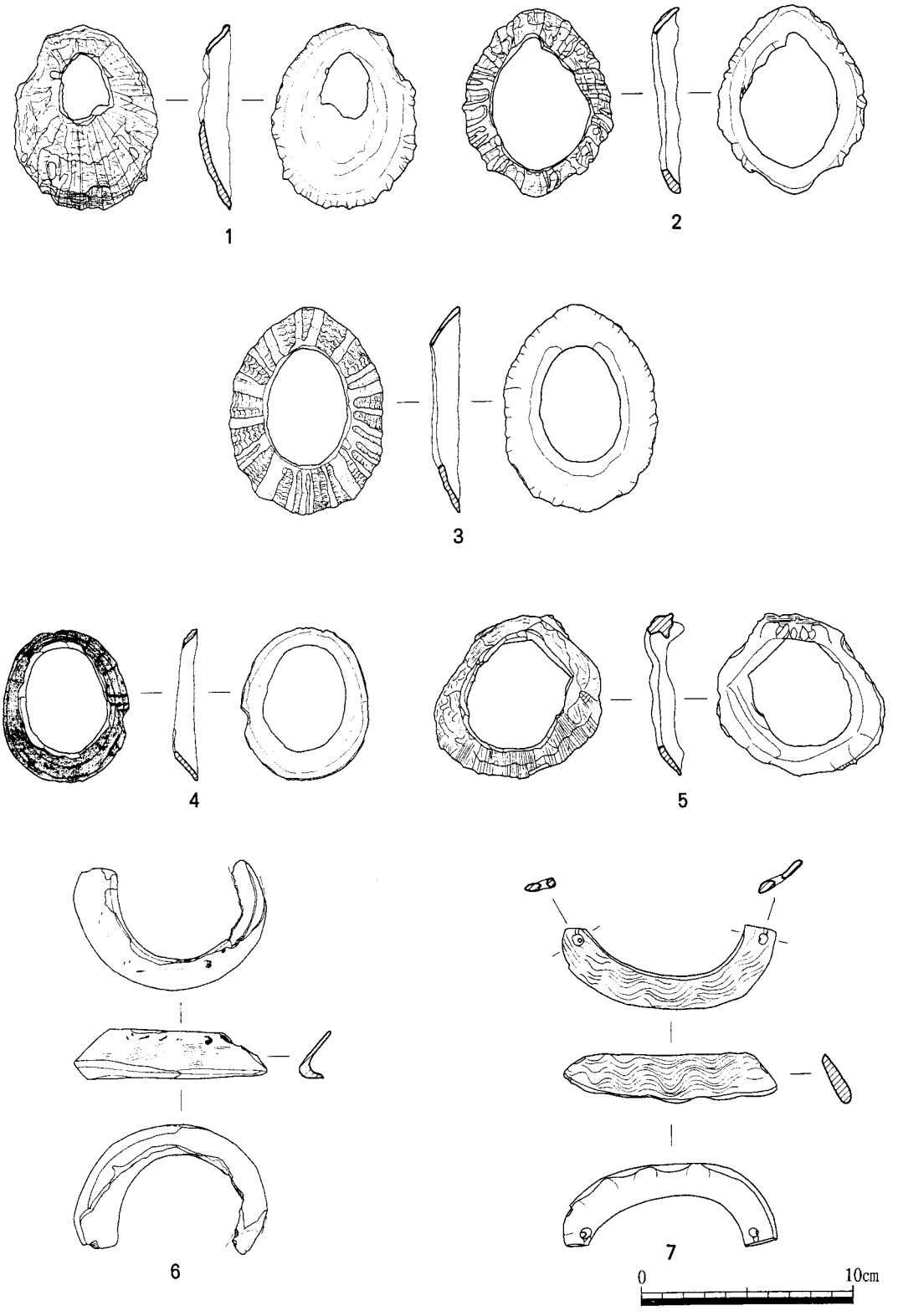
殻の中央部分をほぼ円形に打ち欠き、周縁部を利用するものである。加工部には、研磨等の調整はみられない。最大長、最大幅とも7.6cm、孔径5.5×4.9cm、重量37g。たー25グリッド出土。

ｄ．サラサバテイ製貝輪（第53図６）

殻底を利用したもので、全面に研磨が施される。底面の加工部縁辺には打割による調整がみられる。半欠品。最大長8.4cm、最大幅2.2cm、重量35.5g。しー21グリッド第Ⅳ層出土。

ｅ．シラナミ製貝輪（第53図７）

シラナミの腹縁を利用したものである。全面に丁寧な研磨調整を施しており、特に表面は鱗片がなくなるほど丁寧で光沢を帯びる。両端部には孔がそれぞれ１箇所穿たれており、いずれにも紐ズレ痕がみられることから連結式の貝輪が想定される。最大長9.5cm、最大幅2.1cm、孔径は左側の外径0.5×0.6cm、内径0.2×0.3cm、右側の外径0.7×0.6cm、内径0.3cm、たー26グリッド第Ⅳ層出土。沖縄市仲宗根貝塚（註２）に類例資料がある。



第53図　貝輪（オオツタノハ1～3、オオベッコウカサガイ4、メンガイ5、サラサバティ6、シラナミ7）

f．イモガイ製貝輪（第54図１～５）

体層上部を横位に切断し、螺塔部付近を貝輪として加工したものである。５点出土している。第８表に計測値を示した。

１は体層上部を利用するもので、後述の２・３と異なり、螺塔部も切除される資料である。幅約1.2cmの細い資料である。研磨は丁寧で、ほぼ全面に施されるが、滑層付近には行き届かず、貝本来の斑点模様が残る。切断面のうち、一面は研磨によって角がとれ、丸みを帯びるが、他方は平坦のままで角が残る。半欠品である。

２・３は螺塔部を取り込んでつくられたもので、２は2.4cm、３は2.7cmと１より幅が太い資料である。いずれも破損資料である。

２の表面には径0.2cmの未貫通の穴が多数施され、現存部には20個認められる。破損部には貫通孔が１個みられることから連結式の貝輪が想定される。穿孔は両面から行われている。表面の中央には横位にミゾが走っている。

３は研磨調整のみで他に加工が認められないものである。左側面にも研磨が施されていることから貝輪の端部とおもわれる。上面には貝の模様が若干残っている。

４・５とも製作途中とおもわれる資料である。４は切断面から外唇にかけて丁寧に研磨調整が行われている。螺塔は除去されるが、同部の調整が徹底していないことから完形品ではなく、むしろ製作途中の資料とおもわれる。

５は螺塔の中心が除去されているだけで、４のような研磨調整は認められない。全体的に風化している。

第８表　イモガイ製貝輪観察表　　単位　cm／g

No.	挿図番号	グリッド	層	残存状況	長	幅	最大厚	重量
1	第54図１	せ－20	Ⅳ	半　円	6.40	1.20	0.50	15.50
2	第54図２	さ－19	Ⅳ	破　損	－	2.40	0.60	6.00
3	第54図３	し－19	不明	破　損	－	2.70	0.80	9.00
4	第54図４	せ－24	不明	完　形	7.30	2.50	1.30	81.00
5	第54図５	し－24	不明	完　形	2.10	1.70	1.90	54.00

g．イモガイの切断資料（第54図６～８）

大型イモガイの螺塔部が切り離され、体層部のみが残る資料である。螺塔部を貝輪に利用するために切り離されたものとおもわれる。切断は体層上部で行われ、同部には、擦り切り痕が無数にみられる。６点出土しているが、今回は３点図示した。

６は殻底が敲打によって潰れ、ほぼ平坦になっている。敲高（殻軸頂上まで）9.7cm、殻径5.3cm、重量160g。そ－24グリッド出土。

７は殻高8.3cm、殻径5.3cm、重量118g。ち－26グリッド出土。

８は殻高（殻軸頂上まで）9.2cm、殻径5.1cm、重量123g。た－24グリッド第Ⅳ層出土。

h．ソデガイ科貝輪・貝輪未製品

ソデガイ科の貝の背面や腹面を利用するものである。貝輪として完成されたもののほかに背面あるいは腹面に孔が穿たれたものなどが出土している。後二者は図示した11点中９点が集積遺構から出土している。

①．ゴホウラ製貝輪・アツソデガイ製貝輪（第55図）

12点出土したが、完形品はみられない。６以外は全面に研磨調整を施すものである。第９表に計測値を示した。

１～３は残存状況から背面の外唇部や螺塔部を取り込んで貝輪を製作していたことが想定される。

４は背面の螺塔、５は前溝付近を利用したとおもわれる資料である。

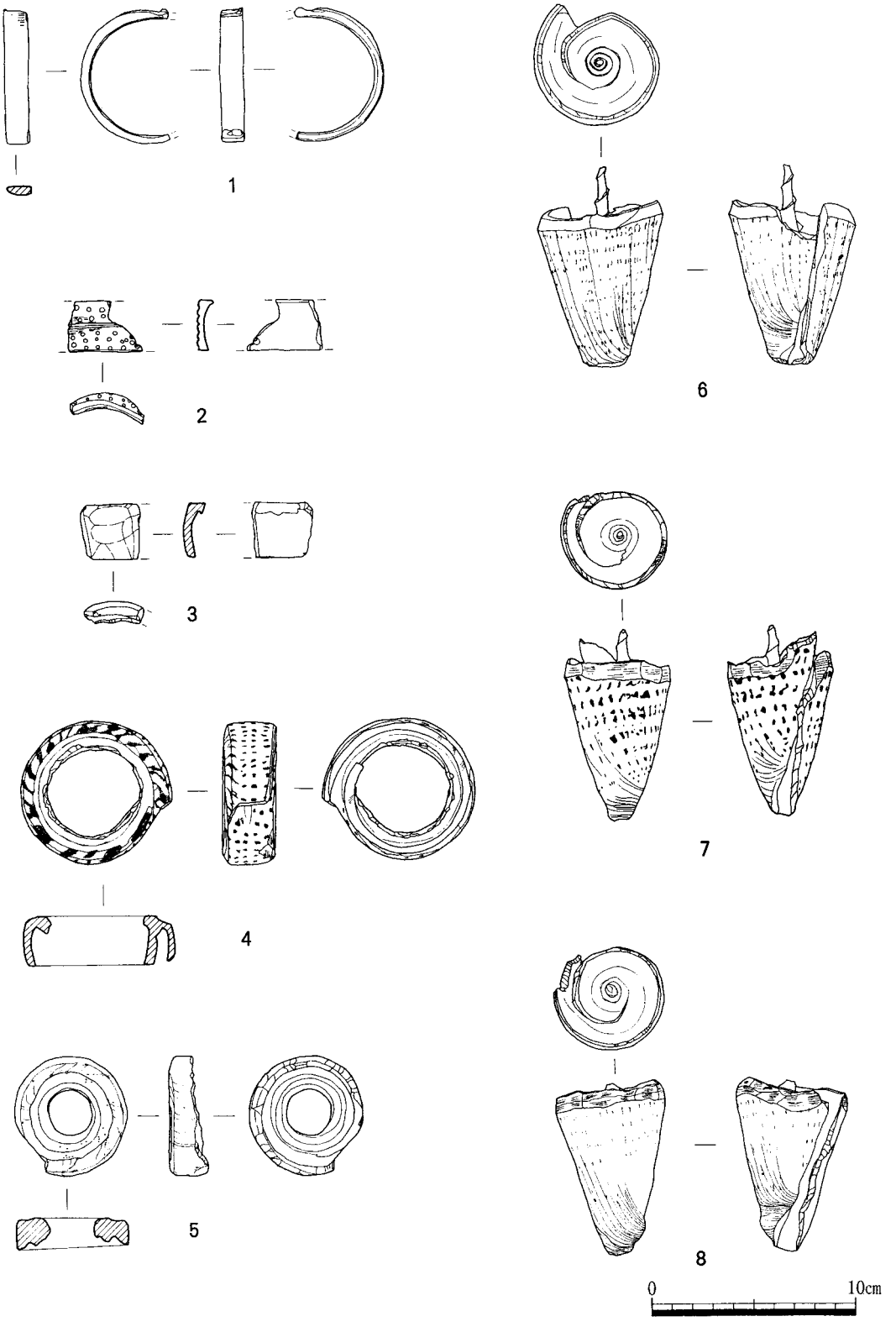
６・７はおそらく背面を利用した資料とおもわれるが、部位は不明である。

８は螺塔を取り込んでいるものであるが、背面を利用するものなのか腹面を利用するものなのか判別が困難な資料である。

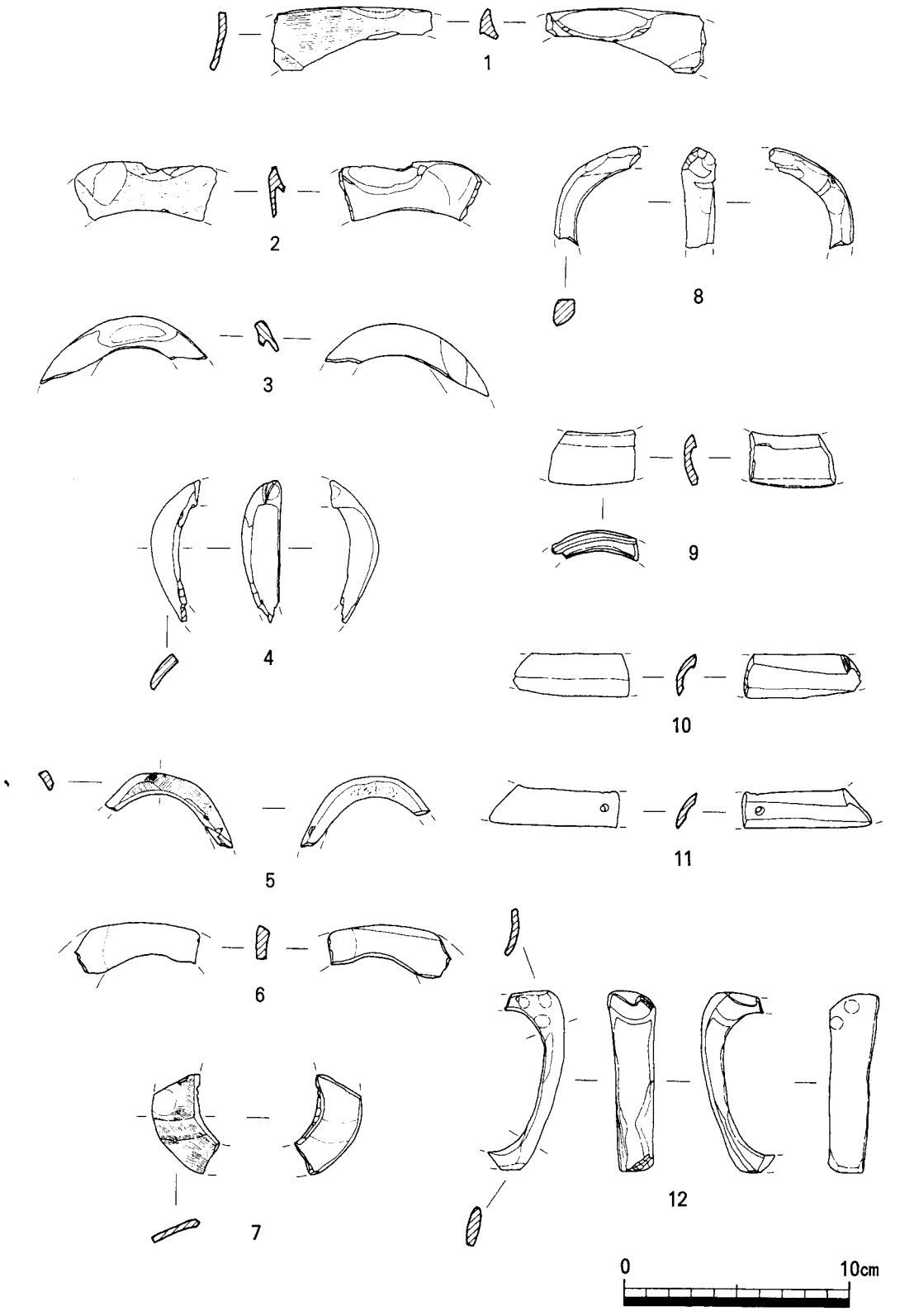
９～11は螺塔部を横位に切断しており、他の資料と製作方法が異なる。これらも背面の螺塔を利用したものなのか腹面の螺塔を利用したものなのか判別が困難な資料である。11は資料端部に穿たれているものもみられることから連結式の貝輪が想定される。12は腹面を利用するもので、螺塔部を取り込んで貝輪を製作した資料とおもわれる。

第９表　ゴホウラ製貝輪観察表　　単位　cm／g

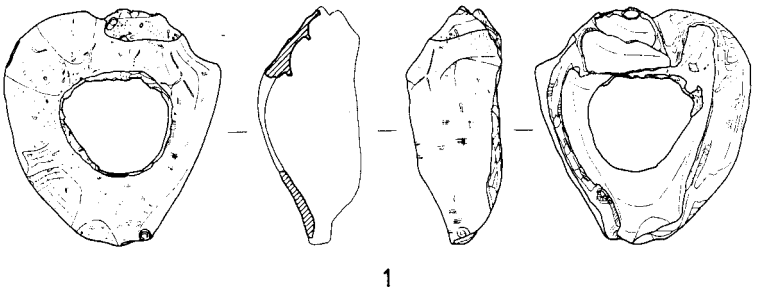
No.	挿図番号	グリッド	層	最大長	最大幅	最大厚	重　量
1	第55図１	ち－24	Ⅳ	☆2.60	☆6.90	0.82	14.0
2	第55図２	つ－22	不明	☆2.11	☆5.50	0.70	10.0
3	第55図３	さ－19	Ⅳ	☆16.0	☆6.30	0.73	10.0
4	第55図４	ち－24	Ⅳ	☆6.20	☆1.10	0.80	11.0
5	第55図５	す－22	不明	☆4.63	☆3.56	0.49	7.0
6	第55図６	ち－23	不明	☆2.00	☆5.30	0.60	9.0
7	第55図７	つ－25	Ⅳ	☆3.81	☆1.40	0.46	5.0
8	第55図８	こ－20	不明	☆4.30	☆1.50	0.71	13.0
9	第55図９	せ－24	不明	☆2.31	☆3.60	0.62	8.0
10	第55図10	た－24	Ⅳ	☆2.00	☆4.90	0.46	7.0
11	第55図11	せ－24	Ⅳ	☆1.80	☆5.70	0.32	7.0
12	第55図12	た－24	不明	7.90	☆2.50	1.11	16.0

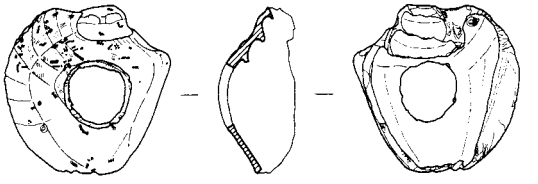


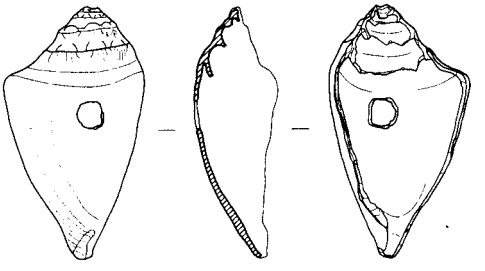
第54図　イモガイ製貝輪（1～5）、イモガイ切断資料（6～8）

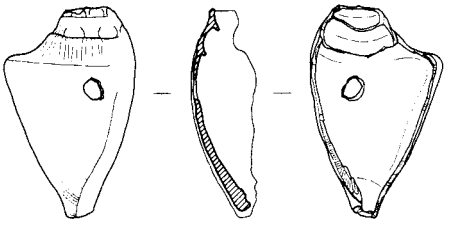


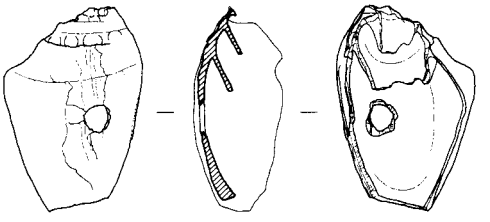
第55図　ゴホウラ製貝輪

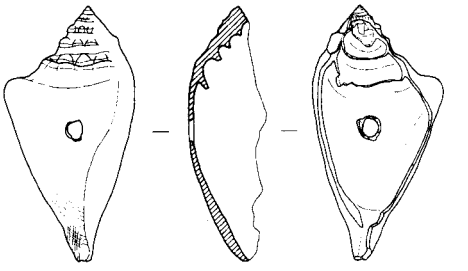


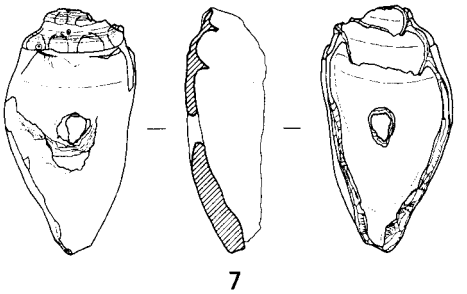


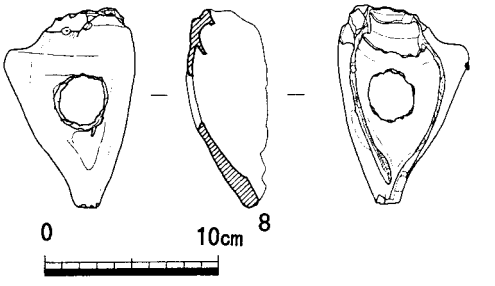












第56図　ソデガイ科貝輪未製品１

②．ソデガイ科製貝輪未製品（第56図・第57図）

第56図１・２は背面を利用するものである。いずれも表面に研磨調整が行われていることから貝輪の製作途中であるとおもわれる。

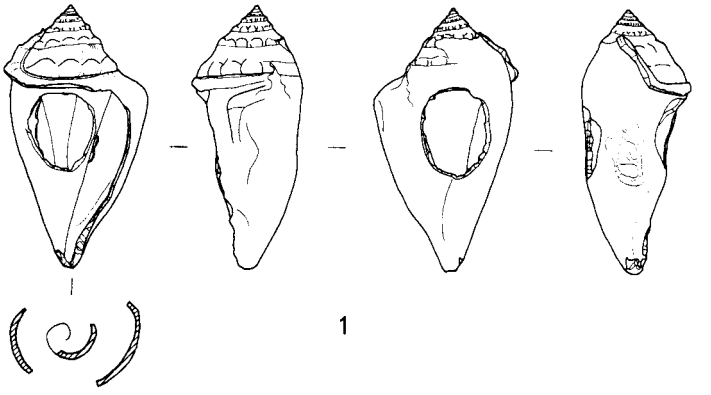
同図３～８と第57図１～３は集積遺構から出土した資料である。３～８は腹面資料で、孔が穿たれるものである。３～７は１cm前後の孔であるが、８は3.1×2.9cmと前者より大きく、数回にわたって穿孔していることから貝輪を意図した孔とおもわれる。

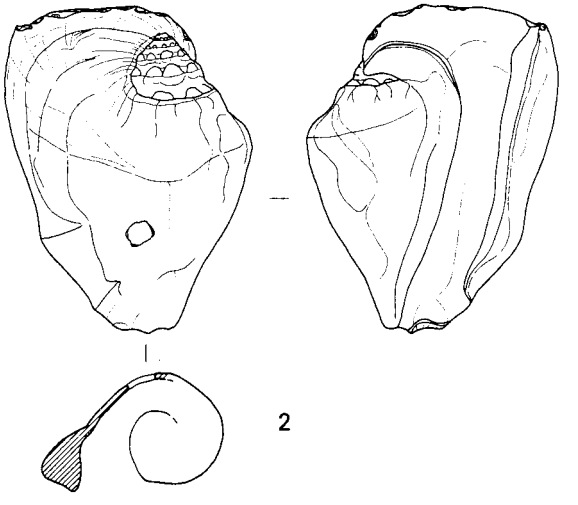
第57図１は外唇が除去され、殻軸を残すものである。孔は背・腹の両面に穿たれており、腹面の孔は貝輪を意図したもので背面の孔は殻軸を除去するための一環とおもわれる。

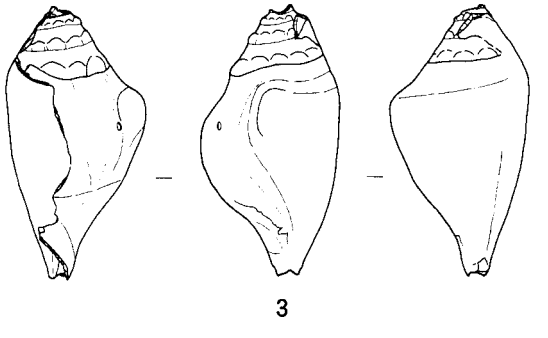
同図２は前溝付近に穿孔するもので、他に加工は認められない。同図３は外唇が除去されているものである。他の資料とは孔がみられない点が異なる。前述のように集積遺構からの出土であることから貝輪の素材を意図したものとおもわれる。

第10表　ソデガイ科貝輪未製品　　単位　cm／g

No.	挿図番号	グリッド	層	貝　種	最大長	最大幅	最大厚	孔　径		重量
								縦	横	
1	第56図１	せ－25	不明	ゴホウラ	13.10	11.90	1.40	6.00	6.40	299
2	第56図２	つ－26	不明	ゴホウラ	9.40	9.10	0.60	3.80	3.60	111
3	第56図３	さ－23	不明	ゴホウラ	14.30	8.00	0.50	1.60	1.50	96
4	第56図４	た－26	不明	ゴホウラ	11.90	7.30	0.60	1.30	1.10	80
5	第56図５	た－26	Ⅳ	ゴホウラ	10.90	7.60	0.60	1.60	1.50	117
6	第56図６	し－23	不明	ゴホウラ	14.40	7.00	0.70	1.20	1.00	109
7	第56図７	し－23	不明	ラクダガイ	13.90	7.30	1.00	1.60	1.20	252
8	第56図８	た－25	Ⅳ	ゴホウラ	11.20	7.40	1.20	3.10	2.90	145
9	第57図１	た－25	Ⅳ	ゴホウラ	14.90	7.80	－	4.40 5.20	3.80 4.00	226
10	第57図２	そ－25	不明	ゴホウラ	17.90	13.50	－	1.30	1.60	997
11	第57図３	そ－24	不明	ゴホウラ	15.30	7.90	－	－	－	275







第57図　ソデガイ科貝輪未製品 2

ｉイモガイ製品（第59図２～５）

イモガイの螺塔部を円盤状に加工するものである。２～４は研磨調整によって薄く平坦に仕上げられている。４はビードとおもわれる。５は研磨などの加工はみられないが、側面に斜位の傷がみられることから製品の製作途中のものとおもわれる。

図示した他にも、螺塔部に孔を有するものなどが出土しているが、これらは研磨等の加工が特に認められず、今回は観察表に計測値のみをしめし、図示を省略した。

第11表　イモガイ製品・イモガイ製ビード　　単位　cm／g

No.	挿図番号	グリッド	層	外径		最大厚	孔径		重量	備考
				縦	横		縦	横		
1	第59図２	す－20	不明	3.70	☆1.8	0.30	－	－	☆4.0	
2	第59図３	せ－23	不明	3.80	☆1.7	0.50	－	－	☆5.0	
3	第59図４	し－20	ミゾ	1.00	1.20	0.30	－	－	0.80	ビード
4	第59図５	た－26	不明	6.70	6.20	3.60	－	－	41.00	
5	図省略	そ－26	Ⅳ	4.00	4.30	0.70	0.10	0.10	18.00	ビード？
6	図省略	た－26	不明	3.80	4.10	0.70	0.10	0.10	13.00	ビード？
7	図省略	し－21	Ⅳ	2.40	2.50	0.30	0.40	0.40	4.00	ビード？
8	図省略	せ－24	不明	2.10	2.60	0.30	0.20	0.30	4.00	ビード？
9	図省略	た－26	不明	1.20	2.00	0.40	0.30	0.30	1.00	ビード？
10	図省略	つ－27	不明	2.60	3.00	0.30	0.30	0.30	4.00	ビード？
11	図省略	不　明	不明	2.80	3.20	0.40	0.40	0.40	10.00	ビード？
12	図省略	せ－25	不明	3.00	3.00	0.60	－	－	10.00	
13	図省略	た－26	不明	3.60	2.90	0.50	－	－	9.00	
14	図省略	た－26	不明	3.50	☆2.3	0.40	0.70	－	3.00	
15	図省略	た－26	不明	3.30	3.80	0.50	－	－	8.00	
16	図省略	ち－25	Ⅳ	2.60	2.80	0.30	－	－	6.00	

j イモガイ製指輪（第59図６・７）

２点出土している。いずれも小型イモガイを利用している。６は螺塔部を指輪状に加工するものである。全面に研磨を施すものの、場所によっては研磨が徹底せず、資料の幅が均一でないことから未製品とおもわれる。外径2.0×1.9cm、孔径1.2×1.1cm、最大厚0.6cm、重量2.0g。そー26グリッド出土。７は体層上部を利用するものである。半欠品であるが、残存資料からすると均一のとれた円形を呈していたものと推察され、仕上げも丁寧である。最大長2.4cm、最大幅0.6 、最大厚0.35cm、重量1.0g。そー25グリッド出土。

k サツマビナ製品（第59図８～10）

８と９は殻頂部に孔を施したものである。８は孔の周辺に研磨が加えられ、平坦となる。９は研磨などの調整はみられず、粗孔である。10は殻底に研磨を施すもので、研磨面には明瞭な擦痕がみられる。半欠品。８は殻高3.6cm、殻径2.1cm、重量13g。たー24グリッド出土。９は殻高3.4cm、殻径1.8cm、重量7.0g。たー24グリッド出土。10は現存長2.7cm、現存幅0.6cm、重量0.3g。出土グリッドは不明である。

l サラサバティ有孔製品（第59図11）

サラサバティの殻底を利用するもので、ほぼ円形状を呈する。殻底には0.3×0.45cmの孔が穿たれる。殻口は破損し、周辺部や殻底は真珠層が露出している。製作途中の資料であろう。外径6.0×3.5cm、最大厚1.3cm、重量27.0g。しー21グリッド出土。尚、久米島大原貝塚でも類似資料がみられ、サラサバティ製半円状貝輪の未製品として紹介されている（註３）。

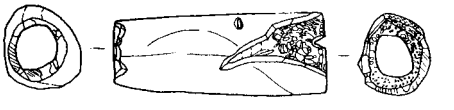
註　１.上原　静「いわゆる南島出土の貝製利器について」（特にスイジガイ製利器とホラガイ製利器について）『南島考古ＮＯ.７』1981年12月

２.沖縄県教育委員会「仲宗根貝塚」第一次・第二次発掘調査概報『沖縄県文化財調査報告書第33集』1980年３月

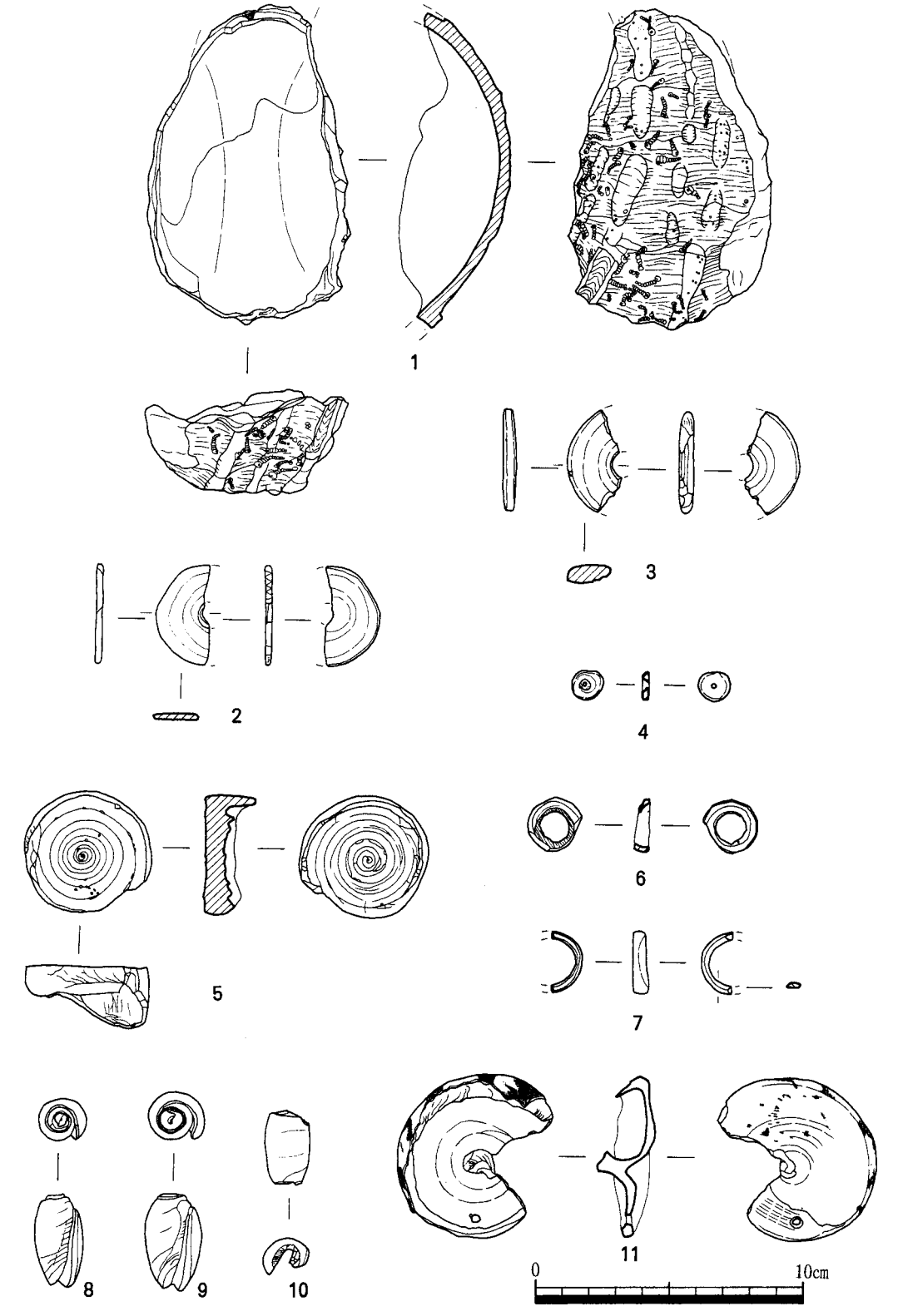
３.沖縄県教育委員会「大原」ー久米島大原貝塚群発掘調査報告書ー『沖縄県文化財調査報告書第32集』1980年３月

4　骨製品

動物の四肢骨を利用するもので、管状を呈する製品である。両端は切断面で、同部は研磨が施される。一方の切断面には抉りが２箇所みられる。動物の種類、部位、用途ともに不明である。高さ4.9cm、最大幅1.9cm、重量5.0g。せー20グリッド第Ⅳ層出土。



第58図　骨製品



第59図　ヤコウガイ製杓子状製品(1)、イモガイ製品（2～5)、イモガイ製指輪（6･7)、
サツマビナ製品（8～10)、サラサバティ有孔製品(11)

5　陶磁器

本地区（Ｂ区）においても前に報告したＡ区（註１）と同様大量の陶磁器類が出土している。破片総数4522点。内訳をみると沖縄産陶器が4129点（91.3％）で圧倒的に多く、次に中国産磁器の250点（5.5％）、日本産磁器143点（3.2％）と続く。こうした数量的な割合はＡ区の場合とほとんど同じ傾向を示している。

陶磁器の出土は調査地区のほぼ全体にわたってみられたが、大部分が後世の攪乱を受けた地層から検出されたもので、Ａ区と同じように遺構に伴う例はほとんどなかった。したがって、ここでは出土した陶磁器の種類、器種器形等を概観することにする。

(1)磁　器

総数393点の出土。産地別にみると中国産と日本産に大別される。中国産はほとんどが清代に属するもので、他に明代に含め得るものが数点出土している。日本産については近代所産の磁器が圧倒的に多く、他に肥前あるいは肥前系とみられる幕末以前の資料がわずかながら含まれている。これらの磁器は遺跡の存続期間を窺い知る上で有力な資料とみなされる。年代のわかる資料からすると古いものでは15世紀後半～16世紀前半の明染付、新しいものでは日本産近代磁器や、20世紀所産とみられる中国染付などがある。出土量を年代別にみると中国産磁器は18世紀～19世紀のものが他を圧倒しており、日本産磁器は前記のように近代（19世紀中～20世紀中）磁器が支配的である。したがって、本遺跡出土の磁器は18世紀～20世紀中のものが中心に出土していることが言える。以下、中国産、日本産の順に種類別に略述するが、実測図は良好な資料のみ掲載した。なお、個々の所属年代については鑑定済みのもののみ記した。

中国産磁器

①青磁

碗を主体（45点）に、盤（２点）、壺（１点）など総数48点の出土をみた。

第60図１は碗の口縁部資料で、直口を示す。内外面に線彫り文様が認められ、外面は雷文とみられるが、内面については不明。

２は無文碗の口縁部資料で、上端部は外反する。

３は盤の口縁部資料で、端部は上方につまみ上げたように微弱に突出する。

４は碗の底部資料で、内外面に片切彫りの文様が施されているが、文様種は不明。釉薬は厚く、外底は釉剥ぎが行われる。

②白磁

碗（16点）、小碗（30点）、小杯（２点）、器種不明（１点）の計49点が出土した。

第60図５は碗の腰部とみられるものである。釉薬は灰白色を発し、外面は途中以下を露胎とする。見込には印花文がみられるが、構図ははっきりしない。

6は高台脇からの立ち上がりがかなり開く底部資料で、碗または皿が考えられる。外面は高台脇までを施釉範囲とするが、部分的に高台にも釉が付着している。見込は無釉。

7は型成形による口兀の小碗である。器壁は全体的に薄い。高台脇から胴上部へゆるやかなカーブを描きながら移行し、口縁部で外反する。18～19世紀で福建産とみられる。

8も型成形によるもので、口兀の小杯である。丸みのある腰部からほぼ直線的に口縁部へ至る。18～19世紀で福建産とみられる。

③色絵

第60図9に示す小碗の底部資料1点である。本品も前述の白磁小碗・小杯と同様、型成形によるもので、18～19世紀の福建産と考えられるものである。器形についても白磁小碗に類似する。外面には赤絵と思われる上絵付が行われていたようであるが、顔料は剥がれ落ち、文様構図など詳細は不明。底径は2.8cm。

④瑠璃釉十白釉

外面に瑠璃釉、内面に白釉を施す掛け分けの資料で、第60図10の小杯1点の出土である。直口の口縁部資料で、口径は3.8cmである。18～19世紀。

⑤染付

碗（142点）、皿（4点）、小杯（2点）、蓋（2点）、器種不明（1点）の計151点出土。

第60図11は外面に草花状の文様を施す碗である。口縁上端と高台脇には界線が繞る。見込には花弁とみられる文様が確認される。器形は高台脇から丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反を示す。高台はやや高い。口径11.4cm、底径5.6cm、器高5.9cm。18～19世紀。

12は円形状および花弁状の文様を施す碗である。円形文の内部にはさらにつる状の文様を描く。胴部から口縁部へ直線的に開く。18～19世紀。

13は寿字文を施す碗である。口縁上端には内外面とも界線を繞らす。18～19世紀初。

14は接合によって全形を復元できた資料である。唐草状の文様を施す碗で、口縁内面にも同文様を配する。口縁内外面および高台、見込に界線を繞らし、見込中央には草花文を施す。外底には銘が記されている。呉須は発色良好で鮮やか。器形は高台脇から丸みをもって立ち上がり、口縁上端で外反する。口径は11.2cm、底径4.8cm、器高5.8cm。20世紀の所産とみられる。

15は前記14の蓋で、文様および施文部位など14と同じである。つまみは高台状のもので、わずかに逆「ハ」字状に開く。口径10.2cm、つまみの径4.2cm、器高2.9cmである。

16は小杯の口縁部資料である。外面に草花文を施し、口縁上端には界線を繞らす。腰部は丸みを帯び、口縁は微弱に外反する。口径は5cm。17～18世紀。

17は蓋と思われる資料であるが、破片が小さく判然としない。上面、側面ともに文様が描か

れるが、上面の界線以外は文様種、構図など不明である。内面は露胎。上端のかど部分は釉薬が拭き取られ、茶褐色を呈する。直径は6.6cm。18後半～19世紀。

日本産磁器

①肥前および肥前系の磁器

碗（19点）、皿（３点）、瓶（３点）、器種不明（３点）の計28点出土した。

第60図18は碗の口縁部資料である。器壁は約３㎜と薄手である。口縁内外面には界線が繞り、外面の場合は界線の下方にさらに文様が認められるが、文様種や構図などは明かでない。17世紀後半で肥前産。

19は瓶の肩部破片で、鋸歯文と界線が認められる。内面は無釉。17世紀後半で肥前産。

20は瓶とみられる底部資料で、高台外面に界線と思われる文様が施される。高台脇にも文様が認められる。内面は露胎。底径は推定5.2cm。17世紀後半で肥前産。

21は青磁染付皿の底部資料で、内体面には文様の一部が確認される。釉薬は淡緑色を発し、外面は畳付のみ無釉。内面は見込を蛇の目状に釉剥ぎする。底径は4.8cm。17世紀後半で肥前波佐見産。

22は碗あるいは皿とみられる底部資料である。高台脇と外底に界線が繞り、外面体部にも文様が描かれるようだが、詳細は不明。外底の中央には銘が施され、「太明」だけは読み取ることができる。1690年～18世紀前半で肥前産。

23は皿の資料で、内体面に飛ぶ鳥を模したような文様が描かれる。器形は腰部から丸みをもって口縁部へ移行する。見込は無釉。口径は9.4cm。19世紀中葉で肥前系。

②近代磁器

破片総数115点。釉薬の種類でみると透明釉を施すものが圧倒的に多く、他に緑釉、淡青色釉、緑釉と透明釉の掛け分けなどが見受けられる。施文方法には型紙刷り、銅版転写、印文、吹き付け、手描き文などがあり、緑釉や淡青色釉には型成形による陽・陰刻文などもみられる。以下、透明釉、緑釉、掛け分けの資料について略述する。

透明釉

a 型紙刷り

碗（21点）、皿（６点）の計27点出土した。碗１点を掲載した。

第61図１の碗は沖縄では一般にスンカンマカイと呼ばれているものである。点の集合からなる三角形や円形の文様を外面体部と口縁内面に配し、見込には花文を施す。器形は丸みのある腰部から胴部へ移行し、口縁部は外反を示す。見込には窯詰めの際に使用されるハマの痕がのこる。口径13.6cm、底径4.8cm、器高6.2cm。

b銅版転写

小碗（５点）、皿（２点）、蓋（１点）の計８点出土したうち、小碗１点を図示した。

同図２は外面に花文様を施す。花文は２個一組とするようで、うち一個は緑灰色、他方は赤色を呈す。ただし、後者は色がぬけ落ち、中央部と輪郭だけがかすかにのこっている。器形は高台脇から丸みを帯びながら口縁部へ移行する。口縁部は直口。口径9.2cm、底径4.2cm、器高4.9cm。

c印文

碗（１点）、小碗（24点）、皿（７点）の計32点出土し、そのうち碗１点、小碗３点、皿２点を掲載した。

同図３の碗は縦波線十数本で形づくられた三角形を、内体面に五つ囲繞させるものである。それぞれの縦波線の間は多数の点で埋める。三角形の中央は２個一組の花文で飾る。見込には点の集合による円形文を施す。外体面にはつる草状の文様を３ケ所に配する。文様は濃紺色を主体とするが、内面の花弁のみは赤色である。器形は丸みをもつ腰部から直線的に口縁部へ移行する。口縁部は直口で、小さな抉りを五つ施す。口径11.2cm、底径４cm、器高５cm。　４～６は小碗である。

４は外体面に車輪状の円形文を配す。円形文は５個施され、それぞれ赤、青、緑などの色を呈する。円形文の上下には界線が繞る。器形は高台脇から丸みを保ちながら口縁部へ至る。口径は8.2cm、底径３cm、器高4.8cm。

５は亀甲状の文様によって外体面を区画し、その間に梅(?)の木の文様を施す。外底には「岐」の文字が陽刻される。器形は前記４に類似。口径８cm、底径2.8cm、器高4.8cm。

６は外体面に「(1)」の組合せ文様を施すものである。丸みのある腰部から直線的に口縁部へ至る。４・５に比べ、器高が低い。口径8.4cm、底径2.6cm、器高3.5cm。

７・８は皿である。

７は見込みに松の木や笹の葉、石燈籠などが配され、庭園風の文様が描かれる。外底に「岐982」がある。口径は13.2cm、底径7.2cm、器高2.8cm。

８は内面に岩や松の木、小舟などが施されるもので、山水画風の文様である。外底には「製」の字が陰刻される。７に比べると底径は小さく、口縁部の開きが大きい。口径は13.2cm、底径５cm、器高は2.8cm。

d吹き付け文

小碗と杯がそれぞれ１点出土した。杯について略述する。

第61図９は桜(?)の花文様を施す。花文様は白抜きで、吹き付けは緑色である。施文は内面一部に限られる。器形は腰部から丸みを保ちながら口縁部に至る。高台に特徴があり、下面からみると方形を呈する。腰部は高台にあわせて、４ケ所をかるく面取りする。口径6.4cm、高台一辺の長さ２cm、器高2.6cm。

e 手描き文

小碗（６点）、高杯（１点）、皿（１点）、小杯（１点）の計９点で、すべて赤絵である。小碗、高杯、皿を１点ずつ掲載した。

第61図10の小碗は葉文および、つる草状の文様を描くものである。葉文は赤色、つる状の文様は黒色を呈する。器形は丸みのある腰部からほぼ直線的に口縁部へ移行し、上端はわずかに外反する。口径は8.8cm、底径は2.8cm、器高3.9cm。

11は高杯の資料で、口縁外面につる草状の文様を描く。文様は剥がれ落ち、痕跡しかとどめていない。脚および口縁上下端には界線が繞る。口径6.2cm、底径4.2cm、器高7.6cm。

12は皿の資料で、見込につる草文を描く。口径11.2cm、底径6.2cm、器高2.5cm。

緑釉

クロム青磁と呼ばれるもので、17点出土した。そのうち小碗２点を掲載した。

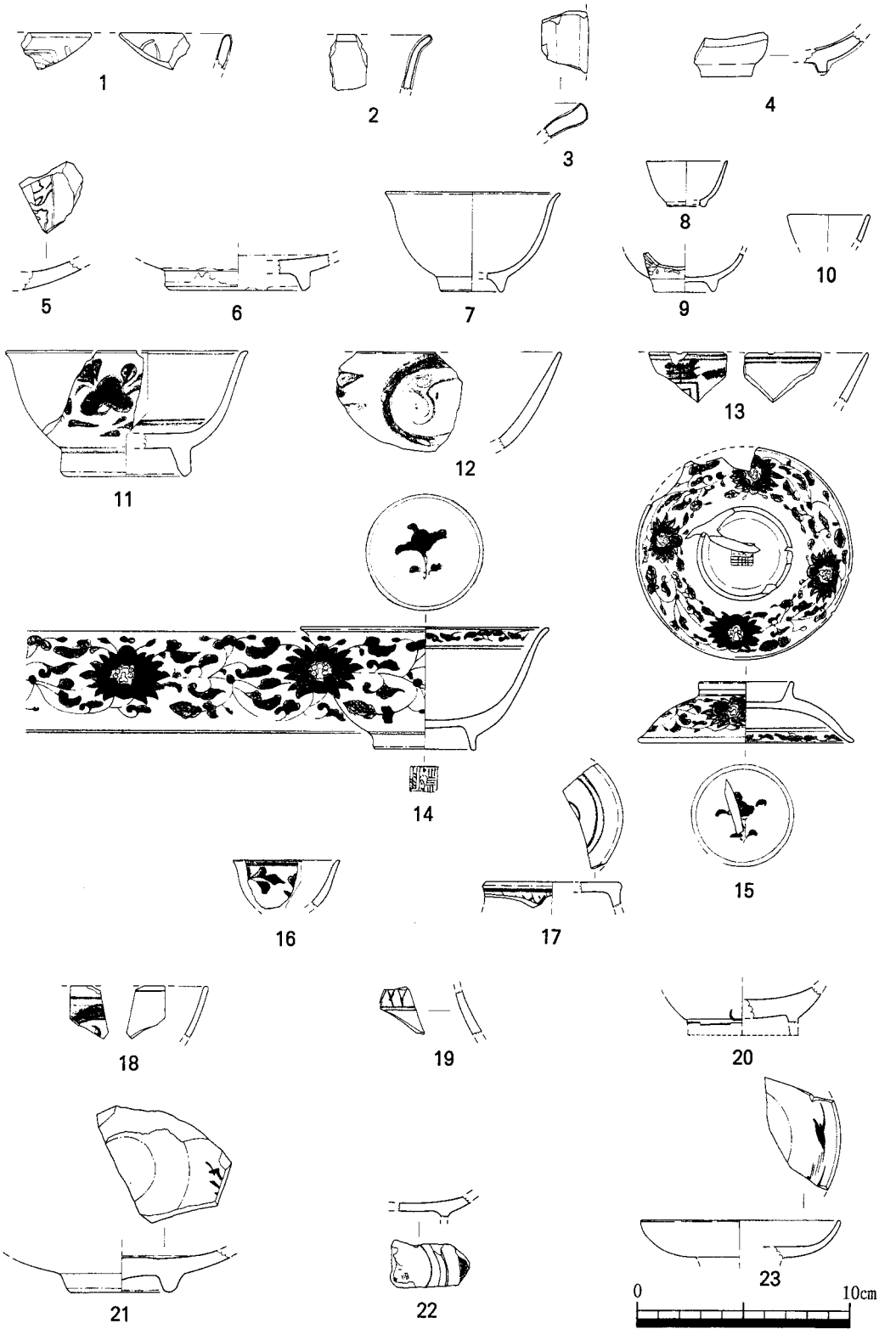
第61図13は腰部に「岐406」の文字が陽刻されることから、型成形による製品と考えられる。外面は手彫りとみられる１cmほどの縦位短線多数で埋められる。釉薬は淡い緑色を発色する。畳付から外底は無釉である。口径7.8cm、底径2.8cm、器高4.2cm。

第61図14は外面に飛がんなによる縦位短線を施すものである。施文によって器面は凹凸となる。口径は７cm。

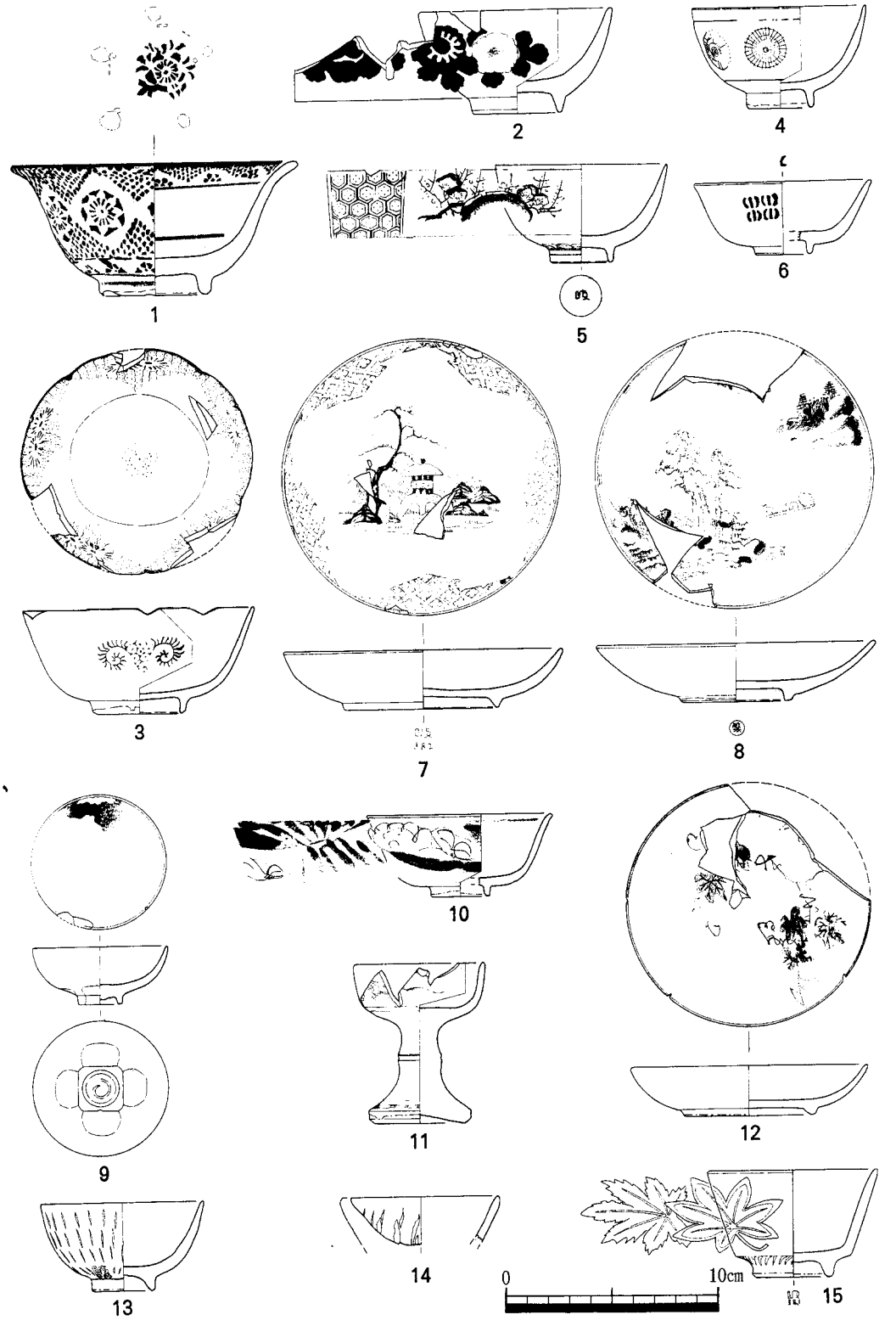
掛け分け

外面に緑釉、内面に透明釉を施すもので、小碗３点が出土している。型成形による陽・陰刻文、印文、手描き文がそれぞれ１点ずつで、そのうち型成形の資料を掲載した。

第61図15は外体面に陽刻と陰刻による木の葉文様を施すもので、高台脇には陰刻の斜線が囲繞する。外底に「岐38.1」が記されている。腰部は屈折し、そこから口縁部へは直線的にのびる。口径８cm、底径3.5cm、器高5.1cm。



第60図　中国産磁器（１～17）、肥前及び肥前系磁器（18～23）



第61図　日本産近代磁器

(2) 沖縄産施釉陶器

破片数で1466点出土した。器種の判別可能なものでは碗、小碗、角杯、鉢、浅鉢、壺、鍋、香炉、瓶、皿、水注、蓋など多様に見受けられる。それぞれについて代表的なものを図示し、器種ごとに略述する。なお、釉薬の記述で白釉としたものは素地に白化粧土を施したあと、透明釉を掛けるものである。

① 碗

破片数699点。最も出土量の多い器種である。釉薬によって5種類にわけられた。

Ⅰ類（灰釉碗）

225点。内外面とも口縁部から腰部までを施釉対象とし、施釉方法は高台をつまみ、逆さにして釉薬を付け掛けしたものと思われる。釉色は灰色を基調とするが、資料によって濃淡がみられる。器形は高台脇から口縁部へ、ほぼ直線的に開くものが主流である。多くは無文だが、中には鉄絵を施す例も見受けられる。3点を図示した。

第62図1は直線的に開く口縁部資料である。釉薬は灰褐色で、無文。口径は12.6cm。

2・3は底部資料で、2は直線的な腰部であるのに対し、3は2に比べわずかに丸みをもつ。内面では、2は底面からゆるやかなカーブを描きながら胴部へ至るが、3は立ち上がり部分にかどをつくる。2は高台下端部に砂の付着が観察される。釉はいずれも淡灰色を呈し、2はやや透明感がある。3の外面には鉄絵文様の一部がみられる。底径は2が6.6cm、3は7.2cm。

Ⅱ類（鉄釉碗）

63点出土。前記Ⅰ類と同様、釉薬はつけ掛けによるものであるが、本類の場合にはつけ掛け以前に内面へ施釉する、「重ね掛け」の例もみられる。釉は茶褐色ないし黒褐色を呈する。器形は高台脇から丸みをもって立ち上がるものと、直線的なものとがあり、前者の方が多く見受けられる。口縁部の形状は微弱な外反を示すのが一般的で、他に直口タイプがある。すべて無文。口縁部資料2点、底部資料を3点図示した。

第62図4は口縁端部が微弱な外反を示すものである。胴部はやや丸みのある器形が想定される。釉は黒褐色。口径は10.8cm。

5は直口する口縁部資料で、高台脇から直線的に開くものと思われる。釉は暗褐色。

6はほぼ直線的に立ち上がる底部資料である。釉は茶褐色で、腰部以下は露胎となる。内面の立ち上がり部に砂の付着がある。底径は5.8cm。

7は釉薬を重ね掛けする資料で、見込は蛇の目釉剥ぎを行う。つけ掛けの釉は黒褐色、見込の釉は茶褐色を呈する。後者は光沢がない。腰部はやや丸みをもち、高台の外面下端には砂の付着がある。底径は6.8cm。

8は見込に円形の鉄釉が施され、つけ掛けの釉とあいまって内底は蛇の目状となる。釉は茶褐色で、見込の円形釉には光沢がない。高台脇から丸みをもって立ち上がる。

Ⅲ類（白釉碗）

252点出土。畳付以外は内外面とも施釉対象とし、見込は蛇の目釉剥ぎが行われる。釉剥ぎ部や高台下端部には、焼成時の溶着とみられる白土が観察される例が多い。高台脇から丸みをもって立ち上がり、口縁部で外反するのが大方の器形である。腰部に膨らみがあるため、全体的にはどっしりと安定感がある。出土した白釉碗の約1／3は有文資料で、これらは呉須や鉄釉によって下絵付の行われるものである。無文資料２点、有文資料６点を図示した。

第62図９・10は無文の白釉碗で、全形の窺える資料である。いずれも前述のように白化粧土を施したあと、透明釉を掛けるが、器表面の色調をみると９は淡い灰白色で、10は淡い黄白色となっている。これらはそれぞれの素地の色とほぼ近い色を示していることから、素地の色がそのまま器表面の色調へ影響したものと考えられる。９が口縁上端部でわずかに外反するのに対し、10は胴上部から外反していく器形である。いずれも見込の釉剥ぎ部と、高台下端部に白土が付着し、10の外底面には施釉時の指のあとがのこる。９は口径14.0cm、底径6.4cm、器高6.4cmで、10は口径12.9cm、底径5.8cm、器高6.2cm。

11～16は有文の白釉碗である。施文部位は外面のみ、内面のみ、内外両面の３種類がある。

11の底部資料は外面体部に呉須と鉄釉によって文様を描くものである。飴色の鉄釉を円形に施し、その周囲を呉須による丸点数個で円形状に取り囲む構図で、イングワーチチャーと呼ばれる技法のようである（註１）。見込の釉剥ぎ部や、高台下端部に白土の付着がわずかにみとめられる。底径は推算5.4cm。

12は前記11と同様の文様構図であるが、すべて丸点による構成という点で違いがある。周囲の呉須文様は11と同じだが、内部を鉄釉の丸点４個で埋める点が11と異なる。口径13cm。

13の口縁部資料は内体面に施文するもので、呉須によって花弁状の文様を描く。文様自体の発色が悪く、注視しなければ見落としてしまうほど不鮮明である。口径は推算13.6cm。

14・15は外面に呉須による文様を施すものである。14は花弁状、15は草状の文様であるが、全体の構図は明確でない。15は見込の釉剥ぎ部と、高台下端部に白土の付着が観察され、高台外面には施釉時の指のあとが明瞭に残る。底径は推算6.4cm。

16は内外両面に呉須による文様を描くが、詳細は不明。口径は推算12.2cm。

Ⅳ類（掛け分けの碗：鉄釉＋灰釉）

内外面で異なる釉薬を掛けるもので、本類は外面に鉄釉、内面に灰釉を施すグループである。53点出土した。施釉範囲をみると、外面は高台脇までを対象とし、高台以下は露胎とするが、中には高台途中まで釉垂れのある資料もみられる。内面は蛇の目釉剥ぎが行われる。器形は高台脇から丸みをもって立ち上がり、口縁上端部で外反する。１点を図示した。

第62図17は全形の窺える資料で、外面の鉄釉は高台途中までで、以下は露胎。発色は濃い茶褐色である。内面は灰釉が施されるが、口縁上端には外面からの鉄釉がわずかに及ぶ。見込の釉剥ぎ部と高台内面に白土の付着がある。口径12.4cm、底径6.0cm、器高5.8cm。

Ⅴ類（掛け分けの碗：鉄釉＋白釉）

外面に鉄釉、内面に白釉を掛けるもので、41点出土した。施釉範囲をみると外面は畳付のみを露胎とするものと、高台外面から外底までを露胎とするものに分けられる。内面の場合はすべて蛇の目釉剥ぎが行われる。器形は前記Ⅳ類と同様とみられる。口縁部資料と底部資料をそれぞれ１点図示した。

第62図18は口縁部の資料で、上端がわずかに外反する。外面の鉄釉は光沢がなく、色調は茶褐色を呈する。

19は底部資料で、腰部は丸みをもつ。外面は畳付のみを露胎とし、釉薬の発色は茶褐色。見込の釉剥ぎ部にはわずかながら白土が付着する。底径は推算5.4cm。

② 小碗

破片数で79点出土した。釉薬によって３種類に分けられる。

Ⅰ類（白釉小碗）

37点出土。畳付は露胎とし、見込は蛇の目状に釉剥ぎする。高台脇からの立ち上がりは丸みをもつが、口縁部では直口するものと端部で外反を示すものとがある。前者の方が多い。また、直口タイプには有文資料もみられる。全形の知り得るもの３点を図示した。

第62図20は直口の口縁部資料で、図上復元によると口径7.8cm、底径3.8cm、器高4.4cmである。

21も直口タイプのもので、外面には呉須による文様が描かれる。口径8.0cm、底径3.2cm、器高4.4cm。

22は口縁端部で外反するものである。見込の釉剥ぎ部に白土の付着がみられる。口径は推算8.8cm、底径3.4cm、器高4.1cm。

Ⅱ類（掛け分けの小碗：鉄釉＋白釉）

外面に鉄釉、内面に白釉を施す。31点出土。施釉範囲をみると外面は高台脇ないし高台まで施釉するが、高台内（外底）にも施す例もみられる。畳付はすべて露胎。見込は蛇の目釉剥ぎする。器形は高台脇から丸みをもちながら立ち上がり、口縁部で外反する。１点図示した。

第62図23は全形の窺える資料で、外面は高台の途中から畳付までを露胎とする。見込の釉剥ぎ部には白土の付着がある。口径9.2cm、底径4.0cm、器高4.4cm。

Ⅲ類（掛け分けの小碗：鉄釉＋灰釉）

外面に鉄釉、内面に灰釉を施すもので、11点出土した。施釉範囲の窺える底部資料からすると、外面は高台脇ないし高台途中まで施し、以下外底まで露胎とする。見込はすべて蛇の目釉剥ぎを行う。器形はⅡ類同様、高台脇から丸みをもちながら立ち上がる。口縁部の形状は出土した小破片１点をみる限り、微弱な外反を示す。底部資料を１点掲載した。

第62図24は鉄釉を高台脇まで施釉するものであるが、釉垂れによって一部高台に及ぶ。高台下端部に白土の付着がみられる。底径は推算3.8cm。

③　角杯

破片数27点。胴部は数回の面取りが行なわれる。釉薬により３種類に分けられる。

Ⅰ類（白釉角杯）

角杯の中では最も多く、25点出土した。畳付を除く総釉掛けで、一般に見込は蛇の目釉剥ぎを行う。また、外底には白化粧土を施さず、透明釉のみが掛けられている場合もある。全形の窺える資料からすると、高台脇からゆるやかに立ち上がるが、面取りの結果腰部で屈折し、そこから直線的に口縁部へ至る形状を示す。口縁部は微弱に外反する。２点図示した。

第62図25は唯一全形の知り得るものである。外面は面取りによって20面体となる。畳付は露胎とし、見込は蛇の目釉剥ぎを行う。高台下端部に白土の付着がある。口径は8.4cm、底径は3.6cm、器高4.1cm。

26は見込の釉剥ぎを行わない資料である。他に比べ高台の低い点も本品の特徴である。高台には白土の付着が明瞭。底径は3.6cm。

Ⅱ類（鉄釉角杯）

第62図27の口縁部資料のみ出土。白化粧土を施したあと、透明感のある鉄釉を掛けるもので、釉の色調は淡い茶褐色を発する。口縁上端は外反を示す。

Ⅲ類（掛け分けの角杯：鉄釉＋白釉）

外面に鉄釉、内面に白釉を施すもので、第62図28に示す口縁部資料のみである。外面の鉄釉は茶褐色を発し、光沢はない。口縁上端は外反する。

④　鉢

破片数50点の出土。器形により概ね２種に分けられる。

Ａ種：高台脇からゆるやかなカーブをもって立ち上がり、口縁部は斜めに開く。碗を大きくしたような形状である。口縁部の上端は外側へ張り出すか、あるいは屈折するかのいずれかである。ワンブーと称されるようである（註２）。

Ｂ種：筒状の器形を示すものである。まず、高台脇から腰部へ斜めに開き、そこから口縁部へほぼ垂直に立ち上がる。内面は露胎とするか、あるいは白化粧土のみを施す。炉、火種入れなどが考えられる。

Ａ種

35点出土。釉薬の種類によって４類に分けられる。

Ⅰ類（灰釉鉢）

５点得られている。１点図示した。

第63図１は口縁部の破片で他資料に比べ開きが弱い。口縁上端は外側へ張り出し、上面は平坦となる。内面には白色の丸点文様が３個みとめられ、施文状況からすると丸点は円形状に配されるものと考えられる。

径14cm。

10は外面から口縁内面まで施釉するもので、腰部以下、外底までと、口縁をのぞく内面を露胎とする。口縁部には抉りを設けている。胴下半部に幅広の横位沈線および凹線が繞る。

⑤ 浅鉢

口縁部の小破片が5点出土した。すべて内彎器形を示す。この種の器種は後述の無釉焼き締め陶器や軟質陶器にもみられるもので、一種の手水鉢とされる（註3）。今回出土した資料は釉薬の種類に2とおりみられ、それぞれ1点ずつ図示した。

Ⅰ類（鉄釉浅鉢）

鉄釉を施すものである。3点出土したうち1点は内面無釉である。

第63図11は内外両面に施釉するもので、内彎のやや強い資料である。

Ⅱ類（掛け分けの浅鉢：鉄釉＋白釉）

外面には鉄釉、内面には白釉を施す。2点出土。

第63図12は釉薬を施したあと口縁上端部のみ拭き取っている。内彎の弱い資料である。

⑥ 皿

2点出土した。

第63図13は灰釉掛けの皿で、器形は高台脇からゆるやかなカーブを描きながら開いていく。釉薬はつけ掛けによるものとみられ、内外面とも口縁部から胴下部まで施釉対象とする。内体面中央には鉄釉の界線を2本繞らし、その上位に白色の丸点数個を円形状に配する。

14は白釉掛けの小皿で、見込には釉剥ぎが認められる。丸みのある胴部をもち、口縁は直口。内体面には呉須によって文様が描かれる。

⑦ 壺

口縁部資料4点の出土で、いずれも鉄釉が施される。器形は口縁部がしだいにすぼまり、上端部は外側へ張り出す。口唇部は幅広で、上面は無釉。2点掲載した。

第63図15は口縁部が直線的にすぼまるものである。胴の張りの弱い壺が想定される。口唇部には白化粧土が施される。釉薬は黒褐色に発色。口径は推算11.8cm。

16はわずかな反りを有しながら口縁部へすぼまる。15に比べると胴部にやや張りのあるものと思われる。口唇部はわずかに内傾する。器面の状態は悪く、釉薬もまだらになっている。口径は9cm前後が推定される。

⑧ 鍋

破片数20点。すべて鉄釉を施すものである。底部は底の広い丸底で、口縁部は外側へ「く」

の字状に屈折する。この種の鍋は、後述の軟質陶器にもよく見かけられるものである。破片資料をとおして施釉状況をみると、外面は口縁部から胴部まで施され、以下を露胎とするようである。内面についてみると底部資料ではいずれにも施釉がみとめられるが、口縁部資料では無釉のものもある。口縁上面（蓋受け）はすべて露胎。口縁部資料２点と、底部資料１点を掲載した。

第63図17は内体面を露胎とするものである。口縁上面（蓋受け）には白土の付着がある。

18は内体面にも施釉するもので、釉は胴部以下にみとめられる。口縁上面（蓋受け）は凹面を形成する。

19は底部の資料で、外面には煤が付着している。外底には脚の剥落した痕がみとめられ、それからすると脚は円錐形状のものが推察される。

⑨ 香炉

２点出土。いずれも鉄釉香炉である。

第63図20は外面から口縁内面までを施釉対象とするもので、釉薬は黒褐色を発する。底部から口縁部へ断面「Ｓ」状に移行する器形で、底部には脚がつく。口縁部はほぼ直立。図上復元によると口径は18.4cm、器高10.2cm。

21は外面は腰部まで、内面は口縁上部までを施釉対象とするもので、釉薬は黄土色に発色する。器形はふくらみのある胴部に、ほぼ直立の口縁部が付く。20のような頸部のしまりはみられない。口径は16cm。

⑩ 瓶

瓶とみられる資料は４点出土した。釉薬の違いで３種類に分けられる。

Ⅰ類（鉄釉瓶）

破片資料の２点が出土した。いずれも内面は無釉で、ロクロの回転痕が明瞭にのこる。

第64図１は肩部の破片でゆるやかななで肩を示す。

２も肩部の破片とみられるもので、１とは異なり途中で張りをもたせて稜をつくる。破片の上方に横位の沈線がみられる。張りの部分の径は10cm。

Ⅱ類（白釉瓶）

第64図３に示す胴部破片１点である。内面は無釉。胴の最大径は７cmと小さく、小型の瓶が想定される。外面には沈線文や、飛がんなの技法によるとみられる爪形状の文様が施され、部分的に茶褐色や藍色に近い色調の色付けが行われる。

Ⅲ類（コバルト釉瓶）

第64図４の花生１点で、ほぼ完全な形をとどめている。釉薬は外面から口縁内面および外底に施す。畳付は無釉。底部は脚台を有し、胴部は球体状にふくらむ。頸部は細く垂直にのび、

口縁部は大きく外反する。頸部には把手状の獣面を２個貼り付ける。器高は15cm、口径8.8cm、底径8.0cm。

⑪　水注

破片45点が出土した。器形により大きく２種に分けられる。

Ａ種：球体状の器形を示すもので、蓋を有する。身の上部には一対の把手がつく。

Ｂ種：算盤玉に似た体部に細い頸部を付け、小さな口縁部をもつ。「カラカラ」と称される酒器の一種である。

Ａ種

破片数44点で、出土した水注はほとんどこれに属する。６点図示した。

第64図５は鉄釉を施すもので、口唇部から内面は露胎。口縁部は微弱なつくりで、口径は６cm。

６・７は外面に沈線文様を施すものである。釉薬は薄い飴色に発色する。口唇部から内面は露胎。７は施釉前に白化粧土を施している。口径は６が6.2cm、７は6.4cm。

８は外面にコバルト色の釉薬を施すものである。内面には白化粧土を施す。口径は推算６cm。

９・10は底部資料で、脚を有する。外底は平坦で立ち上がりは丸みをもつ。白化粧土を施したあとに、透明釉を掛けるものである。外底面は無釉。

Ｂ種

第64図11の１点である。白釉を施すが、高台脇から外底は無釉。外面には葉文様を線彫りし、施文部は呉須によって色付けされる。底径は7.6cm、胴の最大径は11.2cmである。口縁部を欠く。

⑫　蓋

23点出土。全形の知り得る資料についてみると、宝珠状のつまみを有し、縁辺は鍔状に張り出し、内側にかえしを付ける。鍔の下面から内面は無釉。壺や水注の蓋と考えられる。釉薬で２種類に分けられる。

Ⅰ類（鉄釉）

13点の出土中３点を図示した。

第64図12は甲がゆるやかに盛り上がるもので、鍔はほぼ水平となる。内面は露胎。かえしの直径は8.4cm、鍔は10.4cmである。

13は他資料に比べ、鍔の幅広い資料である。甲は直線的で外面中央は円形状に釉剥ぎされる。つまみの形状は不明。かえしの直径は6.4cm、鍔は10.8cmである。

14は小型の資料である。甲は直線的で傾斜はゆるい。かえしの直径は５cm、鍔は6.2cm。

Ⅱ類（白釉）

白化粧土を施したのち透明釉を掛けるものがほとんどであるが、白化粧土を施さず、透明釉のみを掛けるものもある。10点中３点を掲載した。

第64図15は外面に沈線を組み合わせて文様を描くものである。施文部は呉須や鉄釉によって色付けされる。かえしの直径は5.4cm、鍔は7.2cmである。

16は象嵌技法によって文様を施す資料で、文様は沈線文と花文を組合せたものである。甲は傾斜がゆるくほぼ水平となる。かえしの直径は5.4cm、鍔は7.2cm。

17は白化粧土を施さず、透明釉のみを掛けるものである。甲が盛り上がるもので、鍔の上方には2本の線文が囲繞する。かえしは微弱で、直径は7.2cm。鍔は8.8cmである。

器種不明

破片が小さく器種の判別が困難な資料である。5点を掲載した。

第64図18・19は口縁部資料である。器形や施釉範囲等が類似し、同器種が想定される。

18はわずかに外傾するもので、白釉を施すが、口唇部から口縁内面の上端部は無釉。文様は沈線を組み合わせたもので、沈線の上から呉須で色付けする。

19は直口を示すもので、沈線、菱形文、花文を組合せた文様を施す。釉薬は透明釉だが、やや灰色がかった色調を発する。18と同様、口唇部から口縁内面の上端は露胎とする。

20～22は底部資料である。

20は内外面に鉄釉を施すもので、やや厚手の資料である。畳付および内底中央は露胎とし、釉薬は黒褐色を発する。底径は10cm。前述の壺の底部だろうか。

21は外面に鉄釉を施すもので、円盤状の高台を有する。外底はわずかにくぼむ。腰部までが施釉対象で、同以下および内面は露胎。内器面にはロクロ回転痕が顕著である。底径は4cm。瓶あるいは小型の壺が想定される。

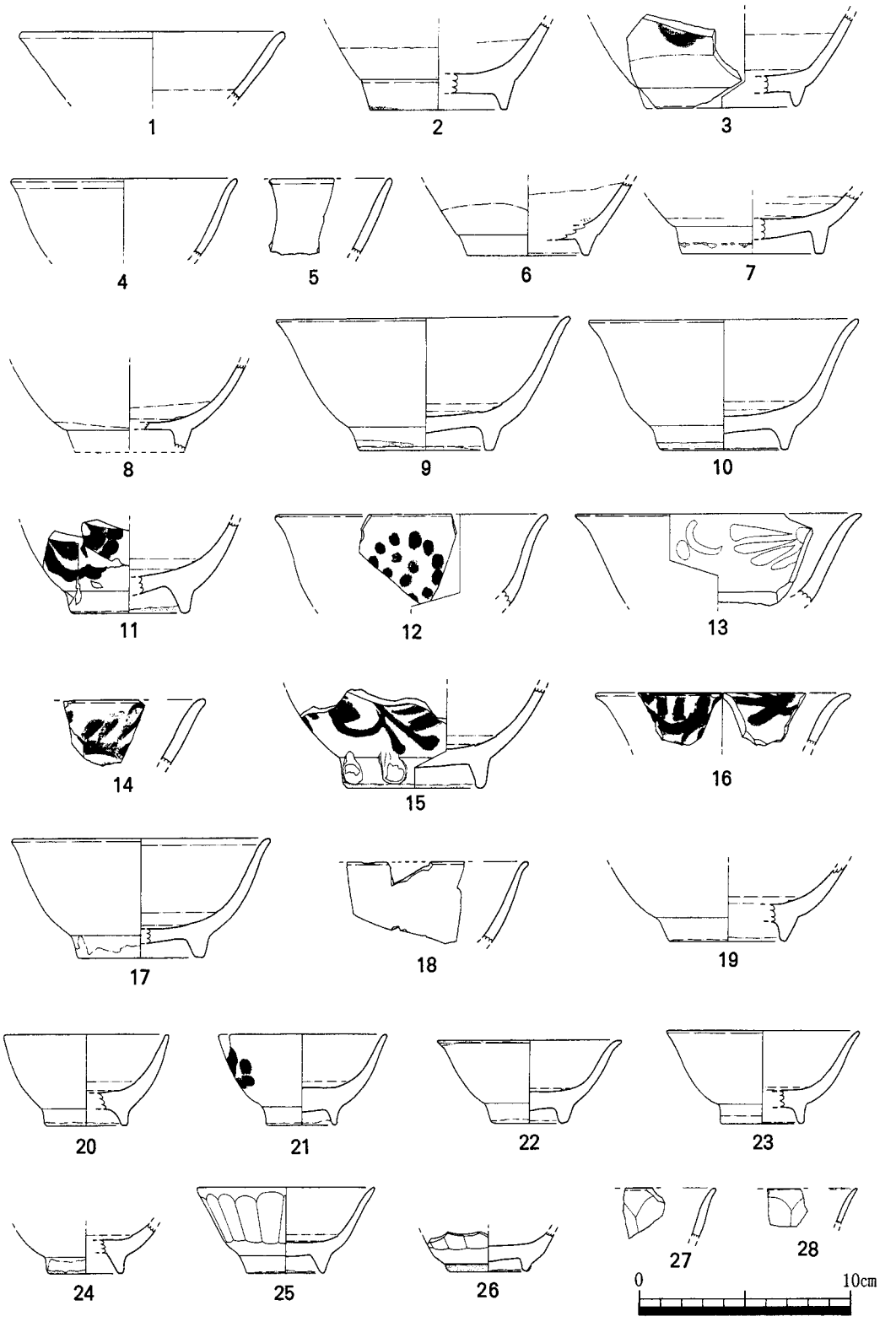
22は象嵌技法によって施文される資料である。高台は低く、立ち上がりは大きく開き、安定感がある。釉薬は高台外面まで施され、畳付から外底、および内面は露胎。底径6.6cm。

註

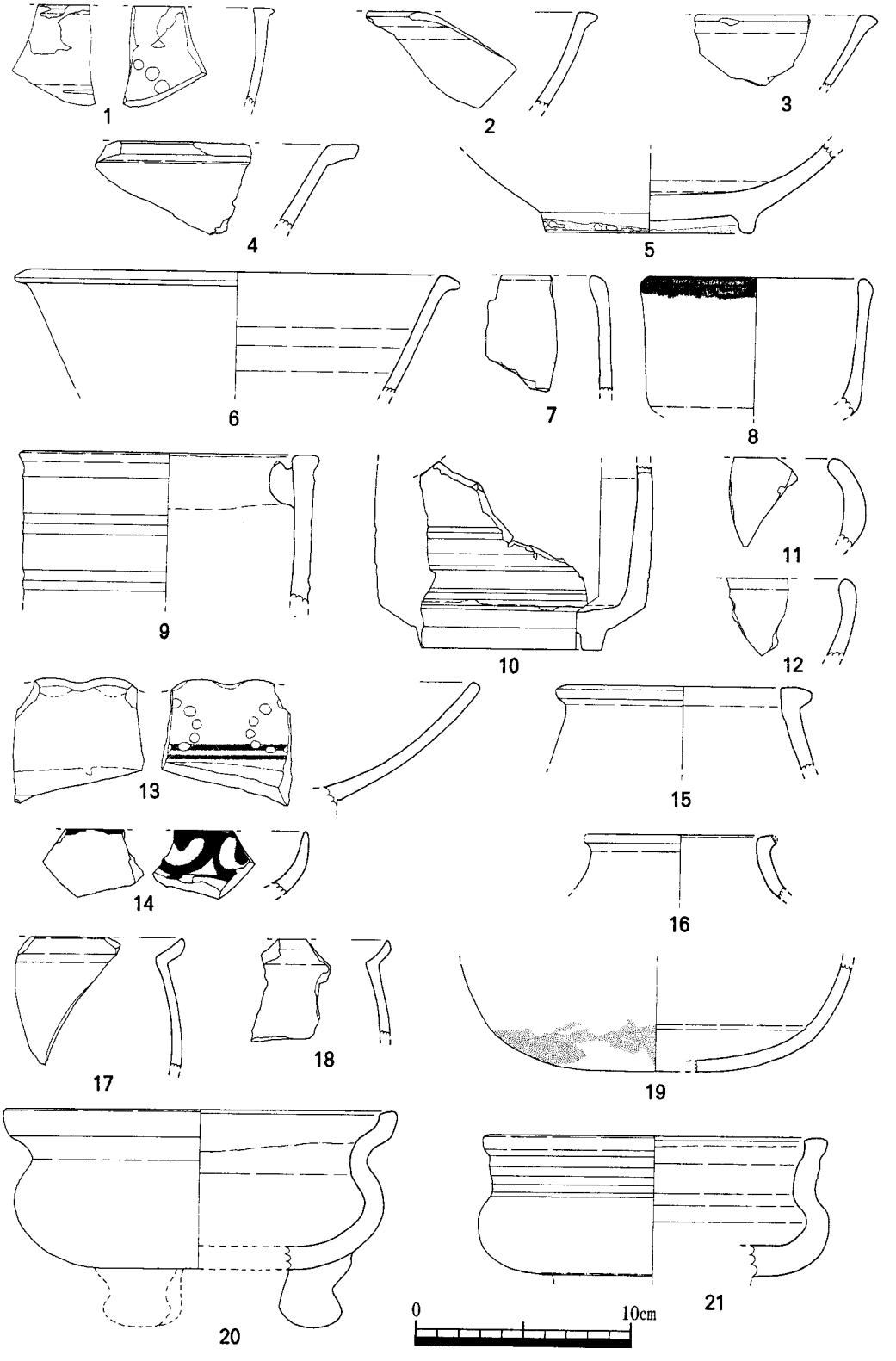
1：沖縄県立博物館『沖縄県立博物館紀要 第4号』1978年3月

2：沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年

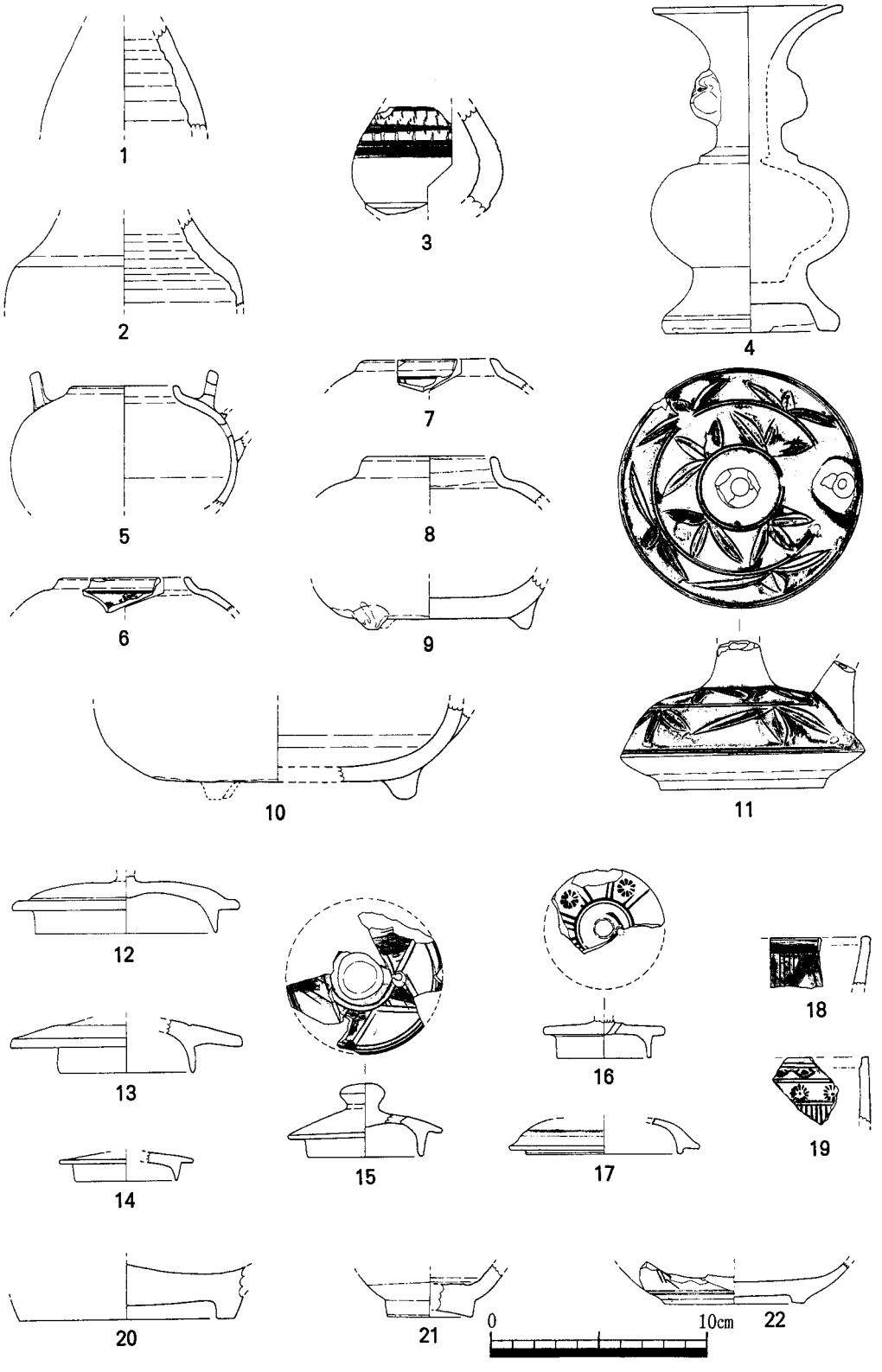
3：2に同じ



第62図　沖縄産施釉陶器 1



第63図　沖縄産施釉陶器 2



第64図　沖縄産施釉陶器 3

(3) 無釉焼き締め陶器

今回の調査で破片1,312点出土した。全形の窺える資料は少ない。器種の知り得るものでは、甕、壺、鉢、浅鉢、皿、瓶、蓋などが見受けられる。それぞれ代表的なものについて図示した。以下、器種別に略述する。

① 甕

口縁部資料が7点出土した。水甕と蔵骨器がある。

第65図1は水甕とみられるもので、張りのある肩部から、頸部へすぼまり、口縁部は微弱に外反する。口縁部は方形状に肥厚する。肩部には貼り付け文を1本横位に配する。貼り付け文は粘土紐を器面に貼り付けたあと、指で連続して押しつぶし、装飾的効果を出している。頸下部と口縁肥厚部にはそれぞれ数本の沈線をめぐらす。内器面はロクロ回転痕がのこる。口径は推算29cm。

2は蔵骨器である。円筒に近いスマートな器形で、口縁部は外反する。口縁部に2本、胴上部に4本の沈線をめぐらし、その間（頸下部）に数条1組とする波状文を配する。胴部にも文様が描かれるが、破損のため文様種・構成とも不明。胴上部には貫通孔が1個確認される。器外面から口縁部内面にかけてマンガン掛けがおこなわれ、黒褐色を呈する。内器面にはロクロ回転痕がみられる。口径は推算19.6cm。本資料は『城間古墓群』（註1）で報告した亀甲墓の西側から出土していることから、同墓と関連する資料と考えられる。

② 壺

23点出土。サイズや口縁部の形状などに数種みられる。7点を掲載した。

第65図3と4は同一個体と考えられる資料で、今回出土した中では大型の部類に入る。両者を合わせて観ると、底部は平底で、やや膨らみのある胴部を有し、肩部はゆるやかななで肩で、頸部はしまり、口縁部は外反する器形である。最大径は胴中央部にある。口縁部はわずかに肥厚。肩部には、上位に7条、下位に1条の浅い凹線をめぐらす。凹線は先端が方形状の施文具によって施されたとみられ、上位の7条は密に接して施文するため、断面では階段状をなす。口径は推算12.6cm、底径は17.4cm。器高は3・4の図面合成によると43cm前後が推定される。

第66図1・2も同一個体とみなされるものである。底部は平底で、立ち上がりからほぼ直線的に胴部へ移行する。胴の張りは弱い。頸部は直立し、口縁部は外側へほぼ水平に屈折する。全体的にはややスマートな形状である。内外面ともにロクロ回転痕がみられ、とくに内面は凹凸が著しい。推算によれば口径は12cm、底径は7.6cmである。1・2の図面の合成から器高は推定23.5cm。

3は直立する口縁部をもつものである。小型の壺が想定される。現存部からすると胴の張りは弱くなるもよう。

4は口縁部が強い外反を示すものである。口縁端部は微弱に膨らむ。内面にロクロ回転痕あり。

5は口縁部が玉縁状に肥厚するもので、胴上部から口縁部へすぼまる器形である。大型の壺が想定される。

③ 鉢

破片数269点の出土。擂鉢の破片が最も多く、ほかに火炉とみられる資料などが見受けられる。

擂鉢は201点出土しており、口縁部の形状からすると概ね3種類が認められる。それぞれ、1点ずつ図示した。

第66図6は口縁部が直線的に開くものである。口縁上部はわずかに肥厚し、上面は内側へ傾斜する。内面のクシ目は10本単位で、隙間をあけて施される。外面にはロクロ回転痕が明瞭にみられる。

7も直線的に開く口縁部資料である。口縁上部は外側へ折れ、同直下にくびれを設けることによって、胴部との境に稜をつくりだす。口縁上面はわずかに内傾。内面のクシ目は一部が認められるだけで、詳細は不明。

8は口縁部がほぼ直口するもので、胴下部ではやや丸みを有する器形が想定される。口縁上部は水平に屈折し、同上面には1本の沈線がめぐる（他資料では沈線2本もある）。内面はクシ目を満面に施したあと、口縁下2.5～3.0cmの幅をなで消している。口径は推算30cm。

今回出土した口縁部資料の中で、擂鉢と同様の器形を示すが、小破片のため内器面のクシ目の有無が確認できず、擂鉢か否か判別の困難なものが45点ある。これまでの報告例に、擂鉢の器形を有しながらも内器面にクシ目を施さない例（註2）もあることから、あるいはこの種の鉢になる可能性もある。1点を図示した。

9は口縁部の開きが弱く、口縁上部を水平に屈折させるなど前記8の擂鉢と同様の形状を示すものである。小破片のためクシ目の有無が確認できない。口縁の上面には、8と同じように沈線をめぐらしている。

10～12は擂鉢の底部資料である。

10は平底で、立ち上がりは斜めに開き、内側へやや湾曲しながら胴部へ移行する。内器面のクシ目は満面に施される。クシ目は10本前後を一組とするようである。器形や内面のクシ目のようすなどから、本資料は前述の口縁部資料8と同種の擂鉢の底部と考えられる。底径は12cm。

11・12は脚台資料で、脚は「ハ」の字形に開く。2点とも胴部への立ち上がり部は残らないが、11は内底面がわずかに残存し、クシ目が確認される。11の場合は脚の下端部がわずかにふくらむ。12の外面下部には2本の沈線が横走する。11は底径の推算9.8cm。

13は直線的に開く鉢の口縁部資料である。口縁上端はほぼ直立し、同外面には横方向にくびれを設け、明瞭な稜が形成される。外面に極細の沈線がわずかに認められるが、文様かどうか判別し難い。本資料は内外面および破損部ともに灰褐色を帯び、他資料とは異質の感を受ける。

14も直線的に開く口縁部資料である。上部を外側へ屈折させる点に特徴があり、内面には明

瞭な稜がつくられる。外面は胴上部から口縁上端までスムーズに移行する。

第67図1・2は口縁部が内側へ屈折するものである。この種の器形は後述の軟質陶器にも見受けられる。火炉と思われる。

1は口縁上部が内側へ屈折するもので、同以下は直線的に胴部へのびるもようである。屈折部には2本の沈線がめぐる。口径は推算12cm。

2は屈折部の幅が1に比べて長いもので、口縁上位に1本の沈線を施す。破損部には穿孔の痕がみられる。

④ 浅鉢

口縁部資料15点の出土。すべて内彎の器形を示すもので、外面には櫛描きの波状文を施す。口縁上端の形状に2種認められ、それぞれ1点ずつ図示した。

第67図3は口縁上端部が外側へ張り出すものである。外面には4本一組の波状文を描く。内外面ともロクロ回転痕が明瞭にのこる。口径は推算17.8cm。

4は口縁上端部の張り出しはみられず、口唇は舌状を呈する。この種は本資料1点のみの出土である。文様は8本一組の波状文を施し、その上下に横位の沈線をそれぞれ1本ずつ配する。器面の保持が悪く、文様の不鮮明な箇所もある。

⑤ 皿

全形の窺える資料が1点出土した。第67図5に示すものである。底部は平底で、立ち上がりはやや丸みをもって開き、口縁部は直口する。口縁上部には煤の付着がみられることから、燈明皿と考えられる。口径10.6cm、底径5.6cm、器高3.0cm。

⑥ 瓶

明かに瓶と解されるものは第67図6の底部資料1点である。平底で、立ち上がりから胴部へはほぼ垂直にのび、現存資料だけをみると、円筒に近い形状を示す。小型のわりには器壁は厚く（1cm強）、内器面にはロクロ回転痕が顕著にのこる。底径は推算6.2cm。

⑦ 蓋

第67図7の1点である。甲はやや盛り上がりがみられ、縁辺には鍔を有し、内面にはかえしがつく。甲中央は欠失するため、つまみの形状は不明。鍔の直径19.8cm、かえしは16.4cm。

器種不明

破片が小さく器種の判別が困難な資料である。口縁部片2点、底部片5点を掲載した。

第67図8・9は口縁部資料である。

8はほぼ直口するものである。口縁上端はわずかに膨らみをみせ、口唇部はやや丸みをおびるものの平坦に近い。現存資料からすると、形状が円筒に近い鉢の可能性も考えられるが、判然としない。外面には2本の沈線が施される。

9は口径の推算が6.2cmの小型品である。口縁部は直線的に開き、口唇部は丸みをおびる。口縁上位に浅い沈線が1本みられる。

10～14は底部資料である。いずれも平底。

10・11は大型の甕、あるいは壺の底部とみられるもので、10が直線的に立ち上がるのに対し、11は微弱なカーブを示しながら胴下部へ移行する器形である。10の外面下端部はわずかに面取りが行われる。底径は推算によると10が13.4cm、11が12.8cm。

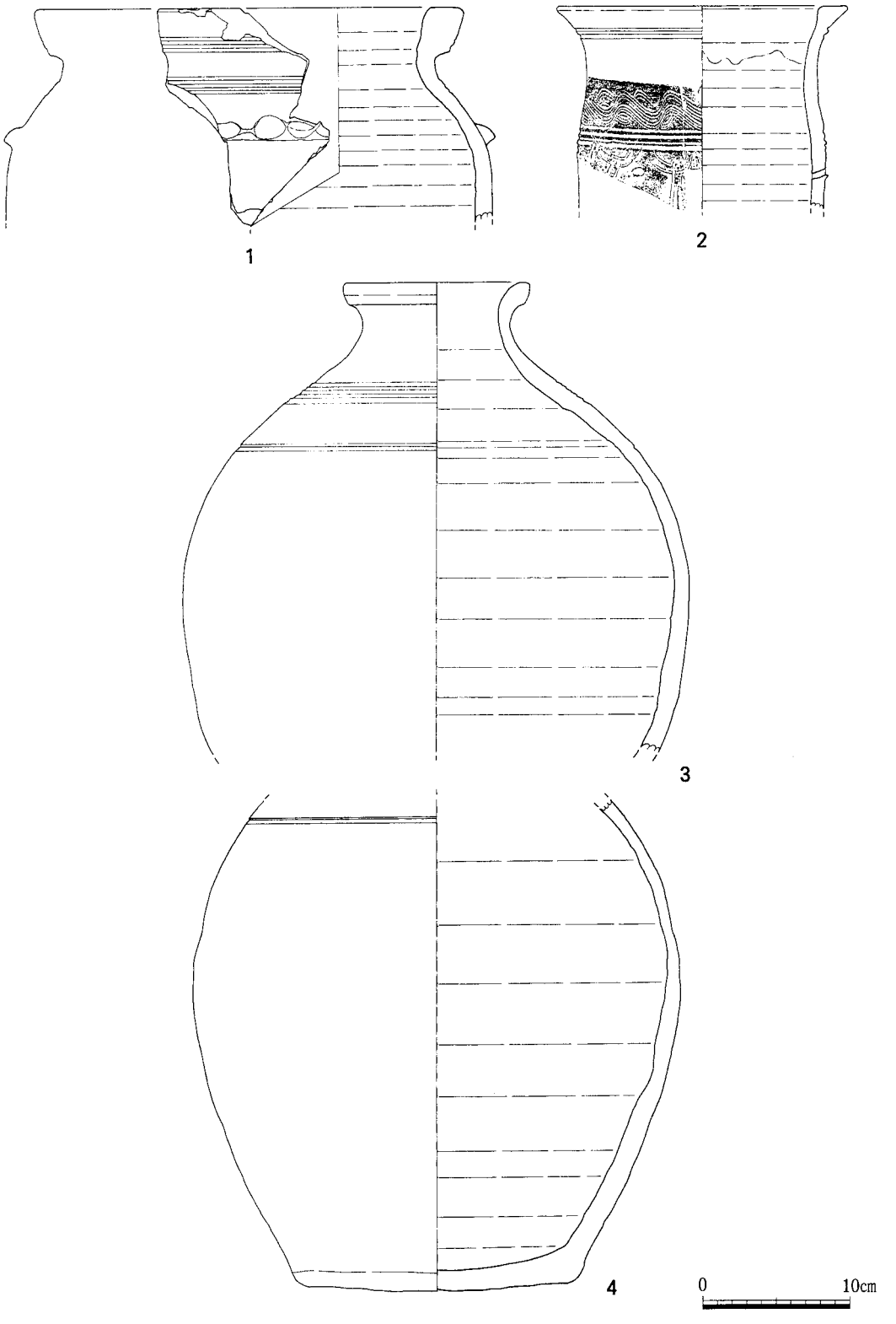
12・13は底径が小さく、立ち上がり部の開きが弱いもので、小型の壺か、あるいは瓶の底部と考えられる。内器面には2点ともロクロ回転痕が観察され、13はとくに明瞭である。底径は12が8.2cm、13が7.4cm。

14は立ち上がり部の開きが大きい資料である。皿などの器種が考えられるが判然としない。

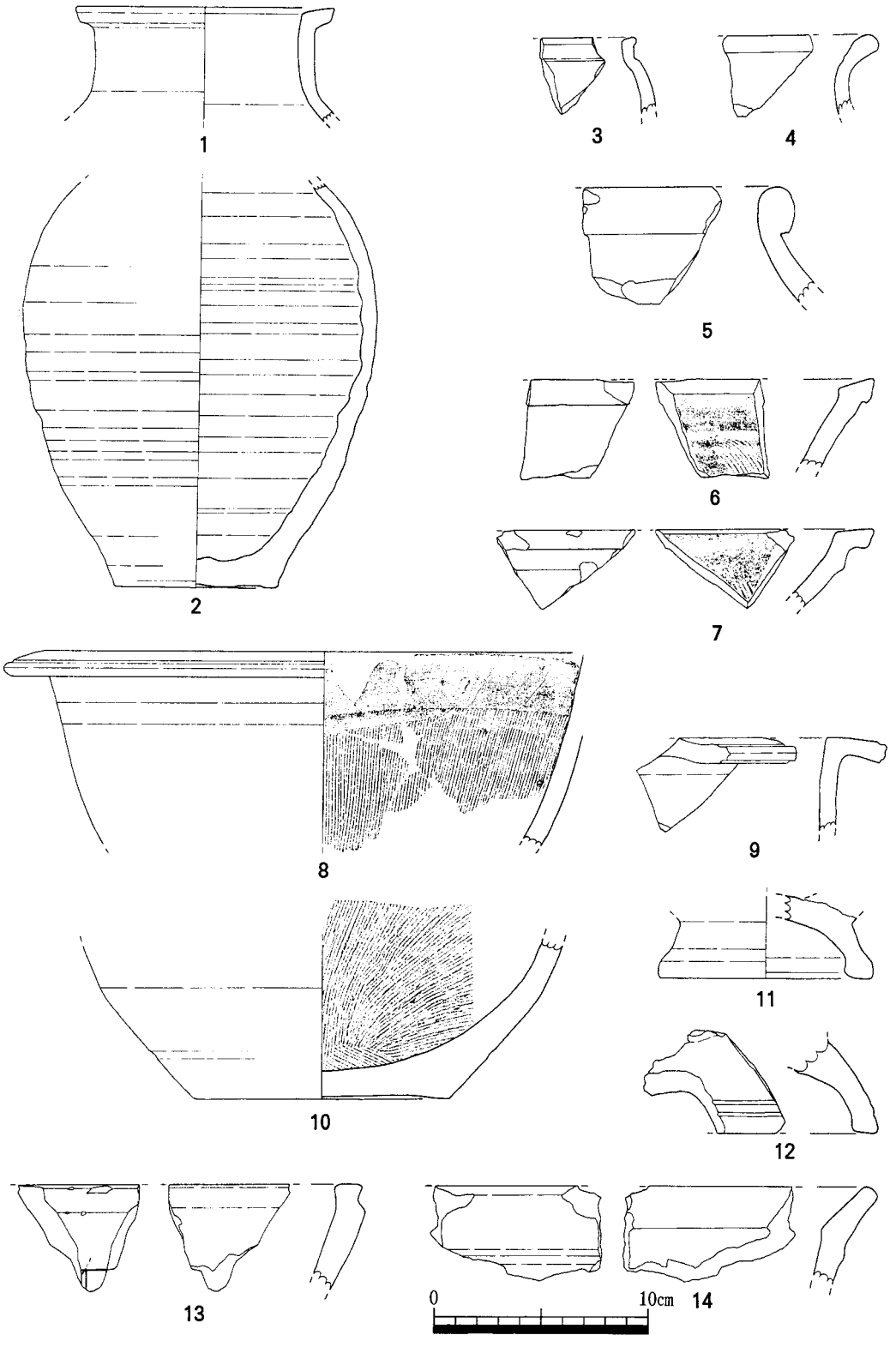
註

1：浦添市教育委員会『城間古墓群』浦添市教育委員会　1990年3月

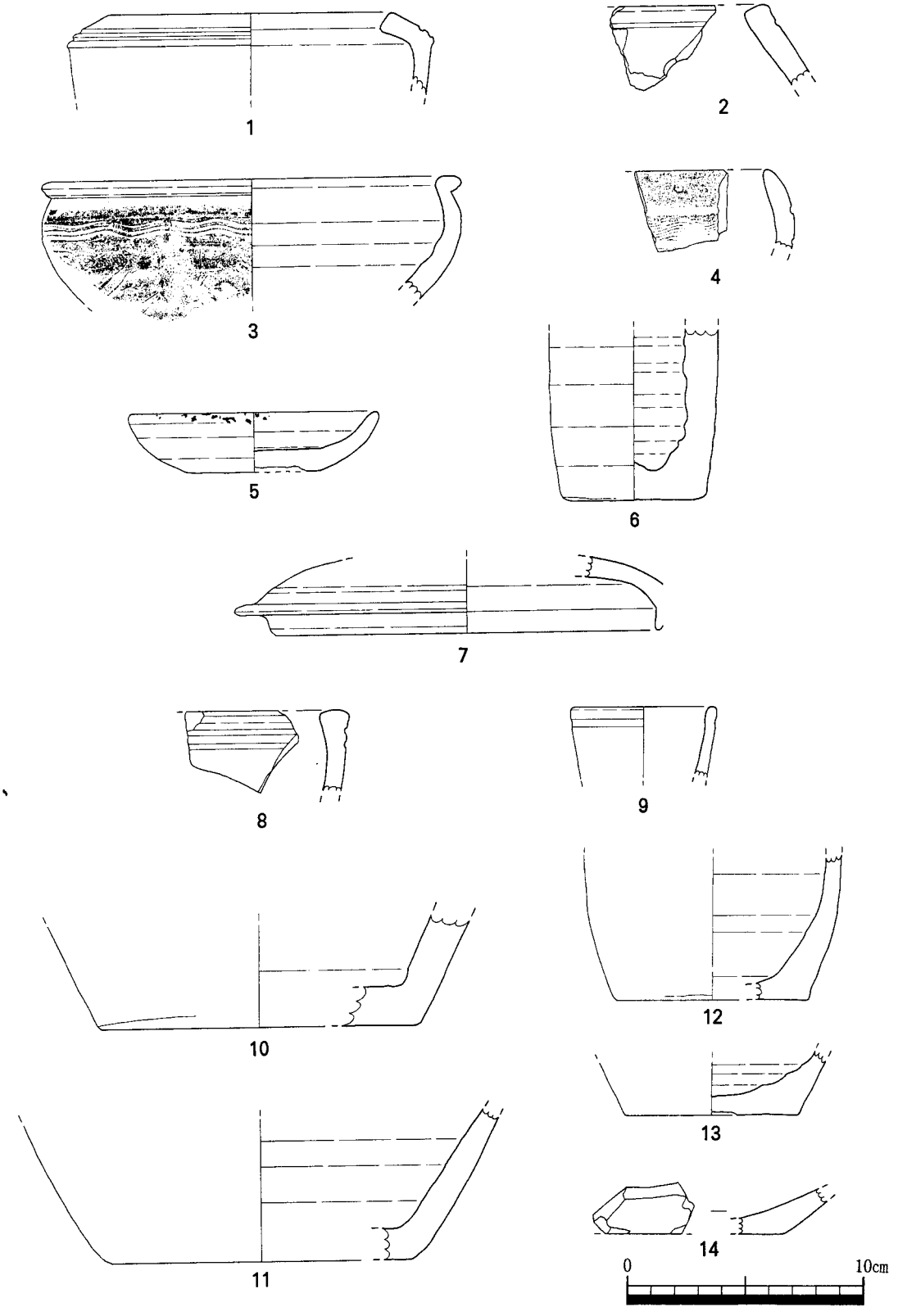
2：那覇市教育委員会『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第18集　1991年3月



第65図　沖縄産無釉焼き締め陶器 1



第66図　沖縄産無釉焼き締め陶器 2



第67図　沖縄産無釉焼き締め陶器３

(4) 軟質陶器

那覇市の壺屋産とされ、「アカムヌー」（註１）と呼ばれる焼物の一群である。一般的な特徴としては胎土は精選され細かく、成形はロクロ引き、焼成は窯を使用し、器色は黄褐色ないし橙褐色を基調とすることなどがあげられる。

破片数で1351点出土した。器種には鍋、浅鉢、鉢、壺、注口、蓋などが見受けられる。ほとんどが破片で全形の窺えるものは少ない。以下、これらについて略述するが、実測図については良好な資料のみを掲載した。なお、注口とみられる資料に注ぎ口や把手などが出土しているが、極小破片のため図および記述を割愛した。

① 鍋 形

116点の出土。鍋は口縁部を「く」の字状に屈折させる点に特徴があり、屈折した口縁部の内面は蓋受けとなる。また、同部外面には一対の把手がつくようで、底部はこれまでの報告例（註２）からすると、底の広い丸底のようである。

本遺跡出土資料について口縁内面（蓋受け部）の形状を詳しくみると、次の３種類が認められた。

Ⅰ：口縁内面（蓋受け部）が平坦なもの。

Ⅱ：口縁内面（蓋受け部）がゆるやかな凹面となるもの。

Ⅲ：口縁端部がつまみあげたように上方へ突出するもの。

上記Ⅱ・Ⅲについては蓋がずれないようにするための工夫とみられる。

第68図１は上記Ⅰに属するもので、出土した鍋の中では比較的口縁部（蓋受け部）の幅が短い資料である。器色は橙褐色だが、蓋受け部の途中から器内面にかけては赤褐色に変色している。口径は推算19.8cm。

２は上記Ⅱに含まれるものである。外面は頸部から口縁部にかけて煤けた部分がみられ、口縁外面には把手の接着部分がわずかにみとめられる。口径は推算24cm。

３は上記Ⅲの資料である。蓋受け部はやや平坦につくられるが、口縁端部は上位へわずかに突出する。口径は推算20.6cm。

４は底部資料である。丸底で部分的に煤の付着がみられる。また、底面は全体的に淡い灰褐色に変色しており、使用時の火熱によるものとおもわれる。

② 浅 鉢 形

20点出土。すべて口縁部資料で、いずれも内彎する器形である。有文と無文とがあり、前者の場合、沈線文や波状文によって描かれる。施文は口縁上部に限られるようである。以下、浅鉢の代表的な資料３点について略述する。

第68図５は沈線文と波状文を組み合わせるもので、櫛描きの波状文を横位に施し、その上位に幅４㎜の沈線を配する。波状文は７条１組のようである。口縁上部はわずかに肥厚する。

口径は推算21.2cm。

6は沈線のみが施されるものである。沈線の幅は4㎜。口径は推算14.8cm。

7は無文の資料である。

③ 鉢形

口縁部21点、把手12点の出土。これらは火炉あるいは火鉢などが考えられる。口縁部資料の器形をみると、概ね4種類がみとめられる。

第68図8は口縁部がゆるやかに内彎するもので、内面には台形状の突起がつき、同先端には煤けた部分がある。

9は口縁上部が内側へ屈折するものである。胴部から底部へは直線的に伸びるもよう。屈折部の直下には破損した把手の一部がみられ、残存部の状況からすると、把手は上面観が半円状か、台形に近い形状と考えられる。口縁部には2本の沈線が囲繞する。口径は推算12.8cm。

10は9と同様、口縁部が内側へ屈折するものであるが、屈折部の幅が長いものである。同部には1本の沈線がみとめられる。口縁内面は煤けて灰褐色を呈する。

11は口縁部が花鉢状に開くもので、上記8～10の資料に比べ、大型になるもよう。口縁上部は肥厚し、外面には微弱な段を有する。口縁上端部は内外面にわずかに張り出すため、口縁上面は幅広である。口縁上面の途中から内面にかけては、煤けて淡い灰褐色を呈する。

③ 壺形

12点出土した。すべて口縁部の破片で、残存資料から全形は球体に近い形状を呈していたものと推定される。水注の可能性がある。

第68図12は張りのある肩部に直立する口縁部をもつものである。内器面にはロクロによる回転痕が明瞭に残る。口径は推算6.6cm。

13は12とほぼ同様の器形を示すが、口縁部は12とは異なり微弱である。また、器壁が薄い点も本資料の特徴である。口径は推算7.2cm。

④ 蓋

71点の出土。つまみが宝珠状のものと、高台状のものとがあり、前者は水注、後者は鍋の蓋と推察される。

第68図14はつまみが宝珠状を呈するもので、内側には「かえし」をつくり、鍔を有する。甲はつまみの脇から鍔へゆるやかに傾斜する。直径は鍔が8.9cm、「かえし」が6.2cm。高さ3.3cm。

15は高台状のつまみを有するもので、つまみはわずかながら逆「ハ」の字形に開く。縁辺部は欠失するが、現存資料からするとつまみの脇から縁辺部へはゆるやかなカーブを描きながら移行する器形とみられる。つまみの径は推算7.0cm。

底部資料

破片が小さく器種の明確でない資料をここで扱った。130点出土。平底や丸底、脚付きなどが見受けられ、その中から代表的なものを図示した。

第68図16・17は平底の資料である。

16は底部からの立ち上がりが斜めに開いていくもので、胴部へはほぼ直線的に移行する。外底面には糸切り痕が観察される。サイズおよび形状から推察すると、浅鉢の可能性が高い。底径は11.2cm。

17は底部からほぼ垂直に立ち上がるもので、外面下端部は斜めに面取りされる。内器面は剥落。鉢形の底部か？。底径は推算11.6cm。

18は碁笥底をなすもので、立ち上がりは斜めに開く。底径は推算7.4cm。

19は丸底の底部に円錐状の脚をつけたもので、水注か、あるいは鍋の底部が考えられる。

20は上面観が四角形を呈する器形が考えられ、コーナー部には脚をつくる。上面は凹部をなし、周囲には縁を設けることから、「膳」のような形状が想定される。胎土に籾がらの混入がみとめられる。この種の資料は隣接する城間遺跡においても出土している（註３）。

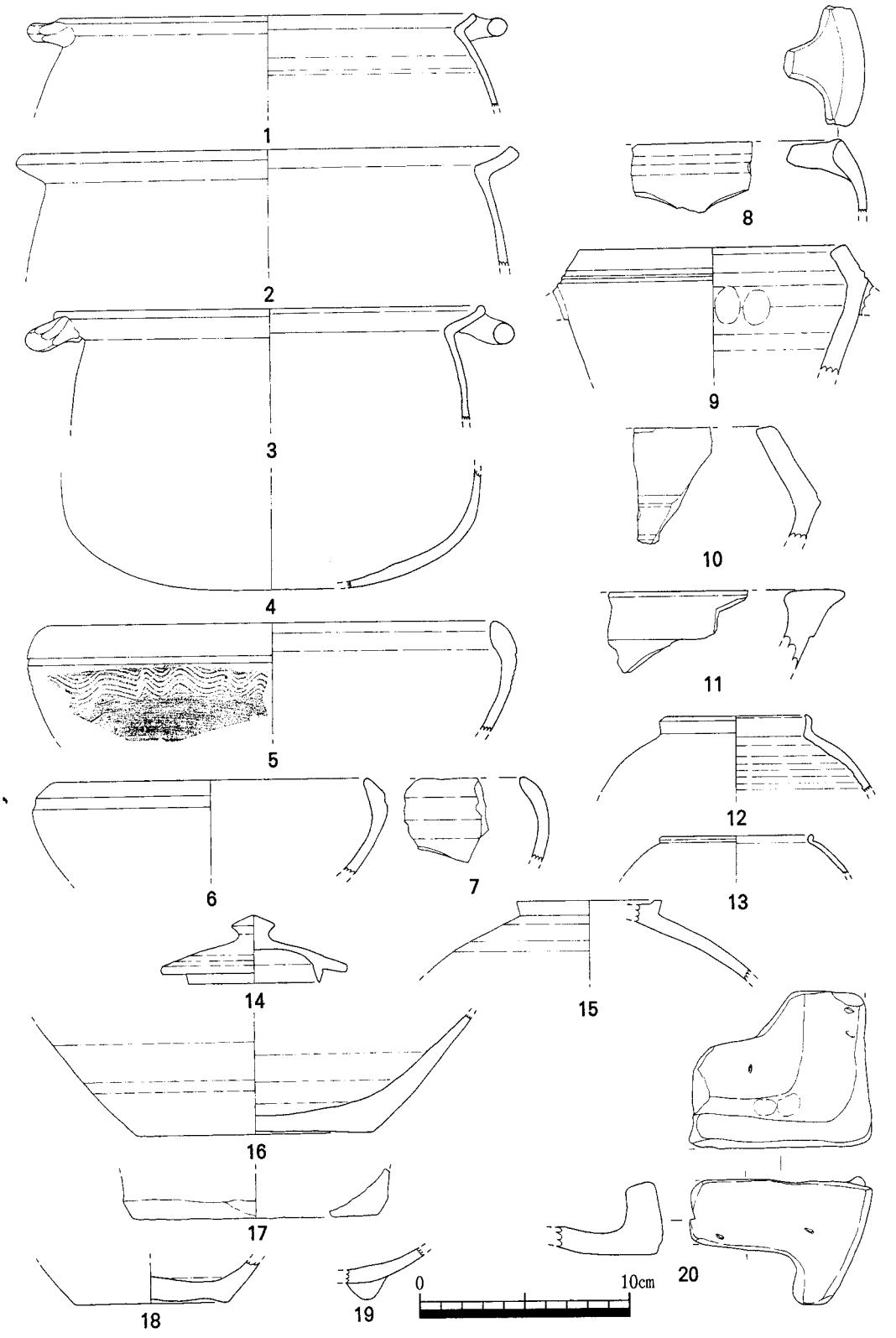
註

１：沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年

２：豊見城村教育委員会『伊良波西遺跡』豊見城村文化財調査報告書第１集 1986年３月

〃：沖縄県教育委員会『安仁屋トウンヤマ遺跡』沖縄県文化財調査報告書第105集 1992年３月

３：浦添市教育委員会『城間遺跡』浦添市文化財調査報告書第19集 1992年３月



第68図　軟質陶器

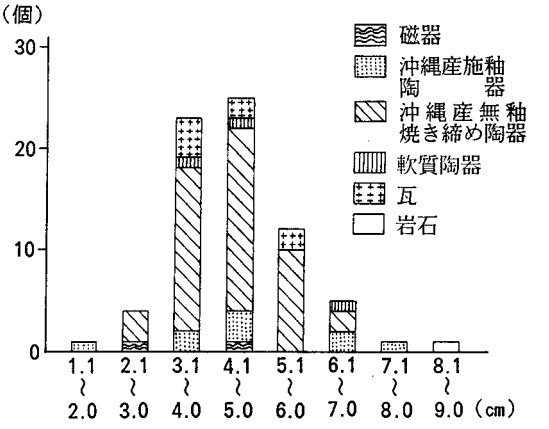
6　円盤状製品

陶磁器や瓦などの破片を、打割によって円盤状につくりだしたものである。72点得られた。素材についてみると中国・本土産の磁器や、施釉陶器・無釉焼き締め陶器・軟質陶器・赤瓦などの沖縄産陶器のほか、石製が1点出土している。数量的には沖縄産無釉焼き締め陶器を利用したものが49点と圧倒的に多く出土しており（全体の約68%）、次に沖縄産施釉陶器の9点（約12.5%）となっている。

加工については前述のように打割によるものだが、第68図11の瓦製のように打割のあと、さらに側面を研磨仕上げするものや、同図12の石製のように部分的に敲打仕上げするものもみられる。打割は外面から施す例が多く、粗いものからやや丁寧なものまでみられる。

素材が器物のものについてその利用部位をみると、胴部片を利用したものが全体の約90%を占め、他は底部利用のものである。後者は高台の脇（腰部）を打ち欠き、高台を含めたまま円盤状につくりだすのが通常のようであるが、同図1のように高台内の平坦部分のみを利用する資料もある。

サイズは最大径4cm台のものが最も多く、最小は同図3（沖縄産施釉陶器製）の1.8cm、最大は同図12（石製）の8.3cmである。円盤状製品の素材・サイズ別の出土状況は第12表および第69図に示した。また、代表的な資料については実測図を掲載し、これらについては第13表で以って個別の観察を記した。



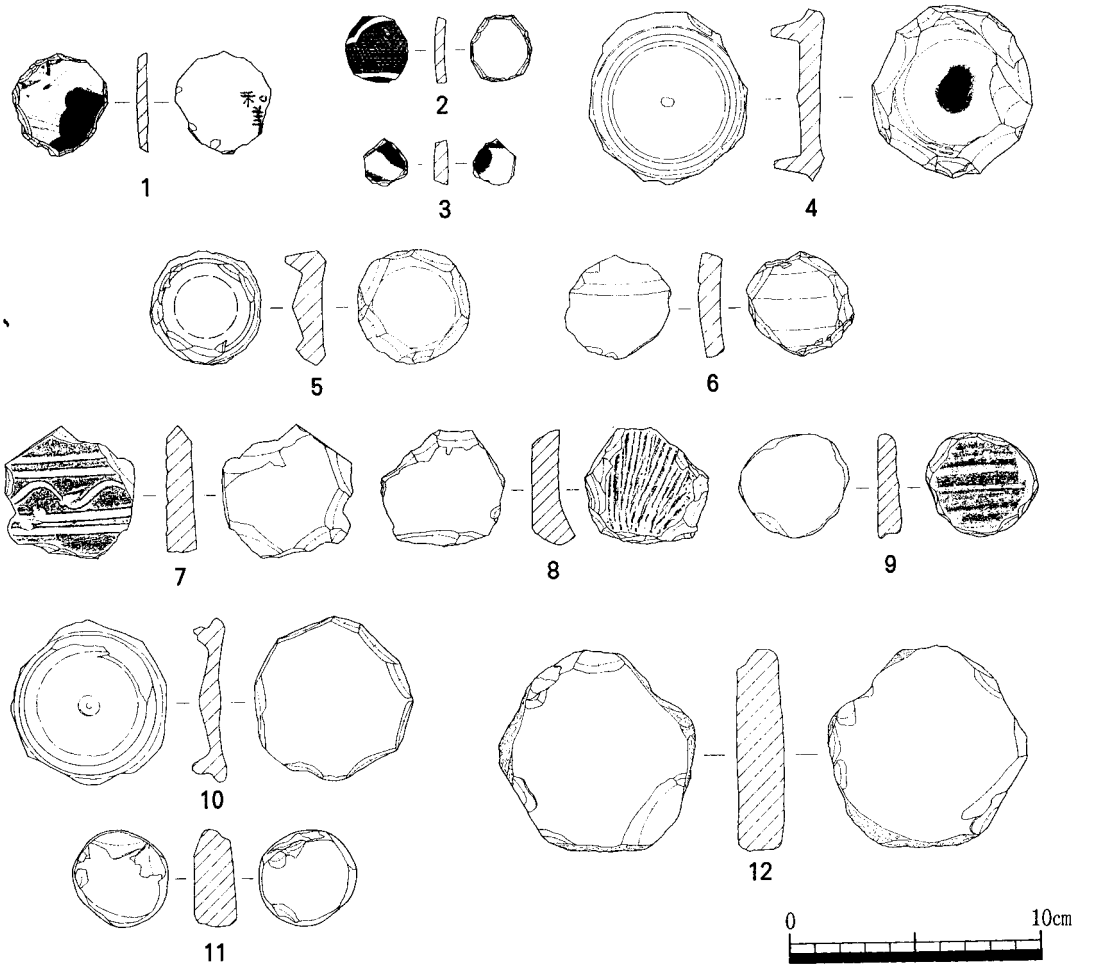
第69図　素材及びサイズ別の数量

第12表　円盤状製品の素材及びサイズ別の出土状況

素材 / 最大長（cm）	磁器						陶器									瓦	石	計
	中国産			日本産			沖縄産施釉			沖縄産無釉焼き締め			軟質陶器					
	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底			
1.1〜2.0								1										1
2.1〜3.0					0						3							4
3.1〜4.0								2			16			1		4		23
4.1〜5.0			1					2	1		18			1		2		25
5.1〜6.0											10					2		12
6.1〜7.0									2		2				1			5
7.1〜8.0									1									1
8.1〜9.0																	1	1
小　計			1		1			5	4		49			2	1	8	1	72
素材別計	1			1			9			49			3			8	1	72

第13表　円盤状製品の個別観察　（単位：cm／g）

挿図番号	素材 種類	器種	部位	サイズ 最大径	厚さ	現重量	備考	出土地点
第70図 1	中国産磁器	皿？	底	4.1	0.5	10	染付。外底に「和美」。外面より丁寧に打割。	表　採
〃　2	本土産磁器	碗？	胴	2.7	0.4	6	銅版刷り。外面より丁寧に打割。	け－24
〃　3	沖縄産施釉陶器	碗	〃	1.8	0.5	3	白釉有文。出土資料中で最小。	け－21
〃　4	〃	〃	底	6.9	2.0	68	釉はかけ分け。高台脇を外面より打割。	ち－26
〃　5	〃	小碗	〃	4.6	1.6	32	白釉。高台脇を外面より打割。	く－21
〃　6	沖縄産無釉焼き締め陶器	壺	胴	4.4	0.8	22	外面に横位沈線。外面よりやや丁寧に打割。	つ－22
〃　7	〃	甕	〃	5.3	1.0	41	外面に横位沈線と波状文。主に外面より打割。	す－26
〃　8	〃	擂鉢	〃	5.0	1.1	44	内面に粗いスリ目。内外両面より打割。	せ－20
〃　9	軟質陶器	不明	〃	4.4	0.8	18	外面より打割。縁辺部は磨耗。	け－19
〃　10	〃	〃	底	6.4	1.3	39	高台脇を外面より打割。蓋の可能性もある。	ち－25
〃　11	瓦	－	－	3.9	1.6	30	側面を研磨によって仕上げる。	つ－22カク
〃　12	石	－	－	8.3	1.8	225	板状の自然石を利用。側面に敲打痕あり。	ち－32



第70図　円盤状製品

7　銭　貨

寛永通寶２点（第71図１・２）と大正年間の通貨１点（同図３）が出土した。

8　煙　管

煙管には①施釉陶製、②無釉陶製、③金属製の３種類がみられる。以下、それぞれについて略述するが、いずれも残存状況の比較的良好な資料についてのみ図示した。

①　施釉陶製

雁首５点、吸い口１点の出土。雁首については３点を図示した。

第71図４～６は雁首である。４・５は透明釉を施すもので、素地が白いため白色を発する。６は灰白色の釉。施釉範囲についてみると、３点とも羅宇接続部外面の縁辺を露胎とする点で共通するが、内面はそれぞれ異なっている。施釉範囲は断面図に「→」で示した。

同図７は吸い口である。前述の４・５の雁首と同じく、釉は透明で素地の色が透きとおって白く発色する。外面から吸い口内面まで施釉。

②　無釉陶製

雁首が２点出土したが、いずれも破損品の為、破片の大きい方１点を図示した。

第71図８は羅宇接続部の資料で、管状を呈する。外面は８面に面取りされるが、加工はやや雑で、面の幅は一定しない。色調は茶褐色。

③　金属製

雁首２点、吸い口１点出土した。いずれも青銅製とみられる。

第71図９・10は雁首で、２点とも火皿を欠く。いずれも一枚の薄い金属板を管状に巻いてつくられる。10は９に比べて厚い金属板を利用しており、やや重量感がある。

同図11は吸い口で、雁首と同様一枚の金属板を巻いてつくられる。吸い口の端部は内側へ折り曲げている。

9　かんざし

10点出土した。いずれも青銅製と思われる。これらは頭部の形態によって次の２種類に分けられる。

Ⅰ類：頭部は丸形で、スプーン状を呈するもの。

Ⅱ類：頭部は細長の楕円形で、耳かき状を呈するもの。

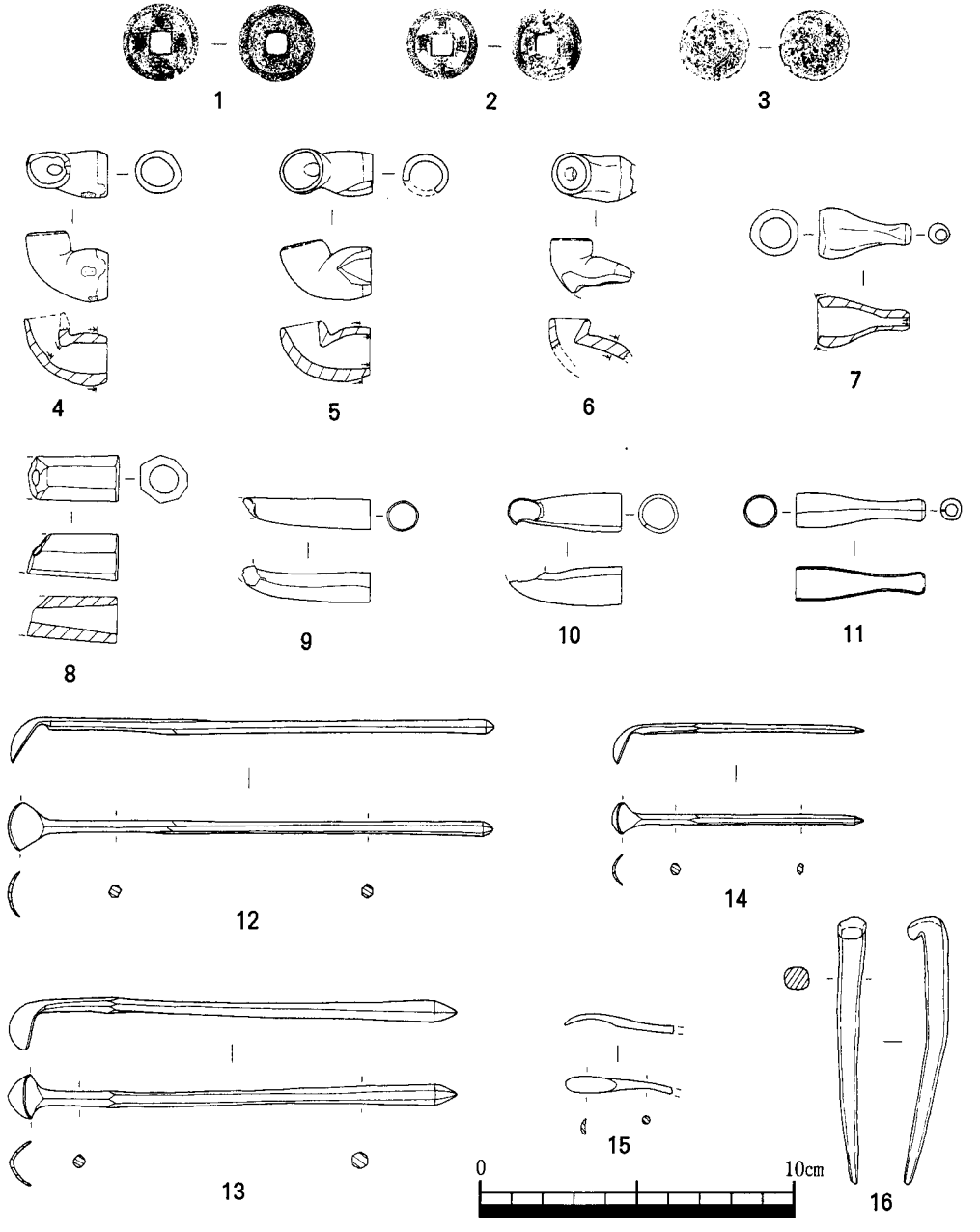
Ⅰ類の資料は４点で、長短２種みられる。３点を図示した（第71図12～14）。いずれも頭部は竿に対してほぼ直角に折れる。竿は面取りが施され、断面は六角形となる。竿の先端は角錘形。12は全長15.4cmで、せー21グリッドの石列から出土した。13は全長14.4cm、14は8.0cm。

Ⅱ類に含め得るものは同図15に示す資料のほか、竿の破片が５点出土している。14は首部から頭部にかけての資料で、頭部はⅠ類のように屈折することなく首部からほぼストレートにの

びる。首部の断面は円形。

10　角　釘

第71図16の１点で、頭部はＬ形に屈折し、身の断面は方形をなす。先端はわずかに欠ける。全長は8.6cm。



第71図　銭貨（１～３）、煙管（４～11）、かんざし（12～15）、角釘（16）

沖縄県浦添市嘉門貝塚B区の動物遺存体

金子浩昌

はじめに

嘉門貝塚は沖縄本島における重要な後期貝塚の一つであった。A・B区における貝塚が調査され、A地区については昨年度報告され、今回はそれに次ぐB地区の報告である。貝塚から検出された貝類以外の動物種について報告する。貝塚の動物遺存体は食料資源の在り方を確かめる重要な資料であり、またその背景となった自然的な条件を知る手掛かりになるものである。その一端については前回の報告中にも述べたが、現在この時期の重要な遺跡の研究が他の地域でも進められている。それぞれの遺跡における動物遺存体の在り方が次第に明らかにされており、沖縄古文化の基幹ともなる重要な知見が得られている。今回の調査に当たって市教育委員会の松川章氏に大変お世話になり、また資料整理には又吉純子、仲宗根菊江、高良京子の諸氏に協力を頂いた。厚く御礼を申し上げたい。

Ⅰ.節足動物

カメノテ

嘉門貝塚A地区ではみられず今回はじめて検出されたものである。Ⅳ層に集中してみられ意図的に採取されたものと思われる。殻の総数は特に多いものとはいえないが、出土例としては珍しいといえよう。殻板の部分ではなく柄部の中にある太い筋肉が食用にされるという。この時代にも同様の利用の仕方があったのであろうか。

カメノテ出土状況

出土地点	層	個数
こ－19	Ⅳ	1
さ－19	Ⅳ	5
さ－20	Ⅳ	6
さ－22	Ⅳ	1
し－20	Ⅰ	3
	Ⅳ	4
し－21	Ⅰ	1
	Ⅳ	17
し－23	Ⅳ	2
し－26	Ⅰ	1
す－20	Ⅳ	4
す－21	Ⅳ	5
せ－20	Ⅳ	2
せ－21	Ⅳ	2
せ－22	Ⅳ	8
せ－24	Ⅳ	1
そ－24	Ⅳ	1
そ－24	不明	1
そ－25	Ⅳ	1
た－24	Ⅳ	6
た－25	Ⅳ	1
ち－25	Ⅳ	1
つ－22	Ⅰ	3
つ－25	Ⅳ	9
て－24	Ⅳ	1
合計		87

節足・脊椎動物遺存体種名表（貝塚時代後期所属）

Ⅰ節足動物門　Ⅰ Phylum ARTHROPODA

甲殻綱　Crass Crustacea

軟甲亜綱　Subclass Malacostracea

十脚目　Order Decapoda

短尾亜目　Suborder Brachyura

ワタリガニ科　Family Portunidae

ノコギリガザミ　*Scylla Xanthidae*

オオギガニ科？　Family Xanthidae?

属・種不明　Ge.et sp. indet

Ⅱ棘皮動物門　Ⅱ Phylum ECHINODERMATE

ウニ綱　Class Echinoidea

目・科不明　Ord.et fam. indet.

Ⅲ脊椎動物門　Ⅲ Phylum VERTEBRATE

a.軟骨魚網　a. Class Chondrichthyes

サメ目　Order Lamniformes

ネズミザメ科　Faily Lamnidae

ホオジロザメ

b.硬骨魚骨　b. Class Osteichlhyes

ウナギ目　Order Anguillformes

ウツボ科　Family Muraenidae

属・種不明　Ge. et ap. indet.

スズキ目　Order Perciformes

スズキ科　Family Serranidae

ハタ類

フエダイ科　Family Lutjanidae

属・種不明　Ge. et sp. indet.

タイ科　Family Sparidae

ミナミクロダイ　*Acan Ihopagrus siuicolus*

フエフキダイ科　Family Lethrinidae

ハマフエフキ　*Lethrinus nebulosus*

ベラ科　Family Labadae

属・種不明　Ge. et sp. indet.

ブダイ科　Family Scaridae

ナガブダイ　*Scarops rubrouiolaceus*

イロブダイ　*Bolbonmetopom bicolor*

ナンヨウブダイ　*Scarus gibbus*

フグ目　Order Teraodontiformes

フグ科　Family Tetraodontidae

属・種不明　Ge. et sp. indet.

モンガラカワハギ科　*Family Balistidae*

属・種不明　Ge. et sp. indet.

C.爬虫網　C.Class Reptilia

カメ目　Order Chelania

ウミガメ科　Family Chelonidac

アオウミガメ　*Chelonia mydas*

d.哺乳網　d. Class Mammalia

クジラ目　Order Cetacea

属・種不明　Fam. et gen. indet.

食肉目　Order Canirora

イヌ科　Family Canidae

イヌ　Canis familiaris

海牛目　Order Sirennia

ジュゴン科　Family Dugongidae

ジュゴン　*Dugong dugon*

偶蹄網　Order Artiodactyla

イノシシ科　Family Suidae

リュウキュウイノシシ　*Suslemcomytax riukiuanus*

ノコギリガザミ

A地区よりもやや多くのはさみ脚が出土しているが、他のカニ類の検出例に比べると少ないようである。標本ははさみの脚の不動歯及び可動歯で、可動歯がやや多いのは他のカニ類のはさみ脚についても言えるようである。外れやすい可動歯が遺構内に多く残されたのではないかと考えられる。

ノコギリガザミ出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
さ－20	Ⅳ	可動指	左	2
し－22	Ⅳ	不動指	右	1
し－23	Ⅳ	可動指	左	1
す－20	Ⅳ	可動指	右	1
す－21	Ⅳ	不明	不明	1
す－23	Ⅳ	不動指	左	1
せ－23	Ⅳ	不動指	左	1
せ－24	Ⅳ	可動指	左	1
そ－26	Ⅳ	可動指	左	1
ち－24	Ⅳ	可動指	右	1
つ－25	Ⅳ	不明	不明	1
合計				12

モクズガニ

ノコギリガザミに比べると、出土量は少なく、また其ほど大きい個体の標本はない。残されていたのはすべて可動歯のみであったが、これもノコギリガザミのところで述べたような理由があったのではなかろうか。

モクズガニ出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
さ－20	Ⅳ	可動指	右	1
し－20	Ⅳ	可動指	右	1
し－20	Ⅳ	可動指	左	1
し－21	Ⅳ	可動指	右	1
そ－24	Ⅳ	可動指	右	1
つ－24	Ⅳ	可動指	右	1
つ－25	Ⅳ	可動指	右	1
合計				10

その他のカニ類

小型のワタリガニあるいはイワガニ科のはさみ脚と歩脚片が多数出土している。これらについては標本の保存が良くないのと、比較標本が充分でないので詳細はふれないことにしたい。

カニ種類不明出土状況

出土地点	層位	部位	左・右	個数
こ－20	Ⅳ	可動指	左	1
		不動指	右	3
こ－21	Ⅳ	不動指	左	4
		脚	不明	12
さ－19	Ⅳ	不動指	右	1
		脚	不明	3
さ－20	Ⅳ	不動指	左	2
		脚	不明	8
さ－21	Ⅳ	脚	不明	1
さ－22	Ⅳ	可動指	左	1
し－19	Ⅳ	脚	不明	5
し－20	Ⅰ	脚	不明	6
	Ⅳ	可動指	左	1
		脚	不明	1
し－21	Ⅰ	脚	不明	1
	Ⅳ			11
し－23	Ⅳ	脚	不明	8
す－19	Ⅳ	脚	不明	2
す－20	Ⅳ	可動指	左	1
		可動指	右	1
		脚	不明	1
す－21	Ⅳ	不動指	左	1
		脚	不明	1
す－22	Ⅳ	脚	不明	2
す－23	Ⅳ	不動指	不明	2
		脚		2
す－24	Ⅳ	脚	不明	1
せ－19	Ⅳ	可動指	左	1
せ－20	Ⅳ	脚	不明	1
せ－22	Ⅳ	可動指	左	1
		不動指	右	1
		脚	不明	5
せ－23	Ⅳ	脚	不明	4
せ－24	Ⅳ	脚	不明	4
そ－20	Ⅳ	不動指	左	1
そ－22	Ⅳ	脚	不明	2
そ－23	Ⅳ	脚	不明	5
そ－24	Ⅳ（テストトレンチ）	不動指	右	1
		脚	不明	5
そ－26	Ⅳ	脚	不明	3
た－22	Ⅳ	脚	不明	1
た－24	Ⅳ	脚	不明	3
た－26	Ⅳ	脚	不明	1
ち－23	Ⅳ	脚	不明	2
ち－24	Ⅳ	脚	不明	1
ち－26	Ⅳ	可動指	左	1
		脚	不明	1
つ－22	Ⅳ	不動指	右	1
		脚	不明	1
つ－23	Ⅳ	脚	不明	1
つ－25	Ⅳ	可動指	左	1
		可動指	右	1
		脚	不明	4
つ－24	Ⅳ	不動指	左	1
		脚	不明	2
合計				138

Ⅱ棘皮動物

ウニ類

大量の棘、殻片が検出されている。

ウニ出土状況

出土地点	層	部位	個数
け － 19	Ⅳ	棘	1
こ － 19	Ⅳ	棘	1
こ － 20	Ⅳ	棘	2
こ － 21	Ⅰ	棘	1
さ － 19	Ⅳ	棘	3
		甲	1
さ － 20	Ⅳ	棘	2
		甲	2
	Ⅰ	棘	1
さ － 21	Ⅳ	棘	2
さ － 22	Ⅳ	棘	1
し － 19	Ⅰ	棘	1
	Ⅳ		1
し － 20	Ⅰ	棘	3
		甲	5
	Ⅳ	棘	10
		甲	1
し － 21	Ⅰ	棘	1
	Ⅳ	甲	24
		棘	14
し － 22	Ⅳ	棘	1
す － 20	Ⅳ	甲	1
		棘	4
す － 22	Ⅳ	甲	4
		棘	4
す － 23	Ⅳ	棘	1
せ － 19	Ⅳ	棘	1
せ － 20	Ⅳ	甲	2
		棘	1
せ － 21	Ⅳ	棘	8
せ － 22	Ⅳ	棘	4
せ － 23	Ⅳ	棘	1
せ － 24	Ⅳ	棘	1
		甲	1
そ － 20	Ⅳ	棘	3
そ － 22	Ⅳ	棘	1
そ － 24	Ⅳ	甲	18
		棘	2
	テストトレンチ	甲	2
そ － 25	Ⅳ	甲	3
		棘	1
そ － 26	Ⅳ	甲	1
		棘	3
た － 24	Ⅳ	甲	8
た － 26	Ⅳ	甲	2
ち － 25	Ⅰ	甲	1
	Ⅳ	棘	1
		甲	2
ち － 26	Ⅳ	棘	1
つ － 22	Ⅰ	甲	5
		棘	4
	Ⅳ	棘	1
つ － 23	Ⅳ	甲	1
		棘	1
つ － 24	Ⅳ	甲	2
つ － 25	Ⅳ	棘	8
		甲	42
つ － 26	Ⅳ	甲	1
て － 20	Ⅳ	棘	1
て － 22	Ⅳ	棘	1
て － 23	Ⅳ	甲	1
		棘	1
て － 24	Ⅳ	甲	1
不明	表採	棘	1
合計			232

Ⅲ軟体動物

頭足類

コブシメ

沖縄の方言で”クブシミ”と言われる大型のイカ（コウイカのなかでは最大種）が出土している。甲の破片部分と、甲端の棘の部分の破片である。若干の大きさの違いがあったが、どれも大型の個体のものであった。この甲片を出土するのはどの遺跡でもと言うわけではなく、同じように多いのは具志川市の宇堅貝塚が知られているのみである。

コウイカ出土状況

出発地点	層	部位	個数
こ － 20	Ⅳ	甲片	2
さ － 20	Ⅳ	甲片	1
さ － 21	Ⅳ	甲端	1
さ － 22	Ⅳ	甲片	1
さ － 23	Ⅳ	甲片	1
し － 20	Ⅰ	甲端	4
	Ⅳ	甲端	2
		甲片	1
し － 21	Ⅳ	甲片	4
		甲端	2
し － 22	Ⅳ	甲片	6
し － 23	Ⅳ	甲端	1
す － 20	Ⅰ	甲片	1
す － 21	Ⅳ	甲片	7
す － 21	Ⅳ	甲端	1
す － 23	Ⅳ	甲片	1
す － 24	Ⅳ	甲端	1
せ － 20	Ⅳ	甲片	1
せ － 22	Ⅳ	甲片	2
せ － 23	Ⅳ	甲片	2
せ － 24	Ⅳ	甲片	5
		甲端	3
そ － 20	Ⅳ	甲片	1
そ － 22	Ⅳ	甲片	1
そ － 23	Ⅳ	甲端	1
そ － 24	Ⅳ	甲片	9
そ － 25	Ⅳ	甲片	5
		甲端	1
た － 24	Ⅳ	甲片	2
た － 25	Ⅳ	甲片	3
		甲端	1
た － 26	Ⅳ	甲片	1
ち － 25	Ⅳ	甲片	7
		甲端	1
ち － 26	Ⅳ	甲片	2
ち － 27	Ⅳ	甲片	1
つ － 24	Ⅳ	甲片	1
つ － 25	Ⅳ	甲片	15
		甲端	2
つ － 26	Ⅳ	甲片	4
		甲端	1
て － 23	Ⅳ	甲片	1
と － 23	Ⅰ	甲片	1
合計			111

Ⅳ脊椎動物

a．魚類

エイ類

軟骨魚類としてはエイ類の尾棘片を1点得て

エイ科出土状況

出土地点	層	部位	個数
し－22	Ⅳ	尾棘片	1

ウツボ類

歯骨が1点検出されているのみである。

ウツボ科出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
ち－26	Ⅳ	歯骨	左	1

ダツ類

前上顎骨、歯骨の各1点が確認されている。

ダツ科出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
さ－20	Ⅳ	前上顎骨	左	1
し－21	Ⅰ	歯骨	右	1

ハタ類

フエダイ類と区別のやや紛らわしい標本があるが、数は少ない。

ハタ科出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
さ－19	Ⅳ	前上顎骨	左	1
さ－21	Ⅳ	前上顎骨	左	1
す－21	Ⅳ	前上顎骨	右	1

フエダイ類

小数の前上顎骨、歯骨を検出している。

フエダイ科出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
こ－20	Ⅳ	前上顎骨	右	1
さ－19	Ⅳ	歯骨	左	1
し－20	Ⅳ	前上顎骨	左	1
不明	不明	前上顎骨	右	1

ハタ科またはフエダイ科出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
し－21	Ⅳ	歯骨	左	1

ミナミクロダイ

やや多い出土量である。

ミナミクロダイ出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
さ－19	Ⅳ	歯骨	不明	1
し－21	Ⅳ	前上顎骨	左	1
す－21	Ⅳ	歯骨	左	1
		前上顎骨	右	1
す－24	Ⅳ	歯骨	右	1
		歯骨	左	1

ハマフェフキダイ

本貝塚での主要魚種のひとつである。標本は前上顎骨の出土が特に多いのが目につく。これらの標本の計測値を基に体長復元をしてみると、最大のものは体長60cmに達し、40～50cmになるものが大部分である。常に大型の個体が漁獲できたことをよく示している。

ハマフエフキダイ出土状況

出発地点	層	部位	左・右	個数
こ－19	IV	前上顎骨	右	1
		歯骨	左	1
		方骨	左	1
		舌顎骨	右	1
こ－20	IV	前上顎骨	左	3
			右	2
			不明	1
		主上顎骨	右	1
		歯骨	右	1
			左	1
		舌顎骨	左	1
		角骨	左	1
		口蓋	右	1
		主鰓蓋	左	1
さ－19	IV	方骨	左	1
			右	1
		口蓋	左	1
			右	1
さ－21	IV	歯骨	右	1
し－19	IV	方骨	左	1
し－20	IV	歯骨	左	1
し－20	IV	歯骨	右	1
	I		不明	1
	IV	前上顎骨	右	4
		口蓋	左	1
し－21	IV	前上顎骨	左	3
			右	2
		口蓋	左	3
し－22	IV	主上顎骨	右	1
す－21	IV	前上顎骨	左	1
			右	1
		舌顎骨	右	1
		角骨	左	1
す－22	IV	主上顎骨	右	1
せ－23	IV	前上顎骨	左	1
そ－25	IV	前上顎骨	右	1
ち－24	IV	主上顎骨	右	1
つ－24	IV	前上顎骨	右	1
つ－25	IV	前上顎骨	左	1
		主上顎骨	左	1
	I	角骨	左	1
不明	不明	前上顎骨	左	5
		歯骨	右	1
合計				66

ハマフエフキダイ前上顎骨計測及び復元体長

出土地点	層	計測値 a（cm）	a値による復元体長（cm）	左・右
こ－19	IV	4.0	54.0	右
こ－20	IV	3.6	48.2	左
		3.2	42.2	左
		4.0	54.0	左
		2.6	33.8	右
		2.8	36.7	右
さ－20	IV	3.2	42.5	左
		4.0	54.0	左
		3.7	49.7	右
し－20	IV	2.5	32.4	右
		3.4	45.4	右
		3.5	46.8	右
		3.6	48.2	右
し－21	IV	3.3	43.9	右
		3.6	48.2	右
		2.1	26.7	左
		3.8	51.1	右
	不明	4.3	58.3	左
す－21	IV	3.2	42.5	右
		4.4	59.8	左
せ－23	IV	4.6	62.6	左
そ－25	IV	3.9	52.6	右
つ－24	IV	3.9	52.6	右
つ－25	IV	1.6	19.5	左
不明	不明	3.5	46.8	左
		3.5	46.8	左
		2.2	28.1	左
		2.2	28.1	左
		2.2	28.1	左

注：復元体長は渡喜仁浜原の算出方法を使用した。

フェフキダイ類

上顎骨が2点出土している。

フエフキダイ科

出土地点	層	部位	左・右	個数
さ－20	IV	主上顎骨	不明	1
し－21	IV	前上顎骨	左	1

ヨコシマクロダイ

ごく少ないが、前上顎骨、歯骨が検出されている。

ヨコシマクロダイ出土状況

出土地点	層	部　位	左・右	個　数
さ　－　20	Ⅳ	下顎歯骨	左	1
そ　－　20	Ⅳ	前上顎骨	右	1

クロダイ出土状況

出土地点	層	部　位	左・右	個　数
さ　－　21	Ⅳ	歯　　骨	左	1
し　－　19	Ⅰ	主上顎骨	右	1

クロダイ

上顎骨と歯骨の各1点がある。

コブダイ科出土状況

出土地点	層	部　位	左・右	個　数
せ　－　25	Ⅳ	下咽頭骨	－	1

コブダイ

ベラ科の魚種で確認できたのはコブダイと他の1種であった。

ベラ科出土状況

出土地点	層	部　位	左・右	個　数
す　－　19	Ⅳ	下咽頭骨	－	1
不　　明	不明	下咽頭骨	－	1
不　　明	不明	前上顎骨	左	1

ブダイ類

イロブダイ、ナガブダイ、ナンヨウブダイその他が検出されている。ナンヨウブダイの標本がもっとも多い。ナンヨウブダイは他の遺跡でも出土量の多い種類である。棲息数も多く、大型の個体がいたようである。本貝塚の場合でも、体長の推定できた21標本の内20cm以下の標本は4標本でその他は30～40cm前後の個体がもっとも多く、最大のもので50cmに達した。この程度になる個体も、かつての沖縄の海にはめずらしくなかったのである。

イロブダイ出土状況

出土地点	層	部　位	左・右	個　数
こ　－　22	Ⅳ	下咽頭骨	－	1
さ　－　19	Ⅳ	上咽頭骨	左	1
す　－　22	Ⅳ	下咽頭骨	－	1
せ　－　25	Ⅳ	上咽頭骨	右	1
			左	1
そ　－　26	Ⅳ	下咽頭骨	－	1
不　　明	Ⅳ	下咽頭骨	－	1

ナガブダイ出土状況

出土地点	層	部　位	左・右	個　数
こ　－　20	Ⅳ	上咽頭骨	右	2
さ　－　19	Ⅳ	上咽頭骨	右	1
		下咽頭骨	－	1
さ　－　20	Ⅳ	下咽頭骨	－	3
		上咽頭骨	右	1
		上咽頭骨	左	2
す　－　20	Ⅳ	下咽頭骨	－	1
つ　－　25	Ⅳ	上咽頭骨	左	1
不　　明	不明	下咽頭骨	－	1

ナンヨウブダイ下咽頭骨計測及び復元体長

出土地点	層	歯板面の前幅 w 1 (cm)	W 1 値による復元体長(cm)	歯板面の前幅 W 2 (cm)	W 2 値による復元体長 (cm	翼状突起までの幅 (cm)
こ － 20	IV	1.70	41.8	1.56	43.8	4.78
さ － 19	IV	1.64	40.4	1.57	44.0	－
		1.83	44.8	1.85	49.7	－
		0.81	21.0	0.76	27.6	－
		1.74	42.7	1.42	40.9	4.50
さ － 20	IV	1.65	40.6	1.37	39.9	3.92
		1.52	37.6	1.41	40.7	－
		1.74	42.7	1.60	44.6	5.01
		1.56	38.5	1.21	36.7	3.80
さ － 20	IV	1.60	39.5	1.73	47.2	4.47
さ － 21	IV	1.03	26.2	0.91	30.6	2.46
せ － 22	IV	1.58	40.0	1.42	40.9	4.65
		1.64	40.4	1.45	41.5	－
不 明	不明	0.82	21.0	0.87	29.8	－

ナンヨウブダイ上咽頭骨計測及び復元体長

出土地点	層	左・右	歯列幅 w (cm)	W値による復元体長(cm)
こ － 20	IV	右	0.48	29.5
			0.29	18.2
し － 21		不 明	－	－
す － 21			0.85	51.5
せ － 21		左	0.9	54.4
そ － 32	I	右	0.26	16.4
不 明	不明	左	0.23	14.6
			0.26	16.4

注：ナンヨウブダイの復元体長は全て田中寿賀子氏の体長復元方法を使用した。

ブダイ科出土状況

出土地点	層	部 位	左・右	個 数
こ － 20	IV	前上顎骨	左	2
			右	2
		歯 骨	不明	3
	I	顎 骨 片	右	1
さ － 19	IV	前上顎骨	左	1
			右	2
	IV		左	1
	IV	歯 骨	右	1
さ － 20	IV	前上顎骨	左	2
			右	2
		歯 骨	左	2
			右	1
さ － 21	IV	歯 骨	左	2
し － 20	IV	前上顎骨	右	1
		歯 骨		1
し － 21	IV	前上顎骨	左	3
			右	2
		歯 骨	左	1
			右	1
す － 21	IV	前上顎骨	左	1
			右	1
す 21	IV	歯 骨	右	1
す － 22	IV	歯 骨	右	2
す － 24	IV	歯 骨	左	1
せ － 20	IV	歯 骨	右	1
せ － 21	IV	歯 骨	右	1
せ － 22	IV	歯 骨	右	1
せ － 23	IV	前上顎骨	左	1
せ － 24	IV	歯 骨	左	1
		顎 骨 片	不明	1
せ － 25	IV	歯 骨	左	1
そ － 22	I	歯 骨	左	1
そ － 23	IV	前上顎骨	左	1
そ － 24	IV	歯 骨	右	1
ち － 25	IV	歯 骨	左	1
つ － 25	IV	前上顎骨	右	2
		歯 骨	右	1
つ － 26	IV	前上顎骨	左	1
て － 24	I	歯 骨	右	1
不 明	不明	前上顎骨	右	1
		歯 骨	右	2
			左	4
合 計				62

ニザダイ類

尾柄部分に付く大型の板状の突起が1点検出されている。

ニザダイ科出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
さ－19	Ⅳ	骨板突起	－	1

カワハギ類

モンガラカワハギと思われる大型の背鰭の棘が出土されている。

モンガラカワハギ出土状況

出土地点	層	部位	左・右	個数
す－21	Ⅳ	歯骨	右	1

ハリセンボン科

ブダイ類に次いで多い標本が得られている。大型のイシガキフグ、ハリセンボンを含むものと思われる。前上顎骨及び歯骨の咬面の最大幅の計測値があるが、3～4㎝台のものがもっとも多く、6㎝あるいはそれ以上になる標本も希ではない。これまた体長の50～60㎝に達する個体である。

ハリセンボン科前上顎骨の咬面幅計測

出土地点	層	計測値（㎝）
さ－19	Ⅳ	6.5
		6.3
		3.9
さ－21	Ⅳ	3.4
し－20	Ⅳ	4.1
		3.9
し－21	Ⅳ	4.3
		5.7
		3.6
す－20	攪乱	5.7
せ－20	Ⅳ	5.1
	攪乱	3.6
せ－21	Ⅳ	4.1
		5.1
せ－25	Ⅳ	3.9
そ－24	Ⅳ	6.0
		6.8
そ－25	Ⅳ	7.9
た－24	Ⅳ	6.4
		5.6
ち－24	ミゾ	3.4
ち－25	Ⅳ	3.8
て－24	Ⅳ	3.6

ハリセンボン科歯骨の咬面幅計測

出土地点	層	計測値（㎝）
さ－19	Ⅳ	3.4
さ－20	Ⅳ	4.8
		2.6
		2.6
し－20	Ⅳ	3.6
		3.4
		2.6
し－21	Ⅳ	1.3
し－22	Ⅳ	3.4
		3.3
す－21	Ⅳ	2.9
		3.7
		3.5
		2.3
せ－21	Ⅳ	2.2
		3.2
		2.7
せ－22	Ⅳ	1.4
		1.1
せ－24	Ⅳ	1.7
せ－25	Ⅳ	3.9
そ－24	テストトレンチ	3.7
た－24	Ⅳ	3.5
ち－23	Ⅳ	2.0
不明	不明	2.9
		1.8
		1.6

マフグ科

前上顎骨２点があったのみである。

マフグ科出土状況

出土地点	層	部　位	左・右	個　数
し － 19	I	前上顎骨	右	1
せ － 20	I	前上顎骨	左	1

Ｖ．爬虫類

ウミガメ類

アオウミガメを主としたと考えられる遺体が多数検出されている。個体数を直接推定するのは四肢骨であるが、不完全ではあるが比較的保存の良好な上腕骨の出土量から検討して少なくとも６個体及び８個体位は推定できると思われる。これらの上腕骨は１点を除いてみな大きく、甲長１ｍになるような個体であったようである。ウミガメ類の骨でもっとも出土の多かったのは肋骨板であるが、それに比べると腹板の確認が極めて少ない。多数の肋骨板片中に腹板の破片も多少含まれることも考えられるが、それにしても少ないと思われる。おそらくこれは解体の際に腹板を外す場所と関係があるのではないかと考えられ、捕獲したウミガメの腹板は海辺で外され、その後で持ち込まれたのではなかろうか。ウミガメの解体ではよく見られる方法である。

ヘビ類

19点の出土がある。

ハブ出土状況

出土地点	層	個　数
こ － 19	Ⅳ	1
し － 20	Ⅳ	1
し － 21	Ⅳ	4
す － 20	Ⅳ	1
す － 21	I	1
	Ⅳ	1
す － 23	Ⅳ	4
つ － 22	I	1
つ － 25	Ⅳ	4
不　明	不明	1
合　計		19

Ⅵ．哺乳類

クジラ

ゴンドウクジラ

大きさからみて、おそらく本種ではないかと思われるクジラ類の肋骨片が10点出土している。小さな破片である。

ウミガメ骨出土状況

出土地点		上腕骨			大腿骨			鳥口骨			頂骨板	椎骨板	肋骨板	縁骨板	腹板	不明	合計
グリッド	層	R	L	不	R	L	不	R	L	不							
こ－19	Ⅳ															5	5
こ－20	Ⅲ												2				2
	Ⅳ	1														3	4
こ－21	不															1	1
さ－19	Ⅳ									14		2	2	1			19
さ－20	Ⅰ																1
	Ⅳ											2	22	2		4	30
さ－21	Ⅳ												4	1		1	6
さ－22	Ⅳ	1															1
さ－23	Ⅳ															1	1
し－19	Ⅳ												2	1			3
し－20	Ⅳ												41	2		3	46
し－21	Ⅳ		1					1					3	2		37	44
し－22	Ⅳ		1										3				4
し－23	Ⅳ		1	1									14			1	17
す－19	Ⅳ														1		1
す－20	Ⅰ												2				2
	Ⅳ											1	10	1		2	14
す－21	Ⅳ								2					1			3
す－22	Ⅳ												18	1		1	20
す－23	Ⅳ									1						2	3
す－25	Ⅳ												2				2
せ－20	Ⅰ												1				1
せ－21	Ⅳ												7			1	8
せ－22	Ⅳ															2	2
せ－23	Ⅳ												5				5
せ－24	Ⅳ								2					1		41	44
せ－25	Ⅳ	1														6	7
そ－21	Ⅳ															1	1
そ－23	Ⅰ	1															1
	Ⅳ													8			8
そ－24	Ⅳ					1			1		1		204	3		780	990
そ－25	Ⅳ								1				34				35
そ－26	Ⅳ												1				1
た－23	Ⅳ												1				1
た－24	Ⅳ													4		17	21
た－25	Ⅳ												10				10
ち－23	Ⅳ												9			2	11
ち－24	Ⅳ												5	4		3	12
ち－25	Ⅳ												1			16	17
ち－26	Ⅳ												2				2
つ－22	Ⅰ													1			1
つ－24	Ⅳ												1	4			5
つ－25	Ⅰ												19	1			20
	Ⅳ											3	144	2		35	184
つ－26	Ⅳ															17	17
て－22	Ⅰ															2	2
て－24	Ⅳ												2				2
て－25	Ⅳ												1				1
合計		4	3	1		1		1	6	15	4	5	573	40	1	984	1638
		8			1			22									

ゴンドウクジラ出土状況

出土地点	さ－21	す－21	せ－23	せ－24		た－24	た－25	ち－25	合計
	Ⅳ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ	不	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	
肋骨	2	1	1	1	2	1	1	1	10

クジラ類骨出土状況

出土地点	さ－19	す－21	そ－24	合計
	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	
脛骨		1		1
不明	1		1	2
合計	1	1	1	3

イルカ類

前上顎骨片1点と椎骨が出土している。前上顎骨も断片のために種名はあきらかでない。

イルカ出土状況

出土地点	し－19	し－21	す－19	す－21		す－22	せ－21	た－25	つ－25	合計
	Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	
右前上顎骨				1						1
腰椎	1	1	1			1	1	1	1	7
腰椎関節板					1					1
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9

ジュゴン

本遺跡で採集できたジュゴンの遺骸は、下顎骨片2点と肋骨片があった。小さな断片となった肋骨はおそらく骨製品の作られた残片なのであろう。

ジュゴン出土状況

出土地点		さ－16	さ－19	し－22	す－27	た－25	ち－25	つ－25	不明	合計
		Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅰ		
下顎骨	R	1								1
	L						1			1
肋骨			1	1		1		1		4
不明					1				1	2
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	8

リュウキュウイノシシ

多くの歯牙、四肢骨が出土している。下顎骨と歯牙の出土が多く最小個体数が推定される左下顎骨片を例にしてもっとも数の多いＭ３が57個、これに当歳児と思われる８個の下顎骨例を加えて65個体が最小個体数になる。これは四肢骨で推定されるどの部位の骨よりも多いが、おそらく四肢骨の方が破損される率が高かったからであろう。乳臼歯を持つ顎骨以外では、臼歯の咬耗がいずれもかなりすすんでいるもので（イノシシ臼歯の咬耗表を参照）、特にＭ３の咬耗がはじまり進展しているものが多い。このことから３歳以上の個体の多いことも推定される。なお四肢骨でみると上腕骨の右40点に遠位骨端が化骨している標本は左右３点で、遠位端が化骨していないのが38点（右24点、左14点）になる。遠位骨端の化骨が１歳半位であるので、この位の年令の幼体もかなりあったようである。これはイノシシの年令による生存率からみて当然で、むしろ少ない位であろう。つまり成体を主としたイノシシ猟が行われていたとみてよいであろう。

イノシシ完形下顎骨　<>:未萌出　+:エナメル質咬耗　++:小窩独立　+++:小窩連絡　⊕:全面窩　−:欠落

No.	出土地点 グリット	層	雌雄	R														L											
				I1	2	3	C	P1	2	3	4		M1	M2	M3			I1	2	3	C	P1	2	3	4		M1	M2	M3	
				i1	2	3	c	dm2	3	4			M1	M2	M3			i1	2	3	c	dm2	3	4			M1	M2	M3	
1	た−24	Ⅳ	♀	−	−	−	−		++	++	+−		−	−	+++	++	+++	−	−	−	−		++	++	+++		⊕	⊕	+++	−++	+++	++	++
2				−	−	−	−		−	−	−		−	−	⊕	+++	+++	−	−	−	−		−	−	+++		−	−	−	+++	+++	++	++
3					−	−	−		−	−	+++		⊕	⊕	⊕	+++			−	−	−		−	−	−		−	−	−	−			
4	ち−25	Ⅳ	♂				−		+	++	++		++	++	++	++	+	−	−	−	−		+	++	++		++	++	++	++	+	+	+−
5					−	−	−		++	++	+++		⊕	⊕	++	++	++	−	−	−	−			++	++		⊕	⊕	++	++	++	+	+
6	つ−25	Ⅳ	♂	−	−	−	−		+++	+++	−		−	−	⊕	++	++	−	+++	−	−		+++	+++	+++		⊕	⊕	⊕	+++	++	++	+
7							−		−	−	−		⊕	+++	++	++	+				−		−	−	−		−	+++	++	++	++	+	
8				−	−	−	−		−	−	⊕		⊕	⊕	⊕	⊕	+++	−	−	−	−		−	−	⊕		⊕	⊕	⊕	⊕	+++	++	++	+
9				()														()					−	−	+−	−−	++	++	()	()			

イノシシ左下顎歯咬耗　＜ ＞：未崩出　＋：エナメル質咬耗　＋＋：小窩独立　＋＋＋：小窩独立　⊕：全面窩　－：欠落

No.	出土地点	層	雄	pl	2	3	4	C	M		
	グリッド		雌	dm2	3	4		c	1	2	3
1	こ－24	Ⅳ	♂		－	－	－		－ －	++ ++	
2	さ－20	Ⅳ	?		－	++	－				
3	し－20	Ⅳ	♀			+	+				
4	し－21	Ⅳ	?						⊕ +++	+++ ++	++ + － －
5			♂				++		－ －	++ ++	+ + －
6	し－22	Ⅳ	?							－ －	++ ++ + +
7					－						
8	し－23	Ⅳ	?								－ － －
9							－ －				
10	す－20	Ⅳ	?				+++		+++ +++	++ ++	+ － －
11	す－21	Ⅳ	♂						－ －	+++ +++	++ ++ + －
12			?				++				
13	す－23	Ⅳ	?								++ ++ ++ +
14	す－23	Ⅳ	♂		－	+++	－		⊕ ⊕	+++ ++	++ + － －
15	せ－20	Ⅳ	?						⊕ ⊕	+++	
16	せ－21	Ⅳ	♂						－ －	+++ ++	++ ++ +
17			♀			⊕	⊕	+++	++ ++		
18	せ－23	Ⅳ	?		－	－	－		⊕ ⊕	⊕ ⊕	⊕ +++ ⊕ －
19			♀				⊕	+++	－ ⊕	⊕ ⊕	+++ +++ +++
20					－	+++	+++		+++ +++	+++ +++	++ ++ +
21	せ－24	Ⅳ	♂	－	－	－	－		－ －	+++ +++	++ ++ + +
22										+++ +++	++ ++ +
23							－		⊕ +++	+++ ++	+ + + －
24			?			－	－	－		－ －	
25								－		－ －	
26	せ－25	Ⅳ	♂		+++	+++	+++		－ －	⊕ ⊕	+++ ++ ++
27			♀				+		+++ ++	+ +	
28			♂								
29	そ－23	Ⅳ	♂							⊕ +++	+++ +++ ++
30			?								－ － －
31	そ－24	Ⅳ	♂		－	－	－		－ －	⊕ ⊕	⊕ +++ +++
32				－	－	－	－		⊕ ⊕	⊕ ⊕	+++ +++ ++ ++
33			?						⊕ ⊕	⊕ +++	+++ +++ ++ －
34										+++ +++	++ ++ ++
35			♀		++	+++	+++		⊕ ⊕	+++ +++	+++ ++ +
36					－	－	+++		⊕ ⊕	+++ +++	++ ++ +
37					－	++	－		+++ +++	+++ +++	++ ++ + －
38			♂							+++ ++	++ ++ +
39			♀							++ ++	+ － －
40			?		－	+++	+++		+++ +++		
41							+++				
42					－	－	++		－ －		
43				++	+++						
44			♀		－	－	－				
45			?				－				
46	そ－25		?							++ ++	+ + －
47	た－22		?						+++ ++	－ －	
48	た－24	Ⅳ	♂		－	－	+++		⊕ ⊕	⊕ +++	⊕ ⊕ ⊕ －
49			?							⊕ ⊕	⊕ +++ +++ －
50	た－24	Ⅳ	♂							－ －	⊕ +++ +++ ++ +
51			?								+++ ++ ++
52					－	+++	+++			+++ ⊕	+++ +++ ++ ++
53						－	++				++ ++ + + － －
54			♀							⊕ +++	++ ++ + － － －
55			♂				+++			－ －	+++ +++ － － －
56						－	－	－		－ －	<> <>
57						+++	+++				
58			?		－	－	－	+		⊕ +++	
59						+++	+++			+++ +++	
60										－ －	
61					－	－	－				
62	ち－24	Ⅳ	♀		++	+++	++			－ －	⊕ +++ ⊕ +++ ++
63			?								+ － － －
64			♂			+++	+++			⊕ ⊕	⊕ ⊕ － － －
65			?			－	－	－		－ －	
66	せ－25	Ⅳ	?							－ －	+++ +++ ++ + － －
67	ち－25		♀			－	－	－			
68	ち－26	Ⅳ	?							－ －	+++ +++ ++ ++ +
69	つ－24	Ⅳ	♀								+++ ++ ++ ++ +
70			?								++ ++ － － －
71			?								－ － －
72			?		－	⊕	⊕	+++		+ －	
73			♂			－	－	－			
74			♀							－ －	⊕ ⊕ ⊕ +++ +++
75			?							－ －	+++ ++ ++
76	つ－25	Ⅳ	♀		+++	+++	+++			⊕ ⊕	+++ +++ +++ ++ ++
77			?							－ －	+++ +++ ++ ++ + +
78			♂								+++ +++ ++ ++ +
79			?								－ － ++ ++ +
80											++ ++ +
81											+ + +
82											++ ++ +++ ++ －
83			♂		－	+++	++			⊕ ⊕	⊕ +++ ++ + －
84			?								+ + －
85			♀		－	+++	++			+++ +++	++ ++ + － － －
86			?								++ ++ + － －
87			♀		－	+	++			+++ ++	+++ ++ <> <> <>
88					<>	－	－			+++ +++	++ ++ － － －
89											++ ++ － － －
90			♂			++	++	++		+ －	<> <>
91					++	++	++			－ －	
92							++			－ －	
93								－		－ －	
94			?			－	－	－			
95					－	－					
96											
97											－ － ⊕
98					++	++	+++	+++	++		
99	て－22	Ⅰ	?				－	－	－	－ －	

イノシシ左下顎歯咬耗　＜ ＞：未崩出　＋：エナメル質咬耗　＋＋：小窩独立　＋＋＋：小窩独立　⊕：全面窩　－：欠落

番号	出土地点 グリッド	層	雌雄	pl dm2	2 3	3 4	4	c c	M 1	2	3
1	さ－21	Ⅳ	?							⊕⊕	
2	し－19	Ⅳ	?		－	⊕⊕	⊕		－－		
3	し－22	Ⅳ	?			+++++			⊕+++		
4	す－23	Ⅳ	♂			+++++			⊕⊕		
5	す－24	Ⅳ	?				－		－－		
6	せ－20	Ⅳ	?						－－+++++++++		
7			♂		－－		－		－－		
8	せ－21	Ⅳ	?								－－－
9	せ－22	Ⅳ	♂		－	++++					
10	せ－24	Ⅳ	?							++++ + + + +	
11									++++++++++		
12					－－						
13	せ－24	Ⅳ	♂			⊕⊕			⊕⊕⊕⊕		
14						++			++++ + －		
15			?								
16			♀		－	－					
17	そ－25	Ⅳ	?							⊕++++++++++	?
18										+++++++	
19										⊕++++++++	
20	そ－24	Ⅳ								++ ++ +	
21							+		++ ++ + + 〈〉〈〉〈〉		
22			♂		－	－	⊕		⊕⊕⊕⊕ － － －		
23			?		－	－	－		－－		
24	そ － 25	Ⅳ	?			－	－		－ － － －	++ ++ + +	
25	た － 24	Ⅳ	?						－－ ⊕⊕ +++ +++ ⊕		
26			♀		+++++++++				⊕⊕⊕⊕⊕ +++ +++		
27						++++++			⊕⊕⊕⊕⊕ +++ +++		
28						++++++			⊕⊕⊕⊕ +++++++++		
29			?							⊕+++ ⊕ +++ ++ +	
30			♂			－	－		－－ ⊕⊕ +++ +++ ++		
31			♀			－	－		⊕⊕ － － +++ ++ + +		
32			?							－ － +++ ++ +	
33			?								+ + －
34			♀			++ +++			+++++ ++ ++ － － － －		
35			?		++	+++	⊕	⊕	⊕⊕		
36			♂		+++	+++++			⊕+++		
37			?			－	－				
38	ち － 24	Ⅳ	♀			++	++++		⊕⊕⊕⊕⊕ +++ ++ ++		
39	ち－24	Ⅳ	?					－		－－	
40	ち － 25	Ⅰ	♀		－	－	++	++		++ ++ ++ ++	+ － － －
41					－	－	++	++		++ ++ ++ ++	+ － － －
42		Ⅳ	?			⊕	⊕	⊕⊕		+ + 〈〉〈〉	
43			♂			+	++				
44	ち － 26	Ⅳ	♀							? +++ ⊕ +++ ++ ++ +	
45	つ － 24	Ⅳ	♂			－	++	++		⊕⊕⊕⊕⊕ +++ +++	
46			♀			+++	+++	++		⊕⊕ +++ ++	++ ++ ++ +
47			?								++ ++ ++ +
48			♀							－－ ++ ++ + － －	
49			?			－	+++	－			
50							－	－		－－	
51			♀			－	－	－			
52		不明	♀			+	++	++		+++ +++ ++ ++	－ － － －
53		Ⅰ	♂		－	〈〉	－	－		－－ －－	
54										⊕⊕ ⊕ +++ ++	
55			?							⊕⊕ ++ ++ ++ ++	
56										++ ++ +++	
57			♂			+++	+++	－		⊕⊕ +++ +++ ++ ++ ++	
58			?							++ ++ +	
59						++	+++			⊕⊕ +++ ++ ++ + +	
60			♂		－	－	－	++		⊕ +++ +++ ++ + + － －	
61			♀			++	++	++		⊕ +++ ++ ++ + + －	
62			♂			〈〉	－	+		+++++ ++ ++ 〈〉〈〉〈〉	
63	つ － 25		♀			－	+	++		+++++ ++ + 〈〉〈〉〈〉	
64		Ⅳ	?					+++		⊕ +++ ++ ++	
65							⊕	++	++	++ +	
66						++	++	++	++		
67						++	++	++			
68								++			
69						+	++	－		－－	
70			♂			+	++	－		－－	
71			♀		－						
72			♂		－	－	－				
73			♀				+++++			－ － +++++ ++ ++ ++ －	
74	て － 22	Ⅰ	?			－	－	－		+++ ++ 〈〉〈〉	
75	て － 23	Ⅰ	♂			－	－	－		－－	
76	て － 25	Ⅳ	?								+ － － －
77	と － 23	Ⅰ	♂							+++++ ++ ++ + +	

イノシシ右上下顎骨歯部位別出土状況

出土地点 グリッド	層	部位		個数
さ － 19	Ⅳ	下顎	M3	2
さ － 20	Ⅰ	下顎	M3	1
	Ⅳ	上顎	I3	1
		下顎	I1	1
			M3	1
し － 19	Ⅳ	下顎	dm4	1
し － 21	Ⅳ	下顎	I1	1
			M3	1
し － 22	Ⅳ	下顎	I1	1
す － 21	Ⅳ	下顎	M2	1
			M2・M3	1
			M3	2
す － 22	Ⅳ	上顎	I1	1
		下顎	I1	1
			p2	1
			p3	1
			p4	2
			dm4	1
す － 23	Ⅳ	下顎	M3	2
す － 25	Ⅳ	下顎	M3	1
せ － 20	Ⅳ	下顎	M3	1
せ － 24	Ⅳ	上顎	I1	1
		下顎	I1	1
			M3	1
			P2・P3	1
せ － 25	Ⅰ	下顎	M1	1
	Ⅳ		I1	1
			M3	1
そ － 22	Ⅰ	下顎	M3	1
そ － 23	Ⅳ	下顎	M3	2
そ － 24	Ⅳ	上顎	I1	1
		下顎	I1	1
そ － 24	Ⅳ	下顎	M1	2
			M3	11
			P2	1
			P3	2
			P4	2
そ － 25	Ⅳ	下顎	M3	1
た － 23	Ⅳ	下顎	I1	1
た － 24	Ⅳ	下顎	I1	2
			M1	3
			M3	5
			P2	2
			P3	1
			P4	2
			dm4	1
た － 25	Ⅳ	上顎	I1	1
ち － 23	Ⅳ	下顎	M3	1
ち － 24	Ⅳ	下顎	P3	1
			i2	2
ち － 25	Ⅳ	下顎	I1	1
ち － 26	Ⅳ	下顎	P4	1
つ － 25	Ⅳ	下顎	I1	1
			M3	3
			P1	1
			dm4	1
			i1	1
つ － 26	Ⅳ	下顎	I1	1
			M3	1
て － 22	Ⅰ	下顎	I1	1
			M3	1
			dm4	1
て － 23	Ⅰ	下顎	I1	1
不明	不明	下顎	M1	1
			M3	2
合計				96

イノシシ左上下顎骨歯部位別出土状況

出土地点 グリッド	層	部位		個数
さ － 19	Ⅳ	下顎	I1	1
さ － 20	Ⅳ	上顎	I1	1
		下顎	M3	1
し － 20	Ⅳ	下顎	M3	1
し － 21	Ⅳ	下顎	M2	1
す － 19	Ⅳ	下顎	I2	1
す － 21	Ⅳ	下顎	M1	1
す － 24	Ⅳ	下顎	P4	1
			P3・P4	1
す － 25	Ⅳ	下顎	M1	1
せ － 24	Ⅳ	下顎	M3	1
せ － 25	Ⅳ		I1	1
そ － 24	Ⅳ	下顎	I1	2
			I2	1
			M1	1
			M2	2
			M3	2
			P2	1
			P3	2
			P4	1
そ － 25	Ⅳ	下顎	M2	1
			M3	1
た － 24	Ⅳ	下顎	I2	3
			M1	2
た － 24	Ⅳ	下顎	M2	2
			M3	4
			P3	1
			P4	1
			i2	1
た － 25	Ⅳ	下顎	M3	1
ち － 25	Ⅳ	下顎	I2	1
			M2	1
ち － 26	Ⅳ	下顎	M1	1
つ － 24	Ⅳ	下顎	I2	1
つ － 25	Ⅰ	下顎	M1	1
			dm4	1
	Ⅳ		I1	2
			I2	3
			M1	1
			M2	5
			M3	4
			P3	1
	不明		P3	1
不明	不明	下顎	I3	1
			M1	1
			P1	1
			P2	1
			P3	1
合計				69

イノシシ犬歯出土状況

出土地点 グリッド	層	R・L	雌雄	部位	個数
こ － 19	Ⅳ	R	♂	下顎	1
こ － 20	Ⅳ	L	♂	下顎	1
さ － 19	Ⅳ	L	♀	下顎	1
		R			1
さ － 20	Ⅳ	L	♂	上顎	1
				下顎	1
し － 20	Ⅳ	L	♂	下顎	1
し － 22	Ⅳ	R	♂	下顎	1
す － 19	Ⅰ	L	♂	下顎	1
す － 20	Ⅳ	L	♂	下顎	1
す － 21	Ⅳ	L	♂	下顎	1
		R		上顎	1
す － 22	Ⅳ	L	♂	下顎	1
		R			1
せ － 20	Ⅳ	R	♂	上顎	1
せ － 23	Ⅳ	R	♂	下顎	1
せ － 24	Ⅳ	R	♂	下顎	3
せ － 25	Ⅳ	L	♂	下顎	2
そ － 23	Ⅳ	L	♂	下顎	1
		R	♀		1
そ － 24	Ⅳ	L	♂	下顎	4
					4
		R	♀	下顎	2
			♂		1
そ － 25	Ⅰ	R	♂	下顎	1
	Ⅳ	L			1
					1
		R			4
そ － 26	Ⅳ	L	♂	下顎	1
そ － 26	Ⅳ	L	♂	下顎	1
た － 23	Ⅳ	R	♀	下顎	1
			♂		1
た － 24	Ⅳ	L	♀	下顎	3
			♂		2
		R	♀		6
			♂		2
た － 25	Ⅳ	L	♂	下顎	1
		R			2
ち － 23	Ⅳ	R	♂	下顎	1
ち － 24	Ⅳ	L	♂	下顎	1
		R	♀		1
ち － 25	Ⅰ	L	♂	下顎	1
	Ⅳ				1
					1
		R	♀		1
ち － 26	Ⅳ	L	♂	下顎	1
					1
つ － 24	Ⅰ	R	♂	下顎	1
	Ⅳ				2
つ － 25	Ⅰ	L	♂	下顎	1
		R			3
	Ⅳ	L	♂		2
					2
			♀		8
		R	♀		4
			♂		5
つ － 26	Ⅳ	L	♂	下顎	1
て － 23	Ⅰ	R	♂	下顎	1
て － 24	Ⅳ	L	♂	下顎	1
合計					101

その他

オオコウモリ出土状況

出土地点	層	部位	個数
つ － 25	Ⅳ	歯	1
ち － 25	Ⅳ	歯	1
合計			2

種不明獣骨出土状況

出土地点	層	個数
こ － 20	Ⅳ	2
第2号竪穴遺構		1
さ － 20	Ⅳ	1
し － 23	Ⅳ	5
す － 23	Ⅳ	2
せ － 29	Ⅳ	1
そ － 24	Ⅳ	1
た － 24	Ⅳ	1
た － 25	Ⅳ	1
つ － 22	Ⅰ	1
つ － 25	Ⅳ	2
不明	不明	2
合計		20

アホウドリ出土状況

出土地点	層	部位	個数
せ － 22	Ⅳ	右大腿骨	1
不明	表採	不明	3

ブタ骨出土状況

No.	出土地点 グリッド	層	左右	部位	個数
1	さ － 20	Ⅰ	R	上腕骨	1
2	さ － 33	Ⅳ	R	橈骨	1
3	し － 19	Ⅳ	L	大腿骨	1
4	し － 20	Ⅰ	不明	破片	1
5	し － 21	Ⅰ	不明	破片	1
6	し － 33	Ⅳ	L	脛骨	1
7	せ － 26	Ⅰ	不明	大腿骨	1
8	そ － 26	Ⅳ		棘突起片	1
9	ち － 30	Ⅰ	R	肩甲骨	1
10				大腿骨	1
11				棘突起片	1
12			不明	橈骨	1
13	ち － 31	Ⅰ	L	脛骨	1
14			不明	側頭骨(頬骨)	1
15	つ － 22	Ⅰ	R	上腕骨	1
16				頭頂骨	1
17			不明	破片	1
18	不明	不明	不明	破片	1
19	不明	Ⅰ	R	寛骨	1
合計					19

収　束

先年報告した嘉門貝塚A地区の動物遺存体に比較するとはるかに多いB地区の資料であったが、基本的にはA地区のそれと大きくは変わらないものであったと思われる。しかし、数量が増えただけ動物遺体の内容を正確に知る資料であったと思う。

ノコギリガザミその他

この種のカニ類の中で目立った点は、A地区の報告の際にものべたが、この貝塚の近域に広い入り江とマングローブ樹林の発達していたことが予想される興味ある資料である。今回は、その他カニ類も多く検出され、食用に当てられていたことがわかった。

魚類

ハマフエフキダイ、ブダイ類、ハリセンボン類の大型の個体が主となり、特にハリセンボン類の目立った点は，B地区でもみられていたことであった。ハリセンボン類の多いことは伊江島の具志原貝塚においても報告されていて、この魚の多いことは魚族の全体の豊富なこと、あるいは漁労により積極的であったことを示すのではないかと考えている。他の遺跡では、大型ハリセンボン類の出土は少ないからである。

爬虫類

アオウミガメ

大小のアオウミガメの以外の出土は特徴的である。イノー内に進入してきたのを捕獲したのであろう。当時どの程度のリーフが発達していたか明かではないが、多獲されている大型の魚類のことを考えると、ウミガメ類の進入も充分可能であったろう。ここでもこの頃の海の豊かさを知るのである。沖縄の文化の基調にある海との繋がりはこうした中から育まれていったのであろう。

哺乳類

クジラ・イルカ類、ジュゴン

海棲獣類として、他の遺跡と同様にクジラ・イルカ類、ジュゴンがあったが、その総数は少なかった。クジラ・イルカ類の捕獲の少ないことは沖縄の遺跡全般についていえることであるが、沖縄の漁業が珊瑚礁内の限られたなかで行われ、それで充分な漁獲のあったことを考えると、クジラ・イルカ類のような外洋性の動物の捕獲は偶然的な場合であったようである。それでもイルカも含めた「寄り鯨」などが手にはいることがあればかなりの肉量が供給されたと思われる。ジュゴンもまた出土量は少なく、また残されていたのは下顎骨の断片と肋骨片だけであった。遺跡によっては頭蓋骨や四肢骨など出土する例もあるが、それも一般は少ない。生活

址から検出されるのが肋骨を主としているということは、この骨が骨製品の素材として運ばれていたからであろう。他の骨の所在については今では知る由もないが、別の場所に置かれていた可能性はあろう。

ジュゴンは珊瑚礁の外側の外海域に棲む。当時そうした場所で捕獲が直接行われていたかどうかまだ問題が残る。遺跡に残された遺物にはこれにふさわしい漁具はほとんどないし、また遺骸にみる限り、捕獲の個体数が少なかったであろうことは容易に推測される。これには珊瑚礁の発達とも関連し、この時期の遺跡にみる微妙な出土量の差はリーフ発達の自然的な条件の違いがあると思われる。またジュゴンの骨は種々の骨製品の素材になったが、これはこの動物の骨格が他の動物にはみない特別な形や硬さをもっていたからで、この骨からつくられたものは、日常の道具というよりも、呪術的な意味合の強いものであったと考えている。さらにジュゴンのもつ他の動物にもみられない姿態や珊瑚礁の外海にひっそりと棲む生態は、この動物に神秘的な観念を抱かせるに充分であろう。いずれにしても此の土地に住む人にとって、ジュゴンは食料の資源として必要な動物ではなく、自然が稀に与えるところの授かりものと考えられていたのではないだろうか。こうしたことから、この動物に特別な神格が付与されるということ考えられてくるのであろう。個人的な捕獲は当然禁止され、若しそれを犯すようなことをすれば、大きな災いが来るということも信じられたのである。宮古諸島や石垣島にのこる話で、漁師が人魚を釣って、食べようとしたところ大津波に襲われたという話があるのも、この動物対する掟を破ったからなのであろう。

ジュゴンをめぐる自然・神・人間の交渉の歴史は、考古学的な資料の確かな研究と蓄積によって、また新しい進展がみられるのではないかと考えている。

陸産獣類

今回の調査で検出できた陸産の獣類はリュウキュウイノシシに限られ、その他の種類の遺骸は断片的なものも検出できなかった。イノシシの遺骸の出土は多い。筆者は縄文晩期相当期の例として与那城村宮城島にあるシヌグ堂遺跡の動物遺骸を調査したことがあったが、この遺跡でのイノシシの遺骸の埋存は、貝塚時代としては比較的多いのであるが、それでも面積比でみると嘉門貝塚の方が倍あるいはそれ以上多いようである。本遺跡での肉量の供給は獣肉が主であったのではないかと思われる。

グスク期になるとこれにさらに家畜としてウシ、ウマ、ブタが加わり、獣肉食の傾向はいっそう強まっていく。こうしたことが沖縄の食生活の伝統として入り込んでいくのであろう。しかし、陸産獣類の首里は少なくない。沖縄ではもともとリュウキュウイノシシを除く他の獣類で狩猟の対象になるのはオオコウモリ、ケナガネズミ程度であったが、それも後期の遺跡での出土例は稀である。本州、九州における弥生期の遺跡でも狩猟主体はイノシシ、シカになり、中型獣は極めて少なくなる傾向がある。沖縄における後期の獣骨出土の傾向もこれと共通する

点がみられるのである。

以上に述べた本遺跡の動物遺骸の在り方については、今後さらに調査事例を通じてさらに考察の機会を持ちたいと思っている。

参考文献

1　金子浩昌（1985）、シヌグ堂遺跡出土の脊椎動物遺骸、シヌグ堂遺跡ー第１・２・３次発掘調査報告ー、沖縄県文化財調査報告書第67集　P.183～194

2　金子浩昌（1991）、嘉門貝塚Ａ地区出土の動物遺体、嘉門貝塚Ａー牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱー、浦添市文化財調査報告書第18集　浦添市教育委員会、P.94～110

3　山田孝宏（1992）、黒潮のめぐみ、前編、高知新聞、８月１～４日

第Ⅴ章　まとめ

牧港補給地区の開発工事に伴う緊急発掘調査は昭和62年５月から昭和63年10月までの約１年６ヶ月を要した。調査対象となった遺跡は高宮暫定編年前Ⅰ期の爪形文土器の出土した岩陰墓を含む12基の古墓からなる城間古墓群（註１）、高宮暫定編年前Ⅳ期の伊波式・荻堂式土器やグスク系土器と近世の大規模な溝遺構、窯跡の出土した城間遺跡（註２）、高宮暫定編年の後期に属する嘉門貝塚（註３）の３遺跡であった。城間遺跡と嘉門貝塚については建築工事の工程上から各２地区に分けて発掘調査を実施した。今回報告する嘉門貝塚Ｂ区を最後として、牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査を終了した。

前章までに嘉門貝塚Ｂ区の発掘調査により確認できた遺構・遺物の成果について略述した。ここでは、遺構・遺物別にまとめ、若干の考察をおこないまとめとする。

遺構

発掘調査で確認された遺構は竪穴遺構・貝集積遺構・落込み遺構・炉址・近世の溝遺構がある。

竪穴遺構は赤土部で検出されたもので、面縄東洞式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器が出土している。また、石器ではチャート製の小型の穿孔具等も得られている。１基は柱穴が確認され、他は確認できなかったが住居址と考えられるものである。同期の遺物包含層は確認されてなく、また出土した土器型式からみると比較的短期的なものである。

貝集積遺構はアンボンクロザメとゴホウラを主体とする集積も37基確認した。貝集積については交易品のストックと考えられているが、貝製品の項でみたように加工品も多く出土している。このことから、貝集積は加工前段階のひとつの行為と考えられ、その後に遺跡内において加工を加えたとみられる。他の遺跡においても集積遺構が検出されるが、加工品の少ない例からみると、本貝塚の特異な面がうかがえる。

落込み遺構は柱穴あるいは土壙と考えられるものもあり、分布範囲が遺物の多く出土する一帯であることから平地式の住居址が想定され、精査を行ったが明らかにできなかった。

炉址は平面観が円形をなす屋外炉が１基検出された。

近世溝遺構は遺跡内の内陸側から海側に向かってつくられるもので、所々で縁に石列あるいは石組を伴う。溝や石組から近世の灰釉碗や鉄釉碗の破片が採集されている。戦前において一帯は畑として利用されており、また嘉門貝塚Ａ区で出土した石組を伴う「道」、畑の境界と考えられる石列の出土もあることから近世における土地利用（畑）に関わるものと思われる。

遺物

出土遺物は時代的に先史遺物と近世遺物に大別され、前者は土器・石器・貝製品・骨製品の人工遺物と食料残滓の貝類遺存体と動物遺存体である。後者は陶器・磁器・金属製品がある。

土器は在地土器と搬入土器がある。在地土器は高宮暫定編年前Ⅲ・Ⅳ期と後期に属するものが得られ、前者は赤土部で検出された縦穴遺構から出土したもので、面縄前庭式土器、仲泊式土器がある。また、奄美において型式設定されている面縄東洞式土器等の出土もある。後期に属する土器が本貝塚の主体をなすもので、胎土と器面調整等の製作技法を主眼に器形の分類を口縁部と底部別に行った。その結果、口縁部では4類に分類された。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類は胎土は泥質で、混和材として砂粒と赤色粒が含まれることを共通とし、器面調整で3種に分けられる。Ⅳ類は胎土が砂質で、混和材として黒色鉱物と細かい石英を含み、器面調整が丁寧なもので、胎土・器面調整が前3者と異なる。尚、後述するように九州弥生時代の搬入土器の出土はⅣ類の出土する一帯で多い。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類は嘉門貝塚A区に近い南東部で多く、A区では前記3種が9割を占める。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類とⅣ類が時期的に同時性を有する空間的なものなのか、それとも時期差によるものなのか検討すべき課題である。

九州弥生時代の搬入土器は器形や胎土、成形と器面調整等から在地土器とは明らかに異なる。壷形土器と甕形土器が有り、後者は刻目突帯文土器が多く得られている。刻目突帯文土器は口縁部の傾きや貼付される突帯の位置、大きさや形態、刻目の施し方の違い等の継起的変化から型式的変化がおさえられ、時代的には大まかに弥生前期中頃から中期に位置付けられると考えられる。これは壷形土器においても確認できるのもである。搬出地については明確な板付系甕が存在しないこと、胴部に多条の突帯を施す土器の存在から鹿児島県下を中心とする南部九州弥生土器との関係を考えることができるものである。

石器は有孔石製品・穿孔具・ノミ状利器・石斧・叩き石・磨石・石皿・くぼみ石・その他の石器がある。有孔石製品と穿孔具及びノミ状利器の1点、磨石1点は第2号竪穴遺構からの出土である。穿孔具はチャートの剥片の一端が円形に丸くなるもので、有孔石製品等の孔を有する製品の穿孔具であろう。ノミ状利器は2点があり、うち1点は方柱状の片刃の資料で搬入品と考えられるものである。出土グリッドも在地のⅣ類土器と搬入土器の出土する一帯から得られている。石斧は42点の出土があり、長さ6cmの小型の石斧の出土もあった。石質は石斧・叩き石・磨石は輝緑岩、片状砂岩、ハンレイ岩の用いるものが多く、本島北部や慶良間諸島を産地とするものである。石斧は製作技法から2種に分けられ、素材とする原石は石斧状の形態をなすものを選択し、加工を側辺と刃部に行うものと、打割等の成形調整と敲打による器面調整をほぼ全面に行うもので、後者が多かった。叩き石は器面に敲打痕のみを残すもの、磨石と兼用するもの、くぼみ石と兼用するもの、3者を兼用するものがあり、磨石と兼用するものが多かった。叩きを主とするものでは平面形態が長方形をなすものが多い。磨石は5点の出土で、その中の1点は第2号竪穴からの出土である。くぼみ石は台石的な使用法をとった考えられる細粒砂岩製のものと片状砂岩製のものがあった。

貝製品は実用品と装飾品及び用途不明品の合わせて総数344点が得られている。実用品は貝刃、二枚貝有孔製品、スイジ貝製利器、ホラガイ有孔製品、ホラガイ製容器、ヤコウガイ製杓

子状製品で、貝錘としての可能性が考えられている二枚貝有孔製品が227点出土している。二枚貝有孔製品はほぼ同重量の貝が多く、採集の際に選択されていることが分かる。出土状況は集中しての出土がなく、貝錘として用途決定の傍証になりえないが、貝集積遺構の中に無孔ヒメジャコの集積が2基あるが、これは、貝肉を食した後の殻をそのための用途としてのストックと考えられる。装飾品は貝輪、イモガイ製品、イモガイ製指輪、サツマビナ製品である。貝輪は9種の貝がみられ、ゴホウラ製の貝輪については完成品は少なく、貝輪の製作工程を窺える資料がみられる。イモガイ製品については体層上部から擦り切られた資料と螺頭部を輪切りした貝輪が出土しており、製作工程が窺える。用途不明品はサラサバティの殻底を利用するもので、連結式の貝輪の未製品と考えられものである。

骨製品は獣骨の長管骨の一端に抉りのあるものが1点得られてる。

陶磁器は沖縄産陶器、日本産磁器、中国産磁器が出土している。磁器の中で中国産は青磁・白磁・染付等がある。明代と清代のものがあり、前者は僅かで清代の資料が圧倒的多い。日本産については近世に生産されたものが多く、ほかに肥前とみられるものがある。日本製の近世磁器については文様の施文方法により分類された。これらの磁器からみる年代は18～20世紀のものを中心とする。沖縄産陶器は施釉陶器と無釉焼き締め陶器及びアカムヌーと称する低火度焼成の陶器がある。

円盤状製品は72点の出土がある。銭貨は寛永通寶2点と大正年間の通過が1点得られている。煙管施釉陶器製は雁首5点、吸い口1点、無釉陶器製は雁首2点、金属製は雁首2点、吸い口1の合わせて11点がある。かんざしは10点があり、すべて青銅製で頭部形態から2類に分類された。頭部が「L」形をなす角釘が1点ある。

獣魚骨は18科20種が確認され、特にリュウキュウイノシシの出土量は多く、獣肉の供給の主であったと思われる。ノコギリガザミ等のカニ類は棲息地としてマングローブの存在が嘉門貝塚A区の報告書においても指摘されたが、B区においても出土し、近域にマングローブがあったことを物語るものである。

註1　浦添市教育委員会　『城間古墓群』　浦添市文化財調査報告書第　1990年3月

註2　浦添市教育委員会　『嘉門貝塚A』　浦添市文化財調査報告書第18集　1991年3月

註3　浦添市教育委員会　『城間遺跡』　浦添市文化財調査報告書第19集　1992年3月

図　　版

図版 1　遺跡周辺の航空写真

図版 2　調査区近景（東より）

図版 3　調査区近景（北より）

図版 4　発掘作業状況

図版 5　発掘作業状況

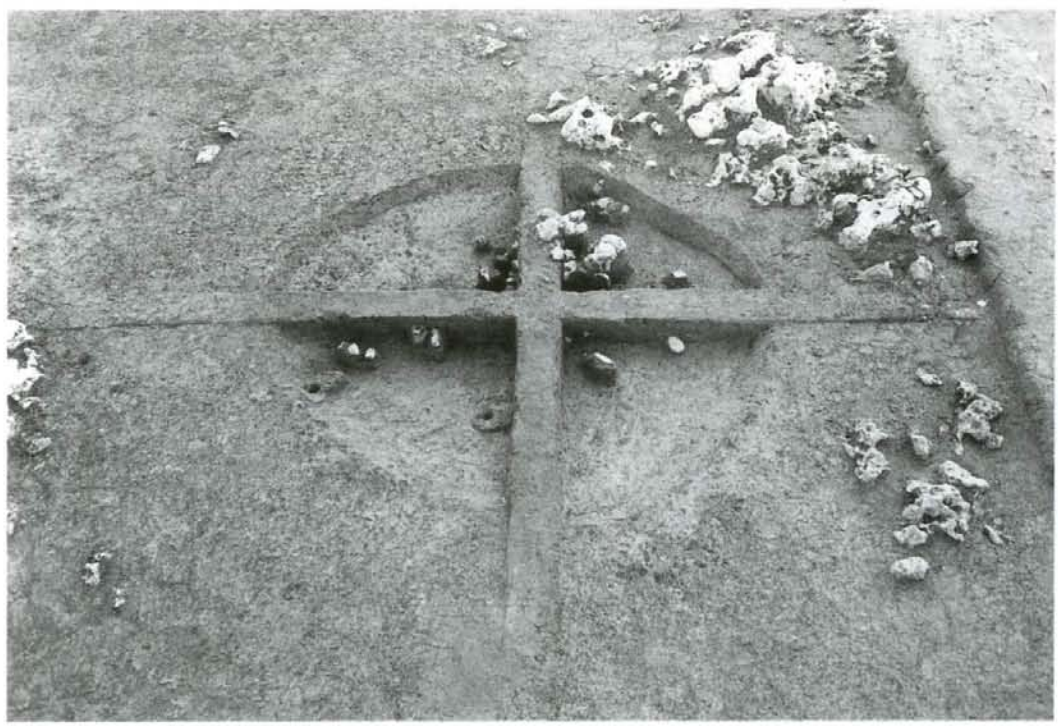
図版 6　砂地と赤土の境界（東側）

図版 7　砂地と赤土の境界（北側）

図版 8　層序（せ－25グリット）

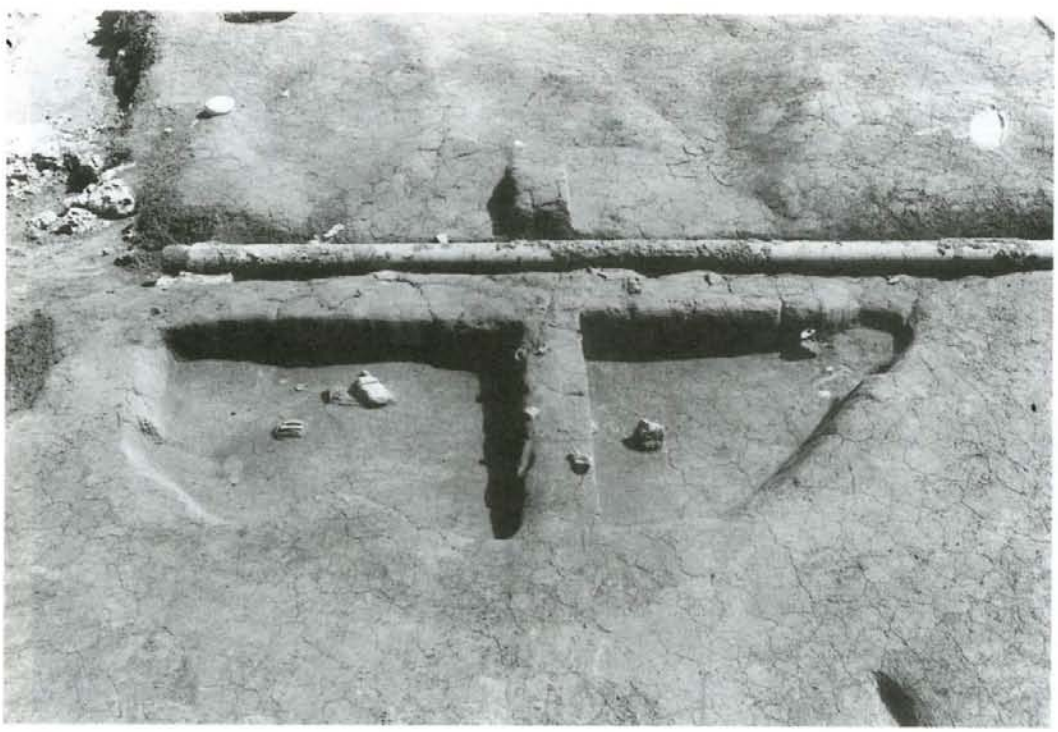
図版 9　層序（す－25グリット）

図版 10　第1号竪穴遺講



図版 11　第2号竪穴遺構

図版 12　第3号竪穴遺構



図版 13　第4号竪穴遺構

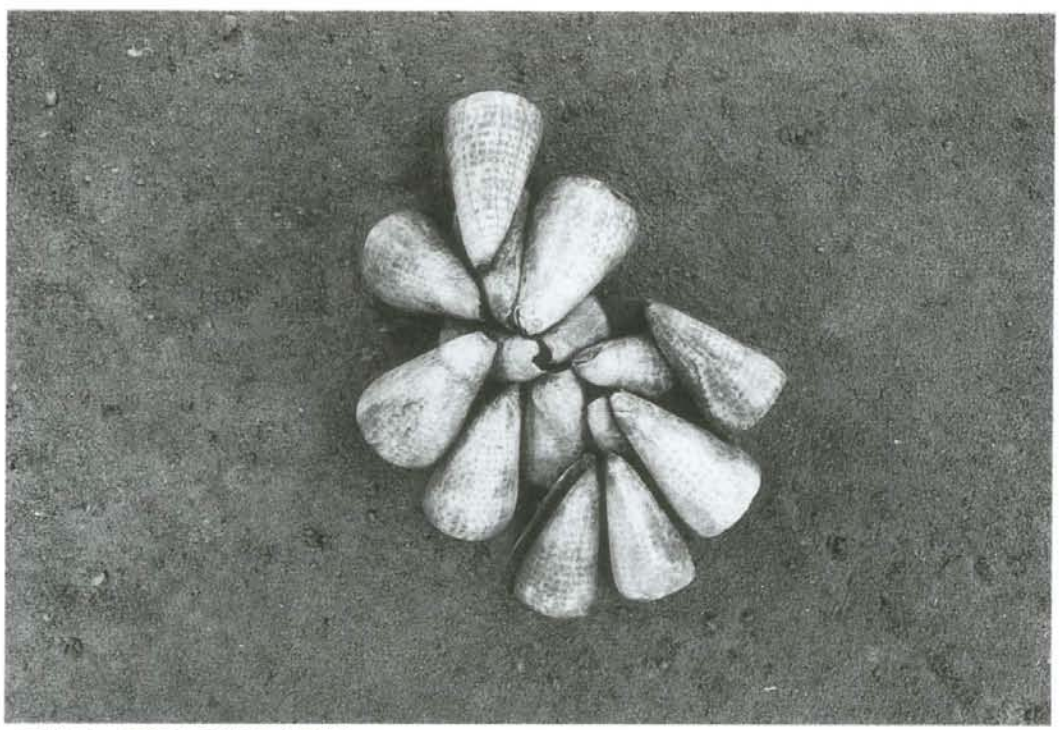
図版14　土壙

図版15　炉址

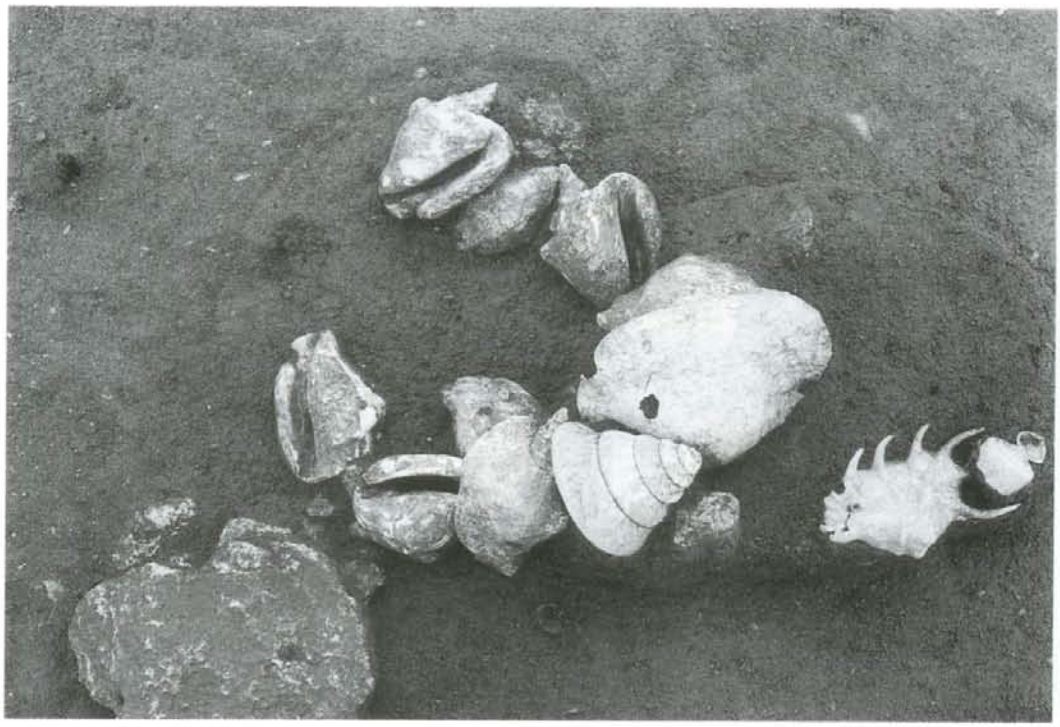
図版16　落ち込み遺構（し－22グリット）

図版17　落ち込み遺構（す－23グリット）

図版 18　第3号貝集積

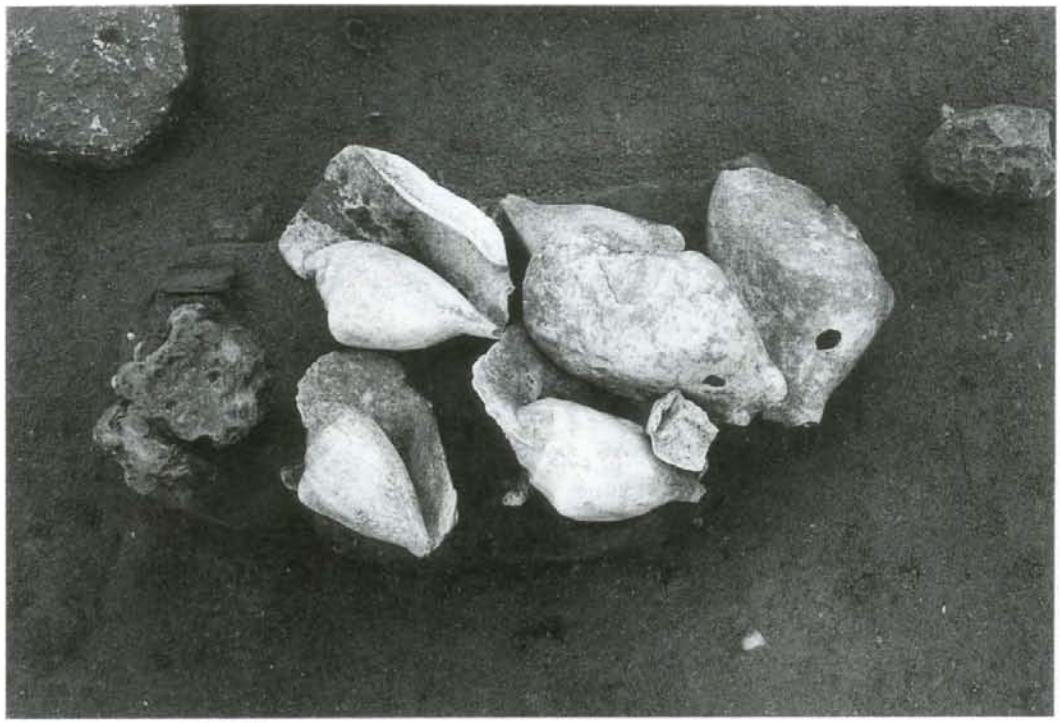


図版 19　第23号貝集積（下部）



図版 20　第27号貝集積

図版 21　第32号貝集積



図版 22　第24号貝集積

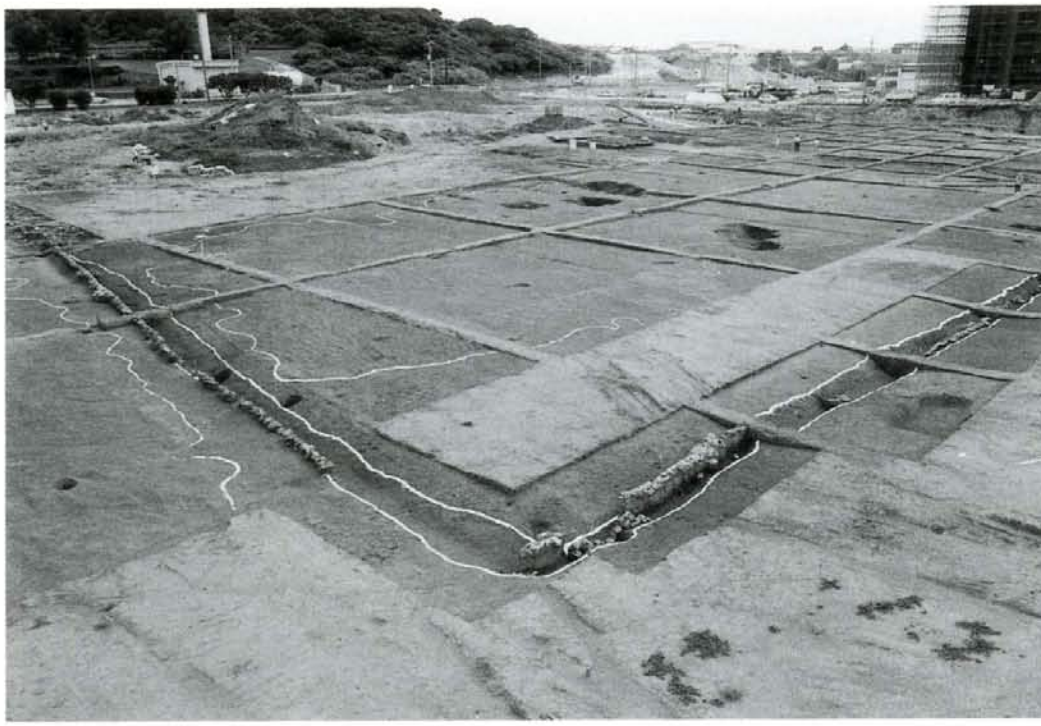
図版 23　第 8 号貝集積

図版 24　第13号貝集積

図版 25　第31号貝集積

図版 26　埋葬遺構

図版27　溝遺構

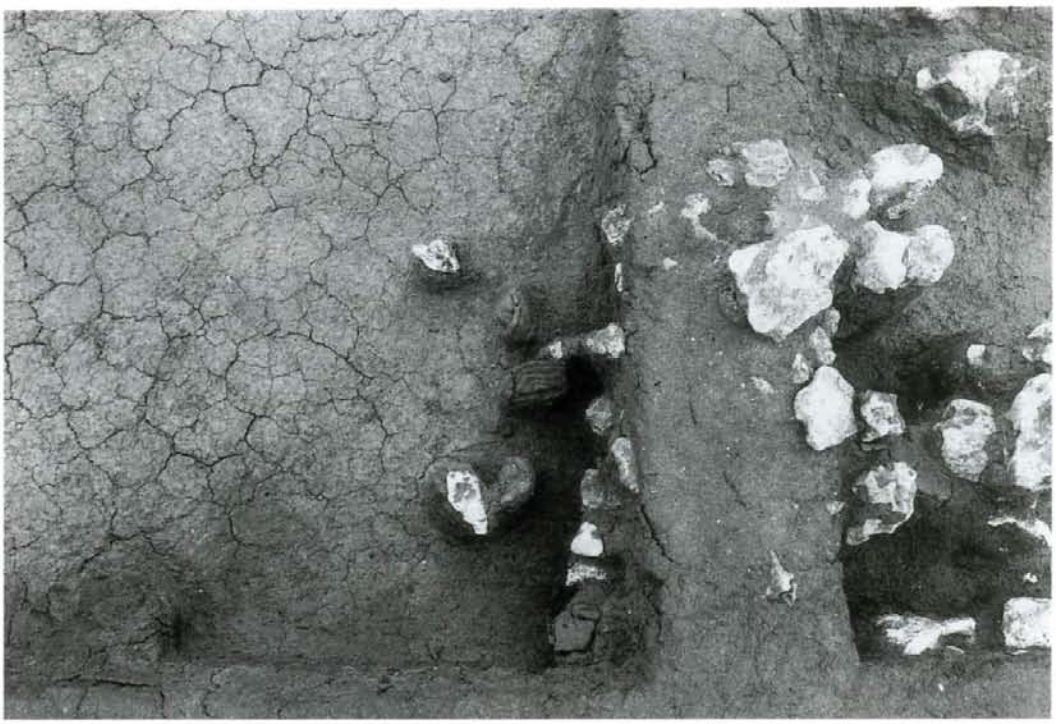


図版 28　溝遺構

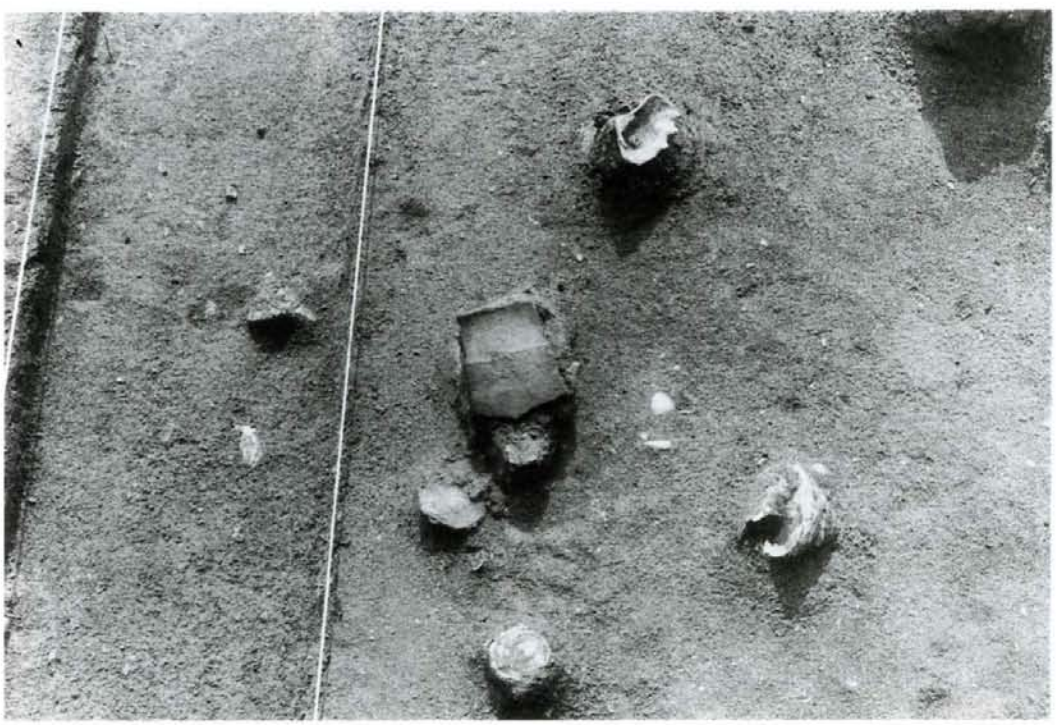
図版29　溝遺構

図版 30　遺物出土状況

図版 31　遺物出土状況



図版 32　面縄東洞式土器出土状況



図版33　土器出土状況

図版34　土器出土状況

図版35　土器出土状況

図版36　土器出土状況

図版37　土器出土状況

図版38　弥生土器出土状況

図版39　弥生土器出土状況

図版40　弥生土器出土状況

図版41　弥生土器出土状況

図版42　弥生土器出土状況

図版43　弥生土器出土状況

図版44　石器（穿孔具）出土状況

図版45　石斧出土状況

図版46　石斧出土状況

図版47　石斧出土状況

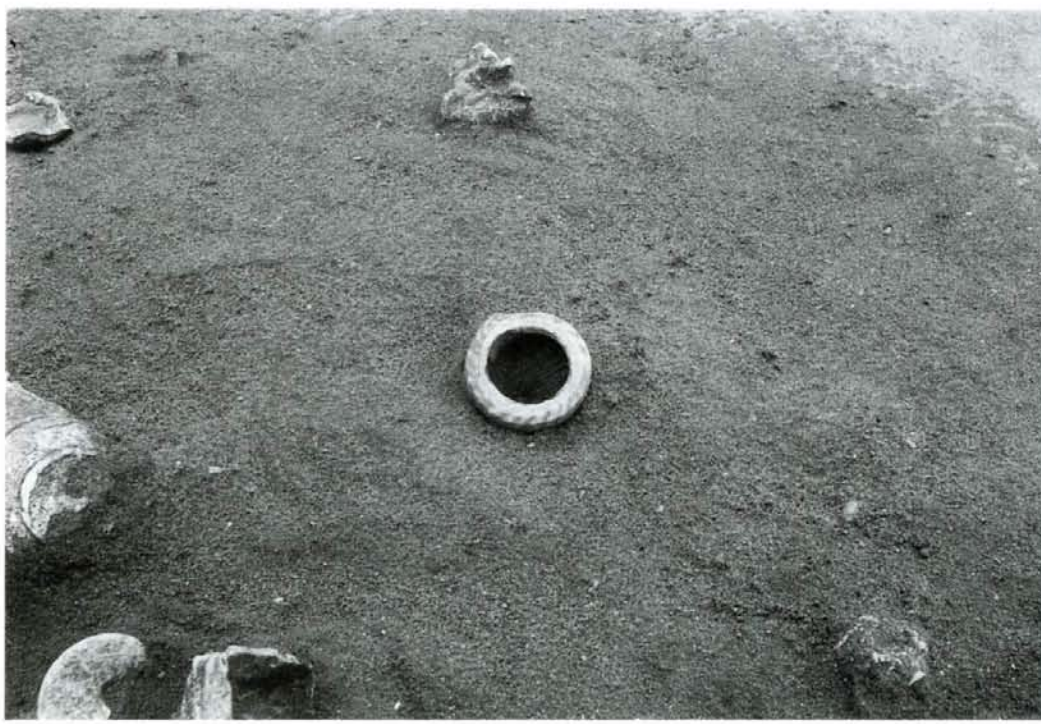
図版48　叩き石出土状況

図版49　石器出土状況

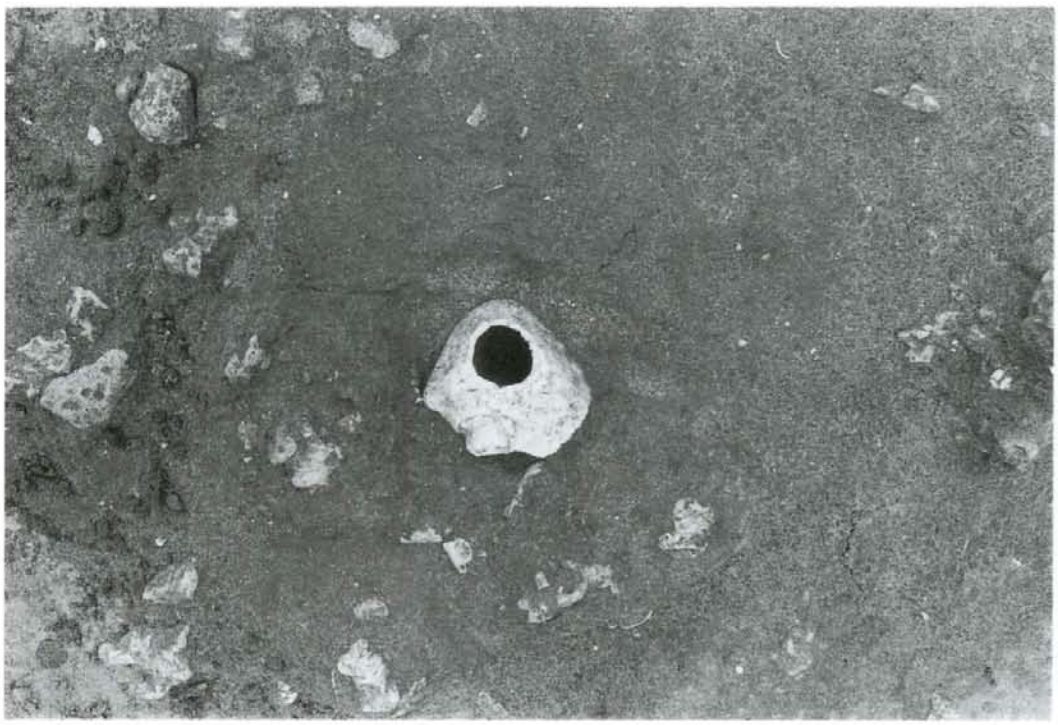
図版50　二枚貝有孔製品出土状況

図版51　スイジガイ製利器出土状況

図版52　貝輪（メンガイ）出土状況



図版53　貝輪（イモガイ）出土状況



図版54　ソデガイ科貝輪未製品出土状況

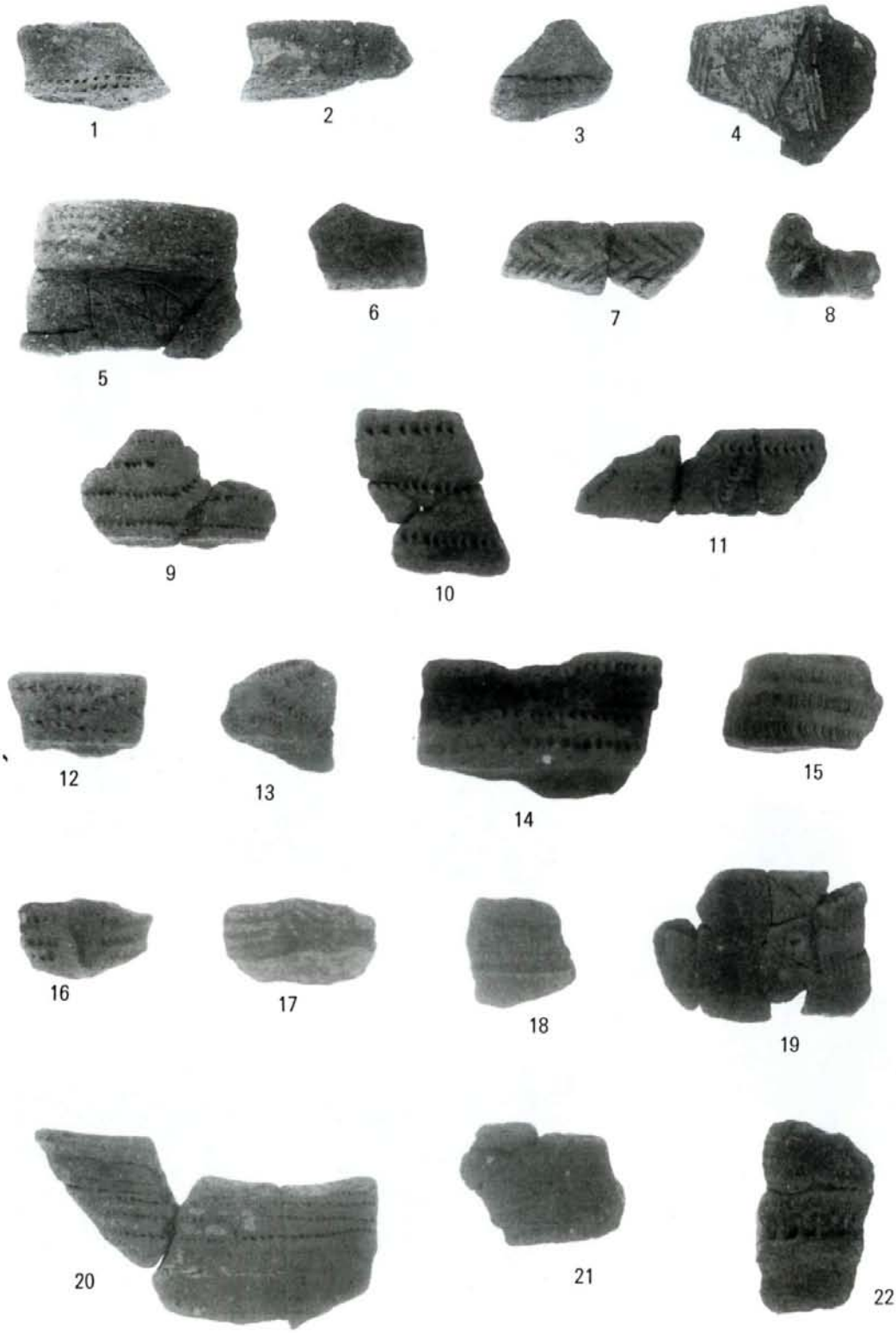
図版55　ゴホウラ製貝輪出土状況

図版56　イノシシ（下顎骨）出土状況

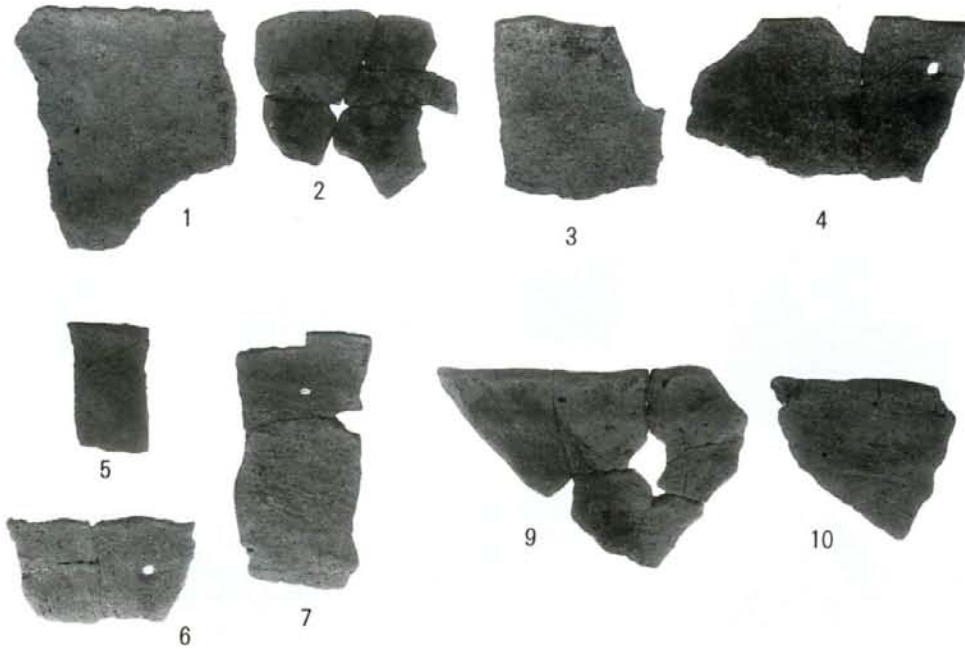
図版57　イノシシ（下顎骨）出土状況

図版58　ゴンドウクジラ（助骨片）出土状況

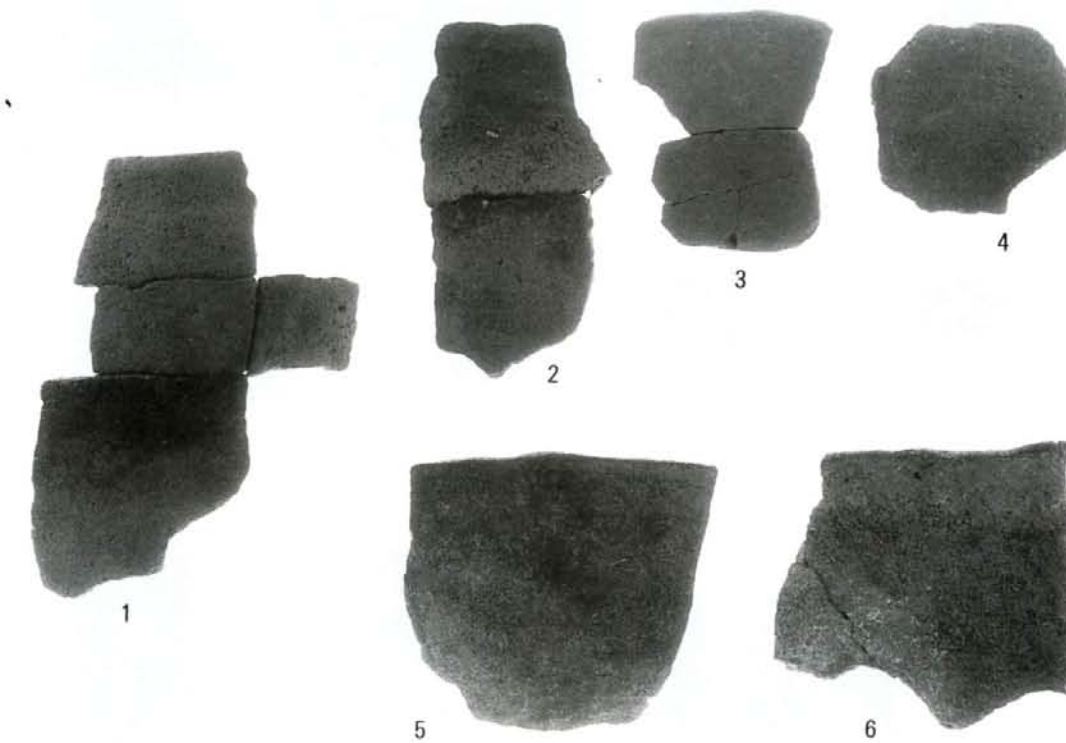
図版59　ウミガメ出土状況



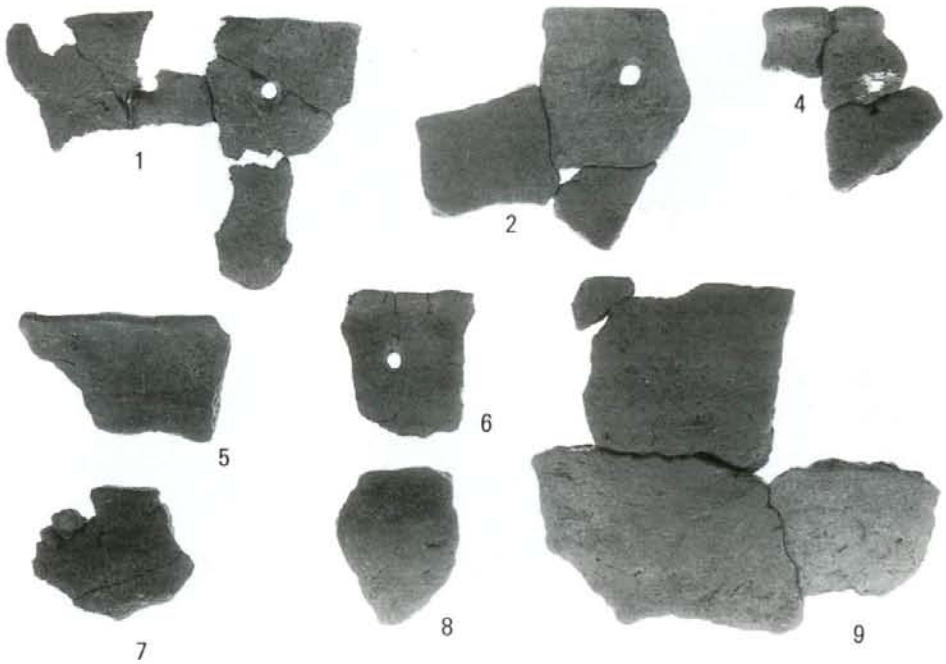
図版60　高宮暫定編年前Ⅲ・Ⅳ期の土器



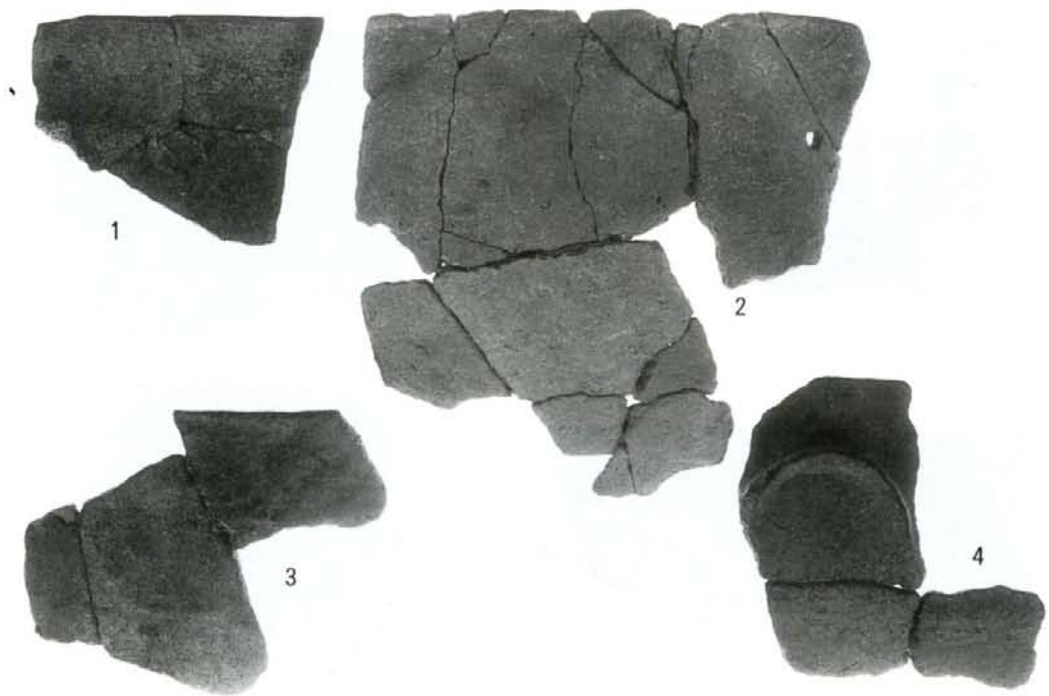
図版61　在地土器（後期土器）※8欠落



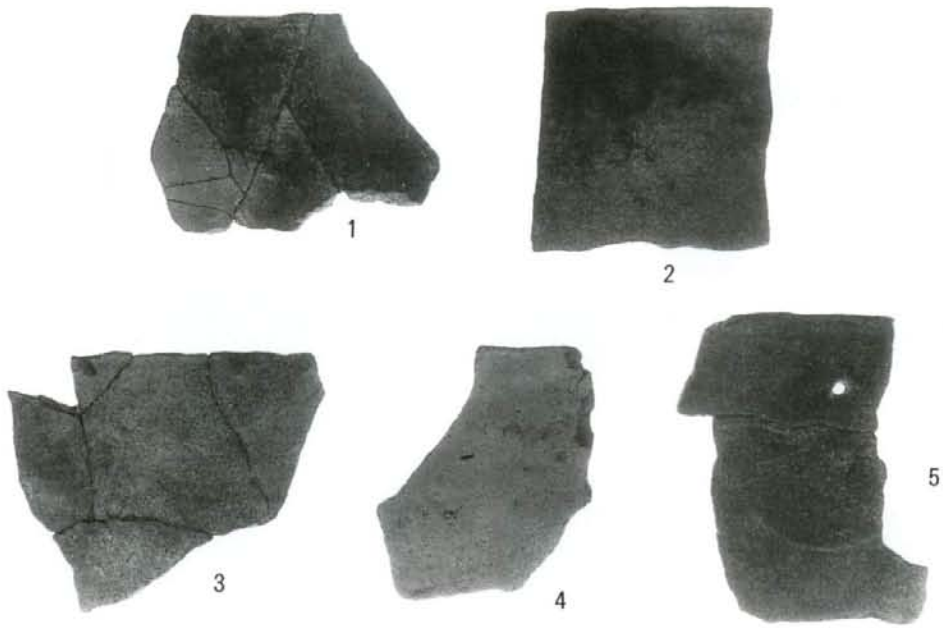
図版62　在地土器（後期土器）



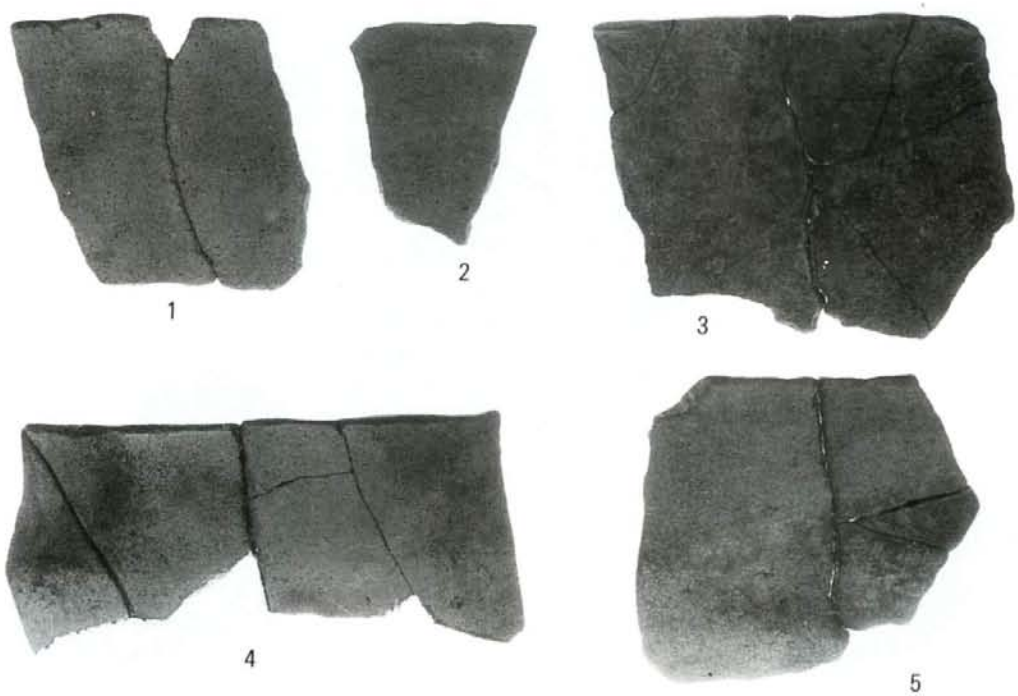
図版63　在地土器（後期土器）※3欠落



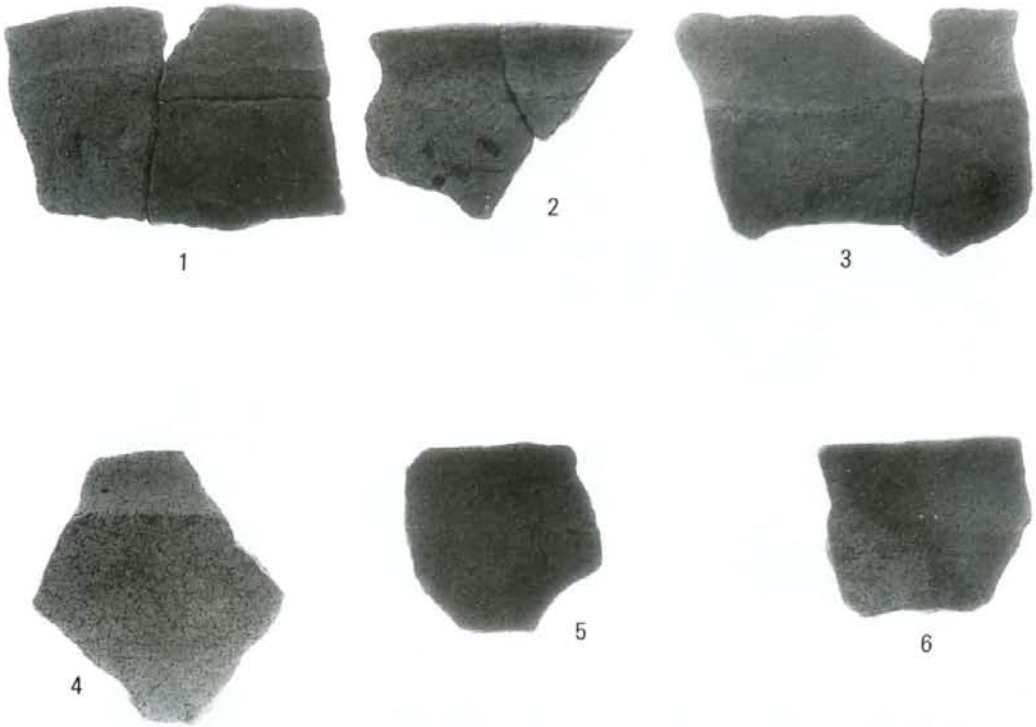
図版64　在地土器（後期土器）



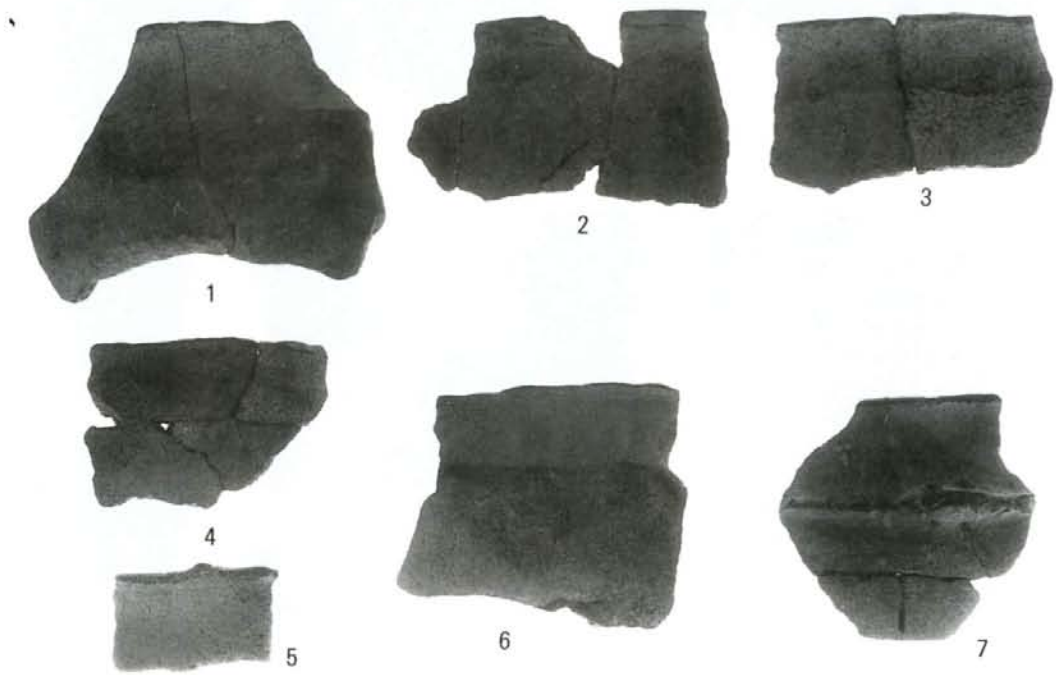
図版65　在地土器（後期土器）



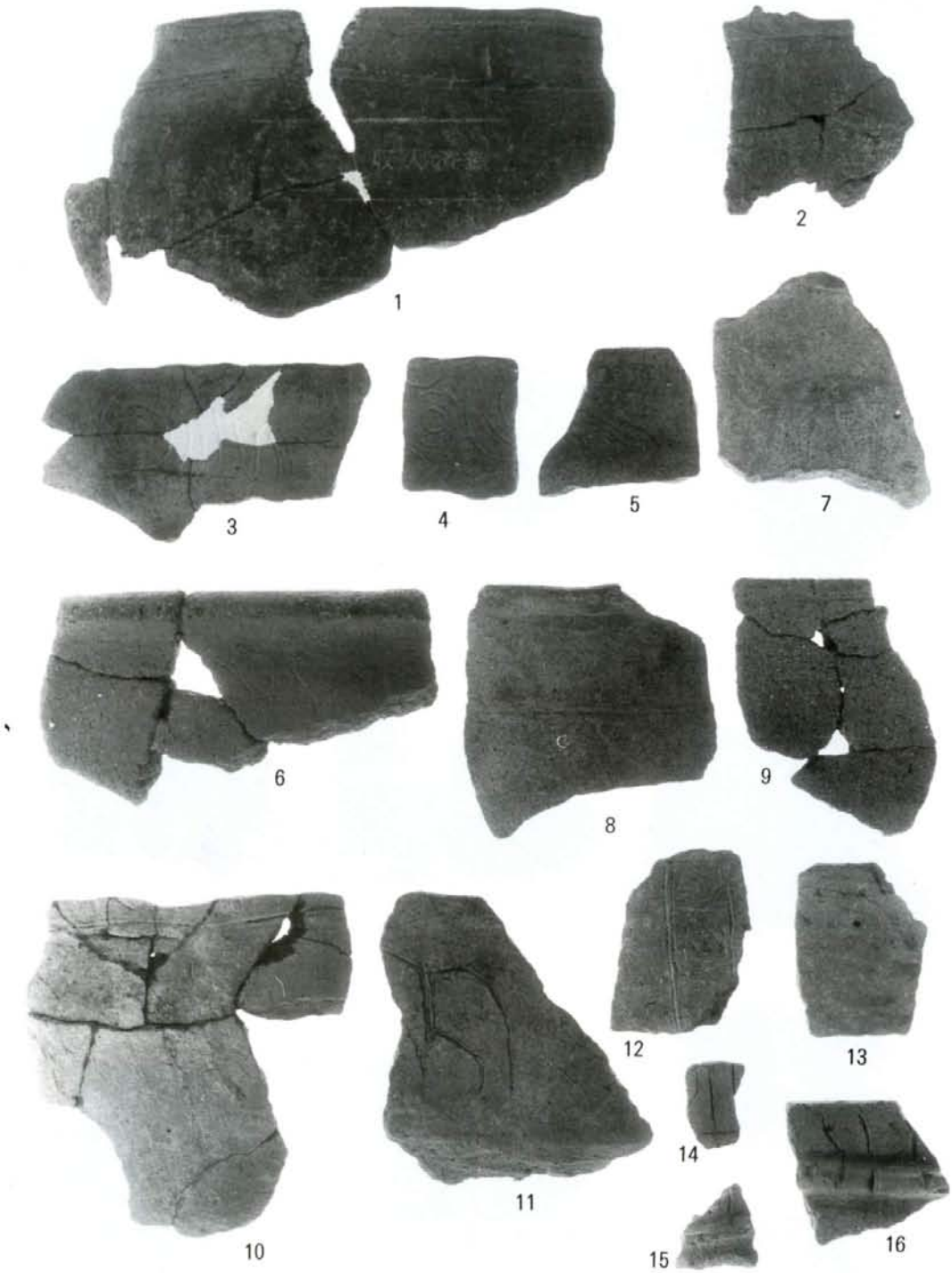
図版66　在地土器（後期土器）



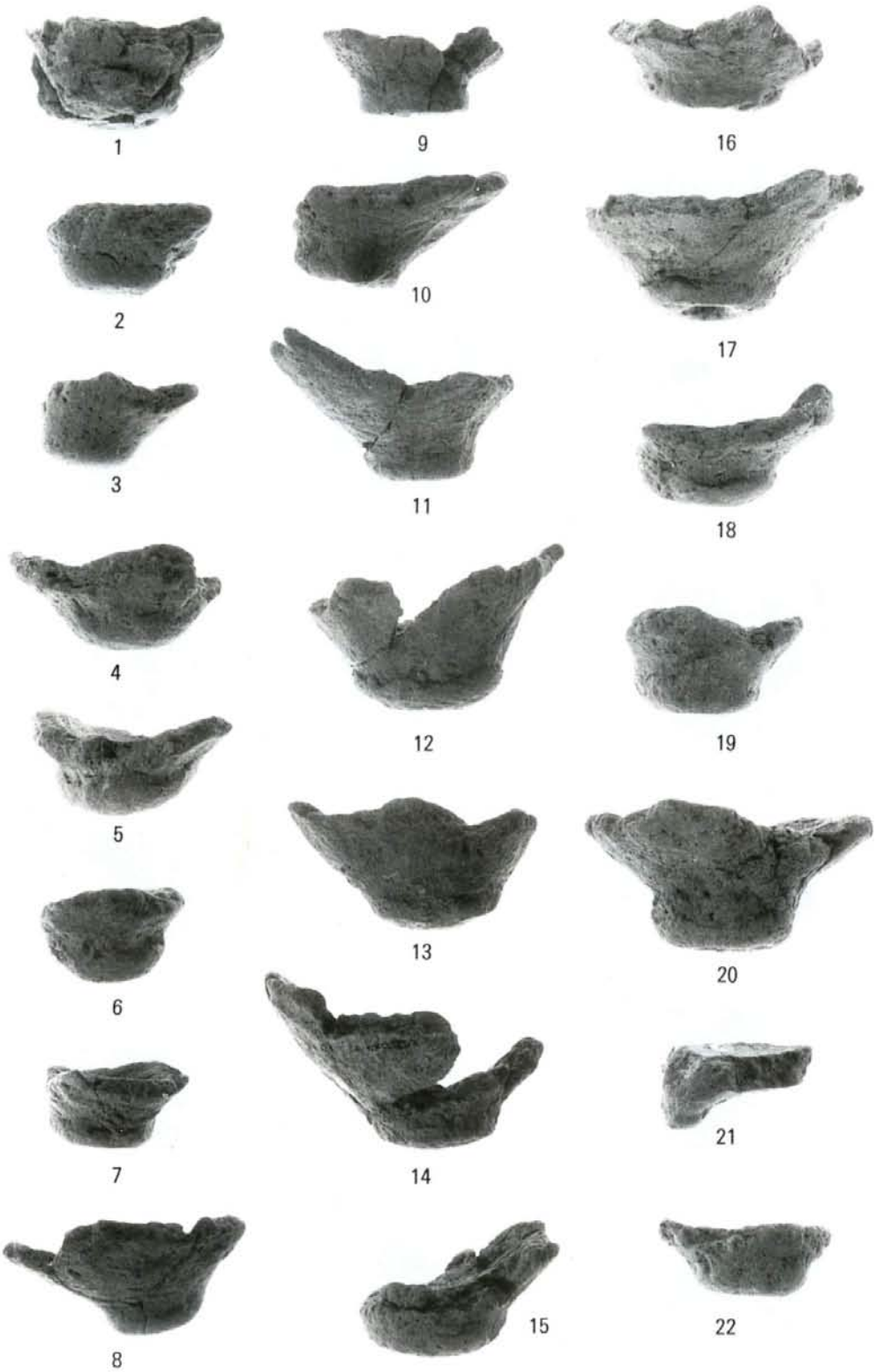
図版67　在地土器（後期土器）



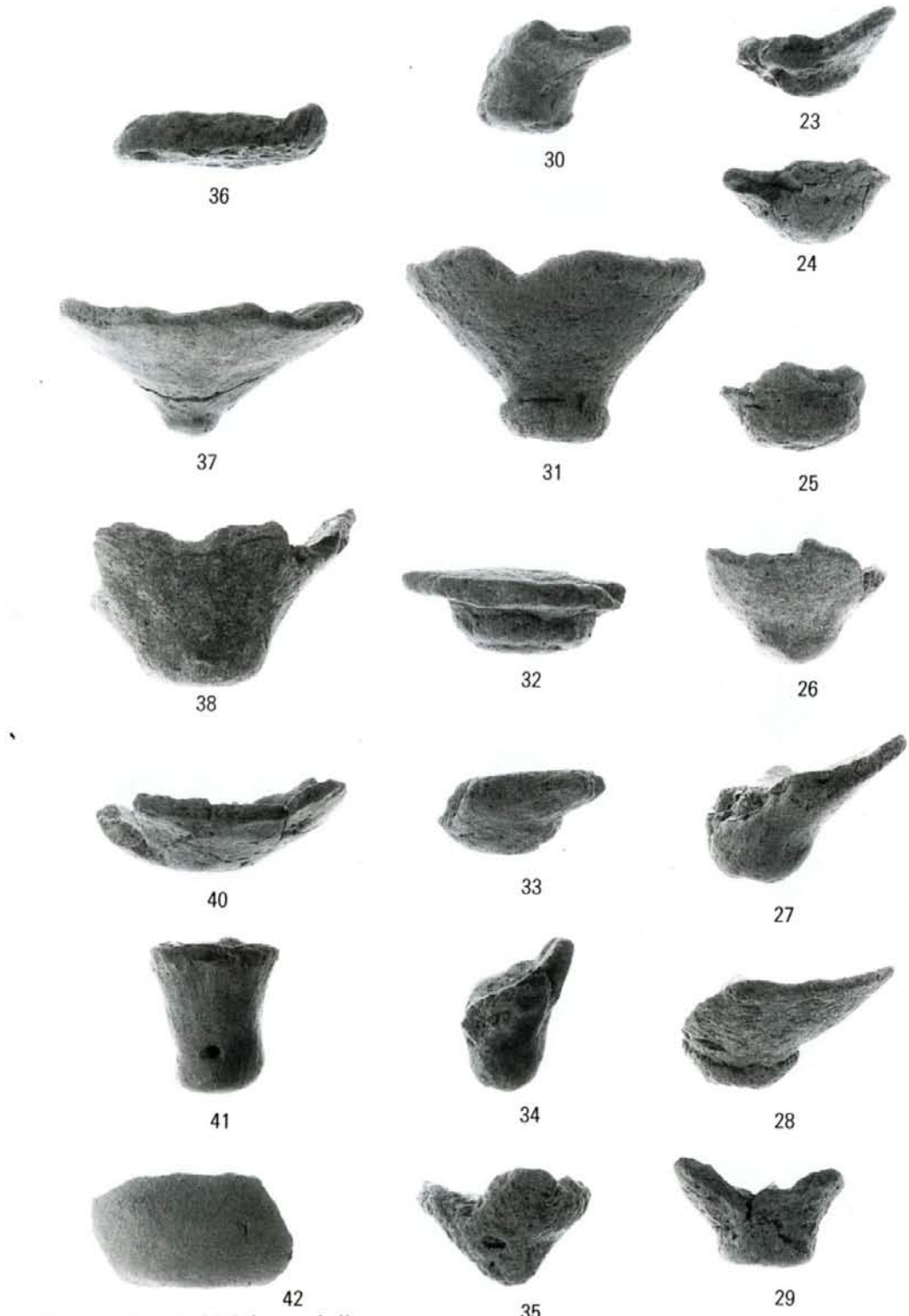
図版68　在地土器（後期土器）



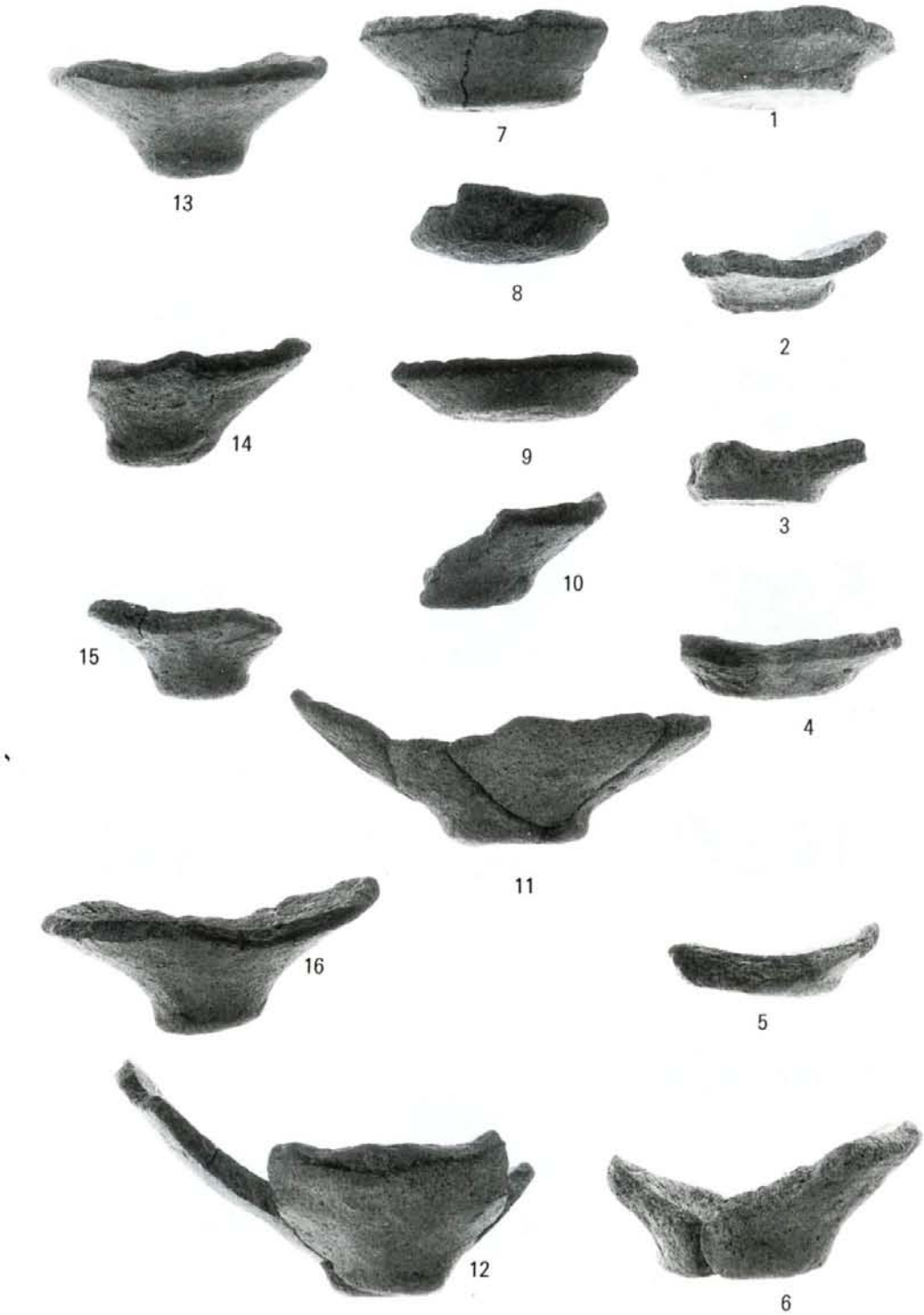
図版69　在地土器（後期土器）



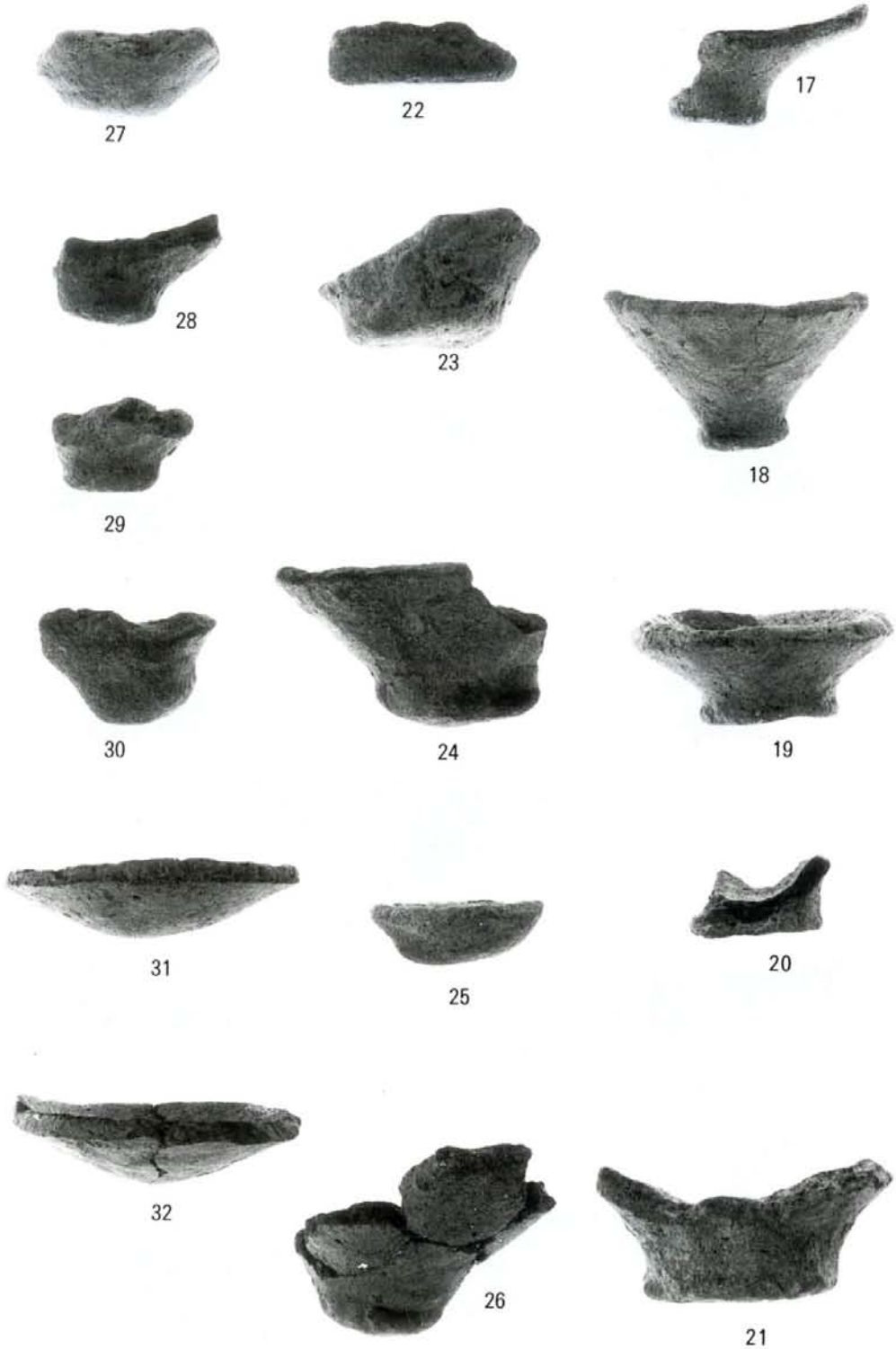
図版70　在地土器（底部）



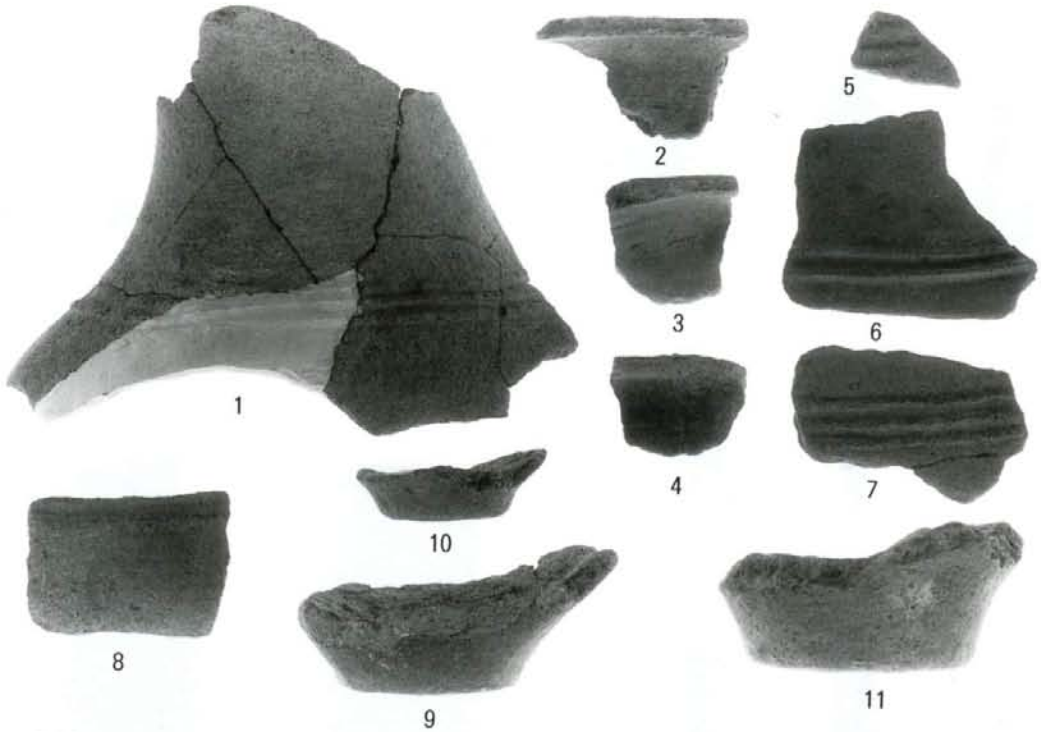
図版71　在地土器（底部）※39欠落



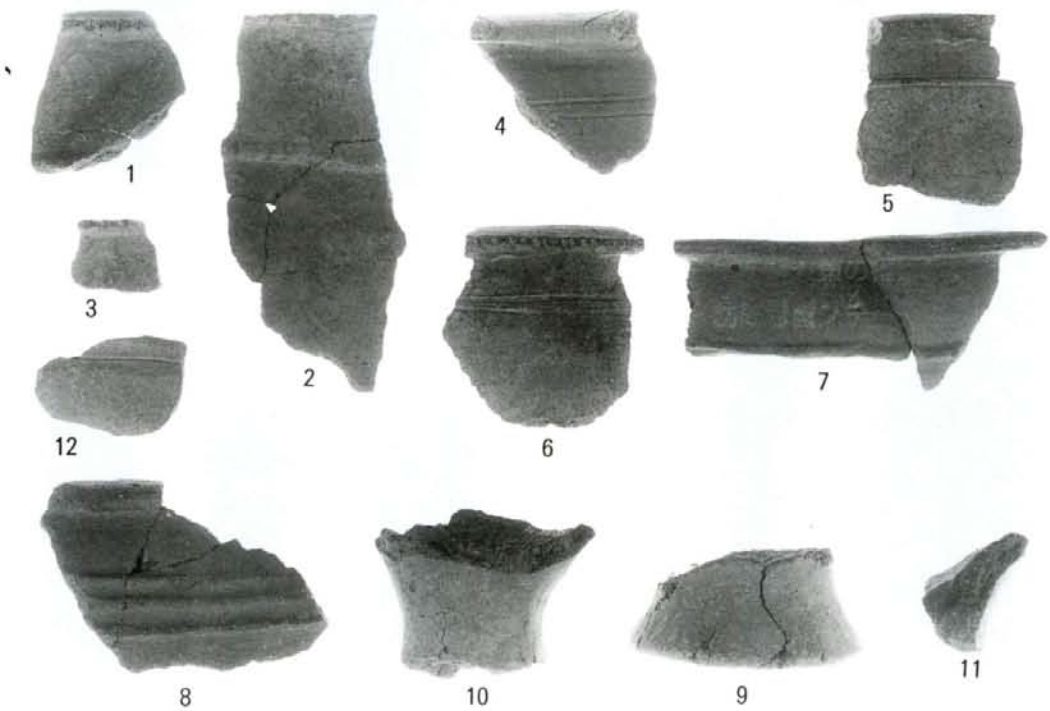
図版72　在版土器（底部）



図版73　在地土器（底部）

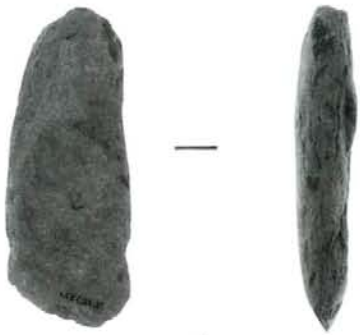


図版73　弥生土器（壺形）



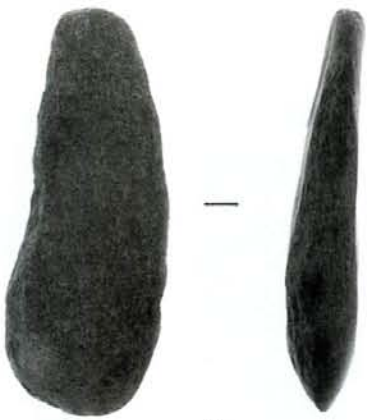
図版74　弥生土器（甕形）

図版75 有孔石製品(1)、穿孔具（２～６）、ノミ状利器（７・８）



1

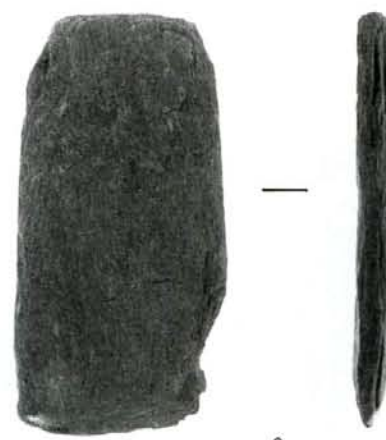
2



3

4

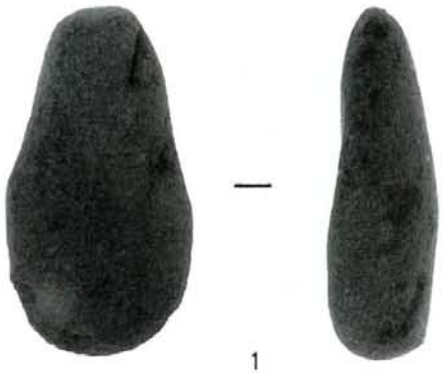
5



6

図版76　石斧1

図版77　石斧2

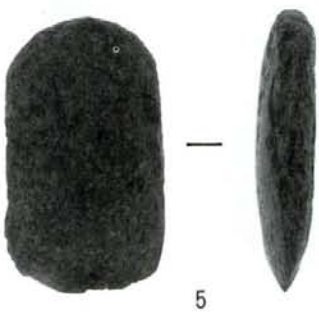


1

2

3

4



5

6

図版78　石斧3

1

2

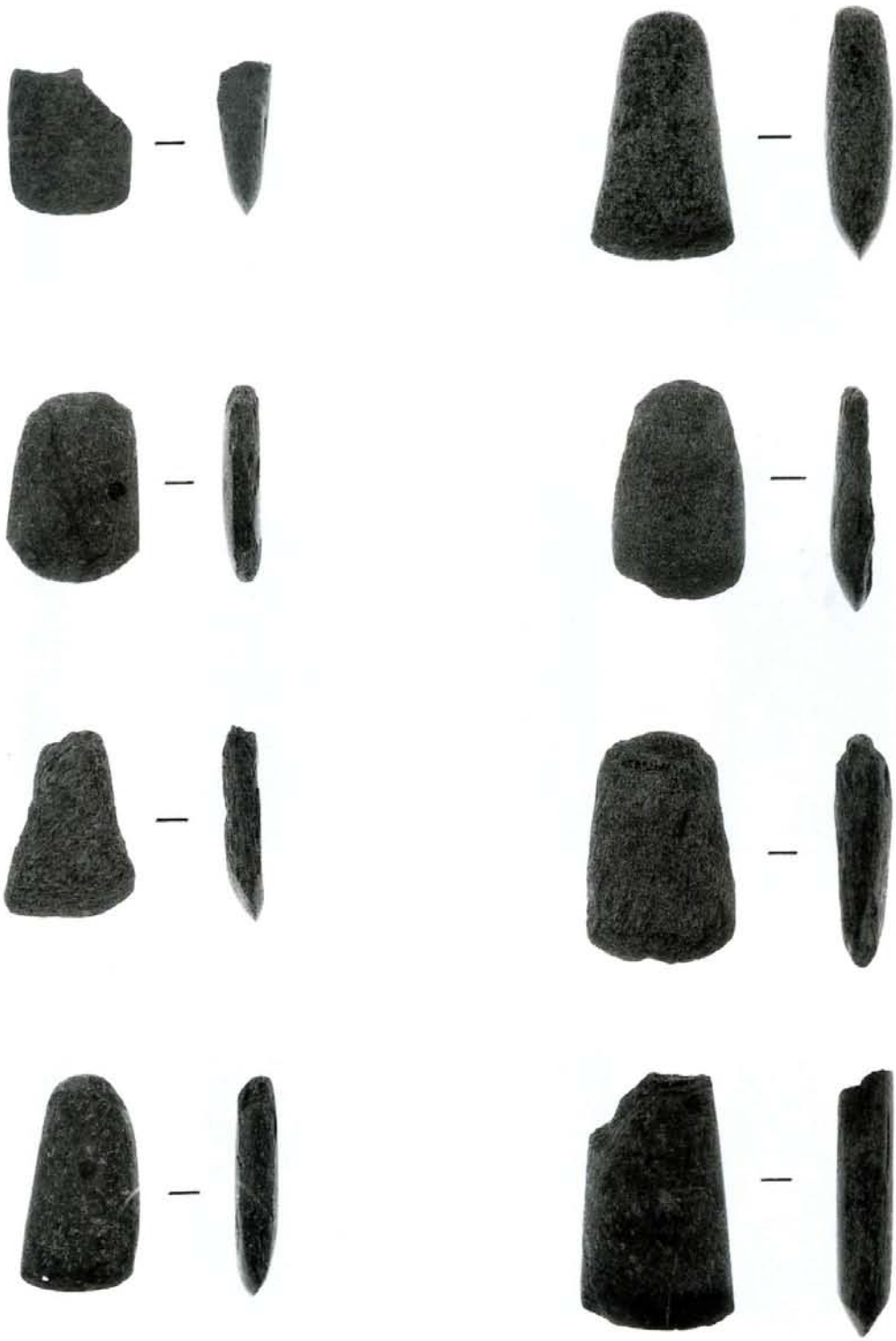
3

4

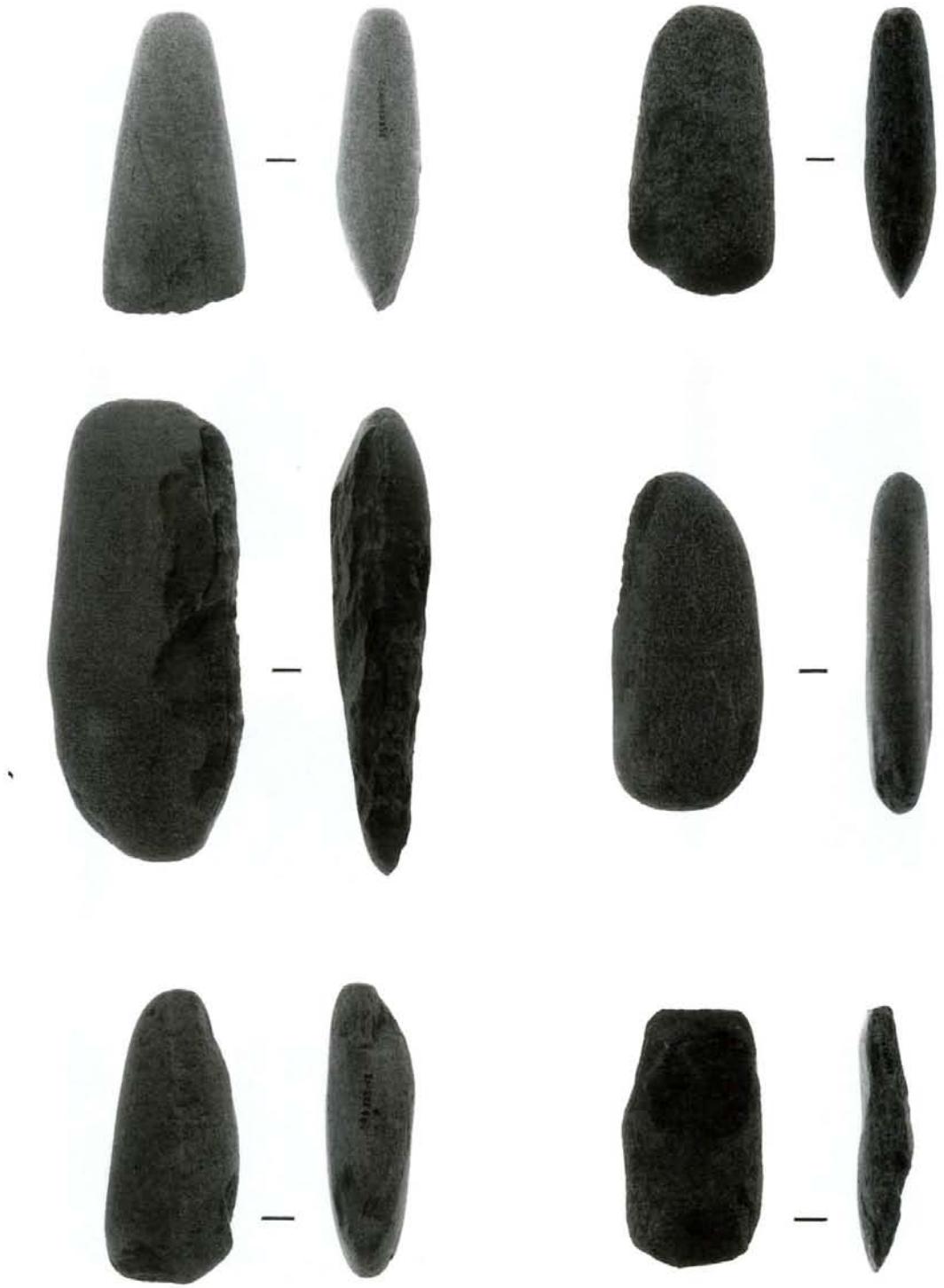
5

6

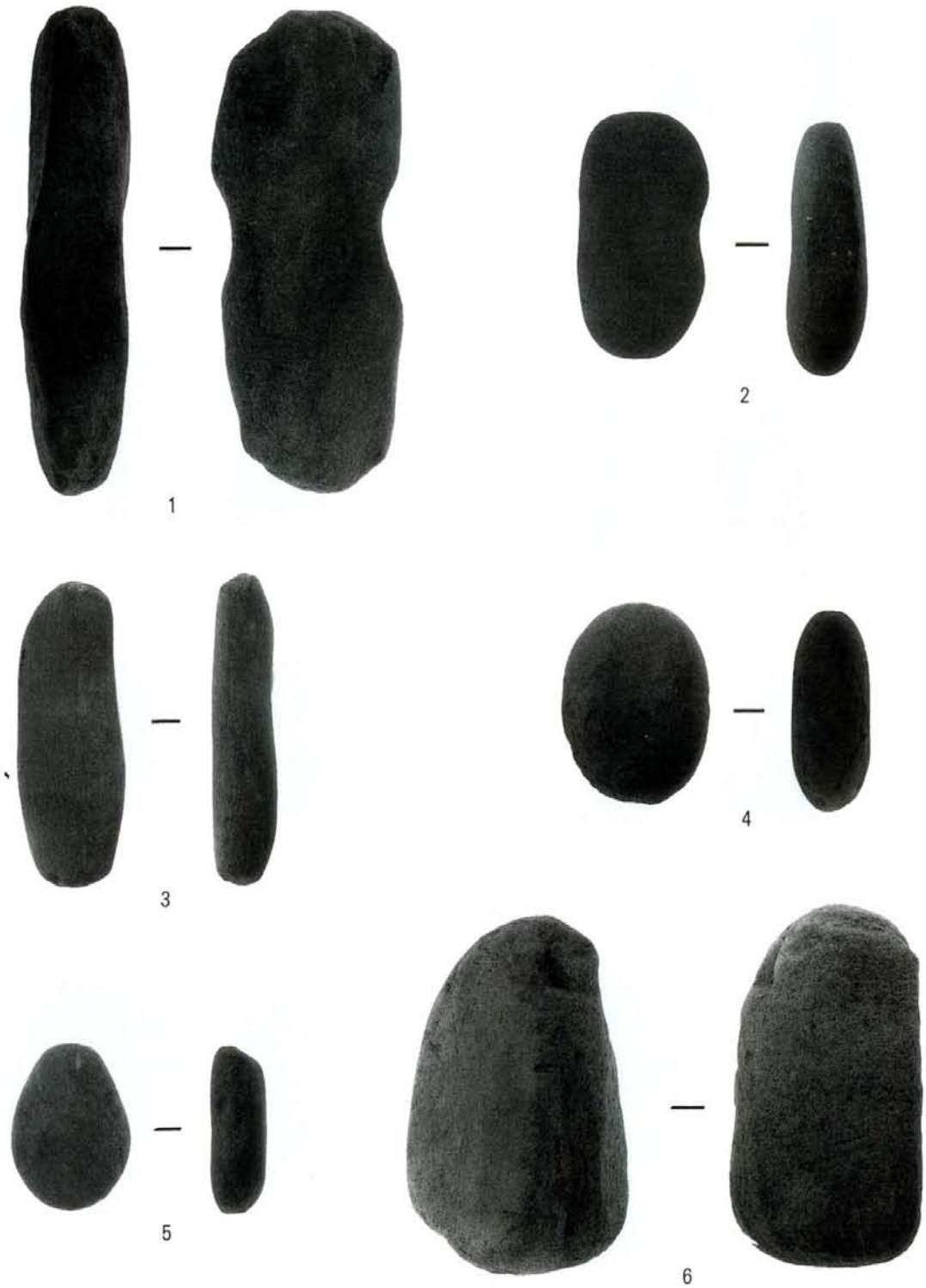
図版79　石斧4



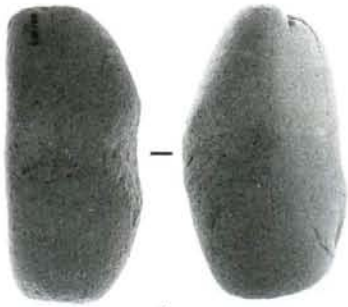
図版80　石斧5



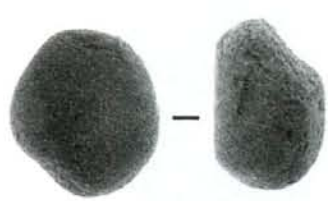
図版81　石斧6



図判82　叩き石1（1～3），2（4～6）



1



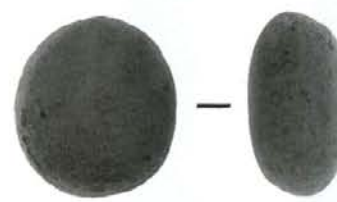
2

3

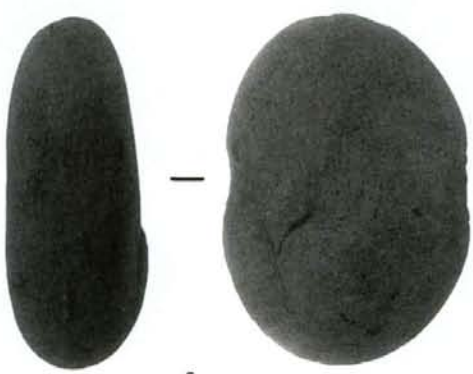
4

5

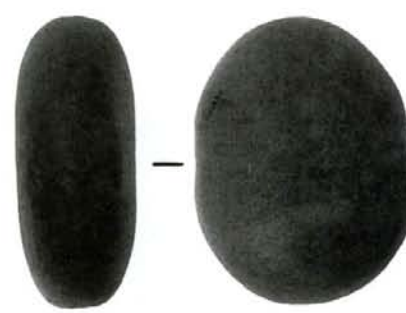
6



7



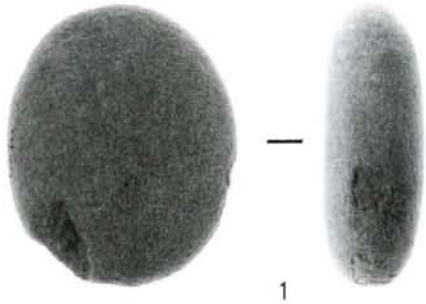
8



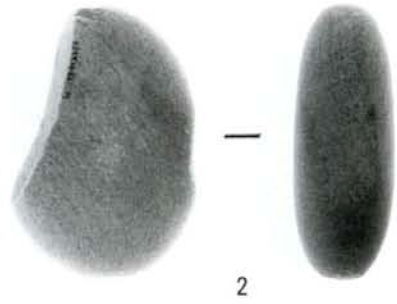
9

図版83　叩き石3（1～6），4（7～9）

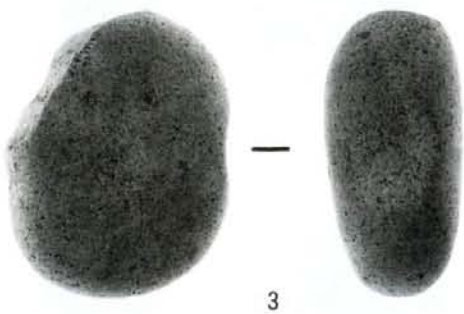
図版84　叩き石5（1～3），6（4～8）



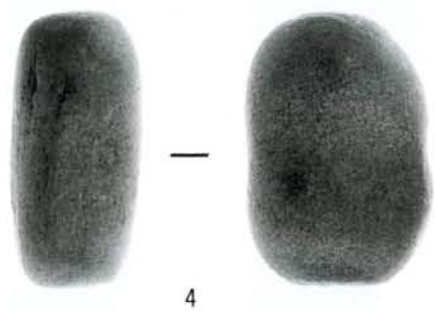
1



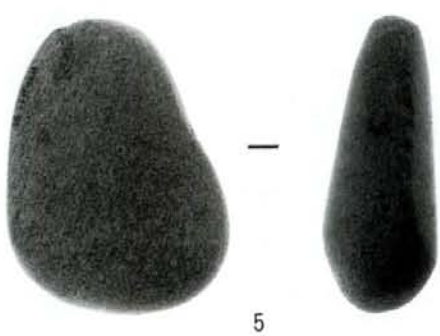
2



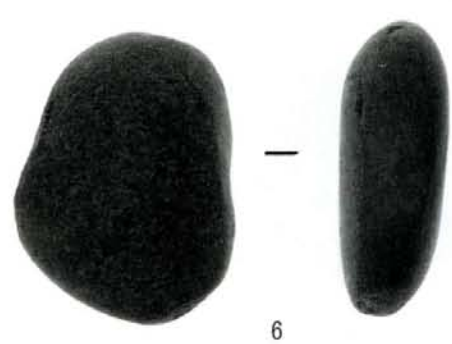
3



4

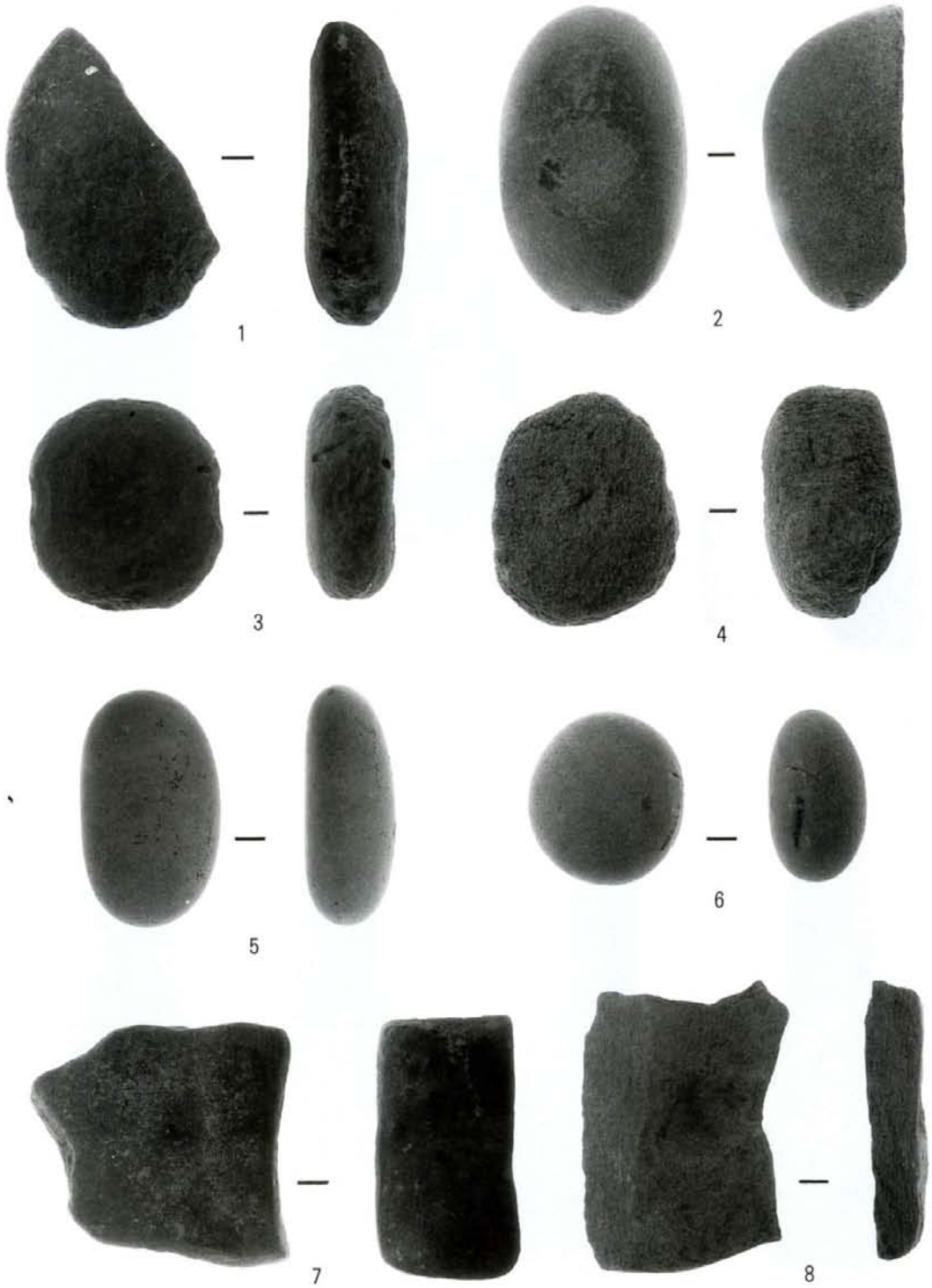


5

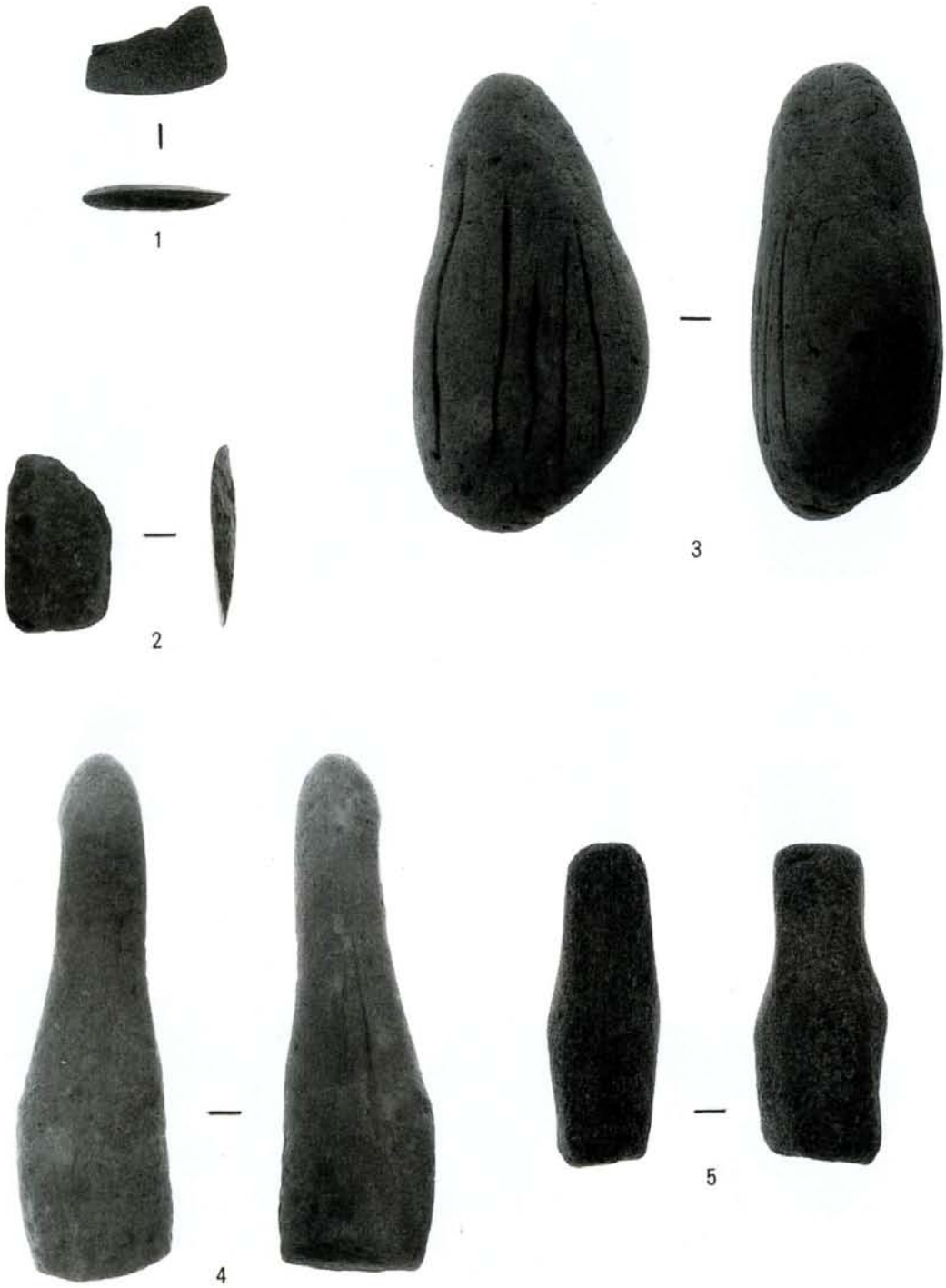


6

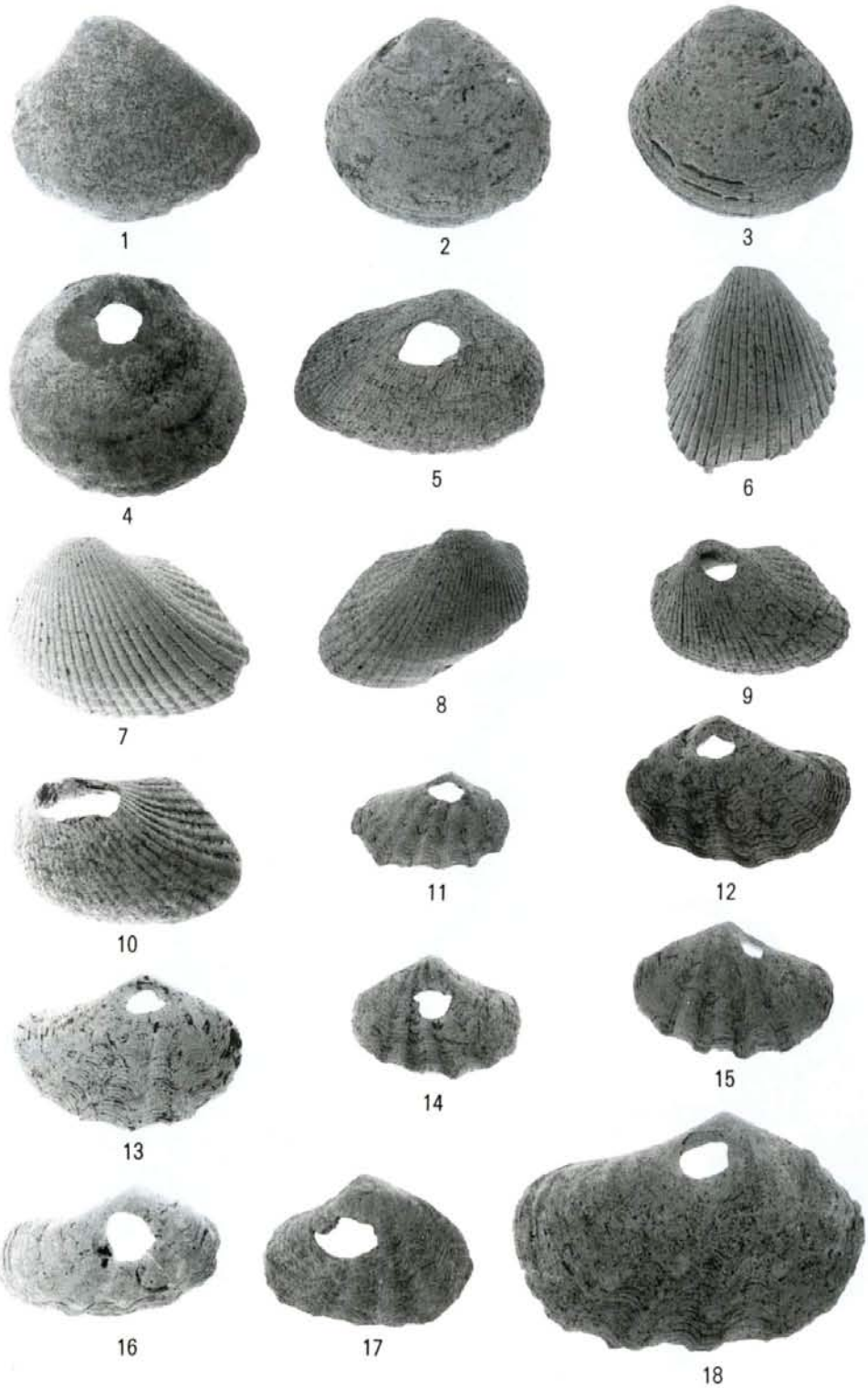
図判85　叩き石7



図版86　叩き石（1～4），磨石（5・6），くぼみ石（7・8）



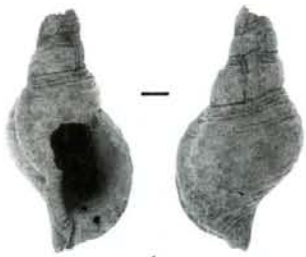
図版87 その他の石器



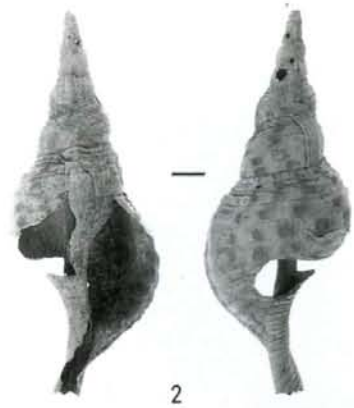
図判88　貝刀（1～3）、二枚貝有孔製品（4～18）

図判89　スイジガイ製利器 1

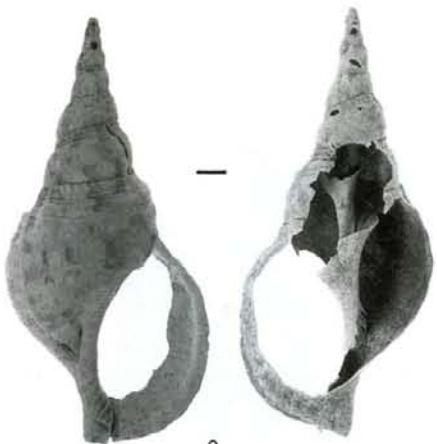
図版90　スイジガイ製利器2



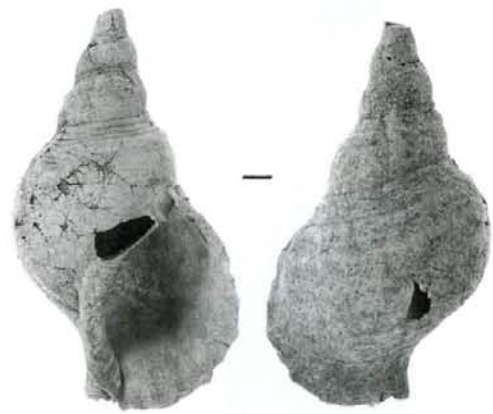
1



2



3



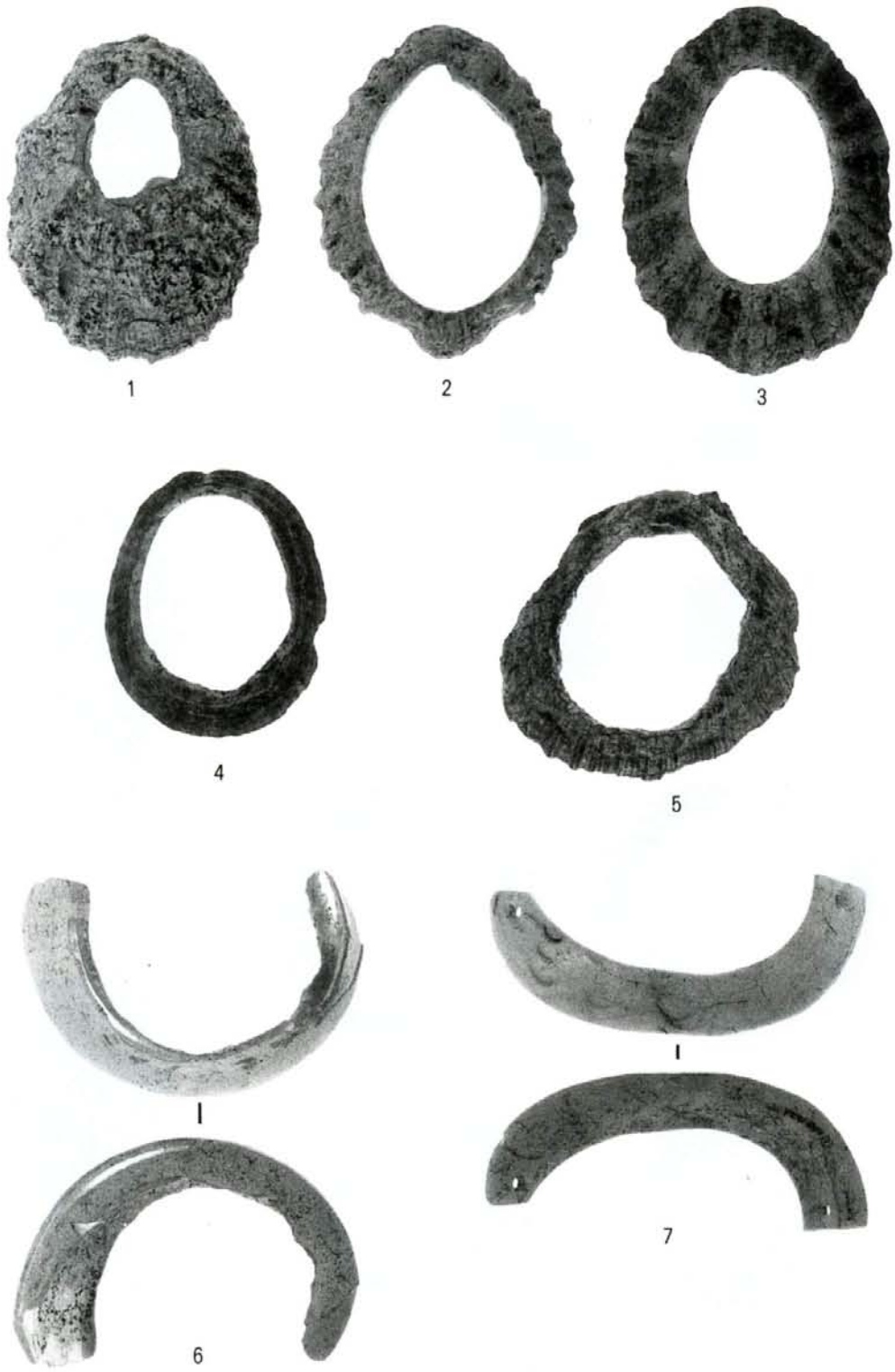
4

5

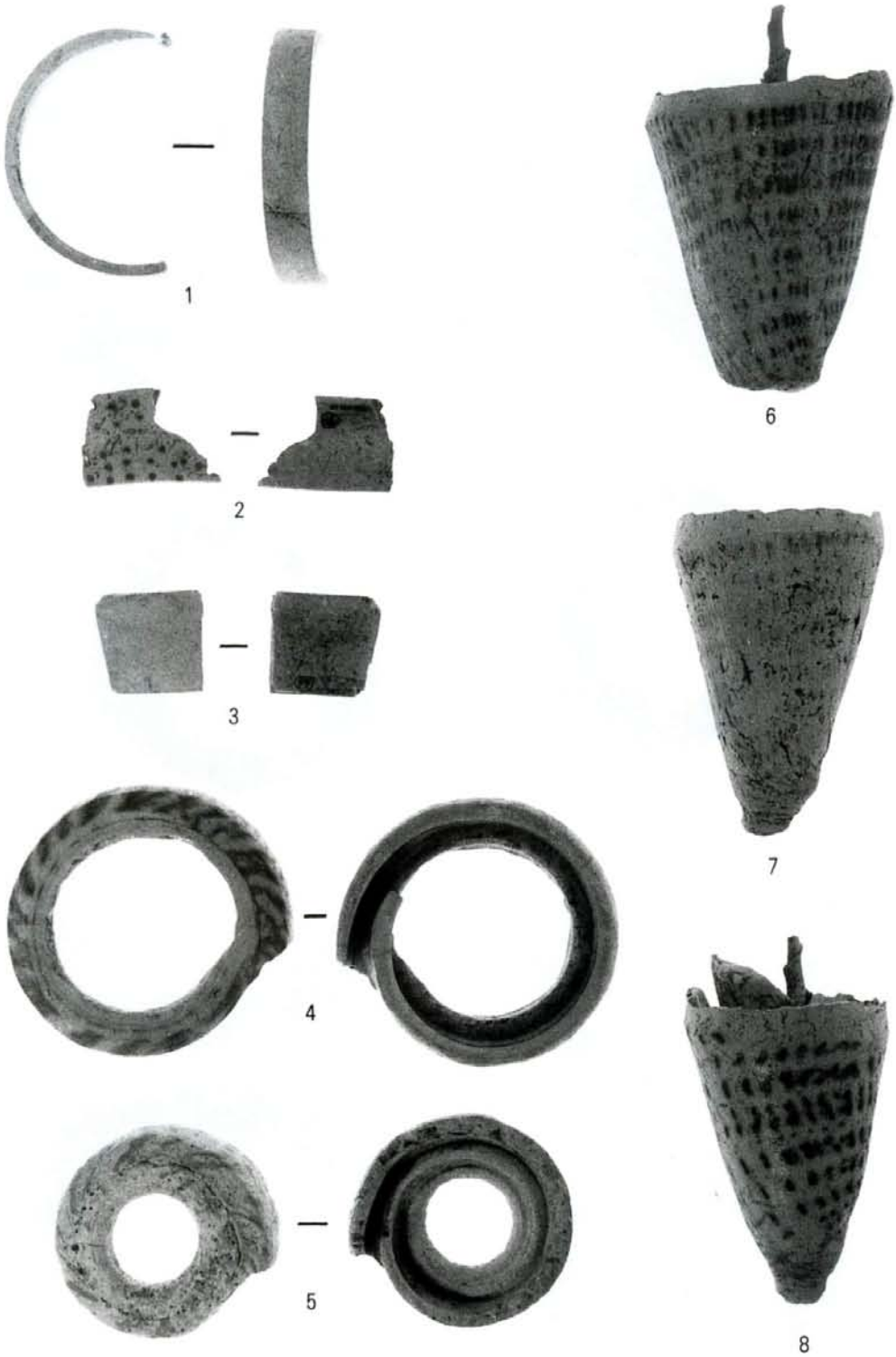
6

6

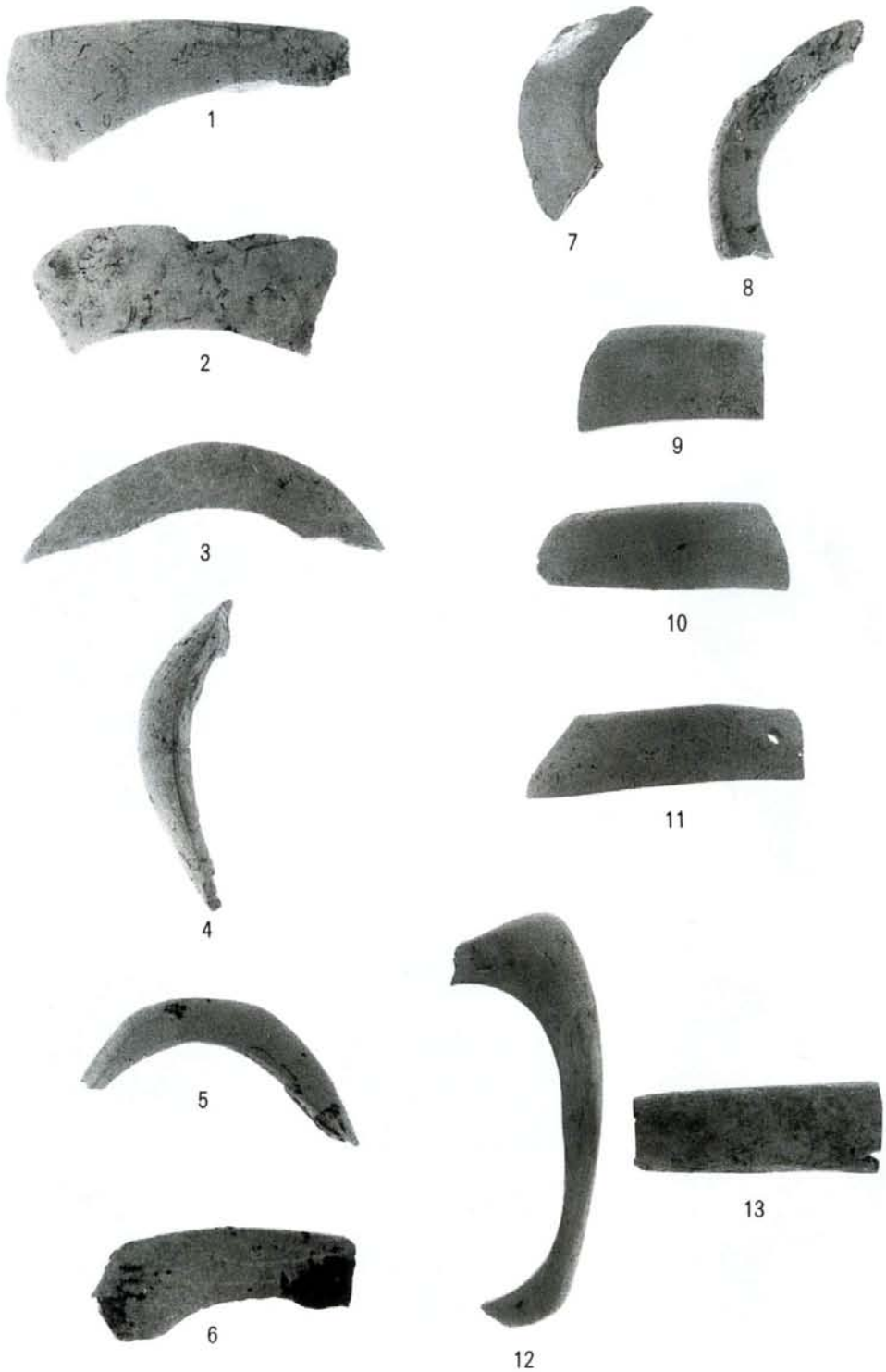
図版91　ホラガイ有孔製品



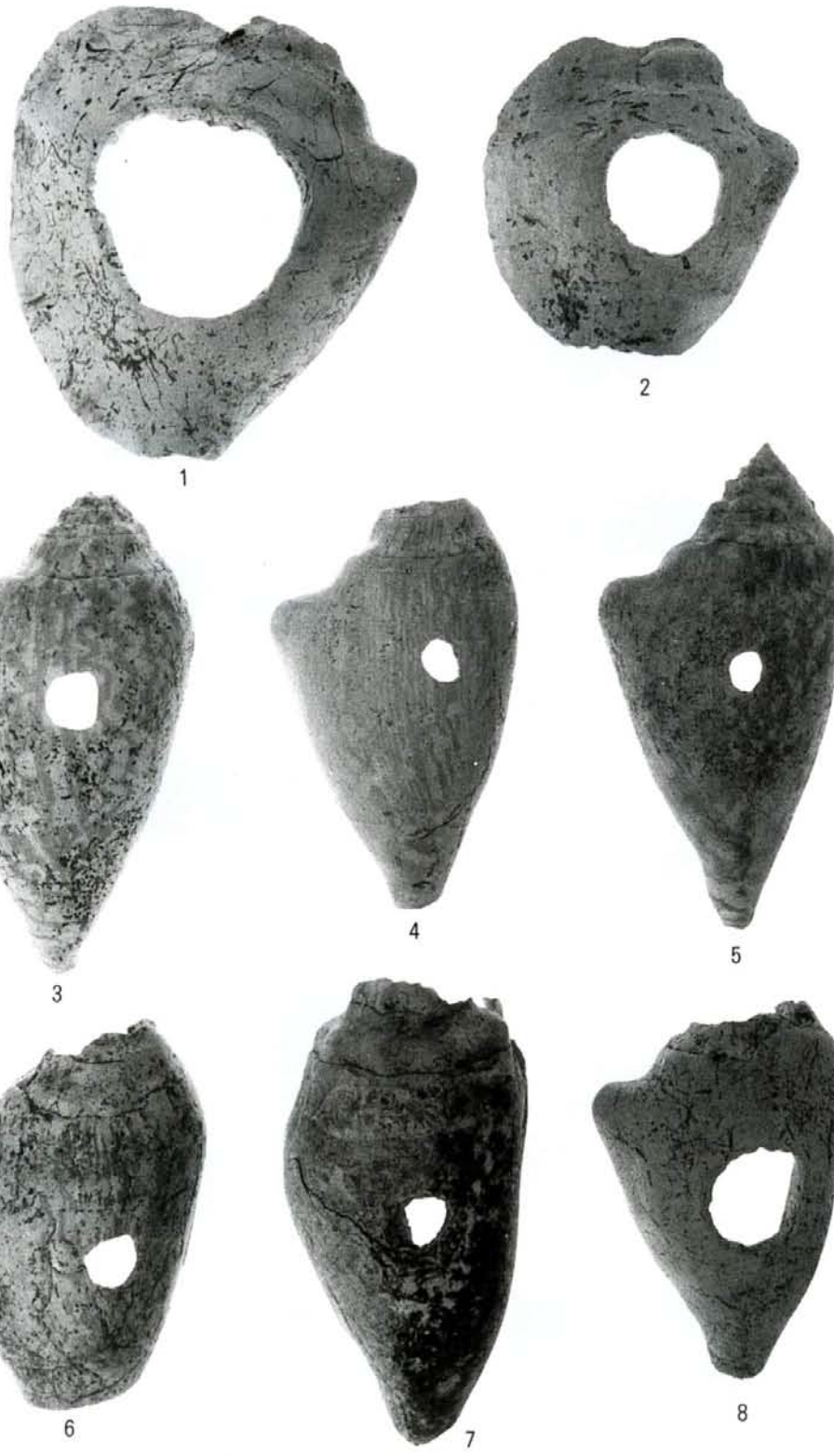
図版92　貝輪（オオツタノハ1～3、オオベッコカサガイ4、メンガイ5、サラサバティ6、シラナミ7）



図版93　イモガイ製貝輪（1～5）、イモガイ切断資料（6～8）



図版 94　ゴホウラ製貝輪

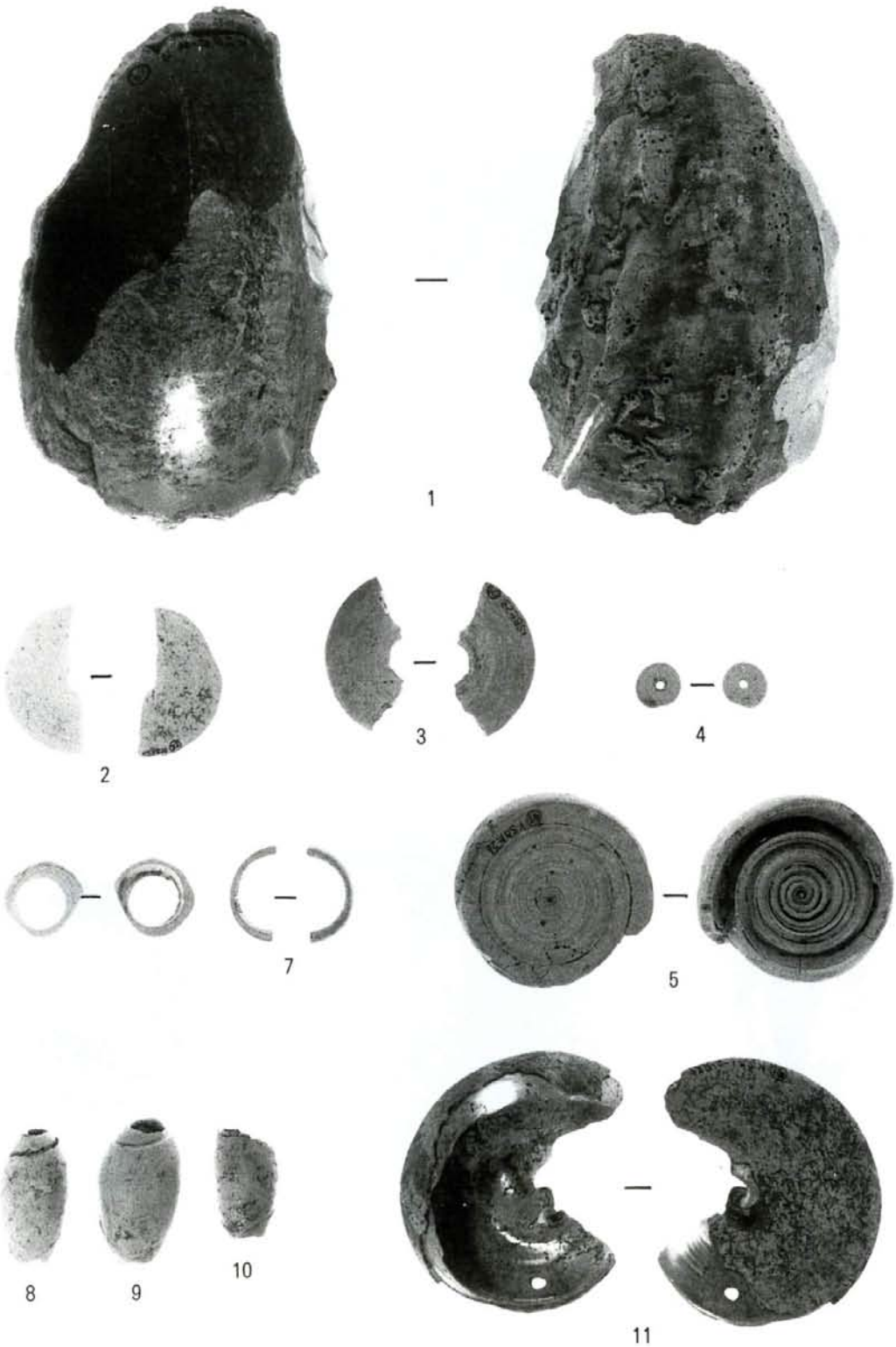


図版95　ソデガイ科貝輪未製品

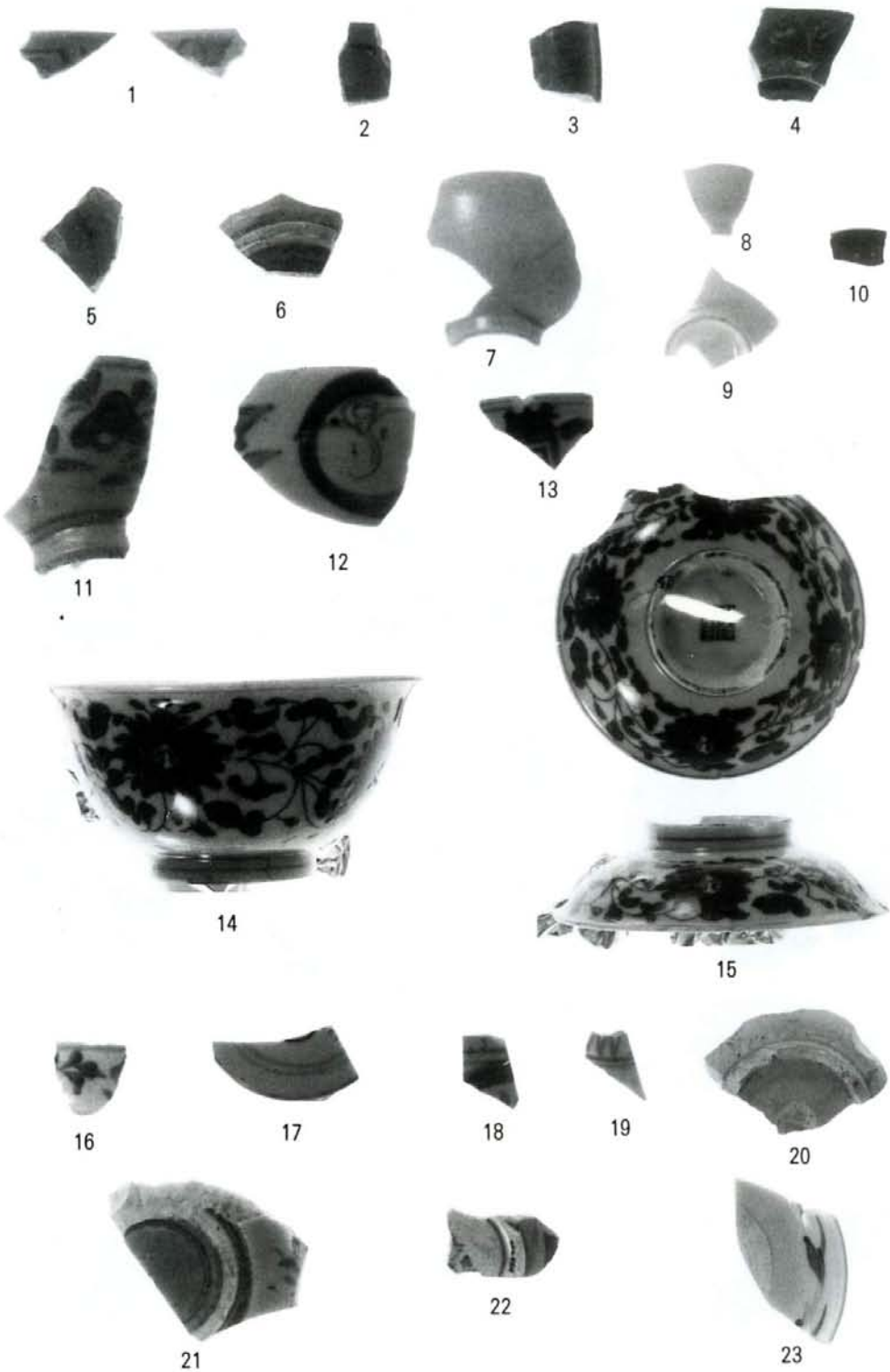
背面

腹面

図版 96　ゴホウラ貝輪未製品　2



図版97　ヤコウガイ製杓子状製品(1)、イモガイ製品（2～5）、イモガイ製指輪（6・7）、サツマビナ製品（8～10)、サラサバティ有孔製品（11）



図版98　中国産磁器（1～17）、肥前及び肥前系磁器（18～23）

1

2

4

5

6

3

7

8

9

10

11

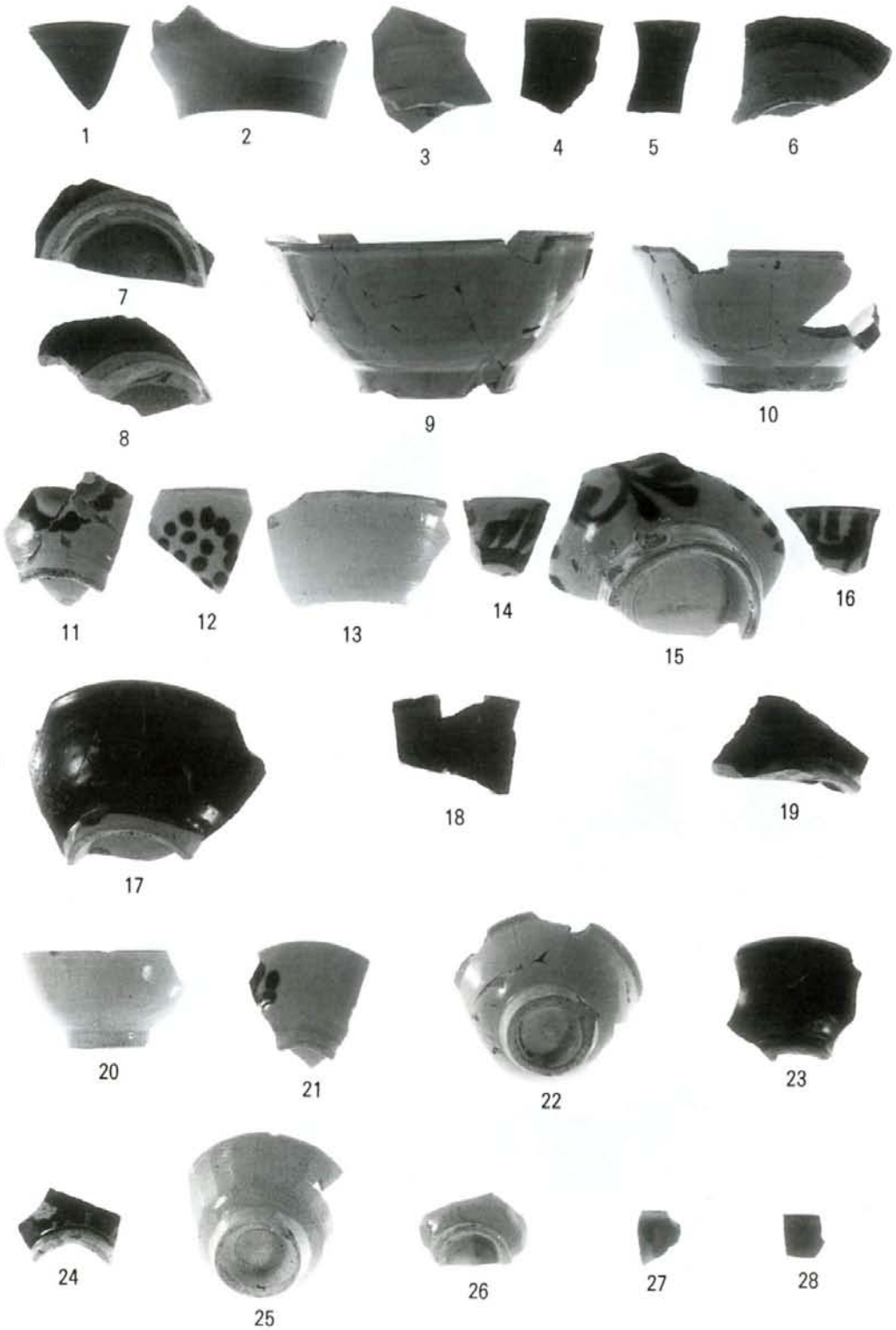
12

13

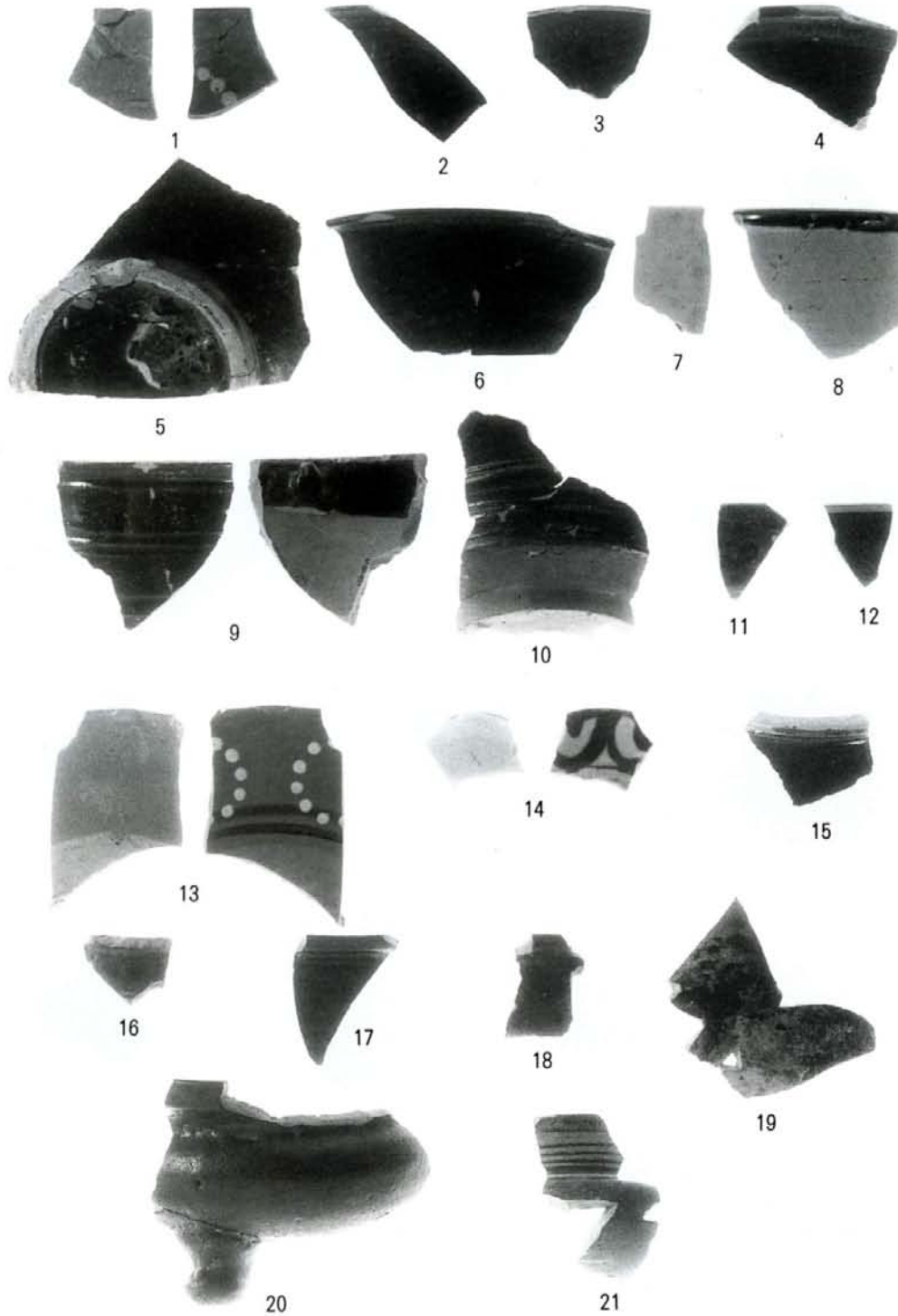
14

15

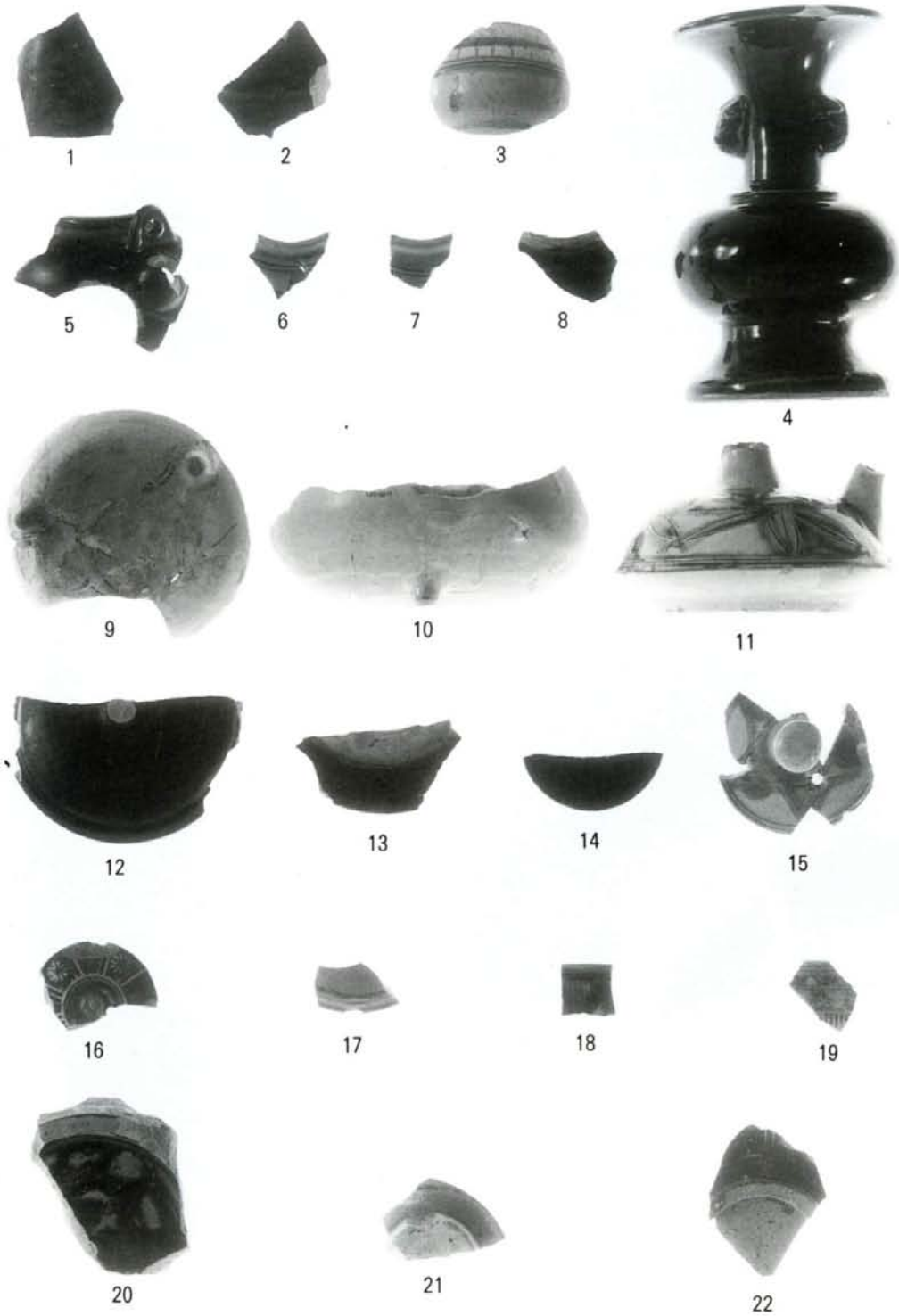
図版 99　日本産近代磁器



図版 100　沖縄産施釉陶器 1



図版 101　沖縄産施釉陶器 2



図版 102　沖縄産施釉陶器 3

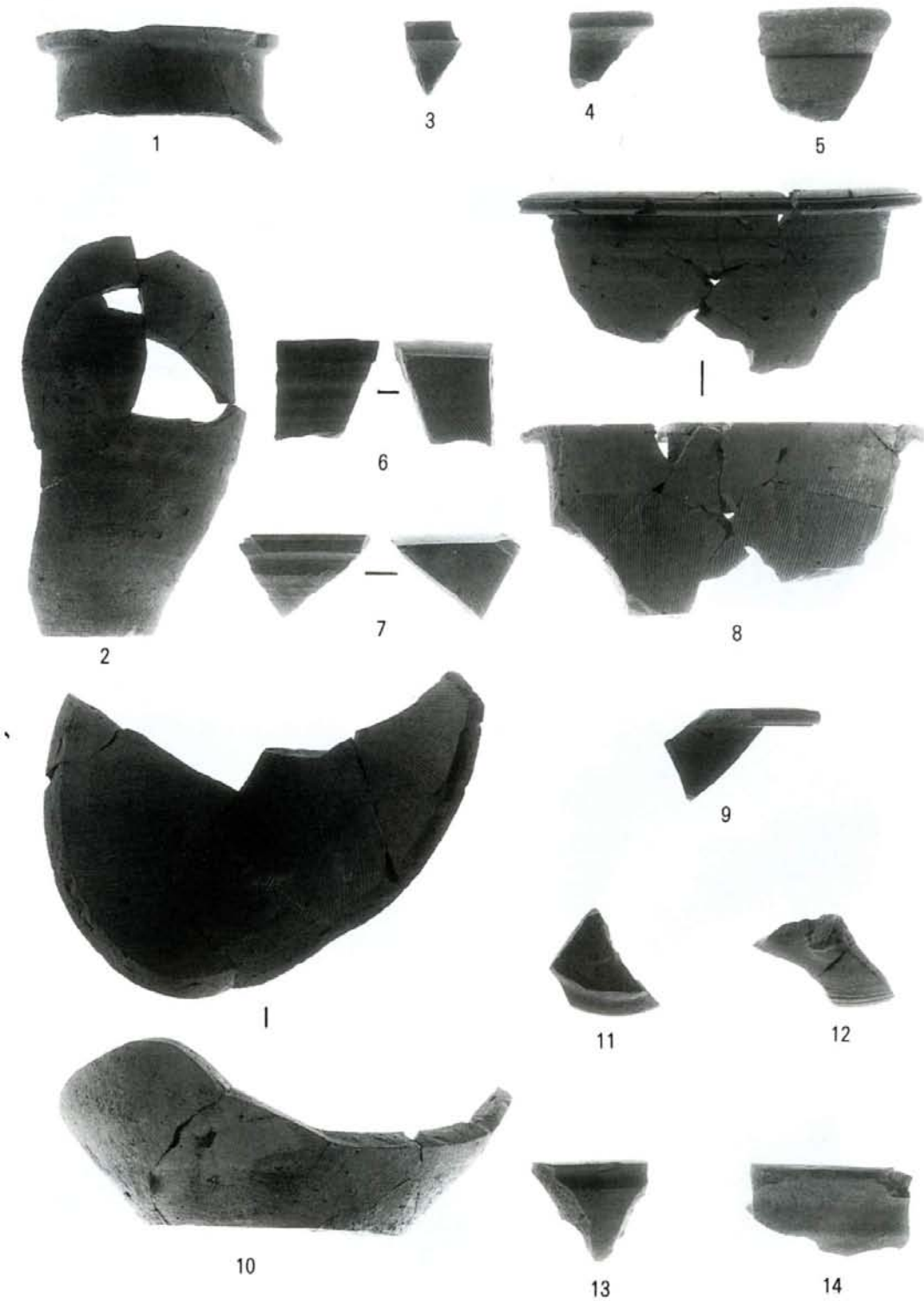
1

2

3

4

図版 103　沖縄産無釉焼き締め陶器 1



図版 104　沖縄産無釉焼き締め陶器 2

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

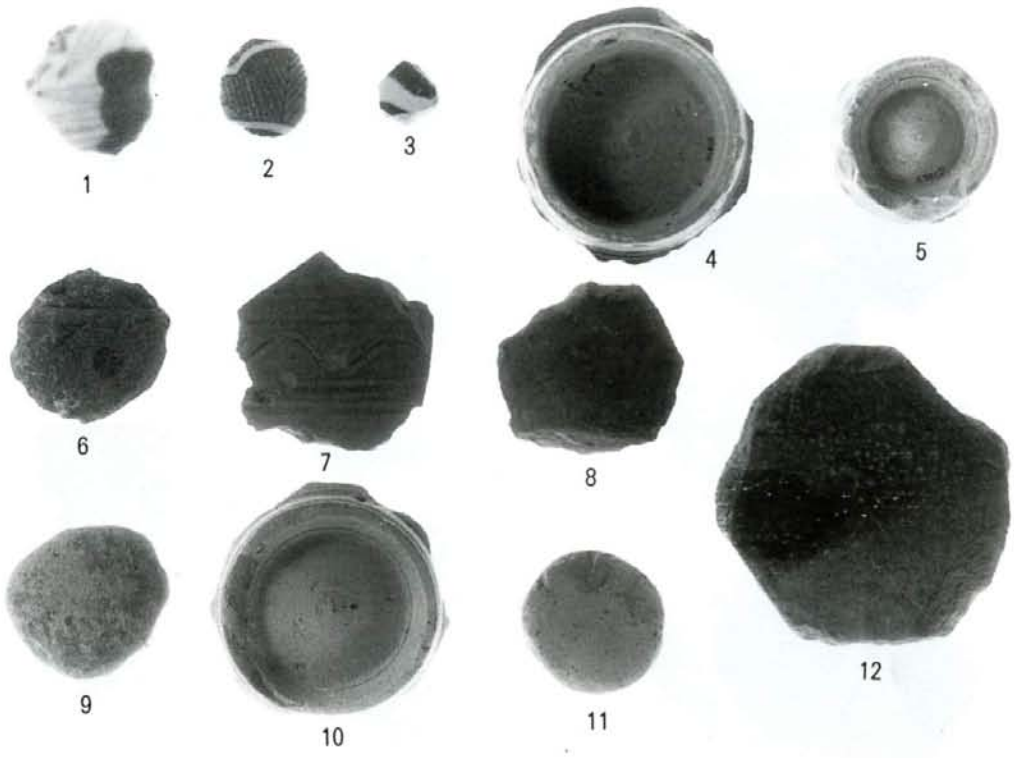
11

12

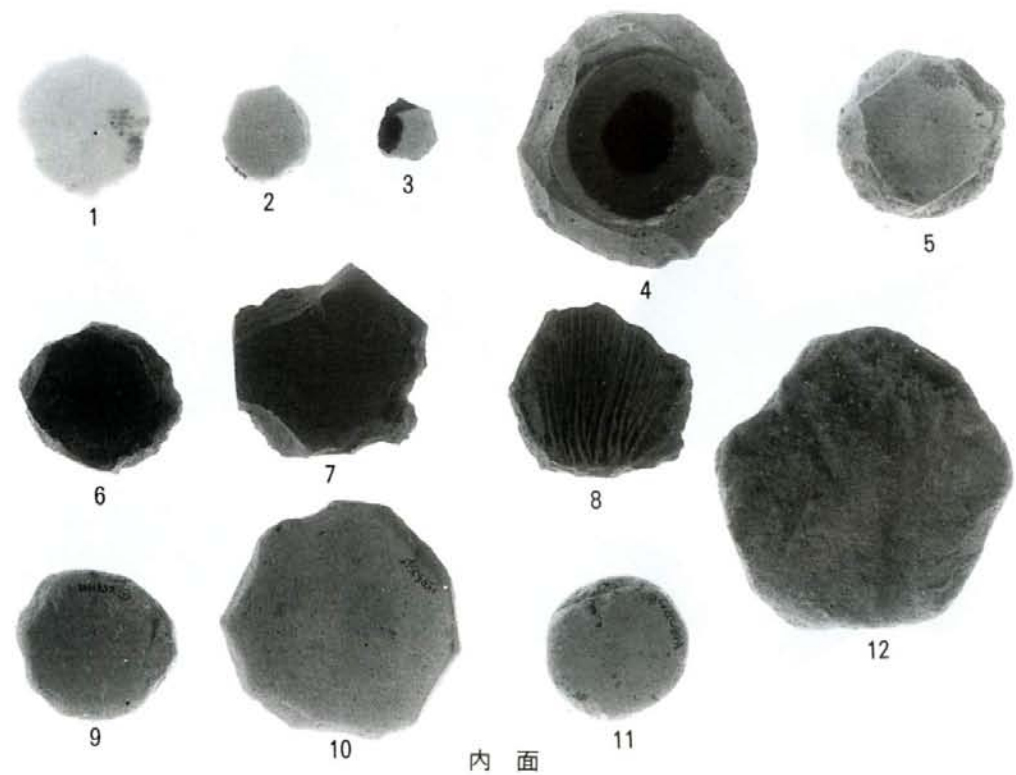
13

14

図版 105　沖縄産無釉焼き締め陶器 3

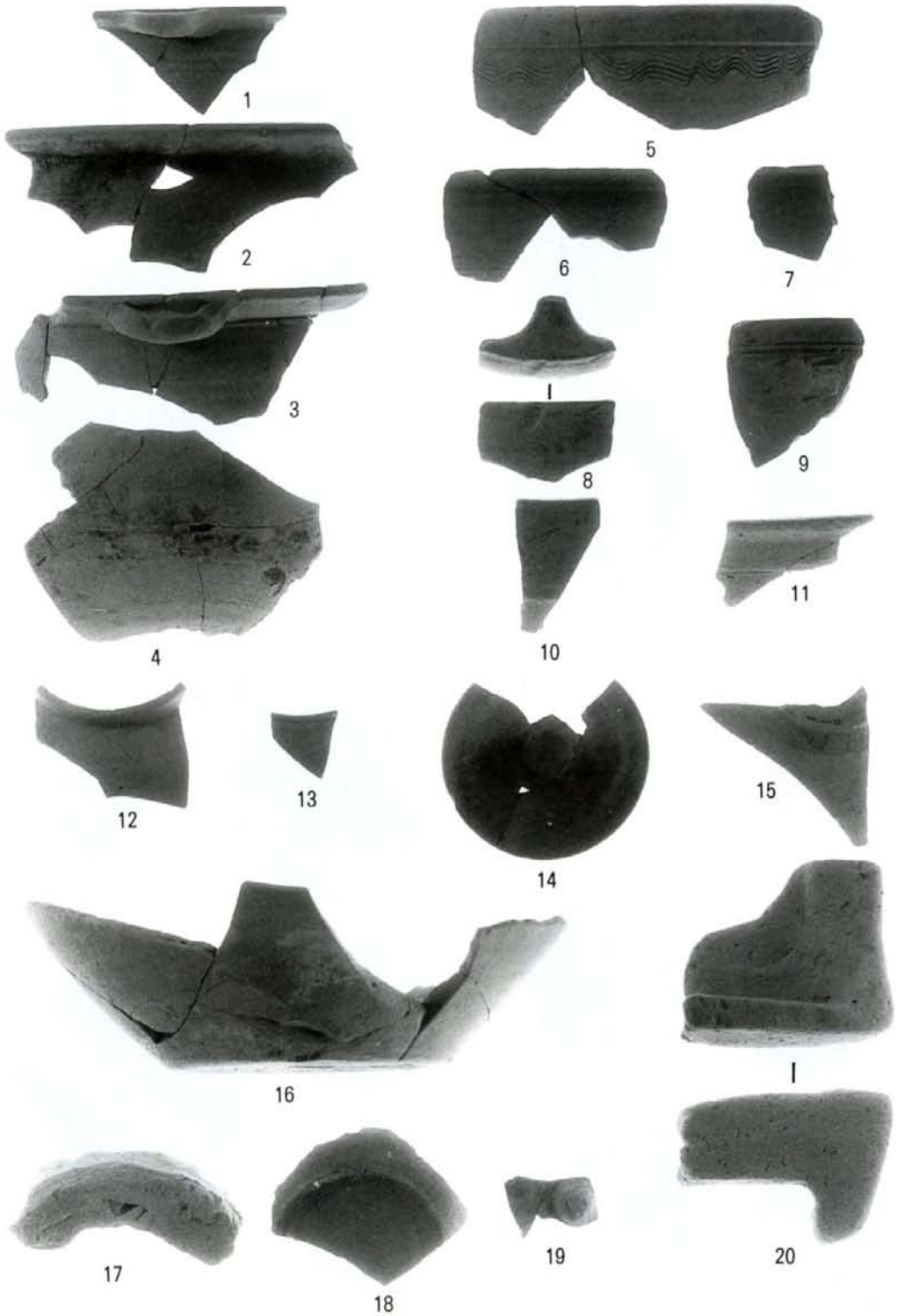


外　面

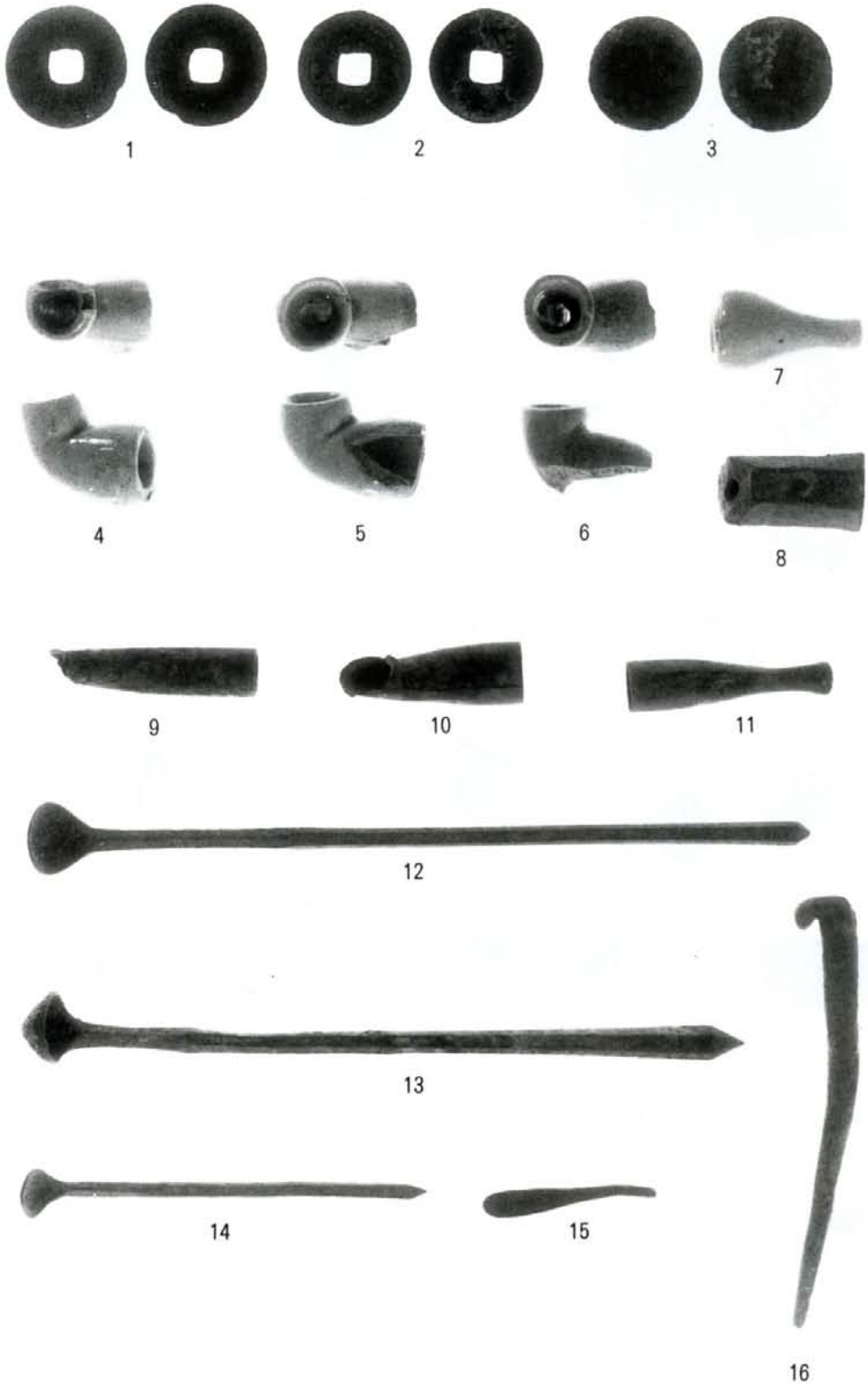


内　面

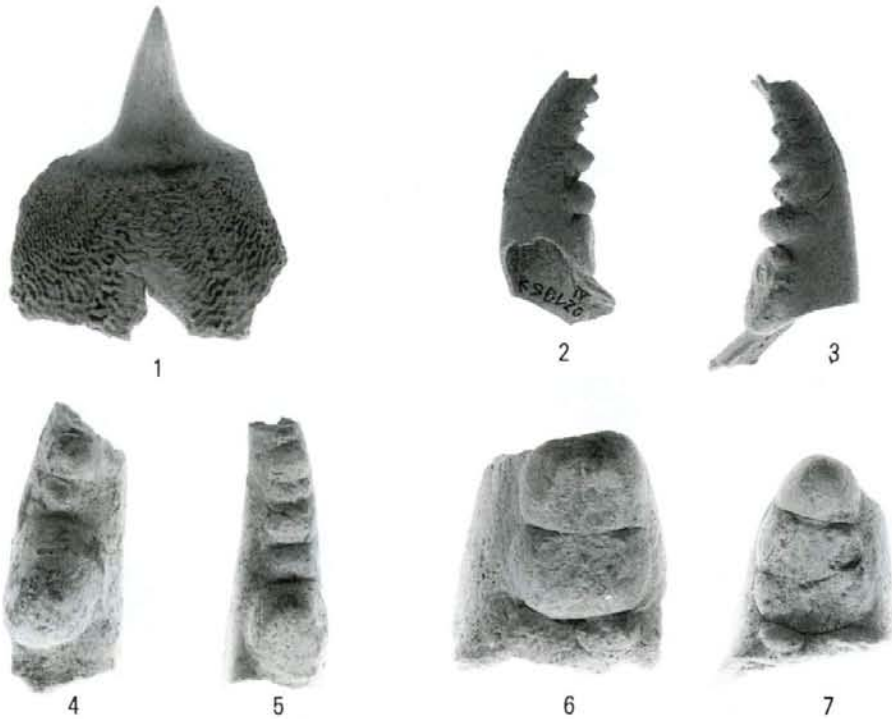
図版 106　円盤状製品



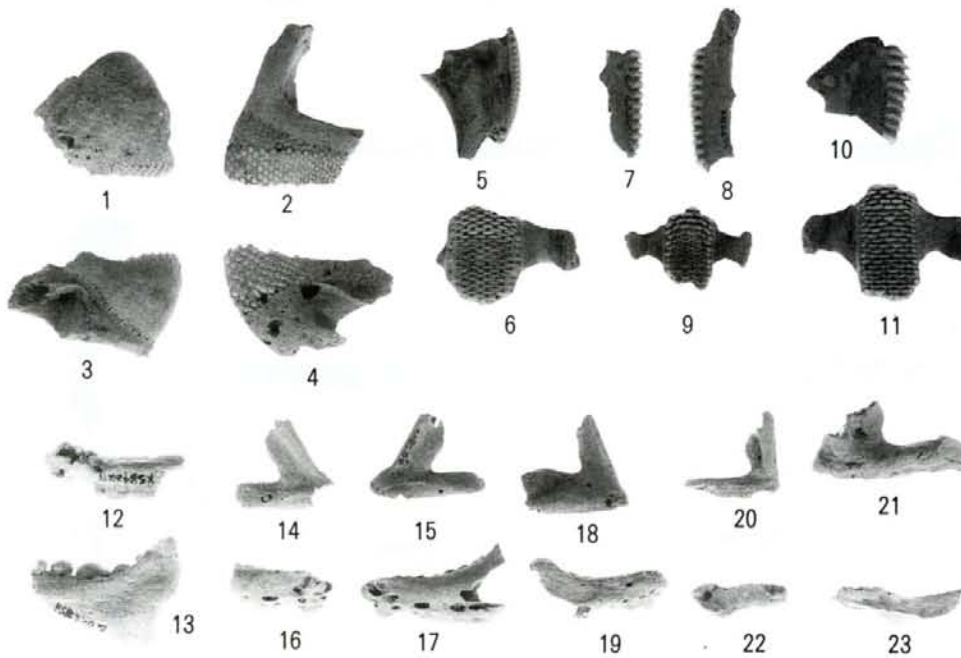
図版 107　軟質陶器



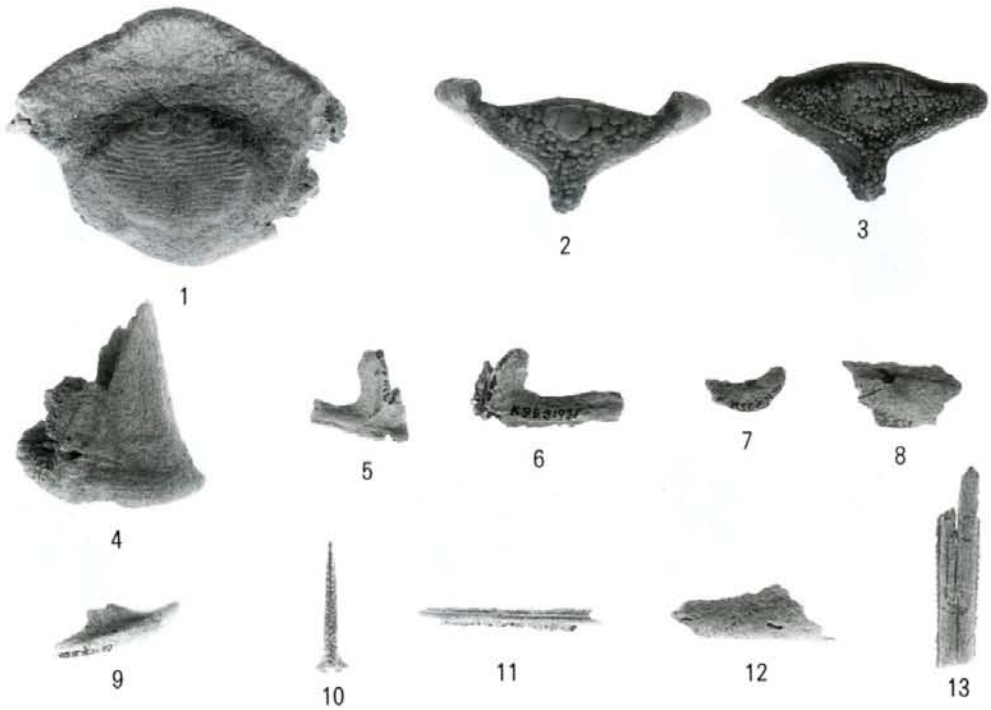
図版108　銭貨（1～3）　煙管　（4～11）　かんざし（12～15）　角釘（16）



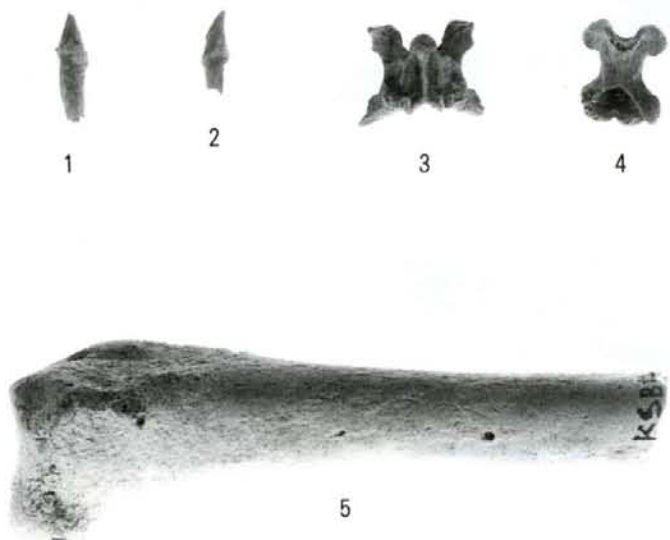
図版 109　1 コウイカ甲端、2 モクズガニ左可動指、3 モクズガニ右可動指、4 コギリガザミ左可動指、5 ノコギリガザミ右可動指、6 ノコギリガザミ左不動指、7 ノコギリガザミ右不動指



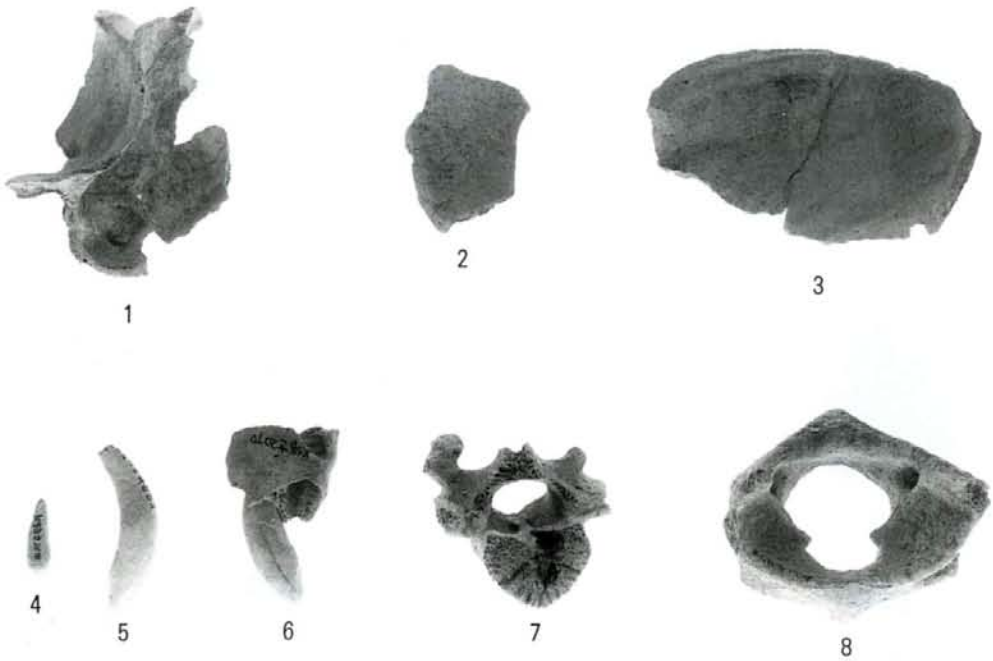
図版 110　ブダイ科（1右前上顎骨、2 左前上顎骨、3 右歯骨、4 左歯骨）、イロブダイ（5 右上咽頭骨、6 下咽頭骨）、ナガブダイ（左上咽頭骨、8 右上咽頭骨、9 下咽頭骨）、ナンヨウブダイ（10 左上咽頭骨、11下咽頭骨）、ヨコシマクロダイ（12右上顎骨、13左歯骨）、ヘマフキダイ科（14右上顎骨、15左上顎骨、16右歯骨、17左歯骨）、ミナミクロダイ（18右上顎骨、19右歯骨）、フエダイ科（20右前上顎骨、21左上顎骨、22右歯骨、23左歯骨）



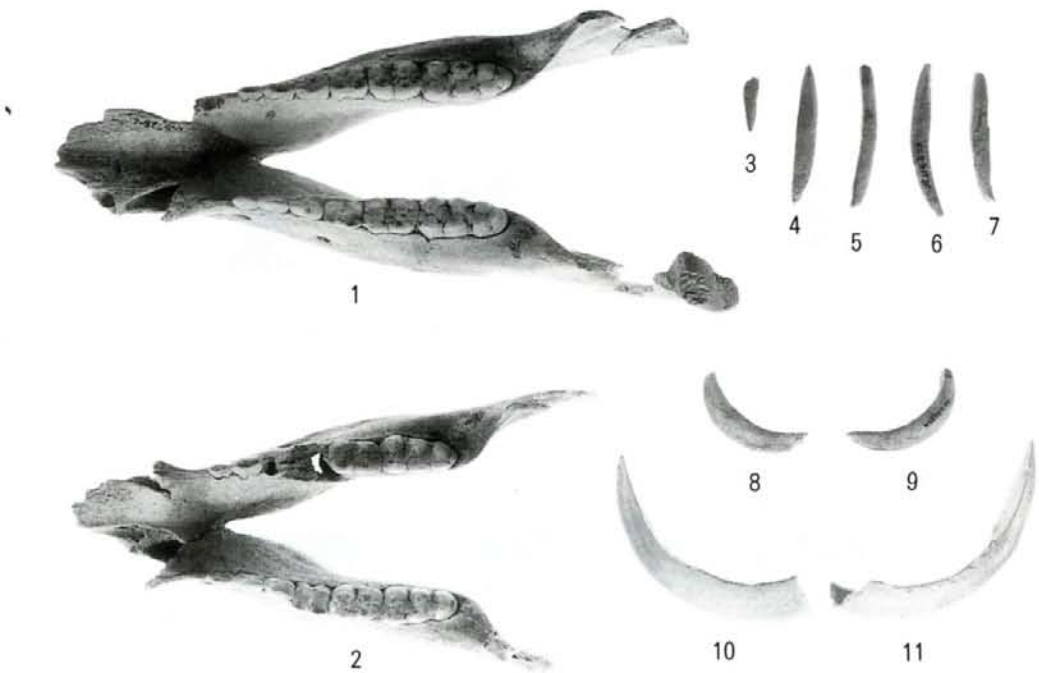
図版 111　1 ハリセンボン科前上顎骨、2 ベラ科コブダイ下咽頭骨、3 ベラ科下咽頭骨、4 マフグ科左前上顎骨、5 ハタ科右前上顎骨、6 ハタ科左前上顎骨、7 クロダイ歯骨、8 ニザダイ科骨板突起、9 モソガラカワハギ右歯骨、10カワハギ背鰭第1棘、11ダツ左上顎骨　12ウツボ科左歯骨、13 エイ類尾棘片



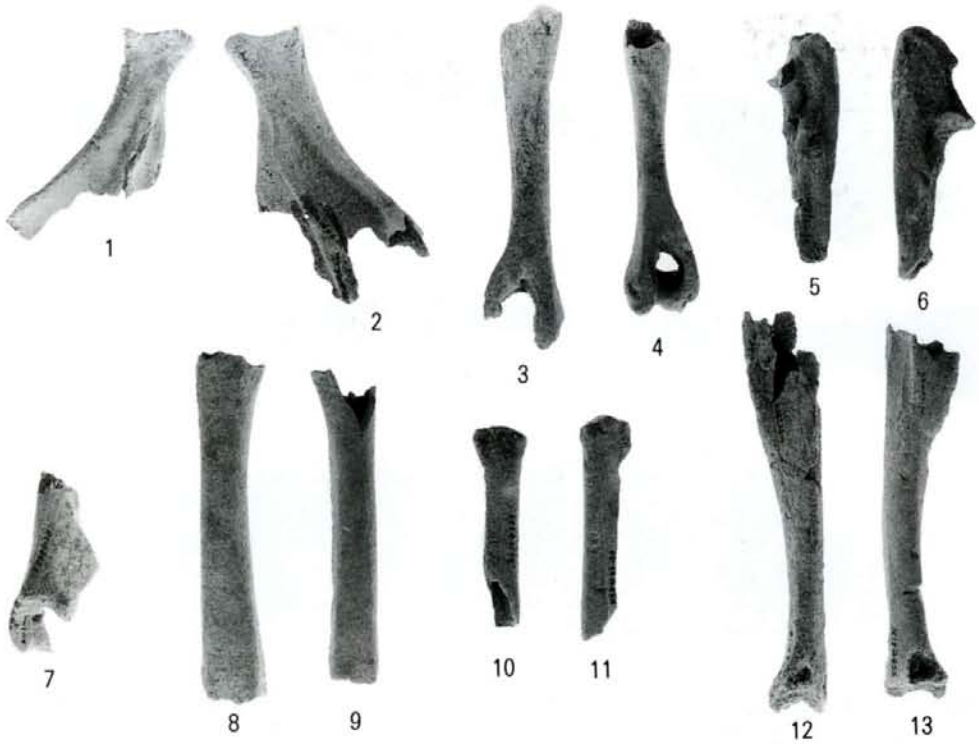
図版 112　オオコウモリ（1・2）、ハブ脊椎（3・4）、アホウドリ大腿骨（5）



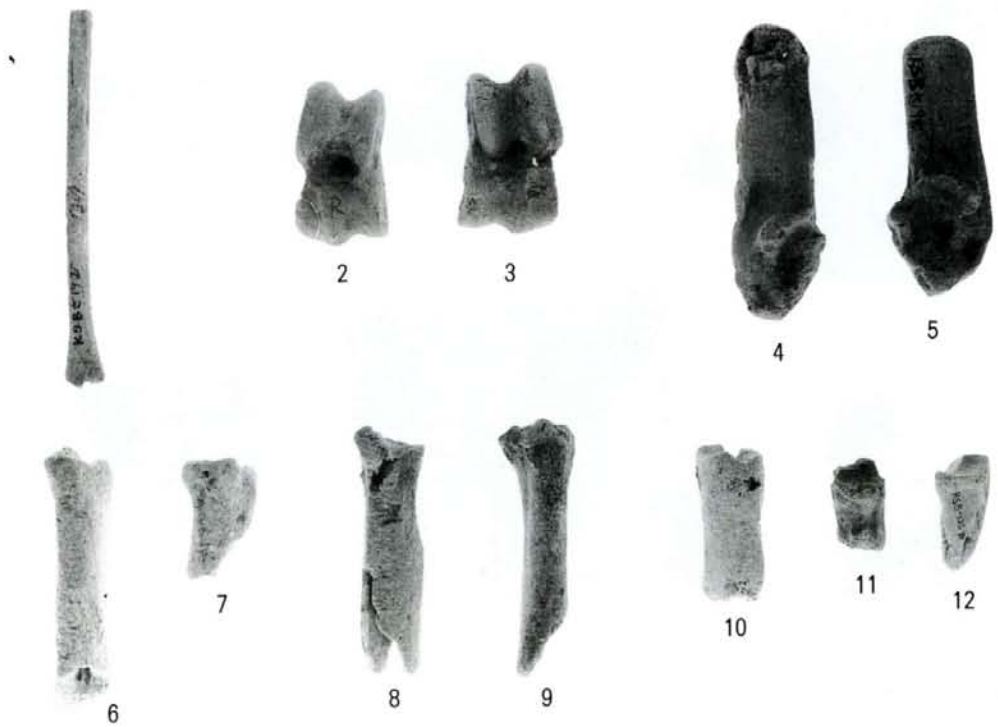
図版113　イノシシ（1右前頭骨、2頭頂骨、3頭蓋骨、4右上顎I^3、5右上顎I^1、6左上顎I^1、7腰椎、8環椎）



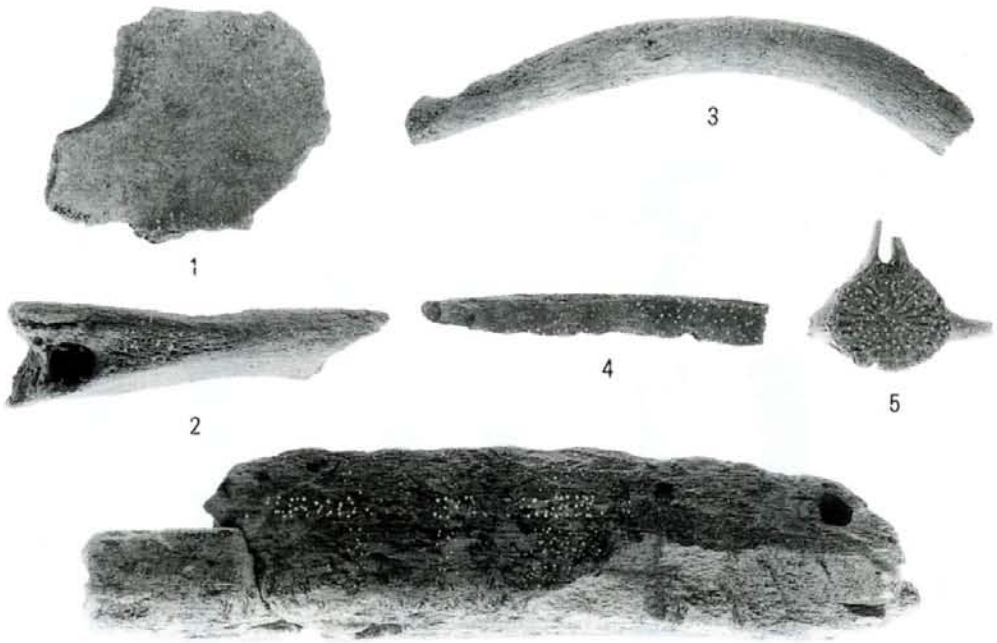
図版114　イノシシ（1・2下顎骨、3左下顎I_3、4左下顎I_2、5左下顎I_1、6右下顎I_1、7右下顎I_2、8♀左下顎犬歯、9♀右下顎犬歯、10♂左下顎犬歯、11♂左下顎犬歯）



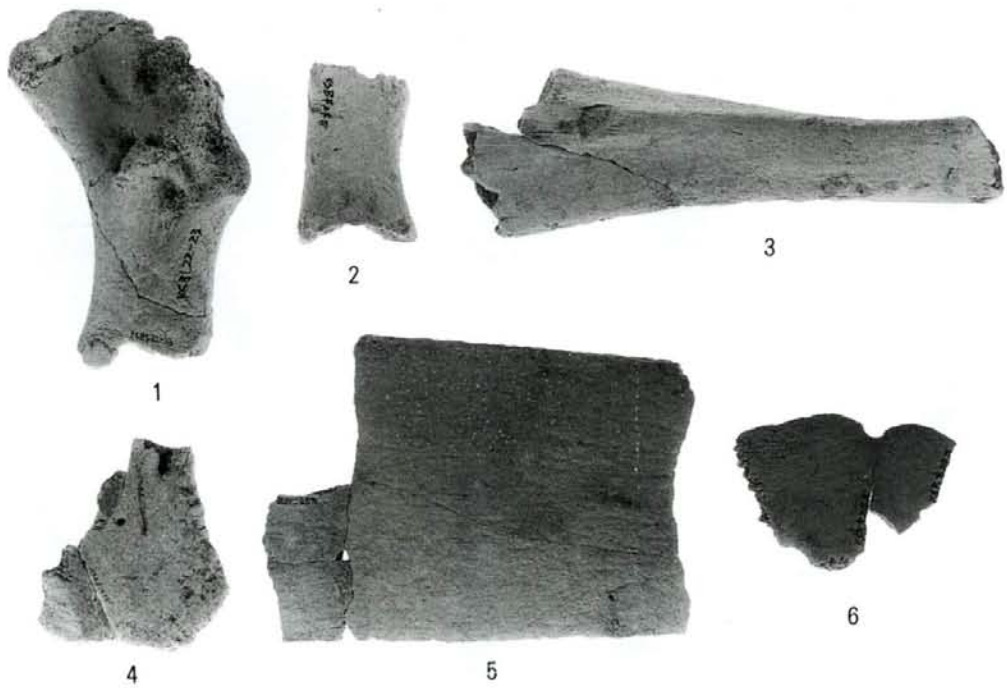
図版115　イノシシ（1左肩甲骨、2右肩甲骨、3左上腕骨、4右上腕骨、5左尺骨、6右尺骨　7左寛骨、8左大腿骨、9右大腿骨、10左橈骨、11右橈骨、12左脛骨、13、右脛骨）



図版116　イノシシ（1腓骨、2左距骨、3右距骨、4左踵骨、5右踵骨、6右中手骨、7左中手骨、8左中足骨、9右中足骨、10基節骨、11中節骨、12末節骨



図版 117　ジュゴン（1 右下顎骨片、2 左下顎骨片、3 助骨）イルカ（4 前上顎骨、5 腰椎）ゴンドウクジラ（6 助骨）



図版 118　ウミガメ（1 右上腕骨、2 左大髄骨片、3 左鳥口骨、4 腹甲板、5 背甲板、6縁骨板）

浦添市民憲章

わたくしたちは、
古い歴史と新しい希望にみちた、
てだこの都市・浦添の市民として、
この憲章を定め誇りをもって
その実践につとめます。

1. わたくしたちは、
自然を愛し、みどり豊かなまちをつくります。

1. わたくしたちは、
きまりを守り、住みよいまちをつくります。

1. わたくしたちは、
働く喜びをもち、活気にみちたまちをつくります。

1. わたくしたちは、
平和を愛し、文化の香り高いまちをつくります。

1. わたくしたちは、
心と体をきたえ、明るく健康なまちをつくります。

浦添市文化財調査報告書第21集
嘉門貝塚B区
牧港補給地区開発工事に伴う
緊急発掘調査報告書　Ⅳ

発行日　平成5年3月
発行所　浦添市教育委員会
浦添市宮城二丁目4番1号
印　刷　浦添市安波茶448番地
尚　生　堂